

Title	馬琴読本における仮名字体の表記研究
Author(s)	市地,英
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76319
rights	223ページから230ページに用いられている図像は著作 権の都合により非公開
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

令和元年度 博士学位申請論文

馬琴読本における仮名字体の表記研究

市地

英

余嘗思ふ。 大約坊間印行の草紙物語に五ケの訛謬あり。

おほよをばらかんいんこう そうしものかたり いっこ あやまり 他だ 心し草帋は

さておきつわがうへをもてこれを敷ん。毎編倉卒の間に成る。稿を易るに暇あらず。 一段傭書に付属し。一巻浄書すれば一巻棗人に遞与す。いちだんようしょ いちて いちくりんじをうしょ いちくりんそうじん ていよ

その工の手を貪りて。速、するやか 一段稿じ了れば。 作者まづ

て。傭書画工謬る。書画 謬 て。棗人又 謬る。棗人 謬るといへども。書肆も亦復, ようじよぐわこうあやま しょぐわあやまり そうじんまたあやま そうじんあやま

改正に疎なり。 いまだその失を補ひ得ずして。やがて製本發販す。 於 是 閨人

競ふてこれを閲するときは。 句讀を訛り。語勢を失ひ。文義を謬ざる

もの稀也。これをわが著編の五謬とぞいふなる。就中この書の前板。棗人のまれ

刀をもて。そ 戕 るゝものいと多かり。 きなは 或は圏点傍訓を削去り。 まるひ けんてんほうくん けづりさ 或は真名を削去て。

補ふに假字を以す。[筑紫琴を筑紫こととするの類なり] ゑえをへとし。ひゐをいとし。ぱれいとし。 假字。しは下につくの假字也。 しとし。 て きを n とす。[よろづをよろずとするの类亦多し] ゑ し は義において違ざれども。___ =_ ___ * て 点 もじを 灰

為にその拙を補ひ。削 戕へるところ/\を。 to stěk brosela 辟ば蠅頭塗鴉の如し。作者といへども読得ざることあり。書肆はこれに驚されて。たとの じゅうとう と あいこ なくしゃ よみえ 修復せんとするに。比校に稿本を
#85.85/26

獲ざるときは。 彼此ます~~惑ふ。遂にそびらを世とし。あにきをあにごとし。

魯魚烏焉馬の嘆あり。 痛しきを。いたはしきとするの類、尠からず。これらは作者意外の失なり。古人メヒーサ

わが燈下の戯墨。 鑿空無根の書において。 經傳方書といふといへども。 自その醪 誤衍なきことを得ず。 を論ふに足ざれども。

は上におくの」も下ウ

彼も一時で 秋後に。俄頃に研を發くをもて。刋刻の日久しからず。よりて多く。醪るゝもの歟。古人風葉のレゥニ゙ にはか すゞり ひら この議をもて。書肆に示すこと再四。書肆余が言を理ありとして。教諭を 喩に感じて。五謬を辨じて。自笑すといふ。 蓋京摂は名工多かり。書肆は梓を蔵るに富て。製本に精妙也。唯余が著編每歳けだしけいせっ。かいうおほうしょしょう。 きない きょう せいほん せいめう たんよ ちょんほいさい 時也。これも亦一時也。 荷 も文場に遊戯するもの。 悞脱錯字を見乍らじ またいちじ いやしく ぶんぷう ゆうげ

早稲田大学図書館へ 13_03093 (早稲田大学図書館古典籍総合データベースで閲覧、二〇一九年一〇月二三日最終閲覧) より翻刻した。 な お、 仮名は字体の区別に関わる箇所以外は現行仮名字体とし、合字「こと」は分解し、割注は []にて示した。

簑笠漁隱再識

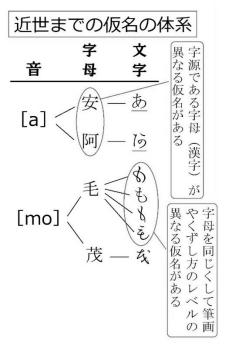
*

凡 例

- 名」と呼ぶ。 名字体」「字体」と呼ぶ。また、その仮名字体が該当するイロハ四十七にンを加えた四十八の仮名を、 本稿では、字母の異なる仮名字体と、字母を同じくして画数・くずし方の違いによって見た目を異にする仮名を区別し、 抽象的な単位として「仮 仮
- 抽象的な単位としての仮名はカタカナを ()に入れ、 に入れて示す。 仮名字体は【 】に入れて示す。 仮名字体の字源である字母 は \Rightarrow

 \approx

三 仮名字体の表示は、Unicode10.0に収録されたものは IPAmj 明朝 は稿者の手書きの画像で表示する。 外の仮名字体は学術情報交換用変体仮名(https://kana.ninjal. ac.jp/)に拠り、 ある仮名字体及び該当の仮名字体がない【**办】【\\]【る】【 る】【 る】【 る】【 を】【 も】【 も】【 も】【 6】【 6】【 6】** (独立行政法人情報処理推進機構(IPA)の著作物) 以上のフォント・画像で置換することに疑問 にて、 収録



馬琴読本における仮名字体の表記研究 目次

三二一第	六 五 四 三 二 一 第	一 近は目凡資 部 世じ次例料
三 臺	お読読読は章	期め
一 一 ル 圧	わ本本本本じ馬	読 に に が 料 に お の 板
先本本に琴 に 読	の・・巻 小	板 や : : : * 今 『 ii 』
大通 本の	の・ 接 · 脱 の ・ 説 の ・ 説 の ・ 説 の ・ 説 の	に る 仮 表
するに 平仮	・ 使用字R ・ を し を の 平 仮 名 ・ に 使用字R ・ に も に も り に る り に り に り に り に り に り り に り に り り に り	『朝夷巡嶋記』 『朝夷巡嶋記』
先行研究の指摘と同じ使一本における仮名字体の本における仮名字体の一本における仮名字体の一本における仮名字体の一本における仮名字体の手に	を に 使用字母の 種類 を に 世用字母の 種類 を に 世 用字母の 種類	仮 の : : : : : : : : : : : : : : : : : :
- 一 先行研究の指摘と同じ使用読本三本に共通する仮名字体の種はじめに	るるを性:子のこれを類:・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	子 記 : : 二 体 の : : 編 の #: : : : 編
用傾向が 一『月氷	- A の 研 究 - A の 研 究 - A の 使 用 :	第二編巻之一 表記の先行研 表記の先行研 記
月 水流		A : : :
傾向がみられ (関) () () () () () () () () (: の母::読	: : : 化
た た 仮 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	(月 使と合 数 数巻	<u>Ш</u>
先行研究の指摘と同じ使用傾向がみられた仮名字体二本に共通する仮名字体の使用法がに	読本と合巻の比較	<u> </u>
体 : : · · · · · · · · · · · · · · · · ·		t)
		年 +
た仮名字体 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		七丁ウ-八丁ウ
: : : 里 : : : 見		人
八		
伝		・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		き ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		刻
52		: : : : : 16 11 6 2 1
46 43 42	i i i i i i i i i i i i i i i i i i i	23
42	24	

(仮名字体の使用種類の多い〈三〉〈ル〉 1.1	大 大 大
三 先行研究に使用位置の傾向が指摘されている仮名字体	
第三章 馬琴読本『月氷竒縁』『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』の仮名字体の特徴	喜 三三

191 190 188 : 18 188	三三
85	まとめ
184	七 筆耕による変字法のための字体使用
	六-二 振り仮名の語頭の〈シ〉の用例
	六-一 単字の振り仮名における〈シ〉の用例179
178	六 振り仮名における単字・語頭の〈シ〉の仮名字体の用例
177	五 稿本と板本の比較における振り仮名の仮名字体
175	四 振り仮名の〈シ〉の仮名字体と使用数及び使用位置の分布
173	三 稿本にみえる馬琴の振り仮名の付け方
172	二 先行研究と調査方法
171	一 はじめに
: 171	第七章 馬琴読本の振り仮名における〈シ〉の仮名字体の用字
165 162	六 結論

資料	初出一	調査資料	参考文献	おわりに	五.	四
. 馬琴読本の仮名字体対照一覧表23	一覧	資料一覧 ····································	文献	り こ 205	五 結論	四 近世前期資料の振り仮名における〈シ〉の仮名字体の使用傾向198
					201	100

近世期、平仮名は大衆が享受する文字として展開した時期だった。

赤本など、 物は写本から 様々 なジャンルの娯楽小説が登場し、 板本へ主流が移り、 商業出版が隆盛した。 特権層から庶民、 浮世草子、 大人から子供まで、 八文字屋本、 洒落本、 出版物に親しんだ。 滑稽本、 黄表紙、 , 向 ゖ は

浜田 種 において、 道である。」(p. 10) の調査資料は草双紙類に馬琴読本以前に出版されている黄表紙を含むなど大略的な指標によるものだったが、 が調査された。 要するに近 類が近世中期頃に固定化することが示される。 右のような娯楽小説を資料に、 (一九七九)では仮名草子、 より厳密に文学ジャンルごとの仮名字体の 世の出版物、 その結果、 と述べ、 特に文学領域の版本の字面は、 仮名草子→西鶴本→馬琴読本→草双紙類→浄瑠璃本の順で仮名字体の種類が減少することを明らかにし、 出版物の大衆化・読者層の拡大に伴う仮名字体の種類の整理が進んだ道筋を提示した。 西鶴本、 平仮名の種類が徐々に減少・収斂していくことを明らかにしたのが、 草双紙類、 馬琴読本、 種類に調査が及び、 収斂・合理化の道を進んだ。 浄瑠璃本から数点ずつを選び、 通時的過程が詳細化され、 それは文化が下の方へ向かって開く大衆化の 始めの一○丁における仮名字体の種 基本的に使用される仮名字体の 浜田啓介 近年、 (一九七九) 久田 浜田 三〇 五 (一九七九) で

作品を多くの読者に享受されるものたらしめ、 勿 論 近世期以前の平仮名がまったく庶民のものではなかった、 大衆が平仮名を通して読書するようになったことにある。 というわけでは ない。 重要なのは、 印 刷 が書物として伝わる文芸

の仮名字体について、 "雨月物語』 中 世 期の写 \mathcal{O} 本である定家筆 仮名と漢字使用について検討し、 写本・古活字本とかなり異なることを指摘する。 『更級日記』、 伝冷泉為相筆 仮名字体の種類とその使用割合を示した前田富祺 (一九七一) 『平仲物語』、 三条西本 その結論では、 『源氏物語』、 仮名と漢字使用の両方を含め、 近世期の古活字本 では、 『竹取物語』、 板 本 次のように述 『雨月物 板本

る

写 で あ 本に通ずる点が多い資料であったように思われる。 る。 た範囲でもっともはっきりした相違が感じられたのは、 その点では、 『竹取』は中世の写本から近世の板本 (中略 『雨月』という近世の板本の文字使用と中世までのも 0) 橋渡しをする古活字本であっ たが 性 格 的 に は しろ との 中 世

写 本 は、 読 みやすさとともに美的な効 ②果の期: 待されるもの で あ b, 板 本 は 実用的な性格をより強くもって いるものであっ

平仮名だっ 印刷 たの 本に により流 で ある。 布する作品の平仮名は、 写本時代にみえる書の美から脱しつつあった。それが大衆文化の時代である近世 期 Ø

稽本、 中で最も仮名字体の種類数が少ない段階にあるとされたジャンルである。 広い範囲の読者層が手に取ることが可能な本であっ にあたり、 資料に及んだ。これまで仮名字体の調査が及んでいる資料は、 前 田 人情本などの通俗的な小説である。 (一九七一)、 調査 近世期の事情を踏まえて、 検 浜田 討 0 (一九七九) 不可欠な資料であったといえよう。 により見通しが これらは近世後期の出版物にあたり、 この当時 た。 つけられて以 Ď 仮名字体の表記がどのようなもの 黄表紙 黄表紙や合巻、 ・合巻の草双紙類の仮名字体の種類 後、 近世期の仮名字体の種類や使用傾向、 大衆文化の出版物に 赤本など平易な平仮名文である草双紙や、 版型としては中本、 であ ったのか、 おける仮名表記の様相を明らかにする は、 小本と小型な本であ 浜田 (一九七九) 考える必 その用字の検討は 要が 生じ に近世 洒落 る 安価 種 小 説 Þ 滑 \mathcal{O} \mathcal{O}

は そうした先行研 近世後期に絶大な人気を得た読本作家、 究がある中で、 本論文が近世期の仮名字体の 曲亭馬琴の読本であ 種 類・ 使用 傾 向 を調査 検 討するにあたって、 資料として取り上 げ る

 \mathcal{O}

にその 落本 読 花 が 江戸作者部類』(天保五 本は 注目した読 -双紙 部を分ちて詳にせざることを得ず。」

『と述べていることに窺える。 中本・読 』(文化六 類の著述をした当時の作家は、 、衆が享受した娯楽小説の中でも草双紙などに対して質が異なったのである。 本 本の如き、 は 〈一八〇九〉 草 妏 〈一八三四〉 、紙や洒落本、 各その差ありといへども、 年 0) 跋文に 年成立) .に「讀本は上菓子にて。草雙紙は駄菓子也。」と例えていること言や、『*****』 とりえていること言や、滑稽本などとは一線を画す、格調高い娯楽小説だった。当時の意識に 草双紙類のみならず、 に赤本作者部・洒落本并中本作者部・中本作者部・読本作者部に 戯墨は則是一なり。 さまざまなジャンルの作品を手掛けるものだった」。 但その文に雅俗あり、 版型も半紙 本と大きめ 当時の意識として、 作者 で、 漢字が多い の用意も亦同 曲亭馬 分けた理由 琴が 式亭三馬が 文語文で書か その中で、 か らず。 近世 この 物之本 『昔唄

とを示した。 田 (一九七九) では、 しかし、この 調査結果を時代的な指標としてのみ考えるよりも、 時代の指標として馬琴読本を数点調査し、それらに使用される仮名字体の種類が草双 小説のジャンルの違い によっ て、 仮 名字: 紙 類に比 体 種 類数や、

その使用法のあり方が異なったために表れた差として捉える必要がある。

その仮名字体の種類と、 査資料を主として板本とし、 論 文第 部 「読本の 板面に表れる仮名字体の 使用法を重視して表記実態を明らかにする。 草双紙類と比較しつつ読本における仮名字体の表記を示す。 表記実態」では、 近世後期の読本作家として最も著名な曲亭馬琴 出版物として人々が接する仮名字体の表記という観点か *Ö* 読 本を 取 り上 調

字体の種類が少ない傾向にある振り仮名の表記実態について検討を行う。 読まれた『月氷竒縁』(文化二〈一八〇五〉 第 を資料として、 章では馬琴の読本と合巻の 読本の板本における本行の仮名字体の種類とその表記実態について明らかにする。 仮名字母の種類を比較し、 年)、『椿説弓張月』 前篇(文化四〈一八〇七〉 読本と合巻の違いを検討する。その上で、 年)、 『南総里見八犬伝』 第四章では、 第二章・ **肇** 輯 第三章では当時 (文化一一 本行よりも仮名 八一 よく 四

稿本を含む、 名字体の種類やその表記に個別性が見受けられ、 田 を探ることができる。 (二〇〇〇) があり、 以上によって明らかになる板本の 自筆資料を中心に仮名字体の表記を検討した大島 (二〇〇〇) や、合巻の筆耕二名における仮名字体の表記に注 しかし、 板本にあたっての仮名字体による用字の事情が明らかにされている。 板 本の制作工程上、 仮名字体の表記実態は、 複数冊の 必ずしも馬琴の表記が反映されているとは限らな 稿本と筆耕の異なる板本を調査する必要があると考える。 その表記が誰の、 どのような場合に ただし、 行われるものかによって、 馬琴読本の V) 先行研 究で 板本ではそれぞれ は、 馬琴読 その 目 た内 本 事 仮

筆耕はどう表記する傾 琴自身が読本の う筆耕の表記を含め、 そこで、 第二部 稿本の 「書き手における読本の仮名字体の 書き手が読本の仮名字体の表記にあたってどのような用字を行っていたのか、という観点から検討を行う。 向 執筆にあたり、 があっ たのか。 どのような仮名字体の種類を用い、 書き手における読本の 表記実態」 仮名字体の使用という問題を、 では、 馬琴の自筆稿本が残る読本を調査資料とし、 表記していたのか、 ここで解消したい。 時期によって違いが な 板本の清書を行 いのか。

本 ように述べていることが知られる 論文の冒頭に、 資料として『朝夷巡嶋記』 第二編巻之一(文化一四〈一八一七〉年)の前書きの翻刻を掲載した。 0 中 で、 馬 琴が

就やなかんづく の [筑紫琴を筑紫こととするの 類 なり] - ^ < L こと っくし 書よの 前板。 楽人の. の刀をもて。 戕ななな るゝものいと多かり。 ゑ えをへとし。 \mathcal{O} ゐをいとし。 或るひ は は圏点傍訓な 点 を削去り。 もじをしとし。 或があるか は真名を削っ て きを 去て。 ハ とす。 補ぎな ふに [よろづを 假字を

よろずとするの 类 亦多し] たぐひまたおほ 羔 (は義において違ざれども。 えは上におくの假字。 *** (は下につくの假字也。 て

に同じ。

た仮名字体の使用位置を区別する記述は、 板本に生ずる表記の「誤り」という文脈で、〈シ〉と〈ハ〉の仮名字体の使用位置を区別して表記する認識が示されている。こうし 一作家が仮名字体の使用位置について認識を示している例は、 歌学書や仮名遣書、 教訓書にもみえるもの型である。 馬琴が唯一といってよいのではないか、 しかし、 指導書の記述としてではな と思われる。

実態から探ることが可能 馬琴には、 図書館が所蔵し一般に公開されている読本の稿本がまとまって残り、右のような使用認識を馬琴読本の自筆稿本の である。 使用

のか全体像と、 較対照することで浮き彫りにする。 る場合を含め、 の仮名字体の使用実態を検討する (<ハ) の仮名字体の使用は第四章で触れる)。第六章では、馬琴の行頭に【 ゑ 】を表記する傾向につい での資料に一貫して【玄】は語頭、【し】は非語頭という使用傾向が見出され、馬琴が使用位置を区別する認識を示している 第二部の第五章では時期の異なる馬琴読本の稿本と、筆耕がそれぞれ異なる板本の比較を行い、その表記にどのような異同 かなり徹底した態度で用字を行っていたことを示す。馬琴読本の筆耕が馬琴から離れた際の著作や、 時期的な変化があったことを論じる。 その用字がどのように行われているかを検討する。 仮名字体が別の仮名字体になる場合にどのような用字が行われているのかを示す。 第七章では、 振り仮名の 第八章では、 〈シ〉の仮名字体について、 馬琴読本の振り仮名における語頭の 作家・筆耕が語頭に【し】を使用す 第六章以降は、 近世前期の資料の調査と比 中世期から にがある 蚏

ける仮名字体の じり文という表記体にあって複数の仮名字体を用いる表記が平仮名文と同等にみられるのかといった、大衆が享受した近世後期 馬琴読本を調査資料の中心に据えることは、 読本の仮名字体の表記を研究することで、 表記実態 の幅を明らかにすること繋がると稿者は考える。 それが同じ作家でもどれほど文学ジャンルによって位相差があるのか、 作家とその作家を取り巻く筆耕らの表記を明らかにするに過ぎない側面が 漢字平仮名混

か

執筆している。 したことはよく知られることである。十返舎一九、式亭三馬といった著名な作家も、黄表紙、 例えば、 山東京伝が洒落本・黄表紙作家として名を馳せ、 寛政改革の風俗粛清で手鎖五十日の処罰を受けて以後、 滑稽本、読本と異なるジャンルの作品を 読本の執筆を開始

九年一二月五日)。この跋文の記述については髙木元「江戸読本に見る造本意識」(高木元氏HP「ふみくら」 『昔唄花街始』(国立国会図書館本、 請求記号:京乙-36)は国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧した (最終閲覧日二〇一

https://fumikura.net/paper/eiriY.html を参照。初出『アジア遊学』一〇九号 調高い知的な読み物」として読本が位置づけられている。 (勉誠出版、二〇〇八年)) において指摘され、

三 『近世物之本江戸作者部類』(徳田武校注、岩波書店、二〇一四年) p. 142

仮名字体の使用位置を区別することの記述がある書物については宇野(一九八六)に詳しい。

兀

近世期資料における仮名字体の表記の先行研究

論に入る前に、 近 世期における仮名字体の表記について論じた先行研究について述べたい。

は、 には 時代から整版印刷本時代へ、 が 部数から読者を考へる場合、 に相当あったらう。 少ないこと、 近 「はじめに」で述べたように、 世期の文字生活 「江戸時代になると仮名草子なるものが企業として成立ったわけであるから、 浜田(一九七九)には、 後期の出版の盛行はそれを物語るし、 !の上で平仮名がどのような位置にあったか、 商業出版の隆盛により文学板本の平仮名表記が大衆化の道筋を辿ったことが具体的にされた。 今日と同様に(尤も貸本屋は栄えてきたが)はゆかないかもしれない。」(p.9)と説かれている。 前 田 近世小説の (一九七一) 板本では時代を下るにつれて、 の漢字・ 更に本は私蔵されるのみならず貸本屋を通して広く読まれたら 仮名の調査により中世の写本類に比して近世期の板本に仮名字体の 近代以 |前の文字生活を考察した池上 (一九五五)「文字論の 仮名字体の 少なくとも平仮名をたどってなら読める人も 種類が 減少していたことが示さ ために 種 類

名字体 仮名字体とその れる仮名字体の 特に、 その後の の種類数の総和が減少すること、 浜田(一九七九)では調査資料ごとの仮名字体の種類数を示し、 近世期における仮名字体の表記研究において、大きな指標となった。 表記について、 種類や、 仮名字体の用字「について、個別の資料やジャンルに調査が及び、 種々の 様相 ジャンルごとに各作品に使用される仮名字体の種 が明らかにされている。 仮名草子→西鶴本→馬琴読本→草双紙類→浄瑠璃本の 浜田 (一九七九)以後、 類の振れ幅も狭くなることが明らかにさ 展開されていった。 近世期資料において使 現在では、 近 順で 世 用 期 仮

複数種 諸資料におい 日本語学大辞典』(東京堂出版、 \mathcal{O} 仮名字体を使用しての表記については、 て確認できる仮名字体の用字法であるため、 二〇一八年) 矢田勉氏執筆項目 、中世期 一から近世に至るまでの平仮 左に引用する。 「変体仮名」 0 【表記機能】としてまとめられている内容は 名資料の調査で、その 用法 が 見 出され てい 近 期

化 ことが多い。 から)特定 更に 0 語彙と特 進 また、 んで符丁化した。 定 消息での「まいらせ の字体との対応。 これらは、 『土佐日記』 (候)」、暦での干支 仮名に表語表記的 から近世の資料に至るまで、 (「きのえ」など) 性格を付与するものである。 の常套句は 「けふ (今日)」 特定の には 仮名字体による表記 Ŋ Ă 固 1 定 る

節頭)」 やす と文節 用という ②表記位 名文字遣』・『悦目抄』・『一 また類書的な書籍に多く見える点は、 傾向 頭に使用する字体とが意識的に区別されるようになった。 などに典型的で、 踊り字用法の変化に伴って、 置による使 性を有する場合があったが、 い分け 分節機能を担っている。 歩』・『男重宝記』 (文節頭 ノ文節 文節の境界を挟んで同音の仮名が連続する場面に現れたことで、 鎌倉時: 常識的な知識となってはいなかったということをも示唆している 末、 等の諸書に記述が見える。 2代以降、 行頭 こうした表記の習慣については、 、行末など)。 それまでの全ての同音節連続で し 仮名字体には、 (非文節頭) その記述は必ずしも表記の実態と合うものばかりでな 一点 その形状から本来的に特定 室町時代から近世初期にかけて、 (文節頭)」、「と の使用 から、 文節 文節末に使用する字体 (非文節頭) を跨ぐ連 の位置に 続 ر ا での 『新撰仮 書 不使 か

音節)隣 接 \mathcal{O} 並 あるいは近接する同音節での避板法的使用。 ぶ辞書類で用いら れた例がある。 (p. 842) これには、 目移りを防ぐなどの目的が考えられる。 文学写本や、 語 頭

に同

一期に おける、 特に文学作品の板本には、 右 の使用傾向が確認されるといってよい。

の板本の調査研究を中心に、 女子用往来四、 加期の 仮名字体 能書家の仮名字体玉、 の様相としては、 先行研究を述べていく。 文学作品の板本・写本や、 俳書、 狂 歌集、 Ш 、柳トなどに及んでいる。 自筆資料以外に、 本論文で調査資料とする馬琴読本に関係する文学作 国学者の学問書にみられる特徴的な仮名字体使用

品

に平仮名文が配 これまでに最も調査が及んでいるのは黄表紙・合巻といった草双紙の仮名字体の表記である。 置 |される本で、 近世期 の娯楽小説の中で最も庶民向けのジャンルといえる。 草 双 紙 は絵を中心とし て、 その 周 n

あるいは文節の 類と、その用法について調査が行われ、 野 (一九九〇) 把握に役立つ」 には十返舎 (矢田 九自画 一九九○:p.256)と述べた。 作 の蔦屋板黄表紙五作品 仮名字体の使い分けに右の①②③の機能があることを明らかにし、 同 (一九九二) には十 -返 舎 九 の榎. 本板黄表 紙 「仮名の字体に多少 兀 作 品 0 仮名字 体 は 0 種

最 久保 -純な仮名使用の様 田 (一九九五b) では、 相が明らかにされてい 子供向けの絵本である赤本の調査で仮名字体の種 る 類の少なさや、 ①②の仮名字体 の使用 傾向 を確 認し、

に 久保田氏の 先 生栄華夢』、 研究には 黄表紙の個別の作品を取り上げた調査検討があり、 同 (110011)に芝全交『大悲千禄本』 \mathcal{O} 調査があ ð. 久保 久保田 田 九九六) 九九六) に恋川 では、 春町 『無益 『無益委記』、 委記』 0) 序文、 同 (一九九八) 詞

書には を位置づける。 書ごとに 致, 仮名字体 使用され 使用され 改行、 .. の な 使用 る仮 V 字の 仮 種類の 名字体がた 名字体の 効果的 位相差が明らかにされてい な使用などを取り上げつつ、 使 種 以用され、 !類が異なることが指摘される。 更に序 文には詞書・ る。 平仮名の多い文字列における切れ目 久保田 本文に使用されない 赤本にも (一九九八) 確認される仮名字体が (110011)特 殊な字体を使用する装飾 では、 ① ② ③ Ø 表示のひとつに 使用され 使用傾 る詞 的 書に対 仮名字体の 向 な を確 用 字 認 が 本文に 行 使 わ れると 分け は 連 詞

され、 \mathcal{O} いて比較・ 統 内田 性 黄 (一九九八 a) 表紙 \mathcal{O} 観 検討がなさ 点からその事情が考察されてい のように絵の周りに文字を配す体裁 では れた。 恋川 その結果、 春町 自 筆 板 洒落本には黄表紙に比して画数の多い、 下 \mathcal{O} が黄表紙 る _ 絵と文章が 金 銀先生再寝』 分け と洒 5 れ た洒 落本 「無 落 複雑な仮名字体の 本 頼 \mathcal{O} 体裁という文字を書き込 通 説 法 \mathcal{O} 仮名字体 種類が使用されることが明ら (T) 種 む空間 類 なとその の多少 使 用 傾 向 かに に

筆稿 に、 ことが明らかにされて 合巻の が調査検討されている。 本と 部 \mathcal{O} 板本の比較・ 調 仮名字体には、 査 は 内 田 V 検討が行 (一九九八b) る。 更に、 複数名の筆耕に共通する仮名字体の異同と、 わ 内田 れている。 に柳亭種彦の (1000)以上 では、 の調査では、 自 筆稿本の 馬琴の 仮 各筆耕が稿本の使用仮名字体 公名字体、 『金毘羅 筆耕ごとに異なる傾 船利生纜』に 同 九 九八 С おい に て 『偐 筆耕 向 をかなりの がみら 紫田 仙橘と谷 舎 れる仮名字体 源 割合で受け 氏 金川 自 筆 0) 稿 担当箇 の異同がみられる 継 本 いで 板 いるととも 所ごとに自 本 仮 名字

体

述べる。 上が 草 双 紙 0 仮 名字 体 \mathcal{O} 使用実 火態に関 する先行研究であ る。 次に、 版型を中本とする通 俗 小 説 に おける仮 名 字 体 \mathcal{O} 調 査 に 0 7

用され 中 玉 分け 跋 村 Ò 小 ない 和歌に 説 文 <u></u> 九 0) が 仮 カコ 仮 お 名字 なり け 名字体が は本文には 四 る仮名字 体 排 では 0 他 みら 使 的 人情本 用 に行 体だが、 使用されない【を】【を】 種 れるという指 類 『春 れることが明らかにされてい 0 洒落 違 色 1 梅児誉美』 本に比 と用字の違い 摘 が して、 あ る。 の 仮名字体 につ 滑稽本『浮世風呂』 人情本や滑稽本の本文はより庶民的な仮名字 が使用されることや、 V て検討が行われ、 :の調 、 る。 査 また、 がなされ、 久保田 を調査した研究に久保田 序文や口絵の文字にも その装飾的な使用傾 多くの (二〇〇九) 資料に共通する使 では、 洒落本 体 向 (一九九七) 【を】【は (T) が 種 明らかにされる。 用 類 『傾城買 傾 向 用字であると見受けら が が なあり、 】等やはり本文に 明 らか 一筋道』 その にされ 以 仮名字体 上は中本の の序文・ るほ は

作

る

説 、通する。 以 外の 庶 民 の娯楽的な読み物として、 三原 (一九九八)、 前 田 $\widehat{}$ 九九八) に に噺本の 調 査 が あ る。 その)使用字: 体や使用 傾向 は 小 説

本などが挙げられ、 ここまで述べてきたの それよりやや通俗的な半紙本で出版される堅い読み物があった。 後期読-は 主として近世後 本はその系譜に連なる書物として"扱われる。 期に江戸で出版された、 庶民的な文学作 近 世 前 期には上方で出版された仮名草子、 品 『である。 娯 楽 小 説 の中でも文章を主体と 浮世草子、 į 期 大

とした調査だが、 前 期読本八『雨月物語』 島田 (一九九〇) の使用仮名字母と使用傾向 の諸論考で西鶴本の使用仮名字体が示されてい は、 先述の 前田 (一九七一) に 調 査 結果が ある。 西 鶴 本 Ď 板 下書きの 推 定を目

は装飾的に は、 れる位置の制限 使用される常用の字体 れている。 八保田 使用される位置に制限の見られる、 (一九九四) (一九九五 この仮名草子における仮名字体の使用傾向をもとに、 時 `々交ぜられる字体が多いという仮名字体の表記の特徴を示した。 等に特徴 「多用字体」と、 が見出せない、 a) では、 仮名草子『可笑記』『因果物語』『東海道名所記』 それ以外の 意味単位の境界が存在することの機能を持つ仮名字体 美的観点から装飾的に用いられたと考えられる「装飾字体」 時々交ぜられる字体 久保田氏は二種 「少数字体」 類以上の仮名字体がみられるもの が存することを指摘し、 0) 仮名字体とその用字 (先の①②③に該当する) があるとした。 後者の · の 調 に また、 つい 查 「少数字体」 考 て、 察が 仮名草子 使用 数多く 行

査され、 に使用される仮名字体の種類が特異なことを位置づけてい 種類以上が数えられており、 近年、 近世後期の資料に滑稽本 その種 坂 (三〇一六) 類や使用数が明らかにされている。 により、 大まかに近世前期の物之本に仮名字体の種類が多いことが示される。 『東海道中膝栗毛』、 物之本の笑話集『醒睡笑』、 随筆『北越雪譜』における使用仮名字母・仮名字体 近世前期の物之本に仮名字体の種類数には一〇〇以上、 浮世草子『好色一代男』『浮世親仁形気』、 その変遷の中で、 前期読本『英草紙』『 (坂二〇一六では仮名字形) 近世後期 **写**好 の資料には八〇 色 雨月物 代 が

000) 用字や変字法が自筆稿本と板本にしかみられない、 \期読本については、 0 研究がある。 近世の小説類に行われている①②③の仮名字体の用字が書簡 馬琴の書簡・日記及び『南総里見八犬伝』第八輯巻之一の自筆稿本と板本の使用仮名字体を検討した大島 という、 板本向けの仮名字体の用字について言及されている。 日記にも行われていることや、 頭における

用字体とその なお 娯楽小 使 用 説以外の文学作品の板本における仮名字体の調査に、『おくのほそ道』の板本については荊木 (一九八三) 傾 向 \mathcal{O} 指 摘 が あ るた。 また、『平家物語』延宝五年板 本の <u>ે</u> の仮名字体の用字法を探った土肥(二〇一八) において使 により、

当該版本の〈シ〉の仮名字体の使用傾向が明らかにされている。

七九) に限って、 る仮名字体の 沂 には 前期 本行と振り仮名の仮名字体の用字を検討している。 『曽根崎心中』 0 種類とその用法が示されている。 浄 瑠 璃 本の 仮名字体を調査には坂梨(一九七九)(二〇一 諸本の へ ハ 〉 の仮名字体の用法が明らかにされている。 佐藤 (二〇〇九) では享保期に初演された浄瑠璃板本の仮名字体について、 四、 野 (一九八三)、 野口(一九八三) 佐藤 (二〇〇九) では近松浄瑠璃丸本諸 の研究がある。 作品におけ

を資料に仮名字体とその用字について調査・検討を行う意義について述べる。 以 上、 娯 楽小説を中心とした、 読み物の板本における仮名字体につい て先行研究を確認した。 以上を踏まえて、 本 論文で馬琴 読

あるものとして捉え直さなければ、 さを時代差として扱うが、 こに、 浜田 (一九七九) 後期読-では馬琴読本における仮名字体の種類数が多く、それに対して草双紙類における仮名字体 本は黄表紙よりも後に成立するジャンルである。 当時の仮名字体の用字の幅広さを無視することになり、ここに読本の 同 時代的 な仮名字体の 仮名字体とその 用字の差が草双 \mathcal{O} 種 用字を調 紙と読 類数 \mathcal{O} 本に 少

する必要性があると考えた。

接していたの 表記実態を明らかにすべきだと考えた。 勿論 表記は装飾 大島 か、 的 (二〇〇〇) には後期読本に調査が及んでいる。 傾向があり、 例のみでは板本によって明らかにできる仮名字体の表記実態の事例に乏しいといえ、 作品ごとに多様な用字が行われている可 しかし、 後期読本が物之本の系譜にあることを鑑みると、 能性が推測される。 読者がどのような仮名字体 複数の読本 から仮名字体 0 その 種類や表記に 仮名字

結果が は内田 表記実態を重ねることは 稿本の表記に主 第二に、 みられるの (二〇〇〇) に明らかにされているものの、 大島 一眼が置 (1000)か、 作家においてまず仮名字体 カ 有意味だと考えられる。 れており、 において馬琴読本の稿本と板本を対照して仮名字体の用字が検討されているが、 調査された読本も一冊 体裁や表記体が大きく異なる読本において筆耕の仮名字体の使用 の用字に時期的な変化はない のみである。 馬琴合巻の筆耕による仮名字体の用字に個 のか問題が残り、 読 本から書き手に 書簡や日記とともに自 おける仮名字体 傾 别 向に合巻と同 性 が 存すること

筆耕における仮名字体による用字を検討することにした。 琴読本には自筆 稿本がまとまって残存し、 板本の 清書を担 当した筆耕が が明ら ゕ な場合がある。 そこで、 作家の 自筆 稿 本 複 数

行 研 究におい ても漢字平仮名混じり文における仮名字体の 用 字が 検討されてい るもの の、 文中に漢字が あるが 放に 仮 名

あるのか、 0 に 機能のひとつ、 体が使用され、 字体の用字に影 切れ目が明確である。 おいて有効的に機能するものだと考えられる。 検討すべきだと考える。 ②表記位置による使い分けである「し(非文節頭)-ゑ (文節頭)」などが発揮する分節機能は、 その用字は本行と同等に行われるのか、 響が な いの ②のような用字が馬琴読本において行われるのか、用字が行われるとして、それがどのような意識のもとに か、 ほとんど検討が及んでいないといっていい。 その点で、 という問題はこれまで扱われたことがなかった。 馬琴読本の漢字平仮名混じり文は、楷書体漢字で自立語と付属語の意味 例えば、漢字につく振り仮名においてどのような仮名字 また、 平仮名の多い文字列 仮名字体による表記

貢献できると考える。 以上の問題点に基づき、 以上を踏まえて、 馬琴読本の仮名字体とその表記を探ることで、 各論に入りたい。 近世期に特有の 仮名字体の 表記実態を明らかにすることに

仮名字体がどのように使用されていたか、という点については、 こ」にも触れられていた。 池上(一九五五)や、 山田(一九八○)「文字論に課せられ

Ŧî.

書写の土左日記等、矢田(一九九五a)には僧侶の仮名消息などに仮名字体の用法の調査が及んでいる。 もと表記されているか示された。今野(二○○一a)(二○○一b)には伝西行筆本、源氏物語古写本、大山祇神社連歌・室町末期 中世期の仮名字体の用字については安田(一九六七)(一九七一)(一九七二)(一九七三)による豊臣秀吉書簡やキリシタン資料、 期以来の仮名字体の用法が明らかにされている。 七四)、小松(一九七四(二○○六所収))に藤原定家筆資料の調査により、仮名字体の使用傾向に分析が加えられ、如何なる用法の 仮名消息の調査、伊坂(一九八八a)(一九八八b)(一九九○)(一九九一)(一九九二)による藤原俊成筆資料の調査、迫野(一九 以上の調査検討により中世

国学者が濁音仮名や当時一般には使用されない字母を用いて特異な仮名字体使用の層を形成していたことは矢田(一九九八)を始 明らかにされている。 内田 (二〇〇一 a) (二〇〇一 b) (二〇〇六) (二〇一〇) (二〇一四) (二〇一六) の種々の国学者の学問書における調査によ

四 (二○○六)(二○○八)の女子用往来を調査対象とした仮名字体とその用字の検討がある。

宮本 (二〇一七) に松花堂昭乗、 同 (二〇一八) に光悦流資料における使用字体が検討されてい

- ごとの検討が行われている。 中 (二○一八) では狂歌集の仮名字体の種類とその用字の調査が行われている。 窪 田 (二〇〇〇) では与 謝野蕪村の俳書と書簡の仮名字体が比較され、 俳書に多様な仮名字体が使用されていることが示される。 川柳の仮名字体については前田(一九八七)に字体 田
- 物の本のめでたきは」として上方で出版された仮名草子、浮世草子の作品や『英草紙』『雨月物語』など前期読本について流れを述べ を物の本といひけり。 馬琴『近世物之本江戸作者部類』(岩波書店、二〇一四年) (pp.145-148)、江戸の読本作家の解説に入る。「読本作者部」は馬琴が自らの読本を物の本に位置づけようとする記述ではある。しか 後期読本の位置づけが、後世の近世文学史の系統としてのみの見方ではないことを記しておきたい。 こは物語の本といふべきを、語路の簡便に儘して中略したる也。 の「読本作者部第一」では そを又近来は読本といふ。」とある上で、「近世 「今より百年あまり已前、 世俗なべて冊子物
- 九 る。 写本で伝わった前期読本『春雨物語』は、木越(一九八八)に仮名字体の種類とその使用実態が古筆切等と比較されつつ検討されて いるが、その仮名字体には万葉仮名に学んだ字母や、濁音仮名が使用されるなど、上田秋成の表現としての文字使用が明らかにされ 『奥の細道』に関しては、写本の仮名字体の調査を行い、 語音排列則を踏まえて二種類以上の仮名字体が使用される事情を考察した

八

t

六

濱(二〇一三)において調査が及んでいる。本間(二〇一四)の研究も存する。このほか、 松尾芭蕉の『野ざらし紀行』における仮名の研究ではその成立を明らかにする目的で 第一部 読本の板面に表れる仮名字体の表記実態

はじめに

て奇異な表記法といえる。 などに複数種の字体 江戸時代の 亦 説 脱類には が あり、 いわゆる変体仮名が使用されており、 文中に使用されるのが通常であった。こうしたことは、 現代人にとってその読書を困難にしている。 平仮名の字体が一種類になっている我々にとっ ヘカ〉 Þ 〈ケ〉 Þ シシ

史的に長いので していた。 しかしながら、 文芸や消息などの文章表記に多種類が使用されていた。 庶民層まで読み書きが浸透したのは江戸時代になってからであるとみられるが、 ある。 複数種の仮名字体 の使用は、 江戸時代において教養層から庶民まで幅広く、 現行仮名表記の時代より、 平仮名字体の種類が豊富な時 それ以前から平仮名字 文章表記の方法としてごく普通に機 体 \mathcal{O} 代 種 . の 方 類 は豊富で 歴 能

江戸 ては江戸 江戸時代の 本稿では江 ,時代の小 時代の 説 小 戸後期の小説、 類においては、 小 説に使用されていた変体仮名に関しては、これまで様々なことが明らかになっている。 説類が時代を下るにつれて、 読本と合巻を比較し、 小説のジャンルによって、使用される平仮名の種類総数が異なるという特徴がみられる ジャンルごと、 変体仮名の種類が多い平仮名表記の実態について考察していきたい 平仮名の種類が減少する傾向にあったことが明らかにされている」。 特に、 板本の仮名字体につい

が 漢語が多用され があれば、 配置されている。 読本と合巻の体裁としては、 平 ており、 仮名の種類総数、 文章は平仮名主体で、 漢字の多くに平仮名で振り仮名が振られている。 読本は匡郭の内に整然と文が並び、 その有り方も異なると考えられる。 漢字は極力少なくされている。 挿絵は別になっている。 こうした小説のジャンルとしての違いと、 方、 合巻は絵が中心に据えられており、 また、その文章は漢字仮名交じり文で、 文体としての違 その周りに文章

仮名字体総数が報告されているのみであり、 0 作品 を 調 査 検討した先行研究は多くあるが、 具体的な字体は示されてい 読本を個別に調 ない言 査した研究には少なく、 馬琴板本と草双紙を調査した研 究 は

に 本稿で扱う読本と合巻では、 て比較し て、 具 体的な違い ジャンルと読者対象が異なる同時期の をみていくこともできる。 小説の 実態 が比 較可能である。 また、 使用された平仮名の 種 類

なり。」

『と板本に至る過程で生じた誤謬を挙げていることが知られている。 まう場合もあったらしく、 本の表記が決定されるので、 ことがある。 本に限らず、 作家が書いた稿本を、 江戸時代に出版された本は、 曲亭馬琴が『朝夷巡嶋記』で、板本の表記ゆれについて「句読を訛り。語勢を失ひ。文義を謬ざるもの稀て、その改変は容易に起こりうることだと考えられる。そのことによって作家の意図せざる文面になってし 筆耕が清書し、 木版による印刷で制作されているため、 彫り師が清書を基に板を彫る、 少なくとも三人以上の手を経て、 自筆稿本と板本とでは表記の改変が 読 者 \mathcal{O} 手に 行 わ れる 届

衆性に受け入れられた媒体としての考察が可能なのである。 しかしながら、 多くの読者が実際に目にした書面は、 板本として流通した本である。 板本の平仮名表記を調査することは、 この 大

これらを踏まえて、 家の合巻『行平鍋須磨酒宴』(文化九〈一八一二〉本稿では江戸の作家、曲亭馬琴の、最も読者を 曲亭馬琴の、最も読者を獲得したといわれている読本の一つ、 『椿説弓張月』 (文化四

仮名表記の実態を明らかにすることにしたせ。 認定基準を決める必要もでてきて、 八〇七〉年)と、 として認定する場合ホが多く、『椿説弓張月』、 今回は字母の種類を調査した。 異なりが共通しており、 同作家の合巻 検討すべきといえるが、《久》など使い分けがなされている字体の異なりの 江戸時代の作品の調査においては、 調査が煩雑化してしまう。本稿では、 『行平鍋須磨酒宴』においても、読本の《奈》、読本・合巻の 年 同字母であっても字形の違うものを、 の平仮名実態の比較を試みる玉 確実に区別することが可能な、 字源の違いという枠での平 判断が難しいものも多く、 《尔》《毛》 使い 分けがなされる字体 など平仮名字

っている例がいくつかあったが、 『椿説弓張月』は本行と振り仮名に分けて字母を調査した。 用例数が少ないため省い た 合巻 『行平鍋 須磨酒宴』 の場合は、 文章中に漢字に振り 仮名をふ

!査範囲は次の通りで、調査した字数はそれぞれ約八○○○字である。

『椿説弓張月』 前編

举行 卷之一 七丁裏~巻之二 三丁裏 三行目

振り仮名 巻之一 七丁裏~巻之二 一丁表 二行目

『行平鍋須磨酒宴』

4文 三丁裏~十五丁表
 九行目

読本と合巻の使用字母の種類

的にみていきたい。 まず、『椿説弓張月』 前篇の本行と振り仮名、 及び『行平鍋須磨酒宴』の本文でどのような平仮名字母が使用されているか、

"椿説弓張月』本行・振り仮名、『行平鍋須磨酒宴』 の本文において、 それぞれ使用されていた字母の種類数は次の通りである。

『椿説弓張月』本行 八〇種

権説弓張月』振り仮名 五七種

 \neg

『行平鍋須磨酒宴』本文 六三種

次に、どのような字母が使用されていたのか具体的にみていきたい。

『椿説弓張月』本行(八〇種)

字母が一種のもの (二十二の仮名)

(イ) 以(ウ) 宇(エ) ⟨セ⟩

世

<u>y</u>

曽

(チ)

知

テ

天

ナ

奈

〈ヌ〉

奴

 $\langle \lambda \rangle$

武

〈モ〉毛〈ヤ〉也 ヘユ〉 由〈ヨ〉与〈ラ〉良〈ワ〉衣〈オ〉於〈ク〉久〈サ〉 王 左 中》 為 $\widehat{\Sigma}$ 无

・字母が二種のもの (十九の仮名)

(ア) 安 阿〈力〉可 加 〈キ〉幾 起 $\langle \exists \rangle$ 古 **∂**≥

(E) 比 飛〈フ〉不 婦 〈〈〉 部 遍 $\langle \pi \rangle$ 本 己 保 $\langle \neg \rangle$ 末 之 満 **∀** 女 免 (J) 利 里 $\widehat{\nu}$ 礼

志

Ŷ

多

太

\(\hat{\}\)

止

登

令令令

袮

年

Î

乃

能

連

〈口〉 呂 (코) 遠 越

・字母が三種のもの (四つの仮名)

(ケ) 介 計 希〈ス〉 春 須 寸 (y) Ш 徒 津 \(\tag{\chi} \) 者

八

盤

字母が四種のもの (二つの仮名)

尔 丹 耳 仁 シ 留 累 類 流

『椿説弓張月』 振り仮名 五七

・字母が一種のもの(三十九の仮名)

安〈イ〉 以 ウ 宇 $\langle \mathcal{H} \rangle$ 衣〈才〉 分》 可 (キ) 幾 ク 久 ヘコ> 己 かか ⟨セ⟩ 世 <u>٧</u> 曽

天 〈ト〉止〈ナ〉 奈 $\langle \Xi \rangle$ 尔 タシ 奴 於 $\widehat{\mathcal{I}}$ 乃 () 比 $\widehat{\mathcal{I}}$ 不 $\stackrel{\frown}{\sim}$ 部 $\langle \neg \rangle$ 末 左 $\langle \lambda \rangle$ 武 () 女 〈モ〉 毛 知

由 〈ヨ〉与〈ラ〉良 〈ル〉留 シ 礼 呂 シ 王 タシ 遠 中》 為 (고) 恵

 $\widehat{\Sigma}$

无

里

(チ)

<u>څ</u>

也川

・字母が二種のもの (九つの仮名)

介 計 シ之 志 ⟨ス ⟩ 春 寸 タシ 多 太 **〈**ネ〉 袮 年 者 八 (ホ) 本 保 Ŝ 三 美 IJ 利

『行平鍋須磨酒宴』本文(六三 種

・字母が一種のもの(三十三の仮名)

安

以

(ウ)

ヘエ〉

ク

 $\langle \exists \rangle$

(す)

〈セ〉

<u>٧</u>

曽

(チ)

知

テ

<u>}</u>

止

分か

奈

良

留

奴 रे (ノ) 乃(フ) 宇 衣〈オ〉 本 於 久 己 左 世

不 ^ ^ 部 (ホ) $\langle \tilde{s} \rangle$ 三 $\langle \lambda \rangle$ 武 ₹ > 女 〈モ〉 毛 ヤ 也 (2) 由 $\langle \exists \rangle$ 与 天 ()

(口) 呂 (ロ) 王 中〉 為 ヘ ユ 〉 恵 $\widehat{\Sigma}$ 无

・字母が二種のもの (十五の仮名)

可 八〈ヒ〉比 起 ケケ 末 介 計 <u>ે</u> 利 之 志 ⟨ス ⟩ 春 4 Ŷ Э 多 越太 <u>څ</u> Ш

徒

尔

仁

〈ネ〉

袮

年

飛 ヘマン 満 (J 里 $\widehat{\mathcal{V}}$ 礼 連 フシ 遠

っているので、 最も字母の 種の字母が使用されている仮名が、 種 読本本行は三種以上使用されている仮名があり、 類が多いのは、 読本本行の 〈ニ〉〈ル〉 読本振り仮名より合巻の方が多い点については、 で四種の字母が使用されている。 更に半数以上の仮名に複数種の字母が使用されている点が特徴とい 読本振り仮名と合巻は 平仮名文による機能的な使用が行われ 種 <u>|</u>から|| 種に 留 ま

ているからかと推測できる。

次に、それぞれに共通した字母を分類してみる。

読本本文・振り仮名、 合巻すべてにみられた字母

(サ) ⟨セ⟩ <u>y</u> 曽 〈チ〉

〈モ〉毛〈ヤ〉也〈ユ〉由〈ヨ〉与〈ラ〉良〈ル〉留〈レ〉礼〈ロ〉呂〈ワ〉〈テ〉天〈ト〉止〈ナ〉奈〈ニ〉尓〈ヌ〉奴〈ノ〉乃〈ヒ〉比〈フ〉不〈へ〉〈ア〉安〈イ〉以〈ウ〉宇〈エ〉衣〈オ〉於〈カ〉可〈キ〉幾〈ク〉久〈コ〉 王 部 己 〈ホ〉 為本左 ヘマ (7 末 世 〈シ〉 无 〈シ〉 五 〈ム〉 武 知 ())

中〉

遠

女 川

〈ケ〉介 計〈シ〉之 志 〈ス〉春 寸 〈タ〉多 太 〈ネ〉 袮 年 <u>〜</u> ハ 者 八 $\widehat{\mathbb{J}}$ 利 里

В 読本本行と合巻にみられた字母

〈カ〉加〈キ〉起〈ツ〉徒〈ニ〉仁〈ヒ〉飛〈マ〉 満 〈レ〉 連 (코)

越

С 読本本行・振り仮名にみられた字母

〈ホ〉保

D 読本振り仮名と合巻にみられた字母

恵

読本振り仮名のみにみられた字母

〈ミ〉美

読本本行のみにみられた字母

〈ア〉阿〈ケ〉希〈コ〉古〈ス〉須 $\widehat{\mathbb{S}}$ 津 \(\hat{\}\) 登〈ニ〉 丹 耳(ノ) 能 $\hat{\rangle}$ 盤 ラ 婦 $\stackrel{\textstyle \frown}{\sim}$ 遍 () 免 シ 類

累

流

路

表1 字母 読本本行 読本振り 合巻 ⊚保 39 (86.7%) 35 (31.0%) 0 木 本 6(13.3%) 78 (69.0%) 80 (100%) られる。 五入)を括弧に入れて示す)、 |や文の切れ目などの表示に活用された仮名である可能性がある。 読本本行・振り仮名には、 黄表紙や合巻では少数の使用もしくは避けられる傾向ハがあり、 合巻では の字母が基本的に使用されていた。一方で、合巻に登場する字母はすべて読本本行・振り仮名に使用されているが C は 読本本行では《保》が Bは読本本行と、合巻とに共通する、すなわち文・文章の表記に用いられたものである。 Aに挙げた字母は四十八の仮名すべてにわたっているので、 〈ホ〉 また、 〈ホ〉 《保》 は 平仮名ばかりで書かれる合巻の文章のような、いわゆる大衆的な平仮名文であるときは、 《本》 のみが使用されていた。表1は〈ホ〉の使用数をまとめたものであり のみであるが、読本本行・振り仮名両方に、 《本》より多く使用されているが、振り仮名では《本》が《保》の二倍以上使用されている。 Aにあたる《本》を併記し、 本行ではC・F、 振り仮名ではC・Eのように、 Cに該当する字母には◎を付けた。 当 時 明らかにジャンルによる違いがある字母の一つとい Bについては後で検討する。 の平仮名表記上、 ある程度《保》 合巻にはない字母が使用されている。 の使用数が認められる。 基本になっていた字母だと考え (割合 したがって、 (小数点以下第三 語の区切れ A B · D

えそうである。

とになっている。 D に 関しては読本本行に 〈 ユ 〉 の仮名が調査範 井 内に登場しなかったため、 読本振り仮名と合巻本文のみに使用されいるというこ

E は $\langle \widetilde{s} \rangle$ 0) 《美》 のみであり、 1 例 であった。 ほかはすべて《三》 が使用されてい

に付された振り仮名「みことのり」であり、 この 1例は次のものである。該当箇所のみ《美》で示し、あとは通行の平仮名表記で示す。[こと]は合字である。 この語頭の「み」が 《美》である。 該当箇所は 勑

巻之一 十一丁ウL3 物[こと]のり

この が振り仮. 名の 直 上 は漢字であり、 「時」に 「とき」という振り仮名が付されている。 この振り仮名 「とき」がすぐ下の「《美》[こ

《保》は

位 を四

と]のり」に続いてしまっていて、 .読本本行のみに使用されていた字母である。 語の区切れとして《美》の使用に関わっていると考えられるが、 このFの仮名が多い点に、 読本の特徴が表れている。 1 例 の Fについても後で検討した みなので判断

たが、 り仮名の字母を対照すると、『雨月物語』には《春》《太》《美》、『椿説弓張月』には《丹》《連》《和》 比較すると、 用的な仮名では、 ればならない振り仮名にBのものは使用を避けた可能性が推測される。『雨月物語』に使用された振り仮名一〇と『椿説弓張月』 振り仮名はA・C・D・Eが使用されていた。振り仮名に関しては「振り仮名という、美しさよりもわかりやすさを目的とする実 その 他の字母は一致した。 В の方が横幅が 単 純な形が採用されていた」ホヒという特性があると考えられる。 あったり、 したがって、 平仮名としても画数が多く複雑にみえる形であるので、 読本の振り仮名は本行に比して字母の数を減らす意識が働くのだと考えられる。 Aの字母のものとBの字母のものの字の大きさを 漢字の横に小さな文字で表記しなけ の3例が使用されてい

読本本行・振り仮名・合巻に共通する字母の使用数

す、Aの字母を検討していきたい。

までもない。 仮名の字母にあたる。 読本本行・振り仮名、 《可》《尔》《本》《三》《王》 合巻に共通していた一種類のものは、 は現行仮名にはないが、 多くの資料に使用されており、 江戸の板本で最も使用されている仮名であることは、 説明するに及ばない。 ほとんどが現行 いう

す)、該当字母には◎をつけ、仮名に読本本行のみにみられる字母がある場合は併記した。 〈シ〉〈ス〉〈タ〉〈ネ〉〈ハ〉〈リ〉 である。表2は二種類の字母の使用数をまとめ(割合(小数点以下第三位を四捨五入)を括弧に入れて示 次に、複数種の字母が使用されている場合では、 どのような使用数の傾向がみられるか検討していきたい。 該当する仮名は

ことが特徴だといえる。 名、合巻それぞれで使用傾向と比率が異なることが分かる。読本においては、本行と振り仮名で二種の字母の使用数が逆転 まず、〈ケ〉は、 がはるかに多く、 読本本行は 《介》 介》 は助動詞 の使用が少なくなっている。 《介》が多く、 「けり」「けん」といった付属語や、 《計》 はその約半数である。また本行のみに 合巻は 《計》 が多く、 形容詞活用語 《介》はその半数となっており、 尾に慣用的 《希》 が少数使用されている。 に用いら れる一と指摘されてお 本本 振 行 している 振り 仮 名は 仮

表2	2				
	字母	読本本行	読本振り	合巻	
	◎介 57(64.8%)		32(21.9%)	40 (33.3%)	
ケ	⊚計	25 (28.4%)	114(78.1%)	80 (66.7%)	
	希	6(6.8%)	0	0	
シ	⊚之	418 (89.1%)	308 (67.2%)	341 (74.6%)	
	⊚志	51 (10.9%)	150(32.8%)	116(25.4%)	
	◎春	167 (86.5%)	21 (15.0%)	150(95.5%)	
ス	⊚寸	9 (4.7%)	119 (85.0%)	7(4.5%)	
	須	17(8.8%)	0	0	
<i>_</i>	◎多	146 (99.3%)	432(99.1%)	223 (89.6%)	
タ	◎太	1 (0.7%)	4(0.9%)	26 (10.4%)	
→	⊚祢	6 (85.7%)	25 (49.0%)	11(25.6%)	
ネ	⊚年	1 (14.4%)	26 (51.1%)	32 (74.5%)	
	◎八	417 (88.3%)	90 (45.5%)	258 (78.2%)	
/\	⊚者	39 (8.4%)	108 (54.5%)	72 (21.8%)	
	盤	16(3.4%)	0	0	
IJ	⊚利	347 (94.3%)	150(92.0%)	239 (93.0%)	
	⊚里	21 (5.7%)	13(8.0%)	18 (7.0%)	
が はるかに	須》よ	はみずるな量に	るとはく四くシンは《異なるが、異なるが、		

量にも、

は、

読本本行は

《春》が圧倒的に多く、《寸》

0)

使

よく知られている。『椿説弓張月』と『行平鍋須磨酒宴』

そうした傾向が表れていると考えられる。

《志》

が語

頭、

念之》

が非語頭という使用傾向があ

シ〉は読本本行・振り仮名、

合巻それぞれで使用比率は

いずれも《之》の使用数の方が《志》

より多い。

性に触れるに留め、詳しい検討は別の機会に譲りたい。

使用が偏るからかと推測できるが、

本稿ではその

読本本行の

《介》

が振り仮名より多いのは本行に

《介》

るかに多く、《春》が少ない。 わずかであった。 《寸》がわずかという結果であり、 より使用比率が低い。その一方で、 **令**寸》 は読本本行のみに使用され 合巻は 読本本行の使用 《春》が圧倒的に 振り仮名は 令寸》 た

出されていないこ。 と似ているといえる。 しかし、 《寸》《春》 は 江戸の文献にほぼ例外なくみられるものの、 特定の使用傾向がこれまでの研究で特に見

あることが分かる。 は語頭に使用される例一が多く、合巻に タ 振 は読本本行・振り仮名、 り仮名では 庶民向け平仮名文の草双紙では、 一%以下であるのに対し、 合巻で、 《太》 いずれも《多》 が読本より多いのは、 合巻では一四%の使用がみられる。これにより、 語の区切れを明示する補助的な平仮名がある「三ことが指摘されている。 の使用数が 《太》を大きく上回る結果であった。 庶民向けの平仮名文の性質を持つためと考えられる。 読本と合巻で《太》 しかし、《太》 の使用に差が の使用が読 《太》

いることに注目される。 にでも使用され、 倍以上であり、 〈ネ〉 は、 読本本行は 読本本行・振り仮名、 《年》 は非語頭に偏ることが指摘されている仮名である「玉。 振り仮名が《袮》《年》 〈 ネ 〉 の使用例自体が 合巻、 いずれも使用傾向が異なった。《袮》《年》も他の文献で《袮》 ほぼ同等に使用されているのと対照的である。 7例と少ないので、 傾向を判断するには早計であるが、《袮》 合巻では 〈ネ〉 は 語の位置に拘らずどこ の使用が六例を占めて は 《年》 が 《 袮》

る。 れていた。 .傾向に影響していると推測できるが、こちらも今回はその可能性に触れるに止める。 《八》は助詞やハ行転呼音などへの使い分け一が知られており、 は、 合巻は 読本本行は《八》が圧倒的に多く、《者》はそれより少ない。 **《八》** が多いが、 《者》 の使用数も決して少なくはない。 〈ケ〉と同様に慣用的な使い分けが読本本行・振り仮名の字母使 振り仮名は このように 《者》がやや多いが の使用比率にはそれぞれバ **《八》** もほぼ同等に使 ラつきが 用 あ

には (J) 共通した使用規則があったかと推測できる。 はいずれも 《利》 が九割以上使用され、 《里》 が少ない。 読本本行・振り仮名、 合巻それぞれの割合も同等といえる。 IJ

より少ない。 られるが、 なることがあった。 母 以上のように読本本行・ 補助的な字母といっ 読本と合巻で使用数の傾向が異なるものがあった。 多い字母が少ない字母の二倍ほど使用されている場合、 た傾向は一致している。 振り仮名、 合巻で共通しても、 読本本行・振り仮名は、 必ずしも同傾向ではないと分かった。 合巻では、必ずいずれも片方の字母が多く使用され、 圧倒的に少ない場合といった数量の違いはあるが、 二種の字母の使用数が逆転している、 これら 一種の字母も多くの または使用比率が異 もう一方がそれ 主体的な字 文献でみ

読本本行・合巻に共通する二種類の字母の使用数

四

と併記した。 表3にまとめ В \mathcal{O} 読本本行と合巻でのみ二種類の字母がみられた〈カ〉〈キ〉〈ツ〉〈ニ〉〈ヒ〉〈マ〉〈レ〉〈ヲ〉をみていきたい。 (割合 (小数点以下第三位を四捨五入) を括弧に入れて示す)、該当字母には◎を付け、 同じ仮名を表わすA・Fにあたる字母 使用

方が補助的に使用されていた字母とみられる。 ずれも二 種 類 気の字母 Ò 方が多く使用され、 もう一方がそれより少ないという傾向がある。 片方が主体的に使用されて、もう一

調査された文献のほとんどで語頭に用いられることが分かっている。 は **河** | | が主体的に使用され、 《加》 が補助的である。 その割合は読本本行と合巻でほとんど同じである。 《加》 はこれまで

から三割使用され は 《幾》 が主体であ ほ カゝ の字母と比べてもやや使用頻度が高いといえよう。 ŋ, 補助的な《起》 の割合が読本本行の方が若干多めである。 《起》 もほぼ例外なく語末での しか Ļ 読本、 使用が指摘され 合巻ともに 《起》

表3	}				
	字母	読本本行	読本振り	合巻	
4	可	349 (89.9%)	378(100%)	411 (89.1%)	
カ	⊚加	39(10.1%)	0	46 (10.9%)	
+	幾	84(67.7%)	261(100%)	140 (79.5%)	
+	◎起	26 (32.3%)	0	36 (20.5%)	
	Ш	96 (91.4%)	219(100%)	214(99.1%)	
ツ	⊚徒	8(7.6%)	0	2(0.9%)	
	津	1 (1.0%)	0	0	
	尓	473 (87.1%)	53(100%)	268 (99.3%)	
_	丹	67(12.3%)	0	0	
_	耳	2(0.3%)	0	0	
	⊚仁	1 (0.2%)	0	2(0.7%)	
<u></u>	比	152(968%)	194(100%)	181 (99.5%)	
٢	◎飛	5(3.2%)	0	1 (0.5%)	
_	末	88 (95.7%)	208(100%)	166 (84.3%)	
マ	⊚満	4(4.3%)	0	31 (15.7%)	
レ	礼	161 (77.0%)	86(100%)	160 (98.8%)	
	⊚連	48 (23.0%)	0	2(1.2%)	
ヲ	遠	424 (98.4%)	42(100%)	176 (94.6%)	
	⊚越	7(1.6%)	0	10(5.4%)	
向が指摘されている「八。	る。《仁》	で、売本本庁こよ寺川は岩母が吏用されていると分があり、合巻が《尓》《仁》の二種のみである一方一番少ないのが《仁》、という字母の種類の多様さの次に《丹》が多く使用されており、その次に《耳》	(ニ)は (ニ)は (ことがあ	が若干多めである。《徒》も語頭に限って使用され《徒》の使用数は読本が8、合巻が2と、読本の方(ツ〉はいずれも圧倒的に《川》の使用数が多い。	

〈ヒ〉は《比》が主体的であり、《飛》 の使用は わ

ずかである。《飛》 は板本によっては語頭に使用されることが分かっている「亢。

ている二〇。 の使用がみられ、 〈マ〉は主体的に使用されている字母は《末》である。読本本行の《満》の使用比率が四・三%である一方、 読本本行より使用頻度が高いことが分かる。 また、 《満》 は特定の語での使用や、 非語頭での使用傾向が指摘され 合巻では一五・七%

傾向がみられず、 に使用されている。《連》も板本によっては語末に使用が偏る傾向が指摘されている三が、大体の板本においては特に定まった使用 〈レ〉は《礼》が主体的に使用され、〈マ〉とは逆に、 時折混ぜられる仮名としている文献もある三三。 補助的な字母の《連》は合巻には少ないが、 読本本文には二三%とやや多め

る場合が多い字母にであり、読本本行と合巻に使用されていたのは頷ける。 は《遠》 が主体的であり、補助的な字母《越》の使用数は読本本行と合巻でさほど変わらない。 《越》 は助詞に使用されてい

これら二種の字母だと、 《加》《起》《徒》《仁》《飛》《満》は、 他の文献にも登場し、 語の特定の位置に使用されることの多かった

る。 たものであり、 字母であると分かる。《越》は助詞に使用される場合が多い。これらを踏まえると、Bに該当する字母は文・文章の表記に用 しかし、《連》は機能を断定し難く、先行研究を参照すると、 読本本行、 合巻といった平仮名での文・文章表記で語の区切れや文の切れ目などの表示に活用された仮名と考えられ むしろ装飾的な役割で汎用性があったかと推測された。 元いられ

受けられる。一方で明らかに読本本行と合巻で使用比率が異なる仮名があった。 〈カ〉〈キ〉〈ツ〉〈ニ〉〈ヒ〉〈ヲ〉は個々の仮名において、読本本行と合巻の間ではさほど使用数に大きな異なりはないように見

読本本行、合巻においてそれぞれ補助的な字母の使用に違いがあることの表れである。 〈マ〉は合巻の《満》 の使用比率が読本本行より多い。〈レ〉は読本本行において《連》の割合が合巻より多い。こうしたことは

0 機能が使用される場合も変化するに違いなく、 読本本行と合巻で、 語の区切れや文の区切れを示す字母が使用されていたとすれば、漢字仮名交じり文と平仮名主体の文とで、 《満》《連》 は特にジャンルの異なりが影響するのだと考えられる。

読本本行のみに使用される字母の使用数

五

にしており、 最後に、Fに該当する、 最も特徴的な面といえる。 読本本行にのみ使用された字母を検討していきたい。これらは『椿説弓張月』における字母の種類を豊富

まとめた 該当する仮名は〈ア〉〈ケ〉〈コ〉〈ス〉〈ツ〉〈ト〉〈ニ〉〈ノ〉〈ハ〉〈フ〉〈へ〉〈メ〉〈ル〉〈ロ〉である。 (割合 (小数点以下第三位までを四捨五入) を括弧に入れて示す)。 表には同じ仮名であるA・Bの字母と併記 それぞれの使用数は表4に L Fに該当する字

Fの字母は、いずれもその仮名において使用比率が最も高い字母より少ない。

母には◎を付してある。

れていない。 〈ア〉は《阿》 が《安》に対してはるかに少ない。この字母は黄表紙や洒落本「同に使用されることもあるが、 特定の用法を指摘さ

で使用されることがある「宝。 〈ケ〉はAに分類された《介》《計》と《希》 しかし、 その使用は、 が使用されていた。 本によっては非語頭だったり、 《希》 の使用比率も《介》《計》に比して低い。 語頭だったりと、 定まった傾向が報告されていな この字母も黄 表

い 三 六。

ı				
字母	読本本行		字母	読本本行
安	106 (92.1%)		八	417 (88.3%)
◎阿	9(7.8%)	/\	者	39 (8.3%)
介	57(64.8%)		⊚盤	16 (3.4%)
計	25(28.4%)	_	不	128 (97.7%)
⊚希	6(6.8%)	7	◎婦	3(2.3%)
己	162(98.8%)	^	部	189 (99.5%)
⊚古	2(1.2%)		◎遍	1 (0.5%)
春	167(86.5%)	4	女	27(93.1%)
寸	9 (4.7%)		◎免	2(6.9%)
◎須	17(8.8%)		留	258 (98%)
JII	96 (91.4%)	п.	◎累	2(0.8%)
徒	8(7.6%)	10	⊚流	2(0.8%)
⊚津	1(1%)		◎類	1 (0.4%)
止	414(99.8%)	П	呂	25(67.6%)
⊚登	1 (0.2%)	1	⊚路	12(32.4%)
尓	473 (87.1%)			
	字 ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎	字母 読本本行 安 106(92.1%) ◎阿 9(7.8%) 介 57(64.8%) 副 6(6.8%) 己 162(98.8%) ◎古 2(1.2%) 春 167(86.5%) 寸 9(4.7%) ◎須 17(8.8%) 川 96(91.4%) 徒 8(7.6%) ◎津 1(1%) 止 414(99.8%)	字母 読本本行 安 106(92.1%) ◎阿 9(7.8%) 介 57(64.8%) 計 25(28.4%) ③希 6(6.8%) 己 162(98.8%) ③古 2(1.2%) 春 167(86.5%) 寸 9(4.7%) ③須 17(8.8%) 川 96(91.4%) 徒 8(7.6%) ③津 1(1%) 止 414(99.8%) ③登 1(0.2%) 口	字母 読本本行 タ 106(92.1%) 人の阿 9(7.8%) ハ 者 ②盤 子の 6(6.8%) フ ②婦 子の 162(98.8%) ス ③婦 子の 162(98.8%) ス 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3

物語』、 特定使用が報告されているほか、洒落本『傾城買二筋道』でも語頭に限 〈コ〉は《古》がわずかに使用されていた。この《古》は読 洒落本、 黄表紙でもみられる。 恋川春町の 小説類に、 語頭での 本 雨 月

って使用されているこせ。

らない《春》《寸》とは違い、《須》は多くの文献で語末、 は《春》《寸》のほかに 《須》が使用されていた。 助詞 傾向の への使用 定ま

1 (0.2%) |の使用比率が高いこともあり、『椿説弓張月』本行において《須》は特 |が報告されている二、。 振り仮名や合巻に共通した《寸》 よりも 《須》

<u>⊚丹</u> ⊚耳 67(12.3%) 2(0.3%) 505 (97.1%) 15(2.9%) 定の使用がされていた可能性が高い。

られないものであり、『金々先生栄花夢』で語頭にときおり混ぜられる $\widehat{\mathbb{Y}}$ には《津》が使用されていた。この字母は他の文献にあまりみ

元と報告されている以外に特に指摘はされていない。

には 《 登 》 が 1例あった。 この字母も他の文献にあまりみられないものである。 天保期の『春色梅兒誉美』 では和歌に使用

されていたことから視覚的効果を狙った字母だと推測されている三〇。 は 《尓》の次に 《丹》が多く、 《耳》はそれよりはるかに少ない。《丹》《耳》ともに特定の用法が分かって いない字母であ

る は 《能》 が使用され、 その比率はかなり低い。 洒落本で助詞に使用されていたことが分かっている三が、 これも多くの 助 詞

する場合が圧倒的に多い中でのことであり、 は 《盤》が使用されており、 《盤》 は他の文献にも助詞に使用されると分かっている三つ。 洒落本『傾城買二筋道』では序文で《者》《八》とともに使用しての表記の多様化が指 しかしこれも《八》 を助詞に使用

(フ) は 《婦》が使用されていた。 この字母は他の文献で特定の語に使用される、 特に指摘がない、 語頭に混じる、 といったばら 摘されている三三。

つきがみられるものである三四

に

《乃》が使用されている中でのことで、それ以上の用法は指摘されていない。

ったりする三六。 は 《遍》 が 1 例あった。 これも《婦》 と同様に黄表紙にもみられることがある言が、 文献によって用法が見出せたり 特にな

(メ) には 《免》 が わずかに使用されていた。 この字母も他の文献にみられるが、 用法が見出しがたい三七。 カ

は読本 先行研究において特に用法を示されていないものである。 『雨月物語』、 は最も多い三つの字母がある。 洒落本『傾城買二筋道』に使用があったが、《類》は他の文献においても使用例がなかった。この三つの字母も 《累》《流》《類》 はいずれも使用比率が低い。 《累》 は黄表紙に使用された例三があり、

(ロ)の 《路》 は他の字母に比べて使用比率が高いといえる。《路》 も特定の用法が指摘されていない。元。

が多いことが分かった。 以上のように、Fの読本本行のみに使用されていた字母は、 洒落本、 黄表紙、 合巻などで総括して特定の用法を見出 しがたい もの

説弓張月』の特徴といえる。 が、『雨月物語』『無頼通説法』 はおおむね合致し、読本本行のみの字母も、ほとんどがいずれかの本において使用されていた。また現在の「は」の字母に当たる《波》 『椿説弓張月』本行と、 読 本 『傾城買二筋道』には使用されているのに、 『雨月物語』 や洒落本 『無頼通説 法』『傾城買 『椿説弓張月』には使用されていなかった『。これも 一筋道』 の本文の字母型を対照すると、 基本的 な字母 『椿

類は使用されておらず、 まり装飾的な用字が意識された字母が多様に使用されていたとみられる。 教養層が読者対象とされていた前期読本、 他 「の文献でもみられる字母を使用していることが分かった。 洒落本門の流れを受けた後期読本『椿説弓張月』 しかし、『椿説弓張月』 は、 独自 特定の用法がみられない字母、 0 表記といえるほどの字の種 0

六 おわりに

意識したかと考えられる字母があるということが、 「椿説弓張月」と『行平鍋須磨酒宴』の平仮名には、まずどちらでも使われている基本的な字母があり、 ある程度予想できたが、 確かめることができた。 読本には更にジャンル

名表記に選択肢があるということは、 読本なら使用するもの、 合巻では使用を避けるものといった、平仮名の選択が可能であった実態がみえた。 現代にはない表記意識が江戸 (D) 小 説類の仮名使用に表れているといえる。 ジ ヤンルによって平仮 『行平鍋須磨酒宴

献 が 0 で、 使用されて、 ほとんどの字 で使用位置に偏りのある点が指摘されているものが多かった(ただし、今回の調査の始めに述べように、字母の種類を概観することが趣旨 使用位置の実態については、 二種 母 は の場合はいずれも片方が多めで、 他 の多くの資料でも使用が認められ、 同字母の別字体の問題を考慮しながら改めて調査したい)。 もう片方はそれより少なめという関係がみられ 当時の基本的な字母と考えてよいだろう。仮名に対し一 た。 また少 なめ 種 から二 の字 母 種 は 他 \mathcal{O} 字 0) 文

したい)。 あるもの \mathcal{O} 0 が多かった。 種類の豊富さが特徴である。 方で『椿説弓張月』 がほとんどであった。 この読本のみの字母は他文献で使用位置の偏りの指摘がされていない、もしくは文献によって使用位置にばらつきが は、『行平鍋須磨酒宴』と共通の基本的な字母も当然使用され、それに加えて読本のみの字母があり、 それらの字母を他の文献と対照すると、 これらの字母は、 装飾的 に用いられたと考えられる(なお、これらの 少し遡った読本や洒落本などに使用されたものと共通するも 『椿説弓張月』の実態も、 改めて調査 字

られた。 仮名使用に近いものと、 るものが多かった。 『椿説弓張月』 読本の字母に のみにみられた特殊な字母は一 は 他 読本板本の のジャンルにはみられ 洒落本などにみられた字母を受け継いで、 詳 細 な調査がなかったので今回その調査を行ったが、 ない、 種 特殊なものがあるの のみであり、 ほかは黄表紙には少ないものの、『雨月物語』 装飾的な使用がなされたと考えられる面が併在していると見受け では ないかと予想してい 馬琴読本には、 たのであるが、 合巻のような大衆的 や洒落本二種と共通す 既に検討したように、 実用的な

注

 \equiv

馬琴読本、 ら近世の板本に移り変わる間に平仮名の種類が減少した点が示され、 九七一) 草双紙といった各ジャンルの平仮名字体の総数が時代の進むにつれ収斂傾向にあることが述べられている。 において、 中世の写本から江戸時代の板本の平仮名字体の種類の割合を調査し、 また、 浜田 (一九七九)には、 比較することによって、 古活字本、仮名草子、 中世 西 鶴

木越 記あ 意識を探ったものである。 り (一九八九) では、上田秋成が 板本の調査ではない。 大島 (1000)『春雨物語』 では馬琴の に使用している平仮名を字母で分類して調査しているが、 『南総里見八犬伝』 が調査されているが、こちらも自筆稿本から作家の表 自筆稿本における調査で

浜田(一九七九)参照。

『滝沢馬琴集』第九巻(古典叢書、本邦書房、一九九○年)pp. 183-184

五. 四

- 書房 館所蔵合巻曲亭馬琴集』に収録されている影印の中で最も状態がよいことを考慮して選定した。 て取り上げた。『行平鍋須磨酒宴』は『椿説弓張月』とさほど隔たらない文化年間の制作であることと、フジミ書房 板坂則子編『椿説弓張月前編』(笠間書院 二〇〇八)によった。『椿説弓張月』は当時の人気作であり、初刊本と考えられる本の影印を参照しやすいことから資料とし 一九九六)、『行平鍋須磨酒宴』(『国立国会図書館所蔵合巻曲亭馬琴集』第三巻 『国立国会図書
- 六 例えば、玉村(一九九四)では複数の同字形仮名グループを平仮名字体として認定し、字体を定義している
- もずれや汚れで判読不可能な平仮名、合字「こと」「ころ」「こそ」は調査から省いた。
- 八 矢野 (一九九○)、久保田 (一九九六)、内田 (一九九八a)・(一九九八c)・(二○○○) の調査結果により、 《保》

は使用されない

九 前田 (一九七一) pp. 122-123

か、使用されても使用例がわずかであることが分かっている。

- 0 前田(一九七一)の調査結果を参照。 以下、『雨月物語』の字母と対照する際は前田(一九七一)による。
- 一 内田(一九九八a)、久保田(一九九五b)(一九九七)(一九九八)(二○○九)、矢野(一九九○)などで使い分けが指摘されてい
- · 一 内田(一九九八 a) (二〇〇〇)、久保田(一九九五 b) (一九九八) (二〇〇九)、矢野 は検討されているが、資料によってさまざまであり、統一用法は報告されていない。 (一九九〇) (一九九二) などで《春》《寸》
- □ 矢野 (一九九○)、久保田 (一九九五b) などで言及されている。
- 内田(一九九八a)、久保田(一九九五b)(一九九六)(一九九七)(一九九八)、玉村(一九九四)で指摘されている。
- 久保田 (一九九五b) (一九九八) (二○○九)、矢野 (一九九○) (一九九二) などで指摘されている。
- 安田 (一九六七)、坂梨 (一九七九)参照。
- 内田 (一九九八 a)、久保田 (一九九七)・(二〇〇九) 参照
- 人保田(一九九七)・(二〇〇九)参照。
- 丸 内田(一九九八a)、久保田(一九九六)・(一九九八)・(二○○九) 参照。
- 内田 (一九九八 a)、 久保田 (一九九五6)・(一九九六)・(一九九七)・(二○○九)、 玉村 (一九九四) で特定の語 への使用が指
- 内田(一九九八a)参照

- 一 久保田 (一九九七) 参照。
- 板本本文に限って、 久保田 (一九九六)・(一九九七)、 内田 (一九九八 a)・(二〇〇〇) などで報告がされている
- 内田(一九九八a)の黄表紙 《買二筋道』、矢野(一九九〇) 『金銀先生再寝夢』、 の黄表紙『心学時計草』『新鋳小判驤』『奇妙頂礼胎錫杖』『怪談筆始』『化物小遣帳』参照 同(一九九八c)の合巻『偐紫田舎源氏』、久保田(二〇〇九)の洒落本
- 宝 矢野 (一九九○)『怪談筆始』参照。
- 九)の洒落本『傾城買二筋道』では特定の語に限られて使用される、という指摘がある。 内田 (一九九八 a) の洒落本 『無頼通説法』では非語頭、 久保田(一九九六)の黄表紙 『無益委記』では語頭、 久保田 (-100)
- t 内田 (一九九八a) の洒落本 『無頼通説法』黄表紙『金銀先生再寝夢』、久保田(一九九六)の黄表紙『無益委記』、 同 九 九
- 八 の 『金々先生栄花夢』といった恋川作品、 同(二〇〇九)の洒落本『傾城買二筋道』参照。
- 「 内田 (一九九八 a) の洒落本 『無益委記』、 同 (一九九八) 『無頼通説法』 0 『金々先生栄花夢』といった恋川作品、 黄表紙『金銀先生再寝夢』、 久保田(一九九五b)の赤本、 同(二〇〇九)の洒落本『傾城買二筋道』 久保田 参照。 九九六) 0 黄 表
- ^{二九} 久保田(一九九八)参照。
- 玉村(一九九四)参照。
- 内田(一九九八a)の洒落本『無頼通説法』、久保田(二〇〇九) (一九九○)の黄表紙『心学時計草』においても確認されている。 の洒落本『傾城買二筋道』による。 字母は 『雨月物
- 内田(一九九八a)の洒落本『無頼通説法』黄表紙『金銀先生再寝夢』、 ·』(坂梨一九七九) でも使用が認められている。 玉村 (一九九四) 0) 『春色梅兒誉美』 参照。 『曽根崎心
- 「久保田 (二○○九)参照。
- 久保田(二○○九)の洒落本『傾城買二筋道』では語頭に混じる、とある 内田(一九九八a)の黄表紙『金銀先生再寝夢』では特定の語、 久保田 (一九九八) の黄表紙 『金々先生栄花夢』 では特になし、
- 矢野(一九九○)黄表紙『心学時計草』『新鋳小判欜』『奇妙頂礼胎錫杖』『怪 談筆始』『化物小遣帳』、 矢野 (一九九二) 『尻欅御要
- し、久保田(一九九六)の黄表紙 内田(一九九八a)の洒落本 『無頼通説法』、 『無益委記』では語頭傾向が指摘されている。 黄表紙『金銀先生再寝夢』では語頭、 久保田 (一九九五b) の 赤本三種では特にな
- 久保田(一九九六)の黄表紙『無益委記』、 同 (二〇〇九)の洒落本『傾城二筋道』 にみられた。

三八 矢野 (一九九〇) の『怪談筆始』を参照。

三九 読本『雨月物語』、 洒落本『傾城買二筋道』、黄表紙『金々先生栄花夢』などに使用が認められる。

四○ 読本『雨月物語』、 算し、対照した。 内田(一九九八a)洒落本『無頼通説法』、久保田(二○○九)『傾城買二筋道』の調査結果を、字母に直して換

四)ほかに『雨月物語』には《遣》《佐》《寿》《堂》《地》《那》《日》《和》、『無頼通説法』には《具》《勢》《楚》《那》《美》《和》 《恵》、『傾城買二筋道』には《佐》《楚》《堂》《美》《恵》が使用されていた。

四二横山邦治編(一九八五)、中野三敏(二〇一一)pp. 220-226 参照。

平仮名字母使用量表総覧

<u> </u>	<u> </u>	白丁马	7世月	里衣前	沱 男				
仮名	字母	読本本行	読本振り	合巻	仮名	字母	読本本行	読本振り	合巻
ア	安	106	116	157		者	39	108	72
,	冏	9	0	0	<i>/</i> \	八	417	90	258
1	以	121	336	233		盤	16	0	0
ウ	宇	53	359	212	ヒ	比	152	194	181
エ	衣	28	45	21	L	飛	5	0	1
オ	於	50	171	92	フ	不	128	149	156
力	可	349	378	411		婦	3	0	0
//	加	39	0	46	_	部	189	123	141
丰	幾	84	261	140	```	遍	1	0	0
7	起	26	0	36	ホ	本	6	78	80
ク	久	178	232	171	111	保	39	35	0
	介	57	32	40	マ	末	88	208	166
ケ	計	25	114	80	Ň	満	4	0	31
	希	6	0	0	131	三	53	198	85
コ	己	162	218	138	1	美	0	1	0
	古	2	0	0	ム	武	22	47	71
サ	左	96	160	179	メ	女	27	171	101
シ	之	418	308	341	<i></i>	免	2	0	0
	志	51	150	116	モ	毛	288	194	205
	春	167	21	150	ヤ	也	65	190	59
ス	寸	9	119	7	ユ	由	8	110	59
	須	17	0	0	日	与	96	155	111
セ	世	82	95	123	ラ	良	172	106	186
ソ	曽	160	89	75	IJ	利	347	150	239
タ	多	146	432	223		里	21	13	18
-	太	1	4	26		留	258	52	156
チ	知	37	217	104	ル	累	2	0	0
	JII	96	219	214	,,,	類	1	0	0
ツ	徒	8	0	2		流	1	0	0
	津	1	0	0	レ	礼	161	86	160
テ	天	468	96	243		連	48	0	2
1	止	414	350	354	П	呂	25	91	43
	登	1	0	0		路	12	0	0
ナ	奈	231	118	206	ワ	王	45	81	65
	尔	473	53	268	中	為	25	35	10
	仁	1	0	2	고	恵	0	64	9
	丹一	67	0	0	ヲ	遠	424	42	176
	耳	2	0	0		越	7	0	10
ヌ	奴	10	8	29	ン	无	74	309	206
ネ	年	1	26	32					
'	袮	6	25	32					
1	乃	505	169	387	-				
	能	15	0	0					

はじめに

戯作作品は未だ調 る研究成果が得られている。 一作品は調査が及び、 世 0 平 仮名字体の研 査するべき資料が多い。 基本として用いられる平仮名字体の種類や、 究は、 これまで、 浜田啓介 黄表紙を中心に、 (一九七九) で時代を下るにつれて収斂する傾向が指摘されて以来、 合巻、 赤本、 共通する用法があることが 洒落本、 滑稽本、 咄本、 浄瑠璃本、 分かってい その 人情 る。 本といっ 傾 L 向を確 カゝ たジャン 近世後期 かに裏付 け

めると とされ、 られた用法につい に重きを置き、 近世の平仮名表記と出版の関わりや収斂傾向の実態を浮き彫りにできると考えられる。本稿では戯作のジャンルと平仮名字体の関係 こうした傾向を、 浜田 「草双紙類 (一九七九) で収斂の指標としている 平仮名字体総種類数の平均値が示されている。その結果、「馬琴読本類」 後期読本の代表作家である曲亭馬琴の読本三本を資料に、 具 て論じ 、体的な字体の種類と用法で裏付けることで、単純化に反した平仮名字体の実態を浮き彫りにできると考えられる。 は全体的に読本より前の出版年であるこ。 たい。 「馬琴読本類」「草双紙類」 読本には特別、 は、 仮名字体の種類、 「馬琴読本類 平仮名字体を多めに使う傾向があったと推測され の平均値が高いとしている が 用 先、 法上 「草双紙 の先行研究との共通 類」 が、 が 後 資料の年代を確 の時 点、 代 のジ 読本にみ ヤ る

ちて詳にせざることを得ず。」三と述べ、 されているほか、 一本の部 本の 読 物之本で教養層の読み物とされる読 本は戯作の 如き、 とし 各その差ありといへども、 中 巻之一 先述した浜田 でも別格視されていたと考えられ、 一を「 読本作者之部」 (一九七九) において 本 同じ戯: 戯墨は則是一なり。 'n 調 としてい 査 作 は、 \mathcal{O} 中でも読本に力を入れ、 前 . る。 「馬琴読本類」のくくりで仮名字体の種類数のみが提示されているのみである。 馬琴は『近世物之本江戸作者部類』(天保五年成立) 田 富祺 このジャンル分けの理由を、 但その文に雅俗あり、 (一九七一) で前期読本 区別していたと分かる。 作者の用意も亦同じからず。 雨 馬琴は巻之一の巻末に 月 物 語 0) 平 -仮名字母 また、 の巻之一を「赤本・ 式亭三 「赤本・ 0 この故にその部を分 種 馬 類 は ع 洒落本 使 讀 用 数が 洒落本 ・中本・

読

草雙子は駄菓子也。」

四と述べている。

が平仮名字体の 複数の字体が使用される仮名の数 品である。 調査資料は後期読本の代表作家である曲亭馬琴の著作にした。 種類 四種類 種類 五種類 計 南 ·椿説弓張月 田 月氷竒縁 36 21 9 5 1 宗 総里見八犬伝 椿説弓張月 3 33 19 10 1 一 (一九九八 権総 使用されて 使用されているが、 資料と調査範囲と共に次に記す五。 22 2 (氷竒縁』(文化二年) 31 6 1 |氷竒縁|| は馬琴読本で初めての売れた作品である。この三本のみで表記の一般性を断定することはできないものの、 |類の字体を使用している場合が最も多い。どの読本においても四八の仮名のうち三〇以上の仮名に複数 |紙の字体種類数と比較するーヒと、三本とも黄表紙を上回り、やや少なめにみえる八犬伝も大体の黄表紙より種類豊富で あることが分かった。 通 八犬伝は月氷竒縁・弓張月と一〇種類以上の差がある。これら三本の字体種類数を先行研究で明らかになっている黄表 !する用法や各作品の比較から読本の平仮名字体の一端を探ることはできよう。 選 複数の字体が使用される仮名の数の分布をみると、表1の通りになる。一つの仮名あたり一~五種類 三作品の平仮名字体の総種類数をみると、月氷竒縁 前篇』(文化四年) 巻之一 七ノ下ウ~三十一丁ウ [択に影響が出る点が検討された。 ず `れも本行の平仮名のみを調査した。『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』が人気を博したことはいうまでもなく、『月 されている平仮名字体の a 肇輯』(文化十一年) 巻之一 九丁オ~三十丁ウ の調査で洒落本と黄表紙に平仮名字体の種類に差が見出され、 複数の字体が使用される仮名の数は月氷竒縁が36、 読本三本における仮名字体の種類 巻之一 八丁オ~廿六丁オ 種 類は共通しているもの 同じことが読本にもいえ、 『近世物之本江戸作者部類』に「多く行われたり」としている三作 106 が多い 弓張 月 102、 ものの、 弓張月33、 ジャンルの違いに分け入る余地のあるといえる。 八犬伝92と、月氷竒縁六が最も多く、 作品によっては 洒落本の行数が決まっているなど体裁の 八犬伝 31の順に多い 共 通しない字体もある。

共

違い

を使用

し、二種

最も少ない

の字体が当てら

三本に

A. 三作品に共通(八二字体)

一種類(18の仮名/一八字体)

 【あ】 (「ゑヾ」)
 【ん】

 【さ】 【せ】 【そ】 【ち】【ぬ】【へ】【 ¿ 】 【む】 【よ】 【ろ】 【 ? 】

・二種類(26の仮名/五二字体)

 【れ】【生】
 【を】【故】
 【を】【れ】【き】【た】

 【れ】【生】
 【を】【故】
 【を】【た】

 [6][た] 【け】【々】 【ゆ】【ゆ】 【 な】 【 よ 】【 ホ 】 [6][5] [a][x] [b][5]

[と][と] [と][と]

【 て 】 【 ハ 】 【 き 】 【 ま 】 【 ぬ 】 ・三種類(4の仮名/一二字体)

【も】【も九】【も】 【る】【る】【 烈 】

B.月氷竒縁・弓張月に共通(八字体) 【6】 【6】 【1月】【作】 【聖】 【に】【7】 【3】

C.弓張月・八犬伝に共通(三字体)

【し】 【ほ】 【体】

D. 月氷竒縁・八犬伝に共通

[り] [を] [の] [れ]

(乃 】 【 ぬ 】 【 み 】

E、月氷竒縁のみ

【抄】【な】 【は】 ほ を 【堂】【章】 ์ ด 例 お 【急】

を

F.弓張月のみ

【者】【す】【セ】【律】【各】【ふ】【母】【的】

G. 八犬伝のみ

【絲】【は】

ば

多く、読本には〈ル〉の仮名字体の種類に特徴があるといえる。 特筆すべきことに、三作品とも〈ル〉に四~五種類の字体がみられることが挙げられる。黄表紙などは【る】【 る】 のみのことが

いえない。 Aは四八の仮名の字体が揃っており、三作品に概ね共通した字体が使われていると分かる。大体が草双紙などにも必ず使用される 当たり前に使用されるとは

B・C・Dの字体は、 基本的には草双紙等に当たり前に使われるとはいえない字体である。

【 * 】は『雨月物語』に使用例があるが、草双紙には使用報告のない字体である。

といった字体を含む。 Fの弓張月のみの字体も種類が多いといえるが、片仮名に近い形の【セ】と、Aに分類される【る】と画数の異なるだけの【**な**】 また、【す】は草双紙によく使われる字体で、月氷竒縁と比べて字体が単純なものが多い印象である。

滑稽本、 八犬伝にのみ使用が確認できた【�】は【ゟ】と運筆違いのバリエーションで、 人情本など読本全盛期より少し後の方がよく使用される字体である。 曲転部に凹みがある。【ね】は、合巻や黄表紙

に仮名字体の種類が多めであっても、こうした字体が必ずAに含まれるわけではないというのは注目に値する。 Bの【り】【 作 】、Cの【し】、Dの【 匈 】、Fの【す】などは黄表紙ほかよく戯作にみられる字体である ○。 読本三本それぞれ

していきたい。 を検討する。読本三本に先行研究で指摘されている使用傾向と通じるのか、また草双紙にはさほど使われない字体の使用傾向 以上から、各作品の種類は概ね共通するも、個別に特色が窺われる面があることを確認した。今回はAの字体を中心に、 注目 用

一 読本三本に共通する仮名字体の使用法

法のある字体と、読本に特徴的な用法のある字体を分けて述べていきたい。 Aに分類した字体の使用数や使用傾向を確かめると、草双紙類にはみられない使用傾向を持つものを含む。 従来指摘されてきた用

位置を示した。ただし〈ス〉〈テ〉のみ分け方を別にしたので後述する。 二種類以上の字体がみられた仮名と、表2に、Aに該当する仮名の自立語、 付属語、 その仮名一字の助詞 · 助 動詞に分類し、 使用

先行研究で指摘されているのと同じ使用傾向がみられた字体は、次の通りである。

 〈力〉【 ク】【 か】
 〈キ〉【 も】【 を】
 〈ク〉【 く】【 く】【 く】【 く】【 く】【 な】
 〈カ〉【 ク】【 か】
 〈キ〉【 も】【 を】
 〈シ〉【 し】【 を】
 〈ハ〉【 た】【 か】
 〈キ〉【 も】【 を】
 〈シ〉【 し】【 を】
 〈ハ〉【 た】【 か】
 〈カ〉【 た】【 た】
 〈シ〉【 し】【 た】
 〈シ〉【 し】【 た】
 〈カ〉【 た】【 か】
 〈カ〉【 た】【 た】
 〈シ〉【 し】【 た】
 〈カ〉【 た】【 た】
 〈カ〉【 た】
 〈カ〉【 た】
 (カ) 【 た】

なる漢字仮名交じり文の読本においても同様の用法があると分かった。右の仮名字体の使用傾向については三-一で述べる。 おいて、そうした使い分けは表語機能となっており、語の切れ目を分かりやすくするといわれているが、漢字が自立語のマーカーと 草双紙には報告があまりみえない使用傾向があった字体は次の通りである。

					2用傾向 	J) ([]内はその	字体の総数			T			
付属語	語末	語中	準語頭	語頭					語末	語中	準語頭	語頭		
12	0	1	0	0	な [13]	月氷			0	0	1	64	い [65]	月氷
13	6	15	0	0	け [29]	竒縁			0	0	1	20	ω ₃ [21]	竒縁
46	0	3	0	3	な [52]				0	2	0	97	رب [99]	弓張
2	8	8	0	2	け [20]	弓張月			0	1	0	1	ω, [2]	月
5	0	1	0	0	巻 [6]	,			0	0	0	95	ډ› [95]	八犬
26	0	2	0	0	な [28]	八犬			0	1	0	3	ω3 [4]	伝
28	11	18	0	6	け [63]	伝	付属語	助詞ガ	語末	語中	準語頭	語頭		
付属語	語末	語中	準語頭	語頭			22	39	2	69	10	13	う [155]	月
6	0	22	0	88	2 [116]	月氷	3	0	0	0	3	15	か [21]	氷竒
0	0	0	1	16	き。 [17]	竒縁	0	0	0	0	0	1	う [1]	縁
10	1	16	6	120	2 [153]	弓張	48	81	20	113	25	21	う [297]	_
0	0	0	0	2	き。 [2]	月	0	0	0	0	9	26	か [35]	弓張月
0	0	2	2	68	こ [72]	八犬	1	2	1	8	0	0	う [11]	,,
0	0	0	0	23	き。 [23]	人伝	57	50	19	82	27	11	う [245]	八十
付属語	語末	語中	準語頭	語頭			0	0	0	1	6	31	か [38]	犬伝
64	86	82	4	0	≀ [236]	月氷		付属語	語末	語中	準語頭	語頭		
0	0	10	6	29	太 [45]	竒縁		0	1	3	1	3	き [8]	月氷
55	124	91	0	0	([344]			7	37	7	0	0	% [51]	竒縁
2	2	0	2	43	点 [50]	弓張月		15	49	10	0	1	き [75]	弓張
2	18	11	0	0	し [34]			3	15	7	0	0	宛 [25]	月
61	113	116	0	7	≀ [298]			0	10	4	0	4	き [18]	八犬伝
0	1	2	2	26	煮 [30]	八犬伝		14	77	7	0	0	宛 [108]	公伝
17	31	7	0	0	し [55]	1		付属語	語末	語中	準語頭	語頭		
	末尾	語中	準語頭	語頭				11	57	2	0	0	〈 [68]	月氷
	66	13	5	22	を [106]	月		0	0	4	0	5	∠ [9]	竒縁
	35	0	0	0	135]	氷竒		15	105	24	0	0	〈 [144]	弓張
	2	0	0	0	ほ [2]	縁		0	0	5	3	3	∠ [11]	万月
	105	25	2	16	を [149]			12	52	23	0	0	く [87]	八十
	13	2	0	0	N [15]	弓張月		0	0	3	0	1	∠ [4]	犬伝
	2	3	0	4	す [9]									
	91	30	0	20	を [128]	八尘								
	43	1	0	0	12 [44]	犬伝								

表2-2	三作品	に共通し	た複数	の字体の	の使用傾	真向([]	内に	その字体の	の総数、助	詞はその	字体一文	字のみで	文中に表	れるもの))
付属語	助詞ト	語末	語中	準語頭	語頭				付属語	語末	語中	準語頭	語頭		
16	106	5	20	0	9	と [157]	月		11	7	27	0	3	ا [48]	月
20	21	0	8	3	25	と [79]	氷竒		24	0	1	1	20	た [46]	氷竒
0	6	0	1	0	0	4z [7]	縁		4	0	12	1	1	출 [18]	縁
62	164	32	30	4	8	ك [300]			57	13	42	8	12	\{ [133]	弓張
9	9	0	3	5	29	と [55]	弓張月		0	0	0	0	1	た [1]	月
0	1	0	0	0	0	₩ [1]	7,1		81	11	20	4	1	ا [117]	† ≻
89	140	31	21	9	28	と [318]	八犬		3	0	0	1	2	た [6]	犬伝
2	5	1	2	3	10	と [23]	伝	付属語	助動詞ツ	語末	語中	準語頭	語頭		
付属語	終助詞	語末	語中	準語頭	語頭			1	1	0	11	4	3	つ [20]	
69	2	2	23	8	32	る [134]	. 月	1	0	4	14	0	0	ッ [19]	月氷
11	0	0	2	0	6	な [21]	氷竒	0	0	1	2	0	0	(1) [3]	竒縁
0	0	0	3	0	0	જા [3]	縁	0	0	0	2	4	3	た [9]	
10	0	0	6	1	4	る [21]		12	8	8	14	10	25	つ [77]	
49	0	2	11	2	19	な [83]	弓張	0	0	1	2	0	0	ッ [3]	_
38	0	7	23	6	26	な [101]	月	0	2	1	3	0	0	(³) [6]	弓張月
0	0	0	1	0	1	ふ [2]		1	0	0	0	1	5	た [7]	
145	0	7	37	3	17	る [209]	八	0	0	0	0	1	0	# [1]	
6	0	0	0	0	1	な [7]	犬伝	9	1	1	11	6	7	つ [35]	八犬
付属語	助詞二	語末	語中	準語頭	語頭			5	5	7	12	0	0	ッ [29]	伝
1	35	3	0	0	0	1 [39]			付属語	語末	語中	準語頭	語頭		
41	213	19	0	0	1	か [274]	月		13	96	5	0	1	て [115]	月
1	13	2	0	0	0	に [16]	氷竒		22	154	1	0	0	き [177]	氷竒
0	1	0	0	0	0	7 [1]	縁		3	2	0	0	0	章 [5]	緑
0	2	1	0	0	0	4 [3]			9	45	4	1	1	て [60]	弓張
8	270	36	0	1	0	1 [315]			39	311	0	0	0	き [350]	月
42	43	8	1	0	0	ታ [94]			8	78	2	0	0	て [88]	八
26	24	10	1	0	0	∌ [61]	弓張月		38	250	0	0	0	ξ [288]	犬伝
0	1	0	0	0	0	に [1]									
0	1	0	0	0	0	7 [1]									
0	261	40	0	0	0	1 [301]	八犬								
51	144	28	3	0	0	ئہ [226]	伝								

表2-3 三本に共通した複数の字体の使用傾向([]内にその字体の総数、助詞はその字体一文字のみで文中に表れるもの)

もの)													
語末	語中	準語頭	語頭			付属語	助動詞ネ	語末	語中	準語頭	語頭		
22	8	0	0	ひ [32]	月氷	0	3	1	0	1	2	ね [7]	月氷竒
14	0	0	11	む [25]	竒縁	0	0	1	0	0	0	رد [1]	竒縁
94	37	0	0	ひ [131]	弓罪	0	4	1	0	0	1	ね [6]	弓罪
0	0	0	5	<i>ਦੇ</i> [5]	張月	0	0	1	0	0	0	رد [1]	- 張 月
48	27	0	3	ひ [78]	八	0	2	0	0	0	0	ね [2]	
0	0	1	2	<i>ਦੇ</i> [3]	犬伝	0	2	0	4	0	0	رد [6]	八犬伝
語末	語中	準語頭	語頭			0	5	0	0	0	0	林 [5]	Д
48	4	0	8	ふ [60]	月氷	付属語	助詞ノ	語末	語中	準語頭	語頭		
0	0	0	4	₽ [4]	竒縁	2	164	95	20	0	9	の [287]	
77	7	0	19	ふ [103]	弓	0	47	6	1	0	0	ਮ [54]	月氷
0	0	0	3	1 2 [3]	張月	0	0	1	0	0	0	お [1]	竒縁
64	4	0	9	ふ [77]	八	0	1	0	0	0	0	ル [1]	
0	0	0	1	<i>t</i> a [1]	犬伝	2	347	143	11	0	2	の [505]	弓
語末	語中	準語頭	語頭			0	12	2	0	0	0	ਮ [14]	- 張月
2	1	0	0	そ [3]	月氷	14	229	109	6	1	1	の [362]	
9	4	1	2	74 [16]	竒縁	0	0	3	0	0	0	ん [4]	八犬伝
0	5	0	1	チ [6]		0	11	0	0	0	0	パ [11]	- 14
14	18	0	0	74 [32]	弓張月	付属語	助詞 ハ・バ	語末	語中	準語頭	語頭		
0	0	0	5	ほ [5]	/,	2	125	1	34	0	1	り [167]	
2	4	1	1	チ [8]		2	0	0	6	0	28	た [36]	月氷
5	7	0	0	И [12]	八犬伝	8	8	0	0	0	0	≉ [16]	氷 竒 縁
0	2	0	2	ほ [4]		0	1	0	0	0	0	參 [1]	
						29	243	10	64	0	0	ハ [347]	
						4	4	0	12	6	13	そ [35]	弓張月
						0	13	0	0	0	0	≉ [13]	71
						35	265	21	36	0	0	り [357]	
						0	0	0	1	1	26	た [28]	八犬
						7	1	0	0	0	0	<u>*</u> [8]	大伝
						0	0	0	0	0	1	は [1]	
												_	

表2-4 三本に共通した複数の字体の使用傾向([]内にその字体の総数、助詞はその字体一文字のみで文中に表れるもの)

付属語 助神 総元 総元 総元 総元 総元 総元 総元 総	表2-4	三本に	共通し	た複数	の字体の	り使用化	頃向([]内[こその字体	の総数、	助詞はそ	の字体-	−文字の∂	で文中	に表れる	5もの)
2 4 1 1 1 0 1 77	付属語	助詞ヤ	語末	語中	準語頭	語頭				付属語	語末	語中	準語頭	語頭		
0 0 0 12 0 5 118 禄	2	4	1	1	0	1	[7]	氷		2	2	13	0	13	[30]	
11 6 0 1 1 3 122 万 0 1 0 0 0 11 1 1 1	0	0	0	12	0	5	[18]			0	0	5	0	2		氷
0 0 0 17 0 17 134 月 0 0 0 8 0 3 11 1	11	6	0	1	1	3	[22]	弓匪		0	1	0	0	0		竒縁
1 28 3 3 0 1 1368 八人	0	0	0	17	0	17	,			0	0	8	0	3	[11]	
1	1	28	3	3	0	1	[36]	八		0	0	2	0	0	[2]	
語末 語中 理語頭 語頭 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日	0	0	0	13	0	9		伝		16	0	20	0	38		張
1 0 1 9 11 1 2 1 1 16 2 1 1 16 2 1			語末	語中	準語頭	語頭				0	0	4	0	0	[4]	
1 0 1 9 [11] 縁 12 0 17 3 27 [59] 人大伝 0 0 0 0 3 3] 5 0 0 1 0 0 0 0 1 1			0	0	1	0	[1]	氷		1	1	2	1	1	[6]	
0 0 0 3 3 3 5 7 6 7 7 7 7 7 7 7 7			1	0	1	9	[11]			12	0	17	3	27	[59]	八大
1 1 2 0 6 4 7 0 0 1 0 0 1 1 1 1			0	0	0	3	[3]			0	1	0	0	0	[1]	伝
O O O O O O O O O O			1	1	2	0	[4]			0	0	1	0	0		
付属語 語末 語中 準語頭 語頭			0	0	3	4	[7]	八		付属語	語末	語中	準語頭	語頭		
行属語 語末 語中 準語頭 語頭			0	1	0	3		公伝		4	2	3	0	0	[9]	月氷
2 0 5 0 0 [7]		付属語	語末	語中	準語頭	語頭				6	4	10	0	0		竒縁
19 21 69 0 0 109 1 0 0 1 1 0 0 1 1 0 0		2	0	5	0	0	[7]	氷		4	14	4	0	2	[24]	弓匪
11 14 106 0 0 15 月 月 1 24 3 1 1 1 30 八大伝 11 14 106 0 0 5 月 1 0 0 0 0 0 2 2 2 38 5 5 5 7 4 5 0 0 1 1 5 7 7 7 7 1 7 7 7 7 7		19	21	69	0	0	-			0	0	1	0	0	[1]	
11 14 106 0 0 [131] 月 1 0 0 0 0 0 [1] 伝 0 3 12 0 0 [15] 八 付属語 助詞モ 語末 語中 準語頭 語頭 30 12 103 0 0 [145] 伝 0 1 0 14 2 38 [55] 月水 付属語 語末 語中 準語頭 語頭 21 27 4 0 0 0 5 5 月水 70 57 45 0 0 0 0 0 0 0 0 3 [3] 6 19 5 0 0 2 4 62 [71] 8 83 164 64 0 0 [312] 長 65 95 20 4 0 2 5 [186] 月張月 0 14 5 0 0 [302] 八 3 0 0 5 1 63 5 7 137 122 43 0 0 5 56 80 14 1		0	0	15	0	0	[15]	弓張		1	24	3	1	1	[30]	八
0 3 12 0 0 [15]		11	14	106	0	0	[131]			1	0	0	0	0		伝
The image of th		0	3	12	0	0		八犬	付属語	助詞モ	語末	語中	準語頭	語頭	,	
行属語 語末 語中 準語頭 語頭		30	12	103	0	0		伝	0	1	0	14	2	38	[55]	
70 57 45 0 0 [163]		付属語	語末	語中	準語頭	語頭			21	27	4	0	0	0	[52]	竒
6 19 5 0 0 [30] 縁 0 4 0 2 4 62 [71] 83 164 64 0 0 [312] 号 65 95 20 4 0 2 [186] 0 14 5 0 0 [19] 月 0 0 0 0 0 3 章 1 137 122 43 0 0 0 [302] 八 3 0 0 5 1 63 [72] 2 0 3 0 0 章 左 56 80 14 1 0 0 章 大伝 56 80 14 1 0 0 0 [151] 大伝		70	57	45	0	0	[163]	氷	0	0	0	0	0	3	[3]	稼
83 164 64 0 0 $\frac{9}{[312]}$ 号 65 95 20 4 0 2 $\frac{5}{[186]}$ 男 $\frac{5}{[3]}$ 目 $\frac{5}{[3]}$ 目 $\frac{5}{[3]}$ 日 $\frac{5}{[3$		6	19	5	0	0	[30]		0	4	0	2	4	62	[71]	, ,
$ \begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$		83	164	64	0	0	-		65	95	20	4	0	2	[186]	張
$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$		0	14	5	0	0	[19]		0	0	0	0	0	3	[3]	
2 0 3 0 0 章 伝 56 80 14 1 0 0 章 大伝		137	122	43	0	0	[302]		3	0	0	5	1	63	[72]	
		2	0	3	0	0		伝	56	80	14	1	0	0	[151]	犬
									0	3	0	0	0	0		

表2-5	三本に	共通した	−複数の	字体の値	使用傾向]	
	付属語	語末	語中	準語頭	語頭		
	6	32	0	0	0	る [38]	
	14	55	2	0	0	る [71]	月氷
	7	7	0	0	0	₹{ [14]	竒縁
	0	2	0	0	0	ぶ [2]	
	19	39	0	0	0	る [58]	
	49	107	4	0	0	る [168]	
	0	2	0	0	0	ふ [2]	弓張月
	0	1	0	0	0	秋 [1]	/ •
	1	1	0	0	0	な [2]	
	5	47	6	0	0	る [58]	
	80	69	12	0	0	る [161]	
	4	2	0	0	0	類 [2]	八犬伝
	0	8	0	0	0	な [12]	
	0	3	0	0	0	ふ [3]	
	付属語	語末	語中	準語頭	語頭		
	7	39	15	0	0	れ [61]	月氷
	5	43	29	0	0	분 [77]	竒縁
	19	56	74	0	0	れ [149]	弓張
	6	17	25	0	0	<u>₽</u> [48]	月
	15	57	43	0	0	れ [115]	八犬
	40	32	37	0	0	₽ [109]	伝
付属語	助詞	語末	語中	準語頭	語頭		
0	326	0	0	0	5	を [331]	月氷
0	4	0	0	0	0	戏 [4]	竒縁
12	321	0	2	0	5	を [340]	弓匪
0	7	0	0	0	0	戏 [7]	張月
2	245	0	3	0	5	を [255]	八十
0	90	0	0	0	0	戏 [90]	犬伝

る。 本にのみ特徴的な用字がみられたものは次の仮名である。これらは三-三で述べる。

〈イ〉【い】【Ŋ】〈タ〉【ら】【た】〈ヒ〉【ひ】【む】〈メ〉【め】【免】〈ヲ〉【を】【成】

草双紙と同じ使用傾向がみられた字体にも個別の問題はあるが、右に挙げた仮名字体は特に顕著だったものである。三-二で述べ

(リ) [り] [至] 〈ス〉【を】【ル】

〈レ〉【れ】【 塾 】 ⟨ノ⟩【の】【れ】

〈フ〉【ふ】【ぬ】

〈ホ〉【そ】【ゆ】

〈マ〉【ま】【ま】【偽】

これといった使用傾向がみられない字体もあり、 それらは先に挙げた分類に含めない。三-三に付け加える形で最後に述べる。

(ナ) 【 る】 (**【 な 】**) 【 な 】 〈ユ〉【ゆ】【ゆ】

三- 一 先行研究の指摘と同じ使用傾向がみられた仮名字体

副詞、 唯一【か】が語中に使用されている用例に「うたかた」があったが、「うた・かた」と解釈したかと考えられる。 使い分けに影響している。 終助詞カは「ゆくかと」(廿五丁ウ・傍線は稿者による)と連綿によってひとまとまりになっている頭に使用されている。 て」2「大かた」4と漢字と合わさっている複合動詞に使用されることが多い。語や文においてどのような要素かが【う】【か】の の両方がある。【か】に用例が多いのは「かゝる」(月氷竒縁3、弓張月8、八犬伝3)「かくて」(弓張月3、八犬伝7)といった連体詞や 【う】が占め、そのため【う】の使用数は月氷竒縁15、弓張月27、八犬伝25と多い。自立語の語頭・準語頭の用例は【か】と【う】 まず、 ときに「かいつかみ」「かしこみて」といった動詞も書かれる。【う】は方向を表す名詞「かた」や、「吼かゝる」「吼かゝり は語の位置に関係なく使われる【う】と、 草双紙等を検討した先行研究の指摘と同じ使用傾向がみられた仮名字体について述べる。 月氷竒縁には【か】を終助詞カ・カモ・カシに使う例がある。カモ・カシは語頭と捉えたかと考えられ 語頭・準語頭に使われる【か】の使用傾向が読本にも顕著であった。 また、八犬伝に 気詞ガは

伝1)、キ(八犬伝2)が、すべて【 宛 】で書かれる。弓張月は助動詞べキに【き】 14 【 宛 】 3 、マジキに【き】 1 と【き】に偏る。 弓張月の語末は【き】 40 【 丸 】 14 と 【き】が多い。加えて助動詞も月氷竒縁と八犬伝はべキ (月氷竒縁 7、八犬伝11)、マジキ (八犬 である。語末の字体の分布をみると、月氷竒縁は【き】1【 宛 】 37、八犬伝は【き】10 【 宛 】 77 と二作品では 【 宛 】が上回るが、 **タヒ】の使用傾向は共通しているが、資料によって使用割合が異なる。** (+) 八犬伝では【き】18 【 宛 】18と 【 宛 】の使用数が多く、弓張月は 【 宛 】 26 【 き 】 84 と 【 宛 】が 【 き 】の半分以下の使用数 の【き】【 宛 】は、【き】が汎用の字体、【 宛 】が非語頭の字体という傾向が三本に共通する。月氷竒縁では【き】 8 【 宛 】

は【く】が非語頭、 横幅に広い【√】が非語末に用いられる。用例は【く】は 「とまれかくまれ」「むく/\」「かくて」、「い

-	けり			
2	1	タ け	月之	氷
9 1	2 0 1	なける	弓張	· 手
1 6	9	タ け	八大	沄
2 4 9 1 4 1 6 と語頭のほか語幹こ〈ク〉を含む語こ用ハられる。		々 は	氷竒縁に語頭「くらく」2「くふうする」「くるゝ」等、語中「うくる」「おくり」「名づくる」等、	伝 へらく」「ふかく」「ゆく」等で、副詞・接続詞・動詞や形容詞の活用語尾に使用される。【\】は月

け る 19 と言豆の に だ 言草 い

〈ケ〉助動詞 け け け け け め れ れ れ 0 8 0 0 0 2 0 1 1 1 5 8 0 4 0 0 0 1 0 0 0 0 0 0 4 3 2 7 0 6 0 7 1 0 れることが多いものの、 ていたが、 |形容詞活用語尾に使われることが指摘されている ̄。今回の調査でもケリ・ケンが【ゟ 】で書かれ |は位置に関係なく使用される傾向がある。これまで、【 ゟ 】の字体は慣習的に助動詞ケリ・ケンや ふ」の語は【ク】が定着していると報告されている「が、月氷竒縁には ケケ は三本を通じて【ゟ】が少数字体である。 表3にまとめた通り【々】【け】の両方に用例がある。弓張月は確かに【々】が使用さ 月氷竒縁と八犬伝はほぼ同等に【け】が使われる。 【け】は月氷竒縁に語中末、 「けふ」を平仮名で書く例 また、 弓張月・八犬伝で 先行研究で「け

ることが多く、【け】の使用領域は広く、【ゟ】は限られた位置に使用されていた。 はなく、弓張月に「けふ」/【 々 】 3 【け】 2 、八犬伝では 5 例すべて【け】である。三本を通じて自立語には【け】が用いられ

て僅かである。 を中心に、語頭・準語頭に【お】が使われていた。【お】の使用数は八犬伝23、 〈コ〉の【 お 】は草双紙に滅多に使用されないが、恋川春町の黄表紙では語頭に使用されている 🗔 用例は 「これ」「ごとく」、それぞれ行末近くに位置する。 月氷竒縁17、 弓張月2と弓張月は他の二本に比 読本三本には汎用の

十五丁ウ (L2) 【 お 】とく | - 回

世四丁才 (L3) 【 ま 】 れ 一

で使われたかと考えられる。 合字の[こと]や【こ】より大きめの字体なので、 行末近くのスペースを埋め、 中途半端な語 の切れ目ができないようにする用途

月氷竒縁の【む】の用例は、 語 頭 「これ」 11 「こゝ」「こひねがはくは」「こなた」「こと/~」「こみ~~」、 準語頭 「跳こえ」と、

て異なる。 頻用される「これ」(【こ】26例)の語に【よ】が時折混ぜられ、その他の自立語にしばしば使用される。 「こゝろ」/【こ】7)、決まった語に用いられている印象である。【よ】は確かに語頭に使われる字体であるが、 「こゝろ」4「こなた」4「こよなき」1と、〈コ〉から「ゝ」に続く語「こゝ」「こゝろ」に【 む 】が目立ち (「こゝ」/【こ】1、 八犬伝は語頭「こゝ」 14 使用用途が本によっ

〈シ〉は非語頭【 し 】に対し、 【 太 】が語頭という使用位置の区別が読本三本にも共通していた。 【 太 】の用例のみ左に挙げる。

(を)

月氷竒縁

語頭―しのび4 禳しむ 3 も かは 2 しかは 2 しらず2等

語中―餌飼して 假宮準語頭―久しくして 、 假寝したまふいして 飽しめて つゝしみて 決断して 音しけれ 銷鑠して等

弓張月

語頭―しばし9 し 7 しば!~5 しかるに 4 しる (知)) 3 等

準語頭―引しぼり2 正しくしてまっしら(真白)

語末— -和睦し 修行し

八犬伝

語頭―し3 しかず 2 しかれども 2 しらず2 しらぬ しかりし等

聞しらでや

語中末— 青して 帰降して 賞し 準語頭—思ひしらせん 聞しらでや

さると【ゑ】を使っても差し支えないようである。 詞の連用形が占め、「漢字+して」「漢字+し」という表記の場合が多い。こうした場合、【し】が中心に用いられるが、 語頭を中心に「餌飼して」「賞し」といった語中末に僅かにみられる。全体的に語中末は「倶して」「為し」といった動詞・ 漢字が合わ 複合動

読 ぼしかゝつて」と他の二本と同様 いる。八犬伝の【 ツ 】は語中末に偏っており、「なつ草」「しづか」「ひとつとして」等、「あつて」「とつて」 2 本にも同様の用法があった。 例と少ない。 は 【つ】が 用例を挙げると 助詞 ·位置に関係なく使われ、【 ′ ′ 】が語中末に偏っている。 【 ′ ′ 】は三本に共通してみられるもの 「つゝ」等の語と、「とつてかへし」「もつはら」(「もつはら」は【つ】1あり)と促音にも【 つ 】 「まつしら (真白)」「もつはら に促音が【ツ】で書かれている。【ツ】が促音表記に用いられるのはしばしば指摘されており (専)」「まづ」と促音と語末である。 月氷竒縁 は 「お 「とつて返し」「の のづ \mathcal{O} が用い 弓 カコ 張 月 5 は

ては」2、 接続する助詞テに【そ】が優勢に使われているからである。 115 語 頭中の用例は 〈テ〉は三本とも【て】が汎用、【 そ 】 弓張月60、八犬伝8を上回っているが、文中に最もよく使われる「至りて」「呼びて」「倶して」「見て」」2、八犬伝は「さても」「なでふ」である。【そ】は三本とも使用量が月氷竒縁17、弓張月30、八犬伝 「てらして」「過てり」2「い が語末および付属語の助詞テ、 かでか」 2 「引たてゝ」、 弓張月は「てらし」「ふりてらし」「過 トテ、 連語トシテなどに偏ってい 八犬伝 る。 等 288 と て 月氷竒縁の の動詞連用 てり」「もてる」」さ 月 7 形 / 氷 竒 語 尾 \mathcal{O}

犬伝は 関連は断定できないものの、 いても多い。 「とまれかくまれ」「とく――」等で、 と は汎用 28 【と】10と【と】が優勢である。 助詞ト・ド、 の【と】に対 連語トシテ・トテは大勢が 八犬伝は 月氷竒縁・弓張月・八犬伝に【と】が語頭に偏って使われる。 語頭に偏るというより、 月氷竒縁は語頭に【と】9【2】25、弓張月は【と】8 【2】29 と【2】 近世も終わりの方になると〈ト〉の使い分けが崩れてくると指摘されている「☆。 【と】で書かれ、 時折混ぜられる字体という具合である。 時 折【と】が混じる。【と】の自 使用数は【と】 立語語頭の が 用 が優勢だが、 例 ず は れ とり 作品 て に お

八犬伝は 字体の割合が異なる。 字で表記する 1 ふ 】を自立語に用いている。 立 の【 る 】【 ふ 】の使用傾向は月氷竒縁と、 語 36 \mathcal{O} 工 213、 読 語 かにして」「いにしへ」「とにかく」といった語が 頭に 本 \dot{O} 文章では、 【 小 】が使用され、 自 立語に【ふ】が用いられるという点は三本において共通し、 弓張月が【 よ 】 270 しかし、 自立語語中末や助詞ニに主として【 4 】が使用されることがある」せ。 月氷竒縁では付属語・自立語の両方に【ふ】が主体的に使用される。 る。 43、 弓張月・八犬伝とで異なる。 八犬伝が【 よ 】 261 【ふ】で書かれる。 【 小 】 14と各資料によってメインになる字体と少 弓張月・八犬伝では、 草双紙に 月氷竒縁は「にげなく」、弓張月は「いにし 各資料 0 助詞ニに おける使用 1 0 両方が使用される場 を主 自 助 傾 立語を主として漢 詞 向 に 0 は 助 ば 詞 月 7.氷竒縁 用

表れていよう。

氷竒縁の16 読本にもかなりはっきりみられる。【き】は助詞ハに用いられ、行頭に偏ることが先行研究に指摘される字体である一つ。 先行研究と変わらない。 が、【ね】は「あらねば」「認めね」に使われ、【 ひ 】は「候はねど」「候はねば」に使われ、【 ひ 】 て」「死ねや」と助動詞ズ已然形ネ2例である。【ね】は助動詞ズ已然形ネ2例、【 d 】 【ね】どちらにも助動 は れ 「見かね」、【ね】は「ねらひ」「はね (ネ) 月氷竒縁の【ひ】は「かね(兼)」、【ね】は「ねがはく」「ねがふ」「こひねがはく」と助動詞ズ已然形ネが4例、 は 【ね】が 例中行末3例、弓張月は13例中行頭3例/行末4例、八犬伝は8例中行末2例と行頭・行末に特別偏るという印 語の位置に関わらずどこにでも使用され、【ひ】は非語頭に偏ると指摘されており、 月氷竒縁で唯一【ハ】を語頭に分類した語は (跳)」、助動詞ズ已然形ネ4例である。八大伝は【ひ】に「かねて」「測かねて」「回答かね 「ぱと」という擬音語のみである。【 れ 】 【 ハ 】 の 助詞 「は」は【ハ】で書かれることが圧倒的に多く、 が決まった語に使用され 三本ともにその 詞ズ已然形に使われる 弓張月の【ひ 使い分けは L か が 象は 月

後者は行末の狭いスペースに【も】を【し】で囲む形で収めたものである。 る【も】は「最も」「もつとも」「もろとも」等語末、 き」等の語中に【も】が用いられている。下の字体に連綿するのに適した形のためかと考えられる。 【も】が2例ある。「もて」(二十丁オ)「もし」(廿七丁ウ) 0 *ф* は非語頭、 三本には 「もの」「もて」「もし」「もつはら」「もろとも」等の語頭、「おもひ」「おもはず」「おも 助詞モ・トモ・ドモ・ニモ等の付属語にみられる字体である。 の語で、 前者は「も一て」と【も】を行末に残して連綿が途切 最終画で上に向けて筆が運ば 弓張月には れて お ŋ しろ 頭

なかった。

例えば月氷竒縁は連語ニハ

10

例中8例が

【 や 】で書かれ、決まった助詞に使われるのが特徴的である。

縁で【も】の2例は、 漢字に近い【も】も三本にみられ、 対句表現が同じ匡郭内に並んでいる十八丁ウにみられる。 月氷竒縁は もの」 3 弓張月にも「もの」 3 八犬伝は助詞モ 3 に使われていた。 月 氷竒

十八丁ウ

L1 L1 ある (も) の

0)

L2 偽変なる【も】のなり。 まる【も】の ある【も】の ある【も】の

い。八犬伝の【も】の助詞は3例中2例が行末に近いところにみられるが、使用理由は判然としない。 えているのだと考えられる。弓張月の【も】の「もの」は十四丁オ、廿五丁オ、三十丁ウと離れた場所で、 L1 5 14の間に六回「もの」が書かれ、二回【も】が使用された後に【も】で「もの」を書いているので、 右のような用法ではな 単調にならないよう変

応しいのであろう。 八犬伝の「やよ」、弓張月に「や (矢)」には【や】が用いられ、独立した一語では、下の文字に積極的に続く【 や 】より【や】が相 ともある。三本に共通していた「やうやく」の語は、月氷竒縁では「【や】う【 や 】く」、弓張月では「【 や 】う【 や】く」「【や】う く」「こやつ」「あやしみ」といった語中に限られる。【や】は終助詞「や」や「はや」等、文末や語末に用いられるが、語頭にくるこ 【 や 】く」、八犬伝では「【 や 】 う 【 や 】く」となっている。上が【 や 】であっても 【 や 】 であってもよいようである。弓張月と 〈ヤ〉の【 ヤ 】は【 む】と同じく下の文字に連綿しやすい字体であるため、「やゝ」「やうやく」「やがて」といった語頭、 「は

なる。特に【お】【や】【も】 ここまでは先行研究で指摘されている用法がみられた仮名だが、【 々 】 【 ホ 】 【 々 】 【 も 】 は作品によって若干用い方が異 しばしばみられた。 は語の位置とは関わりのない用法が顕著だったといえよう。 「時折混ぜられる」といった傾向の字体

一二 草双紙の平仮名文には報告のない使用傾向がみられた仮名字体

次に、草双紙の平仮名文には報告のない使用傾向がみられた仮名字体を検討していく。

が共通している。 〈ス〉の【 も 】と【 侭 】は、【 も 】が汎用の字体、【 侭 】が末尾 (助動詞ズがつく語を表2では 「末尾」に含めている) という使用傾向 読本で弓張月のみ【す】が9例みられるが、やはり【化】15とやや使用数の方が多い。 黄表紙や合巻といった草

双紙は 字体ではない 【に】より【す】が優勢であり、 ので、 読本に【も】【化】に共通する住み分けがみられたのは興味深い。 しかも【を】【す】は使用傾向が判然としない。 VE 【 化 】 は草双紙などに当たり前 の用例を次に挙げる。 に使

N

月氷竒縁

語末―あらず5 べからず5 容易からず2 ならず2 しらず あたはず等

弓張月

語中―ます/~2

語末—かならず 2 おはします 2 しかず たがはず はゞからず 給はず等

が大伝

語中一ます~~

末一ならず4 給はず3 思はず3 用ひず2 死す2 異ならず2 出ず等

ます~~」や助 動詞ズを【き】で書くこともあり、【 化 】は語末中心に混ぜられる字体となっている。

れ、 で助詞ノ12、語末は名詞「もの」3例中1例、副詞「夥の」に【れ】が使われている。弓張月の【れ】の6例は行末近くにみらに自立語に【れ】が使われる。【れ】を使って書く「おのづから」は、「おの一づから」と改行で途切れている箇所である。弓張月 を使用領域にしている。 途切れるのを嫌った技法かと考えられる。 用例をみると、助詞 字体を歪ませたり、二本の縦線の間に前後の文字を挟ませたりして、スペースを省略する書き方をしている。 (ノ) は 【の】が汎用の字体であり、メインの字体といえる。【 れ 】は月氷竒縁 54、 ブの 21例中47例、「おのづから」 7例中 1例、「もの」 八犬伝は「もの」 46例中4例に【れ】が使われている。三作品とも【れ】は語末と助詞 20 例中 6 例が【れ】である。 弓張月14、八犬伝1と使用数に差がある。 主に助詞に混ぜられ、 改行によって語が

用法が一定していない。 〈フ〉の【ふ】【ぬ 】は、【ふ】が汎用の字体、【ぬ 】が語頭に使用されることが読本三本に共通していた。 読本三本では 【ぬ】はすべて語頭である。【ふ】【ぬ】の 語頭 の用例をみると、 この二種類の字体で同 先行研究では 血版

語を書いていることが分かる。

B

弓張月 月氷竒縁 ふたり ふたゝび ふかく 2 ふたゝび 2 ふりたる (古)

八犬伝 ふたり

ふ

弓張月

ふ か く 12

ふた」び5

ふりたる(古) ふりてらして

月氷竒縁 ふかく3 ふたゝび ふかゝりし ふかし ふりて ふるはして

大抵は【ふ】で語を書き、稀に語頭に【ぬ】が使用したようである。

ふかく 2 ふかくし ふかくして ふかき ふき ふく ふらせし等

伝は【ほ】も用いている。【 は 】 【 そ 】 の用例を次に挙げる。 用数が月氷竒縁 16、弓張月 22、八犬伝 12、【モ】が月氷竒縁 3、 〈ホ〉の【モ】と【 ほ 】は、草双紙などでは【モ】が優勢で、【 ほ 】が全く使用されない場合が多い。読本三本では、【 ほ 】の使 弓張月6、 八犬伝8と【4】が多めである。 なお、弓張月・八犬

B

月氷竒縁

語頭―ほど2

準語頭―何ほど

語中 -おほし おほかり

おぼえし

もよほし

語末 -なほ9

弓張月

語中— おぼして6 おぼし3 おぼさん おぼえねば おぼす もよほして等

語末— -なほ 14

語末-なほ5 語中―おぼつか なし おぼしき おぼし召 おぼゆれば なほりて ひきしぼりて等

チ

月氷竒縁

語中— -おほく

語末 -なほ 2

弓張月

語中 -おぼし とぼしからず のぼし 引しぼり 刺とほし

八犬伝

語頭

準語頭—

語中— -なほ 処得がほ-おぼつかなく おぼしくて 立なほ L 取なほす

語末—

頭中にみられる。 月氷竒縁では【 は 】が位置に関係なく使用され、【 そ 】は語中末にしか使われない。弓張月は 【 は 】が語中末に偏り、 【 そ 】は語 八犬伝の【 ผ 】は語中末、【 ~ 】は位置に関係なく使用される。「おぼし」の語、 活用形は三本を通じてほとんど

【 は 】が使用されている。

月氷竒縁と弓張月では【そ】と【 4】で、近くの行に使用される同じ語の字体を変えているものがみられる。

〈マ〉は【ま】【 ま】 【 偽 】の三種類の字体が共通していた。 【ま】 【 ま 】の二種類は、 刺 とほ ((ほ L11 L8 し) 引しぼり 弓張月 月氷竒縁 (10 L5) な【を】 十五丁オ 十四丁オ 廿五丁ウ な【ほ】 引し【ル】り 引し【を】り

(19~11)刺と【4】一し刺と【4】し

八犬伝にはこうした変字法はないが、使い分けとは異なる使用傾向があるといえる。

語頭中を中心に使われるという用法が似て

おり、三本ではどちらかが主体的に使われ、もう片方は混ぜられる字体となっている。

(ま)

月氷竒縁

語頭―まづ5 ます!~2 まげて まつ まだ ます (増) まじはり

語中―たちまち3 いまだ2 あやまち いましめ しづまり とまれかくまれ等

語末―ひま 2

付属語―まで2

弓張月 語中

八犬伝 いまだ2

準語頭―うちまもる 語頭―まよへ(迷)

語中— あまり あまる

語末―あながま

付属語―まで

ま

月氷竒縁

語頭―まゐらす まゐらせし まつはりし

語中―たちまち2 のたまはく のたまふ たまふ

弓張月

語中―いまだ4

語頭 ―まゐらせ8 まゐらすれ4 まづ 4 まつはりて3 ます/~2等

あまり あまりて いきまきて とまれかくまれ

浅まし等

身まかり

語頭

―まうす7

ます~~3

まづ 3

まして 2

まゐらざる まゐり等

いつのまに

おさまり等

準語頭―かくまで2

語中―そがまゝ4 つかまつらん 2 あまり2 V まだ

るので、代替が利き、 る。八犬伝は 7氷竒縁は 【 ま 】は語に定着している側面もあるようである。 【ま】が汎用だが、 【ま】がメインに用いられ、 書き手によって選ぶことのできる字体である。【ま】の用例を見ると、「まゐらす」の語が三本に共通してお 非語末で【 ま 】が多い。【ま】【 ま 】は「ます / ~」や「まづ」など同じ語を書いていることもあ 語頭中に【ま】がみられる。 弓張月はごく少量【ま】 が使用され、 主に【ま】 が使われ

協 】 □πは月氷竒縁と、弓張月・八犬伝との間に用法の違いがある。

為

月氷竒縁

語頭―ます/~2 まつはる

語中―たちまち 5 のたまはく 身まかり とまれかくまれ

弓張月

語中―まします 2 ましまさば えらまず

八犬伝

語中―ましまさず

延べ ヘマン 月氷竒縁には 10 のうち【 偽 】 5 【ま】 4 【 ま 】 2 と様々な字体で変化をつけて書く。 弓張月・八犬伝にも「まします」「ましまさば」「ましまさず」の例を語頭が【ま】、 語頭に使用される場合も3例ある。「ます―~」/【 ゆ 】2 【 ま 】 2、「たちまち」は また、「とまれかくまれ」は上の〈マ〉は【ま】、下 語中を【版】

記】は先行研究で共通した使用傾向は見出されていない。 〈リ〉は助動詞タリ・ナリ・ケリや動詞の活用語尾が主な語であり、三本とも【り】を主体に、【 衤 】が補助的に用いられていた。 月氷竒縁 30、弓張月19、 八犬伝5と月氷竒縁に使用数がやや多めであ

	[れ][。	业 】の:	分布
わ	, ل ١		
<u>n</u>	れ 15 22	مد	
17	15	70	月
0	22	20	小
14	28	れ	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
1	3	(G	月
おれ 17 0 14 1 13 2	28 3 23 14	れきれきれき	大大
	*1	. A	伝
「ばらりずん」は共に擬音語であり、「残りて」は「残一りて」と語中で行移りした箇所(行頭)に【2】	八犬伝は自立語だと「きりゝと」「ばらりずん」「残りて」の 3例にのみ【 ぽ 】が使われる。「きりゝと」	- 100 予長―は「エピス・) 1・1 ~ 「メピス・) 1・1) 1・1 ~ 1・1 ・1・1 ・1・1 ・1・1 ・1・1 ・	連用形活用語尾(月氷竒縁「来り」「破り」

3	表5	漢字0	の直径	糸(し))
١	漢 字 +	漢 字 +		~ ()	
	(#)	ħ			
	22 23	3 16		氷 張月	
れーム	字	31 149	ある。	大伝	を
など名詞の語末である	字体だった。	(追) 10	読	レ〉は草	用いる。
訶の語・	た。使	八	本三本には	双紙	使
末であ	用簡所	犬伝【れ】	は必ず【単	などでは【れ】のこ	用箇所を限って
頻	語中	115	多)	は【れ】	限って
出語で、	末に限	<u>\$</u>	】が使用	4	、時折
出語である一これ	られ、	109 レ	されて	で書かれ	混ぜて
これ -	「みだゎ	使用割	いただ	れること	いる字
- われ	_	用割合にはバラ	用されていただけでなっ	こが多く	体とい
の用例	見れば	バラつ	<	/、【 追	う印象
を確認	といい	さがあっ	氷竒縁	】 が 使	混ぜている字体という印象である。
する。 ・	った動気	るが、 、、	れ	用され	90
表4か	詞の活E	いずれの	61 \$	る場合	
ら、月か	用語尾4	の読本と	77	 	
水竒縁	や、	にもよく	. 弓張	2 例	
例を確認する。表4から、月氷竒縁と八犬伝	- ば」といった動詞の活用語尾や、「これ」「わ	つきがあるが、いずれの読本にもよく見られ	月氷竒縁【れ】61【 き 】77、弓張月【れ】	ることが多く、【き】が使用される場合は1~2例と僅かで	
ĮΖ	1)	<i>1</i> U		C.	

変化をつける用途で使用されていたとみられる。 表 5 に、 漢字直後の送り仮名の「漢字+【れ】」「漢字+【 き 】」の用例数を示した。いずれも【 き 】が優勢である。【 き 】 は、

的なのだといえよう。 みられたり、 草双紙などにはそれほど使用数の多くない、決まった使用傾向を見出しづらい字体に関して、読本では三本に共通する使用傾向 特徴的な用法となっていたりする。 それだけ、 読本の仮名字体の使用傾向には、 草双紙などは字体の種類総数が少なめであるだけでなく、 仮名字体の種類を限ってだが、 個別的な様相がみられる。 使用傾向の上でより統 が

三-三 読本三本のうち一本に特徴的な用法がみられた仮名字体

資料のうち一本に特徴的な用法がみられたものは次の仮名字体である。

【 43 】の弓張月と八犬伝の用例は、 〈イ〉は【い】が主体的な字体であり、【 43 】の使用数は弓張月 2 、八犬伝 4 と二桁にも満たないが、 弓張月 「いかなる」「かい繕ひ」、八犬伝「いづれ」「いかに」「いたう」「かい繰り」となっ 月氷竒縁は20と多めであ

/【い】8 【 43 】 4 といった、文中に頻繁に用いられる語に 【 43 】を混ぜる。 ている。 【 * 】 【 6 】の字体に続く語頭を占めている。また「いひ」/【い】 9 【 ぬ 】 1 、「いへらく」/【い】 6 【 ぬ 】 1 、「いへども」 他の用例に「いへども」4「いたづらに」2「いたりて」2「いたり」「いたれば」「いたる」「いたゞき」など〈イ〉 月氷竒縁の用例には「かいつかみ」があり、接頭辞「かい」に【い】を用いられるのは三作品で共通していた。 の次に 月氷竒縁に

特徴的といえよう。 数が飛び抜けている。月氷竒縁の【た】の用例は、助動詞はタリ23例中16例、タル10例中6例、タレ1例、 自立語語頭は「たちまち」 11「たのしまず」「たちぬ」等、 八犬伝は6 【 を 】の字体もみられ、 〈タ〉の【 ~ 】【た】は、【た】が語頭、【 ~ 】が汎用の字体という傾向がある。 【た】の使用数をみると弓張月は 1例 (「たゝかひ」)、 (助動詞タリ3「たち」「たもつ」「をりたちて」)で、 語頭にのみ少数の【た】の使用がみられた弓張月・八犬伝に比べて、〈タ〉の字体を様々に使い書くの 準語頭「引たてゝ」、語中「みだれて」といった語である。 他の多くの語は【 4 】によって書かれる。 月氷竒縁は【た】 補助動詞「たまへ」1、 月氷竒縁のみ 46と使用

本で共通している。では、【 む 】がどのように使用されているか、 【ひ】は弓張月で語中末、 〈ヒ〉の【ひ】【む】は、 八犬伝に汎用の字体となっている。 弓張月・八犬伝に共通する使用傾向がみられるものの、 また、「いひ」「思ひ」「給ひ」等の 用例を次に挙げる。 月氷竒縁に【む】が特徴的に用 動 詞 連 用 形 語尾 に使われる点は三

· 환

月氷竒縁

語頭―ひとり5 ひとしく しのび 2 ふたゝび 一たび こひ (請) ひゞきて ひらき ひま ひらきて ひろく

うしなひ

おもひ等

語頭 ーひとり 3 ひろく ひたと

弓張月

語末―よろこび4

語頭 ひらけば ひとつとして

準語頭. -推ひらきて

用される字体という印象である。 を用いる。 び」/【ひ】 2 【 む 】 1、「うしなひ」/【ひ】 1 月氷竒縁では 弓張月は語 弓張月と八犬伝は、【む】を語頭に使用することで語の明示する使用傾向かと考えられるが、 【む】が語頭を占めているだけならず、 頭が【む】を占め、 語中末が【ひ】と住み分けがなされている。 【 む 】 1、「 思ひ」 / 【 ひ 】 1 【 む 】 1 と同じ語に 【 む 】 【 ひ 】 両方の字体 語末においても使用されている。「よろこび」/【ひ】2【む】4、「ふたゝ 八犬伝では語頭に【む】が混ざっている形である。 月氷竒縁は装飾性重視に使

法に共通性は見いだせない。 使用数が極めて多く、【免】は弓張月に「睨つめて」、 〈メ〉は【め】【を】が三本に用いられており、その使用法に月氷竒縁のみ大きな特徴がある。 月氷竒縁では め 9 を 八犬伝に助動詞メへそれぞれ 免 20と使用数が上回る。 1例ずつ用いられ、 弓張月・ 稀少字体といえる。 八犬伝はともに【め】 その

用 \mathcal{O}

月氷竒縁

め 語中 す」める 鎮がかめて 飽しめて

語末 | | | まし め

助動詞 な め ŋ 2 \Diamond 2 しめ

()

語中— もとめ 2 は じめ すゝ め

語末―はじめ て 6 ながめて2

動詞 なめり2 しめ 2 め け \otimes

体の組み合わせで表記のバリエーションを増やしていると考えられる。「すゝめる」「すゝめて」は【め】、「はじめ」「はじめて」 用例をみると、 】とほぼ決まった字体で書かれている。 どちらの字体も語中末、 助動詞に用いられる。 全体的に【め】で書く語と【え】で書く語を分けて、 助動詞は、 メリ・シメ (使役シムの連用形)・メ ちりばめている印象である。 (推量ムの已然形) に字

伝は満遍なく文中に使用が確認できる仮名字体である。 数をみると、月氷竒縁 4、弓張月 7、八犬伝 90と八犬伝が突出している。 弓張月 「をはり」 2 「をり~~」「朽をしさ」「やをら」「やをれ」等、 自立語に使われる。 自立語の用例を挙げると、月氷竒縁「をろ」「をしへて」「をはりて」 月氷竒縁・弓張月は稀にみられるという印象だが、 八犬伝 「をさ/\」 ところが、【城】の 2 「をり」「やをら」2

最後に特にはっきりした使用傾向がみられなかった仮名を挙げる。

- いえ、 月は に特に大きな個別性もなく、 異なるバリエーションに過ぎないが、弓張月は両方の字体が使用され、【**ゟ**】をメインとするため、 〈ナ〉は【る】【な】の二種類が三本に共通して使用されていた。月氷竒縁・八犬伝は【る】をメインに使用し【な】は少数: 【な】が【る】を上回って使用され、 【る】 【な】以上に【る】より一画多い【**な**】が主体的に使われる。 【る】 【**な**】は画 (ナ) は助動詞ナリ、形容詞「なし」などの語が頻出するものの、 混ぜ書かれている。 月氷竒縁・弓張月・八犬伝の【る】【な】【な】の使用 今回は分けることにした。 とは 数 傾
- いう見方ができるが、 く」3、八犬伝に語頭 【 ゆ 】は月氷竒縁に語頭「ゆづり」「ゆゑに」「ゆるし」など、 「見ゆる」、八犬伝に語頭「ゆく」2「ゆくりなく」、語中「おぼゆれ」と語中末にもみられる。 〈ユ〉の仮名は三本に【ゆ】【の】の二種類が共通した。用例を挙げると、【ゆ】は月氷竒縁に準語頭 使用量が少ないのではっきりとはしない。 「ゆく」2「ゆき/\て」「ゆきとゞく」、準語頭「落てゆく」2 準語頭「將ゆく」、 語末 「聞ゆ」、弓張月に準語頭「牽てゆく」と語頭・準語 汎用の **Т** 「引ゆく」、弓張月に語 ۲ 語頭に偏る【ゆ】と 「伴いゆく」、 頭が中心であ 頭 語中
- ぜられる字体である。 動詞未然形活用語尾や、 が加えられた字体が使用される。三本とも【ら】よりも【 5 】の使用数が多い。〈ラ〉は「あらず」「いへらく」「奉らん」といっ は月氷竒縁 〈ラ〉は現行仮名字体に近い【ら】と【 5 】がみられる。 7 弓張月15、 使用領域は【り】と同等で、【ら】【り】に使用位置の区別はみられなかった。 助動詞ラルやベシ・ズの未然形ベカラ・ザラ等に限られ、これらの多くは【 5 】で書かれる。【ら】の 八犬伝15となっており、 助動詞ラルや「悞らず」「易からん」といった動 月氷竒縁は【ら】【り】、弓張月・八犬伝には【ら】と、【り】に一点 詞活用形語尾などに時
- (ル) は現行仮名字体に近い【る】と、上の字から連綿出来る形の【6】、【 絜 】が三本にみられる。 月 氷竒縁の 【る】【
 る】では、 動詞終止形が漢字の送り仮名の場合と、 平仮名の場合とで異なる使用傾向 シシ 0) 語 は が 動詞終止 みら れ が 畏ゃ大

漢字の直後〈ル〉 表6 字十 字 + る **'**6 21 2 月氷 22 弓張月 17 39 |18|やすい仮名字体であることから、右のような傾向が表れたと考えられる。しかし、これは書き手の書き癖の 八犬伝 ようなものらしく、弓張月の「漢字+る」は表6に示したように【る】【6】がほとんど同等に用 と「漢字+るゝ」と踊り字に連綿する場合は、【6】を用いて漢字から一続きになっている。【6】が連 書かれる「する」 |る」2「被る」「飾る」など「漢字+る」の形になっているものは、ほとんど【る】が用いられ、 |敗るゝ」など「漢字+るゝ」の6例すべてが【る】で書かれ、月氷竒縁とは異なる。 全 10例や、「ある」 13例中10例は 【6】である。また、「涙入るゝ」「生るゝ」「 八犬伝の「 いられる。 『逃るゝ』

別的な問題により、【る】【も】の使用傾向が分かれると考えられる。 は 【る】がやや多く、「漢字+る^」は【る】 4 【6】 5 とさほど字体の使用傾向に変わりはない。 筆の流れや書きやすさという個

や多めに使用されていた。 かれるのは タル4、自立語語末 \$2 】は草双紙などには滅多に使用されない字体である。 【 れ 】 でのみ。 「ある」 3 「あづかる」「しる (知)」「まつはる」「うくる」に 【 絜 】 が用いられる。 弓張月は「いかなる」、八犬伝は「ある」「得る」に用いられ、 しかし行末に使用される例などはない。 使用数としては、 語を書くバリエーションとして用いられる面 月氷竒縁 .3 14 ` いずれも行末、 弓張月1、 八犬伝2と、 月氷竒縁は助 行末に近 助動詞ラル・ が強 1 筃 月氷竒 いと考えられ 動 所に使わ 詞 ル が書 2 は Þ

四 まとめ

が多いようにみえる場合があった。 これも自立語を平仮名で書く機会の減る漢字平仮名交じり文の影響と考えられる。 また名詞や動詞に【か】や【 ゑ 】といった特定の位置に用いられる字体を使用する。その点は、平仮名文の草双紙と変わらなか 本は自立 また、 非 語 語 \mathcal{O} 頭 ほとんどが漢字で書かれるが、 $\hat{\mathcal{O}}$ 【 を 】や 【 そ 】 は動詞の送り仮名や助詞テ等に使用され、 0) 平仮名で書かれる「かゝる」や「しばし」「しかるに」 は、 助詞ニに使うメインの字体が本によって異なるということが起 語幹部分を漢字で表記する読 などの 本 副 0 本行では 連 使用 こり

表記 バ IJ Í] シ ョンを増やす志向は強く、 全体として、 草双紙にはあ まり見られない 字体をよく使用していた。 T Va は 草 妏

した。 途中での行移りを嫌った用法がみられ、月氷竒縁には「おの一づから」と語が切れてしまう箇所に【れ】を用いる場合があっ 紙より読本の 文字表記の上で個別性を志向することに読本というジャンル性が窺えよう。草双紙は平仮名主体、 回避する配慮を要したかと考えられる。 縦幅をとる仮名字体を使ってスペースを埋める、字体を歪めさせてスペースを省略したりする技法的な用い方が弓張月にはみられ る用法である。 でよく使われる【4】に比して多く使用され、【 4】も使用数が多めであった。読本三本に通じてみられたのは頻出 匡郭があり、 しかし、三本に共通する字体を検討したのに関わらず、既に示した通り作品によっては特徴的な仮名字体の使用がみられた。 仮 特に【お】は月氷竒縁の「これ」、八犬伝の「こゝ」の表記に【こ】とともに混用されるのが顕 名字体は多様であり、 行数の決まっている読本は、語の切れ目を注意喚起したり、 平仮名にも教養色が強い表記と考えられる。 行数の決まっている本ならではといえる。今回は読本の各作品にしかみられない字体は割愛 語が行末と行頭に分かれて別語ととられてしまうのを 読 本は漢字主体の文章だが、 著だった。 語の字体を変え また語 草双

浜田啓介(一九七九)pp. 2-4

三

七

八

草 双 紙 類 は一七七二~一八三四年の出版物、 読本類は一八〇五~一八三〇年の間の出版物である。

曲亭馬琴『近世物之本江戸作者部類』(徳田武校注、岩波書店、二〇一四年) p. 142

四 式亭三馬 『昔唄花街始』(天保一五年刊) の跋文を参照した。 (早稲田大学図書館所蔵、 古典籍総合データベース、

http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he13/he13_01853/index.html (□○一四年一一月一六日参照))

Ŧī. クション、 張月前篇』 『小説月氷竒縁』 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2546338?tocOpened=1 (二〇一四年十一月十六日参照)) を資料とした。 (板坂則子編集、 は『馬琴中編読本集成 笠間書院、 一九九六年)、『南総里見八犬伝』 第一巻』(鈴木重三・徳田武編、 肇輯は 汲古書院、一 (国立国会図書館所蔵、 九九六年)、『椿説弓張月前篇』 国立国会図書館デジ は 「影 印椿 タルコレ

[、]以降、便宜的に資料の名称を月氷竒縁、弓張月、八犬伝と省略する。

恋川春 二〇〇二) と比較 : 町『無益委記』 『奇妙頂礼胎錫杖』 87 (久保田一九九六)、『金銀先生再寝夢』94 89、『怪談筆始』 84、『化物小遣帳』 78 (以上六作品矢野一九九〇)、 (内田一九九八 a)、 十返舎一九 芝全交『大悲千禄本』 『心学時計草』 85、『新鑄小判 73

張月には 〈ヱ〉にあたる字体が本文中に現れなかったが月氷竒縁と八犬伝の ゑ の扱いを優先してAに含んだ。

- 【も】とした仮名字体には筆順や画数の異なる【も】【◆】がみえるが使用傾向が同じだった。 【●】は書き癖の異なる人物が書いたと判断し、本稿では【も】で代表する。 資料ごとに 〈モ〉の【も】【も】
- $\overline{\circ}$ 黄表紙、 内田(一九九八c)(二○○○)、久保田(一九九七)(二○○二)(二○○九)、矢野(一九九○)(一九九二)、玉村(一九九四)の 合巻、滑稽本、人情本の調査結果を参照。
- 一 久保田(一九九五b)(一九九七)、矢野(一九九○)に指摘がある。
- || 久保田(一九九七)で『浮世風呂』の用例が報告されているほか、古くから「けふ」を【 々 】で書くことがあると述べられてい る。また、久保田(二〇〇九)の洒落本『傾城買二筋道』に用例がある。
- |三|| 内田(一九九八a)、久保田(一九九六)(一九九八)に報告がある。
- |玉 久保田(一九九七)で『浮世風呂』に促音表記が「川」の漢字に近い形の字体に偏っていたとある。玉村(一九九四)で『春色梅兒 譽美』に同じく促音に用いる傾向が指摘されている。
- 一、矢田(一九九六)参照。
- される。ただし、矢野(一九九〇)の用例数や、久保田(一九九五b) が窺えるものの、【 4 】 【 4 】 の使用傾向に大きな違いはみられない。 久保田(二〇〇二)による芝全交『大悲千禄本』(天明五〈一七八五〉年)の調査で【 4 】【 4 】の使用位置を分ける傾向が指摘 によれば、黄表紙・赤本に【 4 】が語頭に使用されること
- 「 坂梨(一九七九)に【 & 】が行頭に使われる場合が詳しい。
- 「九 【 偽 】は久保田(一九九七)で滑稽本『浮世風呂』、同(二〇〇九)で洒落本『傾城買二筋道』にもみられるが、 見出されない。 特徴的な用法は

はじめに

を検討し、各読本の表記の個別性と共通点を述べていきたい。 て出現する字体の用法に関する報告を既に行った。 馬琴の読本『月氷竒縁』、『椿説弓張月』、『南総里見八犬伝』の板本の巻之一にみられる仮名字体については、三本すべてに共通し 本稿では、 読本三本のうち二本に共通した字体、 一本にのみみられた字体の 用例

各資料における調査範囲は次の通りである。

『南総里見八犬伝』肇輯(文化十一年) 巻之一 九丁オ~三十丁ウ『椿説弓張月』前篇(文化四年) 巻之一 七ノ下ウ~三十一丁ウ『潔』月氷竒縁』(文化二年) 巻之一 八丁オ~廿六丁オ

馬琴は次のように述べている。 これら三本の読本は、 馬琴の読本の中でもよく売れた作品として知られている。 各作品につい て、『近世物之本江戸作者部類』

読本漸々に流行して、かしむ。画工の名を知 年又大坂の書賈河内屋太助に前約あれば、『月氷香香縁』五巻を作る。是曲亭が半紙形のよみ本を綴る初筆也[出像浪華の画下年、『小説比翼文』二巻[中本なり。鶴屋喜右衛門板]、又『曲亭伝奇花釵児』二巻[同上。浜松屋幸助板也]を作る。享和三年、『小説比翼文』二巻[中本なり。鶴屋喜右衛門板]、又『曲亭伝奇花釵児』二巻[同上。浜松屋幸助板也]を作る。 月氷竒縁 (『近世物之本江戸作者部類』(徳田武校注、 岩波書店、二〇一四年)p. 212) 印行の年[文化元年]大坂并に江戸にて千百部売れたりといふ。 の画工に画作る。この 是より

○椿説弓張月 (同 pp. 214~216)

する所也 その度毎に き年といへども、 弓弓 |筆の外に金拾 張月』 たびごと はんもと り L 遠方の看官はこれを疑ひて、 世 板元 評 両を以す。且北斎に為朝の像を画かせ、曲亭に賛を乞ふて、これを懸幅にして祭れり。の利市三倍也といふ。全本廿九巻、文化七年に至りて結局団円す。八年の春、板元平40mm 尤高かり。 九種発行しけり。 (中略) 馬琴といふもの二人も三人もある歟といへり。『弓張月』は、このゝち編を続ぐこと都て五 大約文化年中馬琴の戯墨、 戯作者ありてより依頼、一人一筆にして、年中馬琴の戯墨、毎歳臭草紙・読本共に、 十余種出り かくの如く著編の年々に多かるは前未聞かくの如く著編の年々に多かるは前未聞いることなし。そのすけない。 ▽ あまくん ことなし。 ままくん ことなし。 こうじゅっぱん 板元平林庄五郎、作者に報ふに、 その贏余多きをもて徳と

文化十一年[甲戌]、『南総里見八犬伝』第)**南総里見八犬伝**(同 p. 241、pp. 248~249) 輯五巻、 『朝夷巡島記』 初編五巻を綴る。 この二書、 編を累るに及て大く行はる。

現この『八犬伝』は流行 、士の綉像と模刻して、 未曽有なりければ、 四方に鬻ぐまでに至れり。 三、 四輯まで刊行の比よりして、 これらも前実聞といふべし。 狂 歌師 の摺物にも多くこれを模擬し、

しい表記等が目指されたと推測される。 長編作品の南総里見八犬伝の初輯と、 後期読本隆盛のきっかけとなる作品の月氷竒縁、世間に高く評価され大流行した椿説弓張月、言わずと知れた馬琴のライフワーク的 『椿説弓張月』、『南総里見八犬伝』の後世にまで聞こえた人気ぶりはいうまでもなく、それらに比べ名が知られていない『月氷竒縁』 馬琴が初めて著述した半紙本の読本にして当時の人気作であり、馬琴を読本作家として知らしめた作品であったことが窺える。 いずれも読本がいかなる体裁であり、 いかなる表記であるべきか、 読本というジャンルに相応

犬伝 92 本によって使用のありようが異なることが分かる。 合巻に比べ、 とややバラつきがある。 読 本には字体の種類が多い二のであるが、 また、読本三本に共通した字体だとしても、 読本三本の字体の総種類数を比較してみると、 使用数や使用傾向に差異がみられるもの 月氷竒縁 106 があった三。 弓張月 102、

江戸時代の資料を対象とした仮名字体の研究の多くは、語の特定の位置に使用されるといった字体使用の傾向を分析するの 使用 が 1 2 例 の字体 は見過ごされてきたといってよい。二本に共通した字体、 本の みにしかみら れなかっ た字体は が中心

を検討しなければ、 類数が多めとなっている。使用割合の多い字体の傾向をみるだけではなく、僅かしか使用されない字体がどのように使われているか 先行研究では、あまり取り上げられていない字体と一致する。これらの字体が使われていることにより、読本それぞれに字体の総種 読本の平仮名とその表記を分析したとはいえないだろう。

二 読本三本の表記に特徴となる仮名字体の種類

まず、二本に共通する字体と、一本にのみみられた字体の種類と、その使用数を概観する。二本に共通する字体は、 弓張月と八犬伝、月氷竒縁と八犬伝の組み合わせで、 計14の字体が該当する。 月氷竒縁と弓

【6】【6】【り】

【的】【传】【惺】【に】【牙】【ふ】

弓張月・八犬伝

[し] [ほ] [係]

月氷竒縁・八犬伝

【乃】 【 タ 】 【 み 】

資料のうち一本にのみにみられた字体は計22、具体的には次の通りである。

月氷竒縁

【抄】【れ】 し は 傾 を 【学】【章】 જા જા 河 お 「急」

包

弓張月

【帝】【す】【セ】【律】【各】【ふ】【母】【的】

八犬伝

【科】【は】【吃】

っては主体的に使用されることもある【セ】πが含まれている。 した字体より、 【 れ 】 【 検 】 【 を 】 【 称 】 【 条 】 【 み 】 【 科 】 は漢字を崩した形に近い字体である。 【 す 】 【 セ 】 【 み 】 以外は、三本に共通 比較的大きな字体である。しだし、 黄表紙や合巻ほか多くの資料に当たり前のように使用される【す】や、 作品によ

表1に右の字体の使用数と、使用割合を示した。右に挙げている字体には、○を付けている。

の異なる【サ】が最も使用され、【お】は【サ】よりも少ない。 体、一本にのみみられる字体は、 縁で〇・八七%、 のうち使用率五%未満の稀少字体というべき字体が22もある。例えば〈ア〉をみると、三本とも【あ】を九○%以上使用し、月氷竒 二本に共通する字体と一本のみにみられる字体3のうち35は読本三本に共通する字体の使用割合に対し、 弓張月で八・四九%、【6】が使用されている。【あ】は主体的、【6】は補助的な関係にあり、二本に共通する字 ほぼ補助的な字体であることが分かる。ただし、月氷竒縁において 〈オ〉 の仮名は【お】とは書形 使用割合が少ない。

される字体である。 られた字体のうち、 共通してみられた字体のうち【 ら 】 【 ら 】 【 し 】 【 作 】 【 雫 】 【 に 】 【 乃 】 【 偽 】 は、 の二本に対して特徴的といえる また、〈オ〉〈ケ〉〈シ〉〈ツ〉〈ナ〉〈ニ〉〈ネ〉〈ノ〉〈ホ〉〈マ〉〈ル〉の字体の使用割合は、 【 6 】が九五%以上、【た】が五%未満で、【 6 】が主体的で、【た】は僅かしか使用されない。 特に月氷竒縁の〈タ〉は、【き】が使用されているほか、【~】と【た】の使用割合がほぼ同等である。 月氷竒縁の【き】【を】、弓張月の【み】【み】は、使用割合が一〇%以上あり、 作品によって使用割合が異なる。一本にのみみ 作品によって異なる場合がある。二本に その本においてしばしば使用 月氷竒縁の使用傾向

本の二本に共通する字体、 一本にのみにみられる字体は、 使用割合が少ないという傾向が共通する。 しか Ļ すべ てが稀少字体 表1 字体の種類とその割合

表															
	字体	,	月氷	Ę	3張月	八	大伝		字体	J	月氷	弓	張月	八	.犬伝
ア	あ	113		97	91.50%	90	100.00%		1	39	11.71%	315	66.73%	301	57.11%
	ंि।	1	0.87%	9	8.49%	0	0.00%		4,	274	82.28%	94	19.91%	226	42.88%
	お	17	34.00%	47	100.00%	32	100.00%		○に	16	4.80%	1	0.21%	0	0.00%
オ	〇护	32	64.00%	0	0.00%	0	0.00%	J	○ み	0	0.00%	61	12.92%	0	0.00%
	0t	1	2.00%	0	0.00%	0	0.00%		○ 3	1	0.30%	1	0.21%	0	0.00%
	う	155	85.87%	297	86.58%	245	86.57%		○ ¾	3	0.90%	0	0.00%	0	0.00%
カ	か	21	11.86%	35	10.20%	38		,	Q.	1	12.50%	1		6	46.15%
	<u>○</u>	1		11	3.20%	0		ネ	ね	7	87.50%	6		2	15.38%
	な	13		52	66.66%	28)	○絲	0	0.00%	0		5	38.46%
ケ	け	29		20	25.64%	63			の	287	83.67%	505		362	96.02%
	○ 巻	0		6	7.69%	0			H	54	15.74%	14	2.69%	4	1.06%
サ	3	28		89		104	100.00%		○ <i>7</i> 3	1	0.29%	0	0.00%	11	2.91%
	○は	1		0		0			\(\mathcal{O}\) \(\mathcal{B}\)	1	0.29%	0		0	0.00%
	(238		344	80.37%	298			<i>n</i>	167	75.90%	347		357	90.60%
シ	太	45		50	11.68%	30			t	36	16.36%	35	8.86%	28	7.10%
	() ()	0		34	7.94%	55		ハ	2	16	7.27%	13	3.29%	8	2.03%
ス	ŧ.	106		149	86.12%	128			<u></u> () / 2	1	0.45%	0		0	0.00%
	N	35		15	8.67%	44		_	○は	0		0		1	0.25%
		2		0	0.00%	0	0.00%		^	72	84.70%	180	100.00%	69	100.00%
	○ す	0		9		0	0.00%		O 2	13	15.29%	0		0	0.00%
	せ	28		62	93.93%		100.00%	ホ	N	16	84.21%	32		12	50.00%
セ	<u>0</u> 2	0		4	6.06%	0			そ	3	15.78%	6		8	33.33%
	○を	1		0		0			○ほ	0	0.00%	5		4	16.66%
	9	48		133		117		マ	ま	30	60.00%	2		6	8.95%
タ	た	46		1	0.74%	6			#	8	16.00%	74		59	88.05%
	○뿔	18		0	0.00%	0			lá O la	11	22.00%	4	4.54%	1	1.49%
-	つ	20		77	81.91%	35			<u>○</u> 像 こ	1	2.00%	0		1	1.49%
\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	-	19		3	3.19%	29		111	○ ○み	26	92.85%		100.00%	40	90.90%
ツ	○11) ○15	3		6 7	6.38%	0			رم ام	2	7.14%	100		1.01	9.09%
	0k	9		1	7.44%	0			る	71	56.80%	168		161 58	68.22%
	<u> </u>	177		350	1.06%	288		ル	- 3 犯	38	30.40%	58		2	24.57% 0.84%
テ	て	115		60	85.36% 14.63%	88			03.	14	11.20% 1.60%	1 2	0.43%	0	0.00%
'	○ す	5							0 ts	0		2		12	
	ح ک	157				- :			○ ß	0		0		3	
<u>۱</u>	ے ح	79		55	15.44%	23		ロ	3		100.00%	23		-	100.00%
'		7		1	0.28%	0				0		9		0	
	る	134		21	10.14%	+			017	U	0.00%	<i>J</i>	20.12/0	U O	0.00%
	な	21		83	40.09%	209 7									
ナ	な	0		101	48.79%										
	○ 歩	0		2		0									
	0 st	3		0		0									
Ш	\bigcirc w C	ა	1.03%	U	0.00%	U	0.00%								

というわけではない。本ごとに、 字体の種類や、 使用数に差異があり、 個別性が窺われるのである。

先行研究に使用位置の傾向が指摘されている仮名字体

まず先行研究において、使用位置に傾向があると指摘されている字体をみていく。

〈シ〉【し】 〈ツ〉【的】 【传】 〈マ〉【**&**】

使用されている語を示す。 る。弓張月と八犬伝において使用され、 〈シ〉の【し】*は、現行仮名字体に近い形をしているが、前の文字の左横から起筆し、 使用数が多めな真っ直ぐ線状に書かれる【し】に対し、使用数の少ない字体である。次に、 前の文字を囲むように書かれる字体であ

弓張月

語中—勇々しき 1

へ 久 しき 1 感じて 1 油然として1

愀然として 1

等 91 例

語末―しばし7 よ し 5 なし (無) 7 なし (成) 3 カュ \tag{\tau}{1} おぼし 1 等 124

例

助動詞―しかば8

助詞―し 4 して5

(1) (34) (34) (34)

久 し く 1 感じあへり1

語末―狩くらし 3語中―信々しき 1 しばし2 よ し 2 なし (成) 1 欣然として 1 なし (無) 1 おぼしかへし1 おぼし1 てらし 1 懲らし 1

助動詞―しかば3 しめ 1

助詞-() 6 して4

八犬伝

₹ 298

助動詞―しかば13 語末-なし (無) 9 語中―おぼしき 1 じ 5 べし 6 心やすし1 似げなし1おぼしく1 しらして1 等 46 例 ふかくして 1 忽然として 1 今はし1 鳴らし1 進らし1 等11例 等 113 例

し 55

助詞―し15

にして13として1

かし1

表 大 大 大 大 大 大 な し (無) 3 語中―おぼしくて1 じ 1 牽めぐらし 1 忽然として1 いひがたし 1 さょして 1 立なほし1 ふかくし 1 読っくし 1 量らずして1 せわしく1 まなくして1 測がたし1 立がたし1 見わたし1 おぼつかなし 1 反らし 1 とりかはし 1 物体なし1

助詞―し18 かし1 じ

弓張月の用例のうち9例は行末であり、 【し】の使用箇所は語中末・付属語で、【 し 】に準じる。【 し 】で主に書かれ、時折【し】が使用される。 行末の〈シ〉は必ず【し】が使用されていた。

①九丁才 (13)

讀よ【し】一

②十二丁才 (L5 ~ L6) 感【し】 一あへり

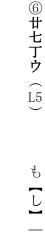


業をな【し】一

③二十丁才 (L10)

④廿五丁オ
L8
な【し】









⑦廿九丁ウ(13



おぼ【し】。一

⑧三十丁ウ (L3)



⑨三十一丁才 (L10) 幾日もあらず【し】一ていくか

末の たと考えられる例であった。 スペースを省略することだけが目的なのではなく、行末には【し】を用いようという意図があるとみられる。しかし八犬伝では、行 し、弓張月の①、②、④は、行末に【し】一文字分を書き入れられる充分なスペースがあるのに関わらず、【し】を書き入れている。 末に押し込むことが可能となる。用例のうち、③、⑤~⑨は行末のスペースを省略するため【し】が用いられたとみられる。しか 【し】は直線的にスペースをとる【し】より、結果的にスペースをとらずに済む。一語を同一行に収めるために、【し】を用いて行 〈シ〉は9例中8例が【し】、僅か1例のみ【し】が使用されている(サカ丁オロ)。これは、スペースを省略するため書き入れ 行末の処理に、それぞれ違いがあることが分かる。

〈ツ〉の月氷竒縁と弓張月にみられた【 的 】 ハ 【 传 】 nの用例を、【つ】【 っ 】と共にみてみる。

月氷竒縁

20

語頭―つゝしみて1 つながれ 1 つきて 1

準語頭―名つく1 纏 つき 1

助動詞―つ2 語中―おのづから2 助詞―つゝ 1 みづから 2 あづかり1 あづから1 あづけ1 うつして 1 ゆづり 1 わづふ1

準語頭―縁づく1

語中―おのづから5 みづから 2 いづち1 1 つく1 しづまり 1 とつてかへし 1 まつはる1 まつはりし

もつはら1

語末 **n** 3 一まづ3 たつ1 まつ1

[h.] 9 語中―あづく1 あづかる1 まづ 1

準語頭―名づくる 1 名つけ 1語頭―つよく 2 つげて 1 承つぎて1

こゝろづきて1

(2) (77)

準語頭—名づけ 2 語頭—つきて 5 つ おのづから2 - うちつれて1 痍つき1 餓つらめ1 追つき1 睨 つめて1 手づから1 彫つけ1つかふ1 つがひ1 ついゐて1 つくゲー1 つけて1 つと1 つらなる1 つゞき1 めづらし1 よつ引1 2 まつはりて2 まつはりし1 いづれ1 うつりて 1 しづやか1 たてまつる1 まつり1

語末 -まづ 3 みづから 1 思し召たつ 2 たつ 2 發^はつ

助動詞―つる 9 つ 8 つれ 3

「ツ」 (3)

語末―まづ1 まつしら1 もつはらい

(r) 6

語中―くつろげて 1 なつかしみ 1 よつ引て 1

語末―よろづ1

助動詞―つ2

語頭―つかふる1 つがひ1 つかず1 つよく1 つく (嚼もっく)

助動詞―つる1

助詞―つゝ 1

表記を豊富に行ったためと考えられる。 (1) は 「川」の漢字を崩した形に近い字体であり、語中末に使用されていた。【つ】【 つ 】の用例と同じような位置に使用され

みられた全 2 例においても、「いとま」(月氷廿三丁オ)、「仰さま」(八犬伝廿五丁ウ)と語末にみられた。より漢字に近い形の【 偽 】は へマ〉の【 め 】は草双紙等で、語末や、「さま」の語に固定して使用されることが報告される字体であり「〇、月氷竒縁と八犬伝に 三本に共通して使用されており、読本においては【 偽 】が優勢で、【 例 】は極めて少ない字体となっている。

四 仮名字体の使用種類の多い〈二〉〈ル〉

(ニ) と シ は四、 五種類と仮名字体の種類が多くみられる。 各資料における用例をここで確認したい。

- ル〉【ふ】(月氷竒縁・弓張月) 【偽】(弓張月・八犬伝) 【焓】(八犬伝)

まず〈ニ〉には、月氷竒縁と弓張月に五種類の字体が使用されていた。

月はこの【み】がやや多くみられるといえる。使用された語を、【ょ】【小】と共に示す。 弓張月のみにみられた【み】は、〈ニ〉の一二・九二%であった。 前期読本の『雨月物語』二 では全体の約二%であるので、 弓張

弓張月

【4】〔94〕 助詞―に25 には3 にも3 にや1 だに1 語末―既に4 為に3 潜に3 遙に2 大に2 いかに2

直☆

に

1

等 36

例

語末―遂に 1 故に語中―いにしへ 1 1 他^{あだ}に 1 僅^{かずか} 1 誠と に 1 忽地 に 1 憂^{うき}に 1 さらに

助詞―に47 にて15 にして10 にも 7 には 6 にぞ 4 にしも 1 にや 1

[**a**] [61]

語末-- 遂に 2 為に・ 1 既^{すで} に 1 直^{たゞ}に 1 嬉し氣に 1 軽やかに 1 健はか 1 等 11 例

助詞―に22 にも13 には5 にて4 にや3 にして1

副 詞の語末である。 み】が使われている語は、三本に共通する字体である【 4 】【 fx 】とほぼ同じであることが分かる。 使用箇所は主に助詞ニや

現行仮名字体に近い 【に】は、 月氷竒縁には 16例みられるが、 助詞ニ 15 例、 「ゆゑに」 1 例、 弓張月では、 助詞 = 1 例がみられ

る。

は、 月氷竒縁に3例みられ、 弓張月ともに僅 すべて行末にあたる。 カコ 1例のみである。いずれも行末に使用されている。また、【 7 】に比して画数の多い【 看 】 月氷竒縁の【に】も助詞ニ15例のうち8例は行末である。

れる。弓張月にも同様に、【 4 】 9、【 4 】 4、【 み 】 4 と行末に四種類の字体が出現する。 月氷竒縁には行末に【ふ】がくる場合も13例ある。 行末にさまざまな字体がみられるようにする装飾志向の使用傾向だと考えら

それ

は、 ぞれの字体は平均的に字幅が異なる。 行末のスペースを埋める用途のためと考えられる。 行末のスペース次第で、 字体を選べたと考えられる。【 犭 】 【 肴 】 が行末に使用されやすい

+二丁オ18)、弓張月は「綴る」(七ノ下丁ウ18)、「よる」が用例である。 (ル) の月氷竒縁、 弓張月に使用されていた【ふ】は、 月氷竒縁、 弓張月ともに 2例のみ使用され、 月氷は「はしる」「給へる」

月氷竒縁

のたぐひことが~く板架をはなれ。或で庖湢をはし【る】。者甚麼とおどろ

は 梁づばり の上に附。

或があること

L10 L9 は棧板をはし【ふ】。

ワ張月十三丁オ

L10 \(\) L11 よー【ふ】

月では行頭に〈リ〉が位置する場合に、十四丁オ18~19「居れ一【2】」、二十丁オ18~19「 畄 一【2】て」、三十一丁オ19一弓張月の【3】の使用は、原因理由の動詞「よる」が語中で行末・行頭で分れている、行頭に使用されている。同じように、 「勦一【≀】」と必ず【≀】が使用される。 【し】が行末に使用されることも含め、 月氷竒縁 「はしる」は、二行前に同じ語がある。このため、 弓張月においては行頭・行末の字体使用に気を配ったかと考えられる「」。 ヘ ハ 〉 の場合も、 行頭の助詞ハ・バに限ると、 近接する同じことばの同じ字体の反復を避けた変字法と考えられる。 5例中 4例に【 々 】で書かれる。 5

にさまざまな (廿五丁オ18) の語である。 【 体】は弓張月で 2 (○・ハ六%)、八犬伝では 12 (五・○八%) の使用数であった。 シシ の字体がみられる。 八犬伝には形がやや異なる【含】も3例使用されており、【る】【6】が主として使用されながら、 弓張月の2例は、「ける」(十七丁オ川)、「遮ぎ

八犬伝

[る] 58]

助動詞―たる1 語末―落る3 からる2 ける2 象^{かたど}る らる 2 入る 2 捩断る 1 廻翔る 1 等 47 例 (「漢字+【る】 39 _

語末―見る5 [6] 161 大なる 2 なる 25 入る 1 象^{かたど}る 1 つる3 送さる 1 らる1 見かへる 1

等 69

例

(「漢字+【ゟ】18」)

はやる1

語末―送る1 助動詞―たる33 (5) 12 立 る 1 掛跨る 1 ざる 12 潜 る 1 ける 6 譏 る 1 向上る 1 多かる 1 しかる1

語末―遠离る 1 助動詞―たる2 含 る 1 ざる 1

立かへる

動詞や 助 動詞の終止形や連体形は、 文中に頻繁に出現する。変化をつけるため 〈ル〉の字体が様々に使われたと考えられる。

五 二本の資料に共通使用された仮名字体

三・四節述べた以外の、資料二本に共通した字体の用例をみてみよう。 〈ア〉の 【 6 】 は、月氷竒縁では次の 1 例のみである。

※すべて〈ス〉の仮名字体に濁点が付く。 かならず破碎るもの

近接した箇所で三回「あらず」が繰り返されている中に使用される。【も】【に】とも組み合わされて、 同じ語に同じ字体が使用

されるのを避けたとみられる。

弓張月の9例は、 用例は【あ】でも書かれる語である。

(あ あり 20 ある 10 ありて8 あれ 1 あらそひし 1 等 101 例

ら あり3 ある3 ありて1 あ れ 1 あらそひし1

所で使用されている。 **6**】で書かれた語のうち3 例は、 対 句 の同じ語に同じ字体の使用を避けたもの、 近接したため同字体を避けたと考えられる箇

廿 六 丁 才 L7 L4 十七丁オ 13 智【あ】るものは爭は【を】。 【あ】しかりつるも。 この事【 ゆ 】るべき一 能す 【6】るものは誇ら【す】。

【あ】まり【6】り。

わけではない。 しかし、二十丁ウには「あり」「あらず」 が同じ行にあるが、どちらも【あ】で書かれており、 変化をつける用法が徹底されている

使用されている。 〈カ〉の【あ】 は月氷竒縁で十丁オル の短歌 「おもへども思ひも【う】ねつあし引の山どりの尾のながきこのよを」 においての

弓張月の【 あ 】 11例は、 自立語の 語中末か付属語に使われる。【う】の用例と示してみる。

う 297

語中 1 かなる2 かば 13 賢 かる 1 快

からず1

等 114 例

語末-(一軽やか18 しづやか 1 わ が 16

助詞 が 81 ながら5 等 124 例

(う) [11]

語末—信やか 1 語 中 | *(*) かなる1 しかば 1

助詞 | が 2 ながら

により使用されたとみられる。 【 う 】は二画で済む字体で、複雑な形とはいえないが、 漢字の名残がある字体である。【う】と使用位置も変わらず、 装飾的志 向

例がみられた。助詞トの用例で、 〈ト〉の【 悭 】は月氷竒縁で7例、弓張月で1例、 月氷の 4例と弓張月の その8例のうち7例は助詞 1 例は行末にあたる。 Ļ 月氷に 「もとめ」と自立語語中に 1 例

> \mathcal{O} 用

月氷竒縁

十二丁才 L6 打ん【撃】一する

(腰元さざ浪の台詞)

十 二 丁 ウ L3 L3 卒こなたへ【を】一前に立 と 吹し給へ【を】一いふ き も しらず / ~【を】一あらがへば

(盗賊石見太郎の台詞)

廿五丁ウ L3

(怨霊さざ浪の台詞)

弓張月

二十丁ウ L2 L3 打殺さず【��】一いふ

行末のスペースを埋める用途で使用したとみられる。 を助詞トに使用するにはスペースが広い場合だったと推測される。【饣】は画数が多いため縦幅がおのずと必要になる字体である。 えられる。右のような用例は、 を 】の行末への使用が目立つのは、【 す 】【 ┫ 】と事情を同じく、字体の縦幅と行末のスペースの余り方が関係していると考 行末の匡郭までの間に、助詞トのあとの自立語を書き入れるには狭く、しかし通常用いる【と】【と】

の【 乃 】 は月氷竒縁で 1 例 (○・二九%)、八犬伝で 11 例 (二・九一%) の使用されており、 すべて助詞 ノにおける用例だっ

た。 月氷竒縁で は + Ħ. 丁 ・ ウ L1 に使用され、 使用理由は窺えない。 八犬伝では、【乃】 は行末近くに使用されている。

サ 十 十 十 十 五 九 六 四 二 丁 丁 丁 丁 丁 寸 才 カ ゆ ウ L6 L10 L8 L6 L5 L2 廿六丁オ L2 ナ ナ ナ ニ ー ー 丁 丁 丁 オ ウ オ L8 L7 L1

において見た目に変化をつけるため使用されたかと考えられる。 助 詞 ノの 240 例 のうち、 22例が【の】で表記される。行末に【の】が表記されるのはそのうち19 例である。【の】と【 乃 】は行末

が優勢だったことが分かっている「言。【ほ】の用例を次に示す。 (ホ) 当時 〈ホ〉 の仮名は【ほ】より【そ】

弓張月 語頭 ほとり 4 ほどこし 1

語頭 -ほとり 語中―おぼしく1 のぼしかゝつて1

られる。 「なほし」等語中4例、「なほ」「処得がほ」語末2例、【 は 】は「おぼつかなし」「なほりて」等語中7例、「なほ」語末5例にみが「おぼして」「もよほして」等語中18例、「なほ」語末1例に使用される。また、八犬伝では【そ】は「ほゐ」語頭1例、「おぼし」 このように、【ほ】は非語末に使用されている。なお、弓張月では【そ】が「ほとり」1例、「おぼし」「のぼし」等語中5例、【ゆ

〈ミ〉の【み】の用例を【 と 】の用例と共に示す。

月氷竒縁

[を] (26)

語頭―みづから 4 みな2 みのらず 1 みだれて1

語末―すゝみ1 語中―このみて2 ゆるみ1 掴み・こみ/〜1 ぁ あはれみて1 1 あはれみ1 1 哀み1 うらみん1 あやしみ1 かしこみて 1 つゝしみて 1 かへりみ1

助動詞―ベみ1 助詞―のみ2

[み] 2]

語頭―みたず1 みだれて1

八犬伝

(E) (40)

語頭—みな3

ー 好みし 10 2 うち笑みて 2 すゝみし 1 · 挟みて 1 あざみ誇て1 あざみ笑ひ 1 すゝみ出 1

語末 進みる すっみ1 淪っ み 1 生⁵み 1 推尊み1

助詞 |-|のみ |11

[み] (4)

語頭 ーみづから 2 みな2

したと考えられる行末における使用もみられ、一概に変化をつけることだけが字体の出現理由ではないことが分かる。 以上、二本の資料に共通する字体の用例を確認した。字面に様々な変化をつけたとみられるものが多く、また、字体の縦幅を利用 【み】は、月氷竒縁・八犬伝ともに、【 と 】が主用される中で時折語頭に使用される傾向のある字体といえる。

読本三本のうち一本のみに使用される仮名字体

次に、一本の資料にのみ使用が確認できた字体を検討する。各本においてどのように使われていたのかみていく。

六-一 月氷竒縁

まず、月氷竒縁の字体を検証する。〈オ〉には、最終画の点から文字を突き抜けるようにして、下の仮名に連綿する形をしている

【お】 17 17

おの/~1 おそれ 2 おのづから1 おどろき1 おどろく1 おのれ1 おふて1 おほし1 おさめ1 おそろし 1 おとろへ 1 おなじ1 おなじく1

入おき 1

サ 32 32

おのづから 6 おどろき 4 おもふ 3 おもひ3 おもへ3 おもはず1 おく 1 おのびて1 おぼえし 1

た 1

おほく1

お り 立

おもふ 1

形の字との相性がよく、一語を連綿によりひとまとまりにしやすい形といえる。 を使用している。「おもふ」などの【**办**】に続く〈モ〉の字体はすべて【**む**】である。下の字に続く形である【**办**】は、上から続く を上回るが、決まった語に使用されていることが分かる。特に、「思ふ」の語1例は、【れ】で書かれた1例を除いてすべて【**办**】 窺える字形として注目される。【お】で書かれた異なり語数は1、【か】で書かれた異なり語数は8である。【か】の使用数は【お】 【サ】は【お】から下の字に連綿する形で、実質的には【お】と字形の違いにあると考えられるが、連綿と語のまとまりの関連が

| れ | が使用されていたのは次の箇所である。

「おもふ」の「お」を残して行移りしている。ほかの「おもふ」 14例は、さきほど述べたようにすべて【**办**】で書かれ、 下に続く

〈サ〉の【 b 】の用例は僅か 1 例、怨霊となった腰元さざ浪の「さらば 縛 を觧べし」という台詞の冒頭に使用されていた leoon と連絡する形で表記されている。連綿が途切れることから、通用の字体とは異なる字体にしたと考えられる。

廿五丁ウい 一【 は 】 らは

〈ス〉の【 ほ 】は漢字に近い形をしている。僅か 2 例しかみられなかった 「玉。

十五丁オロたのしま【頃】。一

世六丁4 おもは【ほ】一

行末に用いられたかと考えられる。〈セ〉の【 を 】は漢字に近い形の字体である ドゥ

十二丁ウ 11 引出 【を 】 り

月氷竒縁〈タ〉の字体使用分布 表 2 準語頭 語中 語末 付属語 9 3 0 27 7 11 [48] た 20 0 1 1 24 [46] 党 1 1 12 0 4 [18]

表3 月氷竒縁助動詞タリ に用いられた字体 党

6

2

近

かれてい

2

2

せ

り

は、

右

0

ほ

か

に

ーせ

り

2

例

「もて

せ

り

「寓居:

せ

り

 \mathcal{O}

5

例

が

現

行

仮

名字

体

た 9

16

6

月

氷竒縁には 【せ】で書

〈タ〉 %以

の字体に三

種

類

が

その表

記に特

徴

が

み

5

れ

他

 \mathcal{O}

は、

5

が

九五 た

上使用され、

た

は僅かであ 使用され、

る。

L

か 5

月

氷竒縁で

は る。

9

四

たり

たる

八

五.

%

兀

一・〇七%、

党

六・〇七

。 と、

た

は ほぼ

同等に

し使用

は 自立 語 語

頭、

付属語

語

されている上に【を】がしばしば文章中にみられる「七。

頭に偏っており、【 ~】【 * 】は自立語語頭・

語 中、

付

属

語

語

頭

に多

と分かる。

0

字体の

位置を表2に示す。

7.氷竒

縁

0

み

の字体である

党

0

用例をみてみよう。

準語頭 たび 1

11 たり 4 11 たる 1 1 たれば 1 1 たゞ き 1 う たが S 1 4 たず 1 みだれて 1

助 動 詞 た ŋ 2 たる 2 語 語

中 頭

た

L

4

1

ふ たゝ び 1 0 たま Š

向 行 助 われ 右 た字体使用といえよう。 0 豹 】それぞれが使用され、 ていることから、 タリの 用 例 の字体と連綿してい 0 中 「たり」「たる」(この二つの活用形のみがみられた)に使用された字体を示したも で、 **₹** 月氷竒 から 文章中に多様な表記がみられる。 、 る。 縁 0 通 〈タ〉 用される に続く語 \mathcal{O} 仮名字体の い は、 すべ Þ)使用傾· て漢字に近 向 以上の通り、 は に比し V 他 W3 心の二本 て、 か (タ) · の 資 画 ら連 数 を含む 料 $\widehat{\mathcal{O}}$ 綿 0 多 してい 使 1 川傾 語 字 のであ に様 体と組み合わさ る。 向 と異なる 々な字 ま る た、 体 頻 助 .. の 出 八。 動 組 語 れ 詞 T 4 \mathcal{O} タ 合わ 化 タ 使 IJ IJ 用 \mathcal{O} 富 せ さ 連 んだ表記を志 による表記が れ 体 る。 形 Ź は、 表 3 ル た は は

その の【す】「れは僅か 5 例 用 例 は 次 \mathcal{O} 通 ŋ である。 十八丁ウ \mathcal{O} 例 は 文章に お け る用字が 字体 使 用に関係すると考えら つれるた

文章全体を示した。

め

1

十八丁ウ口 十丁ウ 14 L6 L5 L4 L3 L2 夫剣は陽物にし【て】威あるものなり。鬼は陰にし【それのなり。鬼は陰にし【それのなり。鬼は陰にし【それのなり。鬼は陰にし【それののとし、ないとないのののののののののののののののののののののののののののののの

はじめて消除し。又にし【す】哭あり。 又一年にし【そ】大に福あらん。**たいもはい 百日にし 【そ】二物をうしなひ。 廿五年を経て禍

二十丁ウ L9 二十丁才 L6 ありと【す】 疑し【す】

L8 L7

【 す 】を使用し、同字体の反復を避けたと考えられる。 十八丁ウには 「陽物」「陰物」、「三日」「百日」「一年」といった反対語や類似の語が「にして」で繰り返されるため、【て】【き】 あとの3例の使用理由は不明というほかないが、 行末あるいは行頭に近

という点が指摘できる。

〈ナ〉の【 ଣ 】の用例を語別に示す。 該当語に【る】が使用されている場合も合わせて示す。

はなはだ 延べ数3

十五丁ウ に7 は 【る】はだ

廿二丁ウ口 十七丁オ 1.5 は【飢】はだ は 【る】はだし

むなしく 延べ数 2

二十九 十十丁才 才 L4 L10 む【る】しく む【れ】しく

すなはち 延べ数 6

十十九 七一丁 オ 110 L11 L10 す【る】 はち

/ 【 る 】 はち

す す 【る】はち 【る】はち

世 四 丁 ウ L6 L8 廿五丁 L4 L5 す 【る】はち す【飢】一はち

る際の行末に稀少字体を使用する例が〈オ〉にもみえ、 されたかと推測される。「すなはち」は、6例中5例は【る】、【矾】の1例のみ行末の用例である。 月氷竒縁は、文章中に複数回表れる語に、異なる仮名字体を使用するケースが多々みられ、【 飢 】の場合も変化をつけるため使用 語中で行移りした際に行末へ特別な字体を配す傾向が窺える。 月氷竒縁には語中で行移りす

まふ」の用例を、【の】で書かれたものと示す。

十 一 丁 オ L5 L6 九丁オ
に 【 み 】 【 る 】 【 ま 】 はく 【の】【き】【ま】ふ 【の】【 6 】 【 値 】 はく

のたまふ」の語は、すべて字体の組み合わせが異なるものとなっている。

れる。 の【 や 】は漢字を崩した形に近く、 【 や 】より更に画数が多い字体である。 月氷竒縁にただ1例、 行末の助詞 ハに使用さ

十八丁才(13) こひねがはく【 巻 】 一

用例は次の通りである。 行末にみられる【ハ】(6例)、【き】(2例)に対し、【き】は縦長な形であるので、やはり、スペースが関係あるかともみられる。 <へ〉の【**を**】は助動詞ベシ、「べし」「べき」「ベみ」にのみ使用されていた。「べし」「べき」は【へ】でも書かれることもあり

【〈】 べし11 べき2 べからず4 べかり1 給へ10 等32例

【**夕**】 べし7 べき5 ベみ1

による表記の特徴となっている。 わせで表記する、表記の平板化を避けた避板法や、行末に特別な字体を配す場合に使用する傾向があり、 で書かれる。平たい【へ】に比しての【を】は画数が多い字体である。特定の語に混ぜて、視覚的効果を狙ったものと考えられる。 以上、三本の資料のうち、月氷竒縁にのみ確認できた字体の用例を示した。その字体使用には、 助動詞ベシの活用形「べかり」「べから」や、左には挙げていないが「いへども」(8例)「かへす」(1例)の語中は、すべて【へ】 頻出する語を様々な字体の組み合 月氷竒縁における仮名字体

六-二 弓張月

立語の用例は次の通りである。 ここでは弓張月のみにみられた【 衤 】【す】【セ】【 は 】【 ふ 】【 袼 】の六種類の仮名字体について述べる。 の【 希 】は 【 々 】 【 け 】 に比して画数が多く、大きめに書かれる字体である。〈ケ〉の三つの字体 【 希 】 【 々 】 【 け 】の自

り

語頭―けふ 3

語中―なけれ4 ちかけれ1 深けれ1 有がたけれ

1

け

語頭—けふ2

語末―名づけ2 退け2 防げ1 似げ1 急げ1 あけ1語中―かけて2 かけず1 しげき1 つけて1 うけ引て1

净】

語中―くつろげて1

組み合わさった表記になっている。 この【 着 】の「くつろげて」(廿五丁13) 0 1 例では に漢字に近い字体の 【り】を使用して おり、 形の複雑な字体が二字 体

れる。 で書かれるが、「けり」1 【
ネ 】 の他の用例は、 表4に示した通り、 例、「ける」4 例が 助動詞 【 希 】 で書かれている。 ケリの表記に使用される。 稀少字体を時折使用して、 助 動詞ケリやベシの已然形の 表記の変化をつけたものと考えら ケシ の多くは りな

もにみる。 〈ス〉 の す は、 草双紙等によく使用される字体だが、 今 回 の 調査では弓張月にのみ使用されていた。【を】【ル】 の用例とと

*****149

語頭―する5 すゝめ2 すゝみ2 すは2 すべて1 等16

例

準語頭―脱すてゝ 1 ー - すじ 1

語中 末尾 - 給はず 6 まゐらすれ 3 怕 れず2(打消「ず」 まゐらする2 仰する 75 例) 1 まゐらす 見する 1 等 ます! 105 例 1 等 25

例

15 15

表4 弓張月〈ケ〉の助動詞 用 例 け け け け け け 字 ŋ る れ λ め れ 体 ろ 9 19 8 5 0 1 [46/52]け 0 0 0 0 1 1 [2/20]衤 0 0 0 1 4 0 [5/6]

語中―ます/~2

末尾―べからず1 せず 1 (打消「ず」 6 例) おはします2 かならず2 等 13 例

す 9

語頭―する4 す1

末尾―放さず 1 誇らず 1 語中―さすらはず 1 渡す 寇する 1 震 する 1

【す】は自立語のどこにでも使用され、 汎用性が高いが、 使用数は最も少ない。用例をみてみると、「さすらはず」は、

廿二丁ウ

に

5 さ【す】らは【も】

※【を】には濁点が付く。

考えられる場合がある。 〈ス〉が二度出てくるときに字体を変えるために使用される。似たような例に、 対句の助動詞ズが同じ字体になるのを避けていると

十七丁オは 智【あ】るものは爭は【を】。 能【6】るものは誇ら【す】

※【を】【す】には濁点が付く。

また、「する」が行末にあたる2例は、スペースの省略のためと考えられる。

世 七 丁 ウ レ 2 L2 L2 震【す】る| 家と【す】る|

ので、【す】のように【も】と密着して書くことはできない。やや狭くなった行末のスペースに、【す】で書かれた「する」を用いた 【す】は最終画で左にはらうため、【も】と連綿することによってスペースを省略できる。【も 】の場合、最終画で右側にはらう

と考えられる。巻之一では用例を示した2例のみだが、巻之三の十八丁オ口に「御覧ずる」が行末に書かれ、 で使用されている。 スを省略した形で書き入れられている。【す】には近接する同じ語を別の字体で表記する用途と、 行末のスペースの省略をする用途 やはり連綿でスペー

使用されている。【セ】の用例は【せ】と区別して使用していたものではないようである。 〈セ〉の【セ】はカタカナの「セ」とほとんど同じ形をした字体である。現行仮名字体に近い【せ】が使用される中で、僅か 4

【せ】 〔62〕

語末―まゐらせ7 語中―申せし1 語頭—せず3 せ 落とり 合はせ 2 せ 1 1 せ せん2 せじ1 申せ1 搦取せ1 縫留させ1まゐらせ給ふ1 労せずして1 せざり1 せらる 1 おはせし1 殺させ 1 せん {すべなく} 1 等 20 等 31 例 例

【セ】 (4)

+ + + = - T T T D L6 L3 L8 七ノ下丁ウ以

字と近接して使用される。 には【は】が僅か 1 例みられた二〇。 左の用例のみ使用されていた理由は不明だが、 漢字に近い形の 【り】や画数の多い · 漢

廿五丁ウ以 嚼み 【は】き【り】蟒一蛇

ナ の【ふ】は僅か 2例である。

十四丁オ17 【 ふ 】 ほ十二丁オ11 夜【 ふ 】 / 〈

ばれたかと推測される。 出語に稀少字体で変化をつけたものと考えられる。「夜な一~」は、漢字と組み合わさっていることから漢字に近い形の【 ふ 】が選 「なほ」は延べ1例みられ、そのうち、使用数の最も多い【**な**】で書かれた例が12例、【な】で書かれた例が1例みられる。頻

〈ロ〉の【

ら 】

について、

【

ろ 】

と共に使用語を示す。

ろ 23 二

語中―よろこび1 ひろく 1 もろとも 1 矢ごろ 1 射ころす 1 よろこびて 1 おどろおどろしく 1 よろづ 1 こゝろみ 1 ころして 1 くろみ 1 くつろげて 1

「 3 9)

語末―こゝろ 5 ところ 4

語中―よろこび 1 おどろおどろしく 1

語末―こゝろ4 ころ1 もろ1 人こゝろ1

丁オ(「御こゝろ」)、【 袼 】で書かれた「こゝろ」は十八丁オ(「人こゝろ」)、廿一丁オ、廿二丁ウ、廿三丁ウ、廿五丁ウに分散している。 り、「おどろおどろしく」ははじめの「おどろ」は【ろ】で書き、二回目の「おどろ」は【 み 】に変えている 「こゝろ」は【ろ】で5例、【袼】で4例書かれている。【ろ】で書かれた「こゝろ」は九丁才、十七丁ウ、十九丁ウ(2)、廿四 **ら】は語中、語末に使用され、【ろ】と使用位置が変わらない。用例のうち「よろこび」「こゝろ」は【ろ】でも書かれる語であ**

以上、弓張月にのみ確認できた仮名字体は、 頻出語に稀少字体を使用して表記の変化をつけたり、 近接する同じ語の字体を変える

変字法のために使用したと考えられるものが多い。

八一三 八犬伝

最後に、八犬伝のみに確認できた【 袮 】と【は】の用例をここに記す。

まず 〈 ネ 〉 の【科】の用例を、【ね】【ひ】の用例とともに示す。【科】は、 【ね】に比して漢字に近い字体である。

【ね】助動詞―ね2

✔ 】助動詞―ね2

語中―かねて1 測かねて1 回答かねて1 死ねや1

特定の字体を使用したものと考えられる。 じ助動詞ズ已然形の「ね」でも、「候はねば」「候はねども」の場合は【ひ】のみが使用される。【补】と【ね】は特定の文字列に、 孙 は【ね】とともに、「あらね」(4例)、「憑しからね」「進らしね」「認めね」に助動詞ズ已然形の「ね」に使用される。
まる

(1) の【は】は現行仮名字体に近い字体である。用例は次の通り。

廿三丁才(12) 件の事【ハ】【は】じめより。

用されることがないが、 名字体が使用される。【は】は、手習いの初学に用いられる「いろは仮名」で習われる仮名字体三であり、 文章中に「はじめ」 助詞 ハの 直後に語頭の の語は4例あり、 月氷竒縁に使用がみられた【�~】に比してごく一般的な仮名字体だと考えられる。 ヘ ハ 〉 の字体が続いているのは右の例のみであり、 娯楽小説類の 語の切れ目をはっきり示した例かと考えられる。 ヘ ハ 〉 には【ハ】【も】、 娯楽小説類には滅多に使 時に【き】の仮 なお、

同

記 八犬伝の とは いえない。 みに確認できた字体は以 Ĺ の 通 り、 少 んない。 月 氷竒縁や弓張月と比べると、 仮 以名字体 : の 種 類も多く少なく、 変化に富んだ

七 まとめ

されていた。 用例を確認した。 以上、 琴読 本 これらは、 の月氷竒縁、 主として使用される字体に対し、 弓張月、 八犬伝を資料として、 使用数が少ないものがほとんどであり、 このうち二本にのみ共通する字体、 本のみにみられた字体の 個別 性が窺われる表記に使 類 用

の特定の位置に使用される字体とみられるもの(【ほ】【み】)もあったが、 |本の資料に共通する【し】【 作】【 川 】【 每 】 は、 草双紙等の調査 で既に指摘されている使用 僅かだった。 傾向が 読本にも行わ れ てい た。 語

理に基づくものか だった。 末の処理は、 かと考えられる。弓張月には【し】や【す】により、匡郭までのやや狭いスペースに語を収めたとみられる例もあった。 在感があると考えられる。 本稿で用例を確認してきた仮名字体は、 氷竒縁には語が行頭と行末に分れた際に、 一方、 行末までに適切な文の切れ目で収める書き手の技術だったと考えられる。 字体の大きさを利用して、 追究しがたい 弓張月に行末を埋める用途とみられる用例があり、 その使用傾向も、 画数が多く複雑な字体が多く、こうした字体は、文章中にまれに使用されるだけで 行末と行頭で語が分かれないようにスペースを埋めたと考えられる場合もあった。【 近接する同じ語、 通常は使用しない仮名字体を使用している例があり、 頻出する語、 八犬伝の【 乃 】が行末に使用が偏るのも同様の使用傾向 対句の同じ語の字体を変えるためとみられる用例が大勢 ただし、 行末に使用される仮名字体のうちで この場合がどのような表記原 こうした行 存

L 選択が意識されていることが窺えた。 総 表記の 合的にみて、 選 択 (例えば、 読本の 仮名字体の使用 変化をつける用字) 多くの に関しては、 が、 目に触れる出版物としての 仮名字体の使用に混ざり合っていたと考えられる。 近世前期の仮名草子三の本行ほどではないが、 表記の分かりやすさ (例えば、 装 飾性の強さや、 行末の処理) 行末では字体 読本に 相応

- と諸研究での刊行年に食い違いはないようである。 化二年の刊行と判断する。 査資料として用いた版の奥付では文化二年と記されと、刊行年に揺れがある。 の『近世物之本江戸作者部類』(徳田武校注、 7氷竒縁. は 日本古典籍総合目録データベース(著作 ID:169857、二〇一九年一二月一日参照)では享和三年版があるとされ、 なお、 成立年は刊記と諸研究において享和三年で一致している。『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』は刊記 岩波書店、二〇一四年)p. 212 では「印行の年」が文化元年となっており、 本稿では調査資料の刊記と収録書の解題に基づき、文
- 市地 において、『椿説弓張月』と『行平鍋須磨酒宴』 の字母の比較を行 V, 読本に字母の種類数が多いことが分かって
- で【 4 】はほぼ付属語専用であり、八犬伝では自立語は【 4 】でのみ書かれるものの使用数は拮抗していた。 氷竒縁では自立語・付属語(助詞ニを中心とする)ともに主に【ふ】が用いられるが、弓張月では【ふ】は自立語に使用される一方 44(約七七・七一%/約二二・九八%)、【ょ】 30【 44】 226(約五七・一一%/約四二・八八%)とそれぞれ使用割合が異なり、月〈二〉の【ょ】【44】の使用数をみると、月氷竒縁【ょ】 39【44】 27(約一二・四六%/約八七・五三%)、弓張月【44】 31【44】
- でき、 ○)、赤本(久保田一九九四)、合巻『金毘羅船利生纜』(内田二○○○)、また、 【し】【 作 】 【 的 】 【 ぬ 】 は、 『 金銀先生再寝夢』 (内田一九九八a)、 『大悲千禄本』 (久保田二○○二))、一九の黄表紙 滑稽本『浮世風呂』(久保田一九九七)に使用が確認 九
- Ŧi. 恋川春町の洒落本『無頼通説法』、黄表紙『金銀先生再寝夢』(内田一九九八a)『無益委記』(久保田一九九六)では【セ】が使用 の上で優勢である。そのほか、 (矢野一九九○)に使用されることがある。 洒落本『傾城買二筋道』(久保田二〇〇九)、滑稽本『浮世風呂』(久保田一九九七)、一九の黄表紙
- 一九の黄表紙(矢野一九九〇)では自立語語中尾および付属語、 かつ行末の箇所、『浮世風呂』 『金銀先生再寝夢』、洒落本『無頼通説法』(内田一九九八a)にて非語頭、 (久保田一九九七)では語中尾の使用が指摘されている。 黄表紙『大悲千禄本』(久保田二〇〇二) では自立語 洒落本『傾城買二筋道』(久保田二〇〇九) の語末、 におい
- 久保田 (一九九七) pp82-83 において、 行末に書き入れる余地の少ない箇所に書けることが指摘されてい
- 八 洒落本『無頼通説法』、 促音に使用される割合が高いことが指摘されている。 黄表紙『金銀先生再寝夢』(内田一九九八a)で非語頭、 人情本『春色梅兒譽美』(玉村一九九四)では
- (一九九八a)、久保田(一九九七)(二○○九) にて語頭への使用が指摘されている。
- (一九九八a)、久保田(一九九五b)(一九九六)(一九九七)(二○○九)、玉村(一九九四)を参照

- 前 田(一九七一)にて『雨月物語』 の平仮名字母の使用割合が示されている。
- 植(一九七九)に定家の写本の用字について「行頭にどっしりして安定感のある華やかな字体が使用される」という指摘がある。
- 浜田 (一九七九) p.9
- 好んで使っていた可能性がある。 『金毘羅船利生纜』自筆稿本(内田二○○○)、『南総里見八犬伝』自筆稿本(大島二○○○)、に使用されていたことから、 馬琴が
- 先行研究においては恋川春町の洒落本『無頼通説法』(内田一九九八a) に詳しい。
- 【 * 】は『可笑記』『因果物語』『東海道名所記』(久保田一九九四)、洒落本『傾城買二筋道』(久保田二〇〇九)において、 仮名草子整版本『因果物語』『東海道名所記』(久保田一九九四・一九九五a)に用例が報告されている。 語
- 「 なお、こうした変化をつける用法は、久保田 (一九九四) において仮名草子に 【 * 】が使用される際にも指摘されている。

に使用されると指摘がある。

- <u>-</u> 『可笑記』『東海道名所記』(久保田一九九四)、人情本『春色梅兒譽美』の短歌(玉村一九九四)に使用例が報告されている。
- 『因果物語』『東海道名所記』に使用されていたことが分かっている。
- らの通史として示され、岡田(二〇一三)に江戸期の往来物のいろは仮名が精査され、 手習い歌として伝わるいろは仮名四十七字体は、ほぼ固定的であることが知られる。このことは、矢田(一九九五b)に鎌倉時代か 明らかにされている。
- 仮名草子の仮名字体については久保田(一九九四)(一九九五a)による。

読:	本三	本本行	における	<u>る平仮名</u>	3 <u>字</u>	体お。	よび使ん	用数総	覧1					
	字体	月氷	弓張月	八犬伝		字体	月氷	弓張月	八犬伝		字体	月氷	弓張月	八犬伝
ア	あ	113	97	90		ē	106	149	128		る	134	21	209
	ら	1	9	0	ス	す	0	9	0		な	21	83	7
イ	い	65	99	95		N	35	15	44	ナ	な	0	101	0
71	M	21	2	4		ほ	2	0	0		5	0	2	0
ウ	う	25	50	27		せ	28	62	92		ળ	3	0	0
エ	え	5	26	6	セ	セ	0	4	0		J	39	315	301
	お	17	47	32		B	1	0	0		1,	274	94	226
オ	か	32	0	0	ソ	そ	56	151	64	Į	に	16	1	0
	た	1	0	0		6	48	133	117		P	0	61	0
	う	155	297	245	タ	た	46	1	6		3	1	1	0
カ	か	21	35	38		7	18	0	0		Ā	3	0	0
	õ	1	11	0	チ	ち	49	35	24	ヌ	ぬ	13	10	25
4	き	8	75	18		つ	20	77	35		a	1	1	6
キ	名	51	25	108		ツ	19	3	29	ネ	ね	7	6	2
<i>h</i>	<	68	144	87	ツ	(1)	3	6	0		荪	0	0	5
ク	4	9	11	4		た	9	7	0		の	287	505	362
	な	13	52	28		は	0	1	0	,	乃	1	0	11
ケ	け	29	20	63		て	115	60	88		H	54	14	4
	尧	0	6	0	テ	٤	177	350	288		み	1	0	0
	2	116	153	72		喜	5	0	0		て	36	35	28
コ	な	17	2	23		と	157	300	318		n	167	347	357
サ	さ	28	89	104	۲	と	79	55	23	ハ	2	16	13	8
プ	は	1	0	0		a grant	7	1	0		亳	1	0	0
	}	236	344	298							は	0	0	1
シ	点	45	50	30						7.	ひ	32	131	78
	し	0	34	55						上	む	25	5	3

読	本三	本本行	におけ	る平仮	名字	体お	よび使	用数総	覧2
	字体	月氷	弓張月	八犬伝		字体	月氷	弓張月	八犬伝
フ	ふ	60	103	77	ラ	ら	7	15	15
	ぬ	4	3	1		5	109	131	145
_	<	72	180	69	IJ	り	163	312	302
,	Ø	13	0	0		P	30	19	5
	そ	3	6	8		る	38	58	58
ホ	N	16	32	12		6	71	168	161
	ほ	0	5	4	27	ΝÝ	2	2	0
	ま	30	2	6	ル	豹	14	1	2
	ま	8	74	59		15	0	2	12
マ	め	1	0	1		な	0	0	3
	ほ	11	4	1	,	れ	61	149	115
,	اکرا	26	51	40		治	77	48	109
111	み	2	0	4	1	ろ	44	23	19
ム	な	19	21	21	口	눵	0	9	0
-7	め	9	24	30	ワ	5	25	37	36
メ	免	20	1	1	中	ゐ	3	20	3
	8	55	71	72	ヱ	ð.	4	0	3
モ	も	52	186	151	7	を	331	340	255
	نهر	3	3	3	ヲ	找	4	7	90
J	や	7	22	36	ン	ん	27	71	63
ヤ	\$	18	34	22					
1	ゆ	1	3	7					
ユ	4	11	4	4					
3	よ	50	89	81					

はじめに

ることを明らかにしてきた。 調査し、 ことを指摘した。 稿者は、これまで馬琴読本『月氷竒縁』『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』の本行における仮名字体の種類、 草双紙類に比べ、 読本のほうが本行にさまざまな字体を用いて変化に富んだ表記にする等、 振り仮名については、『椿説弓張月』の本文と振り仮名の字母の比較を行い、 装飾的傾向が強く、 振り仮名の字母は少ない 使用傾向などについて 個性的であ

の通りである。 巻之一(文化一一 本稿では、『月氷竒縁』巻之一(文化二年、 年、 山崎平八板) の三本における振り仮名に仮名字体がどのように使われているか検討する。 文金堂板)、『椿説弓張月』前篇巻之一(文化四年、 平林堂板)、『南総里見八犬伝』 主たる検討事項は次 肇

- 種類数
- 使用数と使用数の傾向
- 使用傾向
- 振り仮名と本行との比較

なお、本稿で主として検討する仮名字体は、 複数種の仮名字体が使用されている仮名のうち、 調査資料三本に共通する〈ケ〉〈シ〉

〈ス〉〈タ〉〈ネ〉〈ハ〉〈リ〉である。

それらの使用傾向や本行との比較には及んでいない。 があり、音韻による使い分けがなされているとの報告がある。しかし、読本の振り仮名の調査は使用字母の検討のみに留まっており ている仮名の方がより単純な形になっている」(p.103)と述べられている。 読本の振り仮名における調査は、 既に前田富祺(一九七二)があり、 前期読本の『雨月物語』を資料として「振り仮名として使われ また浄瑠璃本の振り仮名の調査に佐藤麻衣子(二〇〇九)

ため、 名字体の表記の 般に 単 純 · 馬 琴読 な 形 あ \mathcal{O} 本 りようを考えてみたい 平易な字体が は 総 ル ビ状 態に 用 V) あ ŋ, られると予 漢字 \mathcal{O} 読みを示すため 測される。 これを踏まえ、 に、 本行と本行 本行に対してどのように平易化されるの の間 \mathcal{O} 狭 V スペ] ・スに、 細 カコ 11 文字で書 か、 振 カコ ŋ れ 仮名の る。 そ 仮

調査資料三本 . (T) 各調査 範囲は次の通り。

『無月氷竒縁』 巻之一 (廿六丁) 本文

椿説弓張月前篇』巻之一(三十一丁)本文

『南総里見八犬伝肇輯』巻之一(三十丁)本文

稿ではこのうち右振り仮名のみを扱い、 題目、 割書き、 左 振 ŋ 仮 名 は 省 $\vec{\zeta}_{\circ}$ 漢 文訓 読 は 右振 り仮名に含め

種 類 種 類 数

.種類

以上あ

る仮名

23

21

21

36

33

31

合

計

73

72

71

106

102

92

表1によ まずは、 れ 資料ごとの字体の ば、 振 ŋ 仮 名の字体の 種類数と、 種類 それらの具体的な字体をみていく。 数 は、 / 氷竒 縁 73 弓張月72、 八犬伝

月

71

のように七〇台前半で

種類も少ない。 振り仮名の字体の 数が月氷竒縁 106 種類の幅は 弓張月 102、 本行よりも狭いことが分かる。 八犬伝92に対であるのに比べるとその約七割で、二〇~三〇

るのに対 体し 複数の字体が使用 カコ į 用いない仮名は、 振り仮 される仮名の数をみると、 名は二一~二三しか 本行が約三割なの ない。 に対して、 いろは四ー 本文には二種 振り 七 に 仮名ではその二倍の ん 類以上の字体が

を

足した四

 \mathcal{O}

仮

に お

て、

 \mathcal{O}

約六割程度もみられるの

使 用 八

され

る仮 名

名が三〇以

Ŀ 種

は 類

あ

表1 ひとつの仮名に対しあてられる字体の種類数の分類

種 種

類 類 類

25 21 2

27

27 19 2

12 21

15

17 22

18

19

兀 五.

種 種

類 類

0

0

り、

本行での

種類

0

0

1

3

1

種

3 0 0

9 5

9 2

6 2

体 的 な字体 は 次 のとおりである。

〇三本に 共通 L 7 見ら れる仮名字体

月氷竒縁 振り仮名

月氷竒縁

字体

34

椿説弓張月

南総里見八犬伝

椿説弓張月 振り仮名

南総里見八犬伝 振り仮名

本行

本行

あ 字

る。

0

0)

仮

名に

種

類を基本として、

種

類を限定している。

【あ】【い】【う】【え】【お】【う】【き】【こ】【さ】【せ】【そ】【ち】【つ】【て】【る】【ぬ】【の】【ひ】【ふ】【へ】【を】【ま】【 E 】

二字体 (14)

【も】【ハ】 【や】【ゆ】【ゆ】【ゆ】【ら】【り】【ぎ】 【る】【る】【も】【ホ】 【ね】【d】【く】【ハ】 【け】【ゟ】 【し】【糸】 【も】【す】 【ら】【た】 【と】【と】【よ】【ホ】 【ね】【d】

○月氷竒縁と弓張月の二本に共通

[t] [b] =

○月氷竒縁と八犬伝の二本に共通

【し】【ま】【み】

○弓張月と八犬伝の二本に共通

○月氷竒縁のみ

【3」【サ】【5】【ほ】

○弓張月のみ

[を][も]

〇八犬伝のみ

(か) (も)

らいで、画数が少なく単純な形の字体が主として用いられている。本行には用いられない、振り仮名のみに使用される字体はない三 ことから、これらが馬琴読本における基本的な字体であるといえる。 使用される。本文には使用される画数の多い字体、例えば【 お 】【 ゃ 】等はなく、また、漢字に近い字体の使用は【 ゅ 】【 ホ 】 ぐ 三本に共通する字体は、振り仮名において四八すべての仮名に認められ、しかも、これらすべての字体は読本の本行にも共通して

二本に共通する字体【 宛 】 【 っ 】 【 ま 】、一本にしかみられなかった字体 【 か 】は、本行には三本に共通して用いられる。このう

5 いため、【か】【た】は振り仮名に必ず使う字体ではなかったと推測される。 があるといわれ、 【か】や【を】は、 本行にもそうした使用傾向がみられた四。 汎用の【う】【き】に対し【か】が語頭、【 を 】が語中末に使用され、 振り仮名は漢字に付され、 語の切れ目を字体によって区別する必要が 自立語の位置・切 れ目を示す書記機 な 能

草双紙の本文には滅多に使用されない。 れていた。他で注目されるのは、二本共通の〈ホ〉の【ほ】【は】である。月氷竒縁や弓張月では本行にも振り仮名にもみられるが 本行と大きく異なる字体は【す】である。 振り仮名には三本とも【す】が使用されているのに対し、 本行では弓張月のみに使用さ

さは、 形の字体が使われ、 の字体が使用されているように、 以上のように、 単に草双紙と同等の仮名字体が使用されるというのではなく、本行に【ほ】【 ほ 】 振り仮名は本行に比べて仮名字体の種類が少なく、一種類のみ字体があてられる仮名が半数以上にも及ぶ。 種類の上で整理がなされていたといえる。字体の選択には本行とは別個の性格が窺える一方で、 読本本行を中心とした字体の選択と整理であったと考えられる。 が使用されている読本には振り仮名にもそ 振り仮名の簡易 単純な

一 使用数と使用数の傾向

ここでは、 〈ケ〉〈シ〉〈ス〉〈タ〉〈ネ〉〈ハ〉〈リ〉 字母違いの字体を複数持ち、 の七つである。表2に、 かつ三本の読本に共通していた字体の使用数と、その傾向を概観していく。 資料別及び振り仮名と本行別に、 それらの字体ごとの使用数と割 該当する仮名

合を示した。

名・字体がどの分類にあたるのか、 ある仮名、 使用数の傾向で仮名字体を分類すると、 ③一本に独自の使用傾向を持つ仮名の三分類にできる。その分類に該当する仮名・字体を次に示す。また、本行の同じ仮 後に示した。 ①使用数の多い字体・少数の字体で分かれる仮名、 ②資料によって使用割合にばらつきの

振り仮名

①使用数の多い字体・少数の字体で分かれる仮名(波線を引いた字体が少数の字体)

〈ケ〉【け】【ゟ】 〈シ〉【し】【ゑ】 〈タ〉【6】【た】 〈リ〉【り】【寉】

表 2	2 〈ケ	〉〈シ〉	〈ス〉	〈タ〉	〈ネ〉〈	(n) (I	J)	使用数と	:割合				
ケ	月氷竒縁 振り仮名	弓張月 振り仮名	八犬伝 振り仮名	月氷竒縁 本行	弓張月 本行	八犬伝 本行	ネ	月氷竒縁 振り仮名	弓張月 振り仮名	八犬伝 振り仮名	月氷竒縁 本行	弓張月 本行	八犬伝 本行
け	80 74, 07%	104 79, 38%	150 96, 15%	29 69, 04%	20 25, 64%	63 69, 23%	ね	27 54%	25 51, 02%	22 18, 64%	7 87. 5%	6 85, 71%	2 15. 38%
な	28 25. 92%	27 20. 61%	6 3.84%	13 30. 95%	52 66, 66%	28 30. 76%	Œ	23 46%	24 48. 97%	97 82. 2%	1 12. 5%	1 14. 28%	6 46. 15%
希	0	0	0	0	6 7. 69%	0	荪	0	0	0	0	0	5 38, 46%
シ	月氷竒縁 振り仮名	弓張月 振り仮名	八犬伝 振り仮名	月氷竒縁 本行	弓張月 本行	八犬伝 本行	/\	月氷竒縁 振り仮名	弓張月 振り仮名	八犬伝 振り仮名	月氷竒縁 本行	弓張月 本行	八犬伝 本行
1	276 65. 4%	271 65, 45%	350 60. 76%	238 84. 09%	344 80. 34%	298 77. 8%	え	81 37. 85%	103 54. 21%	190 60. 5%	36 16. 36%	35 8. 86%	28 7. 1%
杰	145 34. 36%	135 32, 6%	192 33, 33%	45 15. 9%	50 11. 68%	30 7. 83%	n	133 62. 14%	87 45, 78%	124 39. 49%	167 75. 9%	347 87. 84%	357 90. 6%
し	0	8 1. 93%	34 5, 9%	0	34 7. 94%	55 14, 36%	2	0	0	0	16 7, 27%	13 3. 29%	8 2. 03%
ス	月氷竒縁 振り仮名	弓張月 振り仮名	八犬伝 振り仮名	月氷竒縁 本行	弓張月 本行	八犬伝 本行	垒	0	0	0	1 0. 45%	0	0
ē	98 79. 67%	18 13. 43%	132 99. 24%	106 74. 12%	149 86. 12%	128 74. 41%	は	0	0	0	0	0	1 0. 25%
す	25 20. 32%	116 86. 56%	1 0. 75%	0	9 5. 2%	0	IJ	月氷竒縁 振り仮名	弓張月 振り仮名	八犬伝 振り仮名	月氷竒縁 本行	弓張月 本行	八犬伝 本行
N	0	0	0	35 22. 37%	15 8. 67%	44 25. 58%	り	158 94. 04%	133 93.66%	245 96. 07%	163 84. 45%	312 94. 25%	302 98. 37%
ほ	0	0	0	2 1. 39%	0	0	£	10 5, 95%	9 6. 33%	10 3. 92%	30 15, 54%	19 5. 74%	5 1. 62%
タ	月氷竒縁 振り仮名	弓張月 振り仮名	八犬伝 振り仮名	月氷竒縁 本行	弓張月 本行	八犬伝 本行							

②資料によって使用割合にばらつきのある仮名

〈ス〉【を】【す】

③一本に独自の使用傾向を持つ仮名

〈ネ〉【ね】【 ひ 】

本行

①使用数の多い字体・少数の字体で分かれるもの(波線を引いた

字体が少数の字体)

②資料によって使用割合にばらつきのある仮名

〈シ〉【~】【な】

なし

③一本に独自の使用傾向を持つ仮名

〈ケ〉【け】【ゟ】 〈ス〉 【 を 】 【 す 】 〈 夕 〉 【 6 】 【 た 】

0 〈ネ〉 【ね】 【 ひ 】

42. 85% 46 41. 07% 99. 25% 1 0. 74% 18 16. 07% 0 |使用数の傾向が必ずしも同じとはいえない。 自の使用傾向を持つ〈ネ〉だけであり、振り仮名と本行とでは の多い字体・少数の字体で分かれる〈シ〉〈リ〉と、一本のみ独 振り仮名と本行とで使用数の傾向が共通しているのは使用数

|が少数の字体であり、振り仮名では約三三~三五%、本行には約 |する。振り仮名と本文とで共通の使用傾向だった〈シ〉は【ゑ 】 まずは、使用数の多い字体・少数の字体で分かれる仮名を検討 一六%の割合で使用される。また、〈リ〉は【 శ 】が少数の

257

90. 49% 27

0

た

党

398

99.00%

0

562

99. 11% 5

0.88%

48

133

0

117

95. 12% 6 4. 87%

資料による使用割合の幅が狭く、 字体であり、 振 り仮名に約四~六%、 ほぼ一定しているといえる。 本行に約二~一六%の割合で使用される。 【 ゑ 】 【 衤 】 ともに本行に比して振り仮名の 方が

だったりと、 ○%の使用がみられる。 に対して、 次に〈ケ〉〈タ〉の仮名字体について述べる。 八犬伝は約四%と非常に少ない。〈タ〉は【た】が少数の字体で、弓張月・八犬伝の使用割合が約 少数字体という全体的な傾向は共通していても、 〈ケ〉の【 ゟ 】は弓張月本行の使用割合が偏っていたり、〈タ〉 〈ケ〉は【ク】が少数の字体であるが、月氷竒縁 本行には個別の違いが現れる。 は字体の使用割合が月氷竒縁本行のみ特異 が約 二六%、 弓張月が約二一 <u>~</u> % 月氷竒縁に約 % な

は僅か 使用割合である。それとは正反対に、 作品によって、 1例であり、ほとんど【 も 】で書かれている。 振り仮名に使用割合の違いがみられるのは〈ス〉である。月氷竒縁には【も】が主に使用され、【す】は約 弓張月では【す】が優勢であり、【を】は約 共通の傾向はみえない。 13%の割合と少数の字体である。 八犬伝で【す】 20 % Ø

〈ハ〉も使用傾向にばらつきのあり、 月氷竒縁では【ハ】が多く、弓張月・八犬伝では【え】がやや多めと、 微妙な違 がある。

名では、 仮名ともに八犬伝のみ独自性が窺える。 本のみ使用傾向が異なる 〈ネ〉 は月氷竒縁・弓張月の振り仮名では【ね】【ひ】の使用割合がほぼ同等であり、 八犬伝本文では【ね】【ひ】のほかに漢字に近い字体の 【科】もみられ、 八犬伝の 本行・ 振り 振 仮

り仮名は、 本行は、 月氷竒縁の〈タ〉、弓張月の 〈ス〉の ほかは、 概ね使用数の傾向に共通する部分がある。 〈ケ〉〈ス〉、八犬伝の〈ネ〉のように、 個別に特徴がみられることがある。 それに対して、 振

があることが分かる 振り仮名と本行とで使用傾向が共通している〈シ〉〈リ〉〈ネ〉を含め、 振り仮名と本行の使用数・ 傾 向に少なからず異

四 使用傾向

〈ケ〉〈シ〉〈ス〉〈タ〉〈ネ〉〈ハ〉 (J) の字体の使用傾向の違い に つ ١ ر て述べる。 その違い は、 次の 四つを挙げることができる。

の位置によって使用が偏る字体

〈ネ 〉

②字音語に使用が偏る字体がある

③音韻による使い分け

0

0

0

2

0

2

複合語語頭 (準語頭)

14

0

4

0

5

0

④使用位置や音韻に違い がみえない

まず①語の位置によって使用が偏る字体 ヘス〉 〈シ〉〈タ〉 〈 ネ 〉

d[97] 汎用、 【た】が語頭に使用される。

【 太 】は、三本に共通して、【 太 】が語頭専用、【 し 】は汎用である 当。

タ〉

は

5

が

について述べ

振り仮名の〈ネ〉

ね[27]

0 [23]

ね[25]

0 [24]

ね[22]

語頭

11

0

17

0

15

0

「さね」の 令令 0) の〈ネ〉は【ひ】であり、「招き」等、語幹にあたる箇所の〈ネ〉は【ひ】が使用な【ね】【ひ】は表3の通り、【ね】が汎用、【ひ】が語中末という使い分けである。 は【ひ】が使用される。 例えば 「一大」 「一大」 「一年」

える。

表 3

月氷竒縁

弓張月

八犬伝

の 0

下部要素頭「ねん」

0)

〈ネ〉には【ね】を必ず使用する。

このように、

語の構成が意識された表記とい

②字音語に使用が偏る字体がある〈ケ〉 の【け】は、「属」「成頼」「養狎ん」(月氷竒縁)、 (J) に関して、 「身の丈」「幼・いとけな み たけ いとけな つけ 表4・表5にそれぞれの字音語をまとめた。 (弓張月)、「避て」

用いられている方。 和語・字音語の区別なく使われるのに対して、【ゟ】は弓張月に 表4によれば、【 々 】は「ケン」「ゲン」「ケツ」「ゲツ」「ゲキ」「ケイ」「ケ」といった字音語素にほぼ限られて 月に「今日」「嘲弄」き」「即まゐらせ」(0) 和語に用いられる以外は、 「持氏卿」 字音語に 援け

(リ)の (り) 和 語 • 字音語、 は、 「林木」 使用位置に関わりなく用いられる。 「政党」 「執」(月氷竒縁)、 「推量」「頼長公」「折しも」(弓張月)、「潰」「頻にして」だけばかり、よりながこう。 とり それに対して、 |「憲実」 (八犬伝

いると分かる。

表 4 〈ケ〉字音語

		/ / / 1				
	字体	字 用 預 額 の	占める割合	用例	用例数	字 体の対する 割合る体
月氷奇	な	[28/28]	100%	ケン ゲン ケツ ゲツ	15 11 1 1	59.57%
縁 字音語	け	[19/80]	23.75%	ケイ ゲ ケン ケツ ゲツ	5 7 4 1 1	40.42%
弓張月	な	[25/27]	92.59%	ケン ゲン ケツ ゲサ ゲキ ケイ	11 5 4 2 2	53.19%
字音語	け	[22/104]	21.15%	ケイ ゲイ ゲ ケツ ケウ	14 2 1 1 1 1	46.80%
	な	[6/6]	100%	ゲン ケン ケ	3 2 1	12.76%
八犬伝 字音語	け	[41/150]	27.33%	ケン ゲン ケイ ゲキ ケイキ ケウ ゲウ ゲウ	8 8 7 4 4 3 2 2 1 2	87.23%

表:	5	〈リ〉字 ⁻	音語			
	字体	字 音 例 数 の	占める割合 字音語を	用例	用例数	字 体の割する 合 の も る
月氷奇縁	Paul	[10/10]	100%	リヤウ リウ リヨ リヤク リヨク リン	5 1 1 1 1 1	27.77%
字音語	b	[26/158]	16.45%	リヤウ リン リヨウ リヨ リキ	13 7 3 1 1	72.22%
弓張月	Japol	[9/9]	100%	リヤウ リウ リョ リン	4 3 1 1	52.94%
字音語	り	[8/133]	6.01%	リ リヨク リウ リキ リク	3 2 1 1 1	47.05%
八犬	(def)	[10/10]	100%	リヤウ リツ リン	8 1 1	11.76%
入伝 字音語	þ	[75/245]	30.61%	リウ リヤウ リン リコ リヨ リヤク リキ	29 21 11 7 3 2	88.23%

表 6 孔	辰り仮名	$\langle 11 \rangle$	の音	镇			
		ha	ba	pa	wa	ho	bo
月氷竒縁	た[81]	60	21	0	0	0 0 1 1 0 1 0 0 0	
月小可豚	\sim [133]	6	17	0	109	1	0
弓張月	た[103]	81	18	2	0	1	1
り採月	ハ[87]	3	14	0	70	0	0
八犬伝	た[190]	138	50	2	0	0	0
八人伝	い [124]	3	14	0	107	0	0

Г	T	ha	ba	pa	wa	ho	bo
月氷竒縁	た[81]	60	21	0	0	0	0
21716-1/12	~[133]	6	17	0	109) 1	0
弓張月	て[103]	81	18	2	0	1	1
7.0001	か[87]	3	14	0	70	0	0
八犬伝	て[190]	138	50	2	0	0	0
ЛЛИ	ハ[124]	3	14	0	107	7 0	0
表 7 振	長り仮名:	(<u>//</u>) [≖の位	置			
LC / J/L		語頭	語中		吾末	助詞ハ	助詞ノ
 氷竒縁	た[81]	60	21		0	0	0
7 八 印 彦	ハ [133]	0	98		26	9	0
己雅日	た[103]	74	25		4	0	0
弓張月	い [87]	6	72		8	0	1
八犬伝	た[190]	123	43		24	0	0
	ハ[124]	4	97		22	1	0
異なる。/wa/には必ず「云」「禍」「哀れ」などハ行転呼音の語に【ハ】列長音で/ho//bo/と読まれる字音の〈ハ〉は、作品によって使用する字体が列表音でが	表6を参照すると	更ハ分けがみられ ③音韻による使い	語頭に限って【 孑 】を使用したものかと考えられる。 変化を理由とした装飾的な用法であるとする考え方があり!、振り仮名にも	音を中心	伯用語尾までを振り仮名	寄」(月氷竒禄)、「却で」「膽」(弓張月)、「 暋」「猟」(八犬伝)など動詞ょり しんりと、装飾的とみえる用法が行われる。振り仮名には「迫」「はしり」	読本本行では【 2 】を時折動詞の送り仮名に混ぜたり、擬音語に限って使「リミク」 リン」・リッ」と「一〇〇%字音記素の表記に使用されている。

「リヨク」「リン」「リツ」と、一○○%字音語素の表記に使用されているセ。

ところで、 馬琴は、『朝夷巡島記』第二編巻一序文に「【玄 】は上におくの假字。【し 】は下につくの假字。【 て 】【 ハ 】も亦これ 表 が使われる。

に同じ」と表記規則を述べている。

読本の振り仮名の

【 た 】 【 ハ 】 を語の位置で分けると、

ハ行転呼音は主に語中末での音韻変化であるから、「上におく」「下につ

表7のようになる。

(語頭中) に、【ハ】が下(語中末)に使用されているが、

かる通り、「僅」(弓張月・八犬伝)、「童」(弓張月)と【ハ】が語頭に使用される例もあり、 く」ためというより、/wa/と読む〈ハ〉を書くため必然的に語中末に偏ったとみるべきであろう '○。 音韻による使い分けが優先されてい 表7の語頭の数を確認すると分

かれている。 使用差が認められない 犬伝の唯 〈ス〉の【を】【す】 0) 【す】の用例は 「症ずは、 月氷竒縁では であり、 「野鶏 「只管」「已に」、弓張月では など他の語末は【を】で書かれる。 住す む」といった語が両方の字体で 使用法としても、

ることが窺える一。

を認めがたい。各本によって、書き手の使用方針が異なるとみられるこ。

振り仮 名の字体の用字をみてきた。 ヘス〉 以外の変体仮名には、 何らかの使用上の区別があったといえる。

五 振り仮名と本行との比較

今度は、 振り仮名と、 読本の本行とで、 用字にどのような違いがあるのか検討していく。

かれる。 れている。 は、 弓張月は振り仮名にも ?張月は振り仮名にも「嘲弄」に【ゟ】が使用され、「けり」の文字列への定着 ≒の度合が強いといえる。月氷竒縁・八犬伝の本文の助動詞ケリには【け】の使用がある程度みられるが、弓張月にはほとんどのケリが 読本本文では【々】が助動詞ケリ、形容詞已然形ケレなどに使用が偏り、先行研究で指摘されている通りの使用がなさ に【ゟ】が使用され、「けり」の文字列への定着一三の度合が強いといえる。 【ゟ】で書

丁オ) 自立語語頭の字体であり、 らかの語に後接する形で書かれる。 などの語頭のほか、「死」(弓張月・廿九丁ウ)のように、 は本行では語頭【ゑ】、 単独では用いられない。 語中末【し】の使用傾向である。【し】は主に動詞・補助動詞 したがって本文では単独の語として使われることはない。振り仮名では「手段」(月氷竒縁 単音節で一単語となる語に【 し 】が使用される。 【 ゑ 】 はあくまで 「す」の連用形「し」に使わ 何

どに使用される傾向が三本に共通している。これは本行のみにみえた使い分けであり、振り仮名ではルールがはっきりしない (ス) は、 本行には【を】【化】が使われ、【も】は使用数が多い汎用の字体、【化】はそれよりも少なめであり、 打 消しのズな

傾向で使用されている。 たと分かる て助動詞タリや は月氷竒縁の本行・振り仮名に注目する。 **〈**タ〉 を含む語が様々に書かれている。 月氷竒縁の本行は〈タ〉の通用の使用傾向からの逸脱が特徴的であり、一方で振り仮名には通用性を持たせ 本行には【 6 】 48、【 た 】 46 とこの二字体が同等に使用され、【 を 】 18 も交え それに対し、 振り仮名では【 6 】が多く、【た】が少ないという、 よくある

使用される傾向があるが、 (ネ) はそもそも本文に少なく、 振り仮名では語頭に使用される。 打消しの助動詞ズの已然形ネ、 「ねがはくは」が主な用例である。 ね は 助 動 詞 ズの已然形ネに

変わりない。 ハ)の【 を 】【 ハ 】が [ha] [wa] で使い分けられる点、【 を 】 ただし、 本文には助詞ハに【き】 が使用される。 が 「はじめ」など自立語語頭に使用されるといった点は振り 仮名と

る | 回 〈リ〉の【 孑 】をみると、月氷竒縁・弓張月の本行の用例は「はしり」「来り」「破り」(月氷竒縁)、「叱り」「帰り」「止り」(弓張 主に動詞連用形活用語尾である。 八犬伝は自立語だと「きりゝと」「ばらりずん」「残りて」3例にのみ【?】が使われ

では〈タ〉〈ハ〉〈リ〉と字体を多めに使い、さまざまに用いるという装飾的な表記が窺える場合があるが、振り仮名には草双紙など に通用する用字にほぼ限られており、 以上のように、〈ス〉の仮名は本行には字体の使用傾向の上で区別が見受けられ、 原則的には一般性が優先されたと分かる。 振り仮名に対して規則的である。一方で、

六 結論

(1) 振り仮名は、本行に比べ字体の種類が少なく、画数の多い字体、漢字に近い字体はほとんど使用されず、 る。ただし、草双紙のような通俗的な小説と同等な表記というわけではなく、本行における字体を踏まえつつ、振り仮名と言う表 以上、馬琴読本の振り仮名における仮名字体を中心として、検討してきた。各調査項目の結果として、次のことが明らかになっ 記条件に合わせた形での字体の選別・整理が行われたと考えられる。 全体に平易化してい

(2) 本行は、作品によって字体のバリエーションが豊富なことがあり、その場合は使用割合が分散している。 振り仮名と本行の使用数・使用傾向は異なるといえる。 と〈ネ〉のほかは、概ね使用傾向に共通する部分がある。 振り仮名と本行とで使用傾向が共通している〈シ〉〈リ〉〈ネ〉を含め 振り仮名は、〈ス〉

(3)〈ス〉以外の仮名には何らかの使い分けが行われており、 の使用傾向は、 自立語が書かれるときの場合に則している。 それらの用字法は、 概ね平易な平仮名文である草双紙と通じる。

傾向で表記されているものが多い。 (4) 振り仮名と本文の用字を比べると、本行には仮名字体の用字による装飾性と多様性が認められるが、 振り仮名には 通用 \mathcal{O} 使用

のことから、振り仮名は本行の装飾性からは原則的に離れながらも、本行の平仮名の文脈に馴染む表記が行われていたといえる。 字仮名交じり文である読 以上のことから、 振り仮名の字体は本行を踏まえつつ整理・選定がなされ、 本は漢字主体の文章ではあるが、 先述した通り総ルビ状態であり、 通用の使用傾向にほぼ限られ、 読 解上は本行の平仮名との連続性を考慮 平易化されていた。

合性に配慮した結果とみられるものであり、そのことが仮名における字体の選択・用法にも連動していた可能性が考えられる「玉。 されたとみられる。例えば「兵乱」(月氷竒縁・八丁オ)のような漢語と振り仮名の和語による二重イメージを喚起するような表記 仮名字体の問題には直接関わらないが、語の意味を伝達する平易さに重点が置かれている。 読本の本行と振り仮名の文脈的な整

作家・筆耕・彫師の手を経ることで、 なお、画数やくずしの度合いにより区別できる字体、二本に共通した字体、一本のみにみられた字体の用字の検討は残している。 板本の表記の決定に個々の癖がどの程度影響しているのかという問題もある。 いずれも今後の

本稿では、作品名に引いた傍線部の略称で各資料を示す。

課題としたい。

【セ】【ふ】は、月氷竒縁本行には使用されていないが、弓張月本行には使用されている

「市地(二〇一五)にて【か】【 を 】の使用傾向を指摘した。

五. すため、 弓張月と八犬伝に共通する前の字を囲むように書かれる〈シ〉の字体【し】は主に語中末に使用されるが、 本稿では詳述しない。 各本の特徴的な表記に属

久保田篤(一九九八)(二○○九)、矢野準(一九九○)による。近年では坂梨(二○一七)が挙げられる。 【 ゟ 】が助動詞ケリ、 形容詞已然形の活用語尾ケレ、「けふ」、そして字音語に使用されるという指摘は、 内田宗一 (一九九八6)、

七

六

風呂』、合巻『偐紫田舎源氏』の用例をみると、「りゃ」の表記に使用されることが多いと分かる。また、佐藤麻衣子(二〇〇九)にて、 振り仮名の拗音「りゃ」や促音を伴う「りっ」には【 ? 】が使われると指摘されている。 (一九九七)(二○○二)(二○○九)で黄表紙『金銀先生再寝夢』『無益委記』『大悲千禄本』、洒落本『傾城買二筋道』、滑稽本『浮世 【 ぽ 】が「リヤウ」「リウ」といった表記に用いられることについて、内田宗一 (一九九八a) (一九九八c)、久保田篤 (一九九六)

八 久保田篤 (一九九七) (二○○九) では【 ₹ 】は視覚的変化を目的とした装飾的用字が行われているという見方である。

〈ハ〉の【 そ 】【 ハ 】が/ha//wa/の使い分けに用いられていることは近世板本の調査においてほぼ共通している。 した研究に、坂梨隆三(一九七九)が挙げられる。 用字を詳しく検

「上におくの假字」「下につくの假字」の実態がないのかといえば、また一考を要するため、 稿を改めたい。

[□]で囲った字体は、【♪】に対し、語末に使われるという点で共通する。 れるものとみられる 形は異なるが、【◆】と共に二種類の字体で各本に使用

- 用することがあったことは明らかである。 すべて〈ワ〉【?】で表記され、弓張月で【ハ】とされたのは筆耕の表記の可能性もある。しかし、馬琴本人が【ハ】を語頭に使 書館スペンサーコレクション蔵) 板本において必ず作家の表記が反映されているとは限らない。『昔語質屋庫』の稿本(文化七〈一八一一〉 の巻之二までを確認すると、「僅に」を 5 例拾え、すべて【ハ】が使用される。「童」の場合は 年、ニューヨーク公共図
- □ 【 を 】【す】は草双紙によく使用されるが、これまで共通する使用傾向は報告されていない。内田宗一(二○○○)の合巻『金比 なったと報告されている。 羅船利生纜』の板本と稿本での比較調査により、二人の筆耕がそれぞれ清書している箇所で、【も】【す】の使用方針がそれぞれ異
- |三 久保田篤(一九九七)に「【ゟ 】の使用が特定の語・箇所に限られるという減少は、古くから見られるようで(中略) が引き継がれたものと見られる」(p.85)指摘されている。 慣用的表記

読本本行の【 習 】について市地(二〇一五)にて検討している。

インで成り立っている(中略)表記の見かけ上は、 あり、漢字はそれを補佐するもの」(p.47)とあり、 倉田靜佳(二○○四)に読本の振り仮名について、「文章表記上、 漢字が中心で、 振り仮名が担う文脈の主体性が指摘されている。 ふりがなが添えられているが、読解上はふりがなの方がメインで 漢字に対してほぼ総ふりがなになっており、本文はふりがなのラ

はじめに

に隆盛 本である。 の比較にあたり、 近世における読本が、 した江戸を中心とする後期読本とで分けられることは、 調査対象とする後期読本は、 上方を中心として出版された前期読本 化政期・天保年間の曲亭馬琴の読本と、 文学史の常識といえるところであろう。 (寛延~天明 〈一七四八—一七八九〉 弘化年間に出版された松亭金水の読本、 期)と、 本稿で稿本と板本の仮名字体 化政期 (一八〇三—一八三〇) 計

自筆稿本が今に残るのは、 から出版に至るというものだった。 板本の出版工程は、 作家が書いた自筆稿本をもとに、 こうした近世後期における出版文化の醸成を背景とする。 この頃、 戯作の著述で生活が成り立つ、 筆耕が清書し、 校正を幾度か経て板木が彫ら 職業作家が現れ始めた一。 れ 当時 また作家の校正 から著名だっ た戯作者 \mathcal{O} 目を経て

が及んでおり、 るのか、 で書かれた文章の資料で、 ったことが明らかにされている。 分かっている。 作家の自筆稿本と板本の仮名字体を比較した先行研究においてはご、 検討されてきた。 変字法など装飾的 つまり、 また、 作家の表記による仮名字体がどれほど別の字体で書かれるのか、また、 般に流布した板本は、 大島 (三〇〇〇) では曲亭馬琴の 志向による仮名字体の使用は、 筆耕の清書による表記なのである。 書簡や日記といった自筆資料に対し、 読本『南総里見八犬伝』第八輯巻之一(天保三〈一八三三〉 必ずしも筆耕が作家の仮名字体を反映するわけではない 先行研究で扱われた合巻は、 筆耕の表記の個別性がどれほどあ 読本の稿本にみえる表記であ ほぼ平仮名の に調

が

出 カュ して取り上げる研究としては当然のことだが、本行の仮名字体はもとより、どれほど作家の書いた漢字その他表記を反映しているの 確認 版物が溢れた近世 かしながら、 その全体像の中で仮名字体による表記を取り上げることでその性質が明 これまでは平仮名文や、 後期の の表記の 実相を考える、 漢字平仮名混じり文においても平仮名部分のみが取り上げられてい 足掛かりとなると稿者は考える。 らかにできないか。これは、 、 る。 戯作以外にも多様な 仮名字体を中 -心と

仮名字体 .. の 表記 の問題として、 後期読本には、 合巻には使用されない仮名字体がしばしば使用されている点が挙げられる。

性が、 そうした仮名字体を使用 作 家の書いた稿本に基づくのか、 しての表記には、 筆耕の清書の時点によるものか、 本によって異なる装飾的志向が窺えることがある言。 複数本の稿本と板本に基づいて仮名字体の表記傾向を検 板本にみえる仮名字体 \mathcal{O} 表 \mathcal{O} 個 别

一 先行研究

た自筆資料の

仮名字体を調査した研究がある。

する。

利生纜』(六編、 先行研究には、 文政一二〈一八二〇〉年〉 内 田 (一九九八 c) の柳亭種彦『偐紫田舎源氏』(八編、天保四〈一八三三〉 の調査と、 先述した大島 (二〇〇〇) による曲亭馬琴の 年)、 『南総里見八犬伝』 内田 (1000)0) の稿本と板本を含め 曲 亭馬琴 「金毘 羅 船

かれていた【 象 】が板本では【ぬ】に直されている点が挙げられる。 されている。 例亭種彦 『偐紫田舎源氏』 そのほ か、 稿本に比して板本では、 においては、 稿本に比して板本では【 を 】や【 き 】などの仮名字体の種類が より一般的な使用傾向を志向した改変がみられるという。 増加していたことが指 例えば、 種彦の稿本に

使用傾向の されていることが確認されている。 仮名字体の表記について検討されている。 琴 , О 『金毘羅 方針 が異なることが明らかにされた。 船 利生纜」 の調査では、 しかし、 それによると、 八編の巻之一・二の前半部が仙橘、 稿本の仮名字体が、 前半部と後半部ともに九〇%以上は、 板本で別の仮名字体になっている場合には、 巻之三・四の後半部が谷金川と、 稿本から仮名字体をそのまま引き写 筆耕ごとに仮名字体の 担当した筆耕二名

以上 制作にあたって 稿本と板本における仮名字体の研究では、 の仮名字体による表記を、 書記行為の 筆耕が稿本の表記を、 側面から 明らかにしたものである。 清書においてどのように書くのか分析することで、 出 版

0

仮名字体の使用傾 されたことを示す。 大島 (二000) では馬琴の 向 馬琴の自筆という点に主眼を置いて、 は各資料に共通してい 『南総里見八犬伝』第八輯巻之一の稿本と日記・書簡の仮名字体の使用 るが、 読本の稿本には変字法がみられ 読本の稿本を分析対象とし、 たほ か、 その中で板本との 日 記 書簡には 傾向を検討してい 表記の比較を行った研究で ない 仮 名字体 る。 種 基本 類が 使用 的 な

明らかにする余地があると考えられる。 V て検討することを目的とする。 るが、 る。 読 本には 個性が明らかにされたように、 したがって、 本稿では稿本と板本における本行の表記の異同を濁点や漢字の場合も含め、全体像を把握した上で、 草双紙には使用されない仮名字体が使用されることがあり、また板本においてその仮名字体の表記に個 その板本に個別性が作家の自筆稿本の時点からなのか、それとも筆耕が異なるゆえなの 複数本の自筆稿本と、 また、 内田 (一九九八c) (二〇〇〇) や大島 筆耕の異なる板本の表記を比較し、 (二000) では、 読本における仮名字体の 仮名字体のみを取り上げて か 仮名字体の表記につい 内田 別 性 (1000)が 表記傾向を 確認されて

いる。。 び、 として自筆稿本がまとまって残存している。 作家の自筆稿本と板本の両方が残存する後期読本は決して多くはなく、 年) 較調査とすることが可能であり、 Þ, また、 高井蘭山 稿本があったとしても、 (T) 『星月夜顕晦録』(文化六-文政九〈一八〇九-一八二六〉年)といった著名な作品にあっても、 板本が残らないケースもあるエ゚ 調査資料として適切であると考える。 また、 板本の刊記に、筆耕の名前が明記されていることから、 その中で、 山東京伝の 馬琴の後期読本には、 『忠臣水滸伝』(寛政一一-享和元 『南総里見八犬伝』を中心 複数 自筆稿本は散逸して 名の筆耕の 〈一七九九-一八〇 表記を選

三 調査資料と調査範囲

耕は不明だが、後述するように、 こに出現する仮名字体の種類と数量に基づいて表記の検討を行った。 名の作家の自筆と、 とした七(本稿では資料を傍線部の略称で呼ぶ)。 (〈ア〉36例中36例)に書き換えられるなどの違いがあり、 調 査資料は、 第九輯巻之二十 表1に詳細をまとめた通り、 五名の清書のあり方から仮名字体の検討を行うことが可能であると考える。 七 (八犬伝③)、 稿本では〈ア〉の仮名字体の大半に【6】(〈ア〉 また馬琴以外の作家として松亭金水☆の 馬琴の著作四本はそれぞれ異なる筆耕の八、 曲亭馬琴の 稿本から板本へ清書の過程があったことを確認している。 『昔語質屋庫』、 『南総里見八犬伝』第四輯巻之三 (八犬伝①)、 36例中32例)が使用されるが、板本ではすべ 『北條泰時明断録』 異なる制作時期のものとしたか。 調 查範囲 を入れ、 は、 小 計五 説 以上により、 章節分とし、 本 第八輯巻之二 \mathcal{O} 稿本と 明 、て【あ 断 録の 板 筆

表 1 調	画査資料と	調査範囲			
北條泰時明断録ほうでうやすときめいだんろく		南総里見八犬伝		昔語質屋庫	調査資料
巻第 之一 一輯	七巻第二世	巻第 之 輯	巻第 之四 三輯	巻 之 一	調査範囲
二一第 丁丁オ L 2 2	四 丁 オ ケ ー 回 二 回 二 回 二 回 二 回 二 回 二 回 二 回 二 回 二 回	二丁オケー 一	七 丁 オ イ 一 一 一	二六丁ウ 一三丁ウ ・	囲
明 断 録	八犬伝③	八犬伝②	八犬伝①	質 屋 庫	略称
松亭金水		曲亭馬琴	くてい		著者
不明	白馬 台音	分金三	千形仲道	鈴木 武 筍 亭	筆耕
不明	森田甲	横 田 守	作 中 村 喜	九山 郎崎 庄	彫り師
佐河 助内 屋	平丁兵子	平子	八山 崎 平	太河 助内屋	板元
弘化四〈一八四七〉年序稿了年・発行年不明	天保一〇〈一八四〇〉年正月天保九〈一八三九〉年五月	天保三〈一八三三〉年五月天保二〈一八三二〉年一二月	文政三〈一八二〇〉年一一月文政三〈一八二〇〉年六月	文化七〈一八一一〉年一一月文化七〈一八一一〉年七月	稿了年・発行年

みられる。 わっては、 で余白に書かれている文の挿入指示に従った修正が確認できる。これは主として馬琴の校正指示によるものと考えられる。 があった。 表2は調査資料範囲内でみられた異同の性質である。 最初に稿本と板本の表記にどのような異同があるのか確認する。 四 文章内容として、 表記 表記の修正・補正、 稿本と板本の異同箇所について 記の場合、 それが馬琴の指示によるものなのか、 文章の整えには正しい助詞等の訂正や、語句の修正があり、文章構成に関わるものとしては稿本の時 読みやすい表記の工夫、また、本行に書かれていた仮名が振り仮名に換えられること、またその逆も 異同には文字・符号(表記)に関わるものと、 筆耕の清書によって整えられたものなのか、 なお、 虫損等で、 稿本と板本が対照できない箇所は除いている。 文章内容 判断がしにくい。 (推敲) に関わるも 表記に関

(文の挿入指示については扱わない)。 具体的にどのような異同があったの 各資料とも、 か、 表3にまず本行における仮名の部分と、漢字の部分の異同を分類項目ごとに数をまとめ (1) 仮名字体の異同が圧倒的に多い。 本行の漢字の部分の異同をみてみると、 (1)

書記法の別か好みによる たられる)表記の変更 をえ	はに関わるもの ジり師が誤った(と考え 変更	図1	が異体になる、(4)(5)くずし方の程度が変わっている等の異同があるものの、資が異体になる。(4)(5)くずし方の程度が変わっている等の異同は各資料にかなり存するものの、漢字、特に字体・書体に関しかれている一方、質屋庫・明断録の稿本の文章全体のくずしが強いことを示す。では資料差があることからは、仮名字体と漢字の字体・書体で質が異なることが現たいる。これは、八犬伝①②③稿本の漢字がほぼ楷書で書が異体になる、(4)(5)くずし方の程度が変わっている等の異同があるものの、資が異体になる、(4)(5)くずし方の程度が変わっている等の異同があるものの、資
本表記の みやすい 行と振り 記される し と考えら 章の整え	耕や彫り	図 と	夏 ・ 漢 え
2	誤る	省略字体漢字	・と仮名の表記の入れ替わりは、「也」(質屋庫10例、八犬伝①4例、八犬伝②2例、八
表表記推敲	誤	伝③ 1 例)、「	事」(質屋庫6例、八犬伝②2例、八犬伝③1例)、「思」(八犬伝①1例、八犬伝②1例、
割合 15.76% 11.80% 9.70% 17.52% 17.51% の ほ	かに 「 世 質	共」(質屋庫 1例)が図	、八犬伝①4例)がある。これらの漢字はルビがつかず、訓読される場合に使用「1(稿者の手書き)の如き省略字体で固定的に文中に使用されるものである。こ
内の仮名字 異なる字 体になる 642 720 483 911 563 れる。	。 し か 仮	し、この省略字体名主体の文章であ	体漢字と仮名の表記の入れ替わりも、明断録には 1 例しかみられず、やはり資ある黄表紙にも使用頻度が高い「0。仮名と入れ替わりやすい常用の漢字とみら
総数 4073 6102 4981 5200 3215 料	、窺える	D 異 司	、周荃包囲可つマると本つ絵
※数)))))<td>では、仮な</td><td>名字体の異同が</td><td>、調査範囲内の仮名字体の総数に対しどれほどの割合があったのか、表5は各</td>	では、仮な	名字体の異同が	、調査範囲内の仮名字体の総数に対しどれほどの割合があったのか、表5は各

明断録 資料に ても約 断 録 1 は 大幅に調査字数が少ない。 おける仮名字体の対象可能総数と、 10 1 5 18%ほどあり、 オニケ 仮名の約8%以上は同じ字体のまま書き写されているといえる。どのような 部
建
軍 しかし、 井 内 \mathcal{O} 稿本と板本で異なる字体になる仮名の割合は、 異なる字体になる数とその割合を示した。 仮名字体の総数に対しどれほどの割合が あ 馬琴読本に比べ、 0 たの どの資料におい か、 表 5 は 明

場合に、

清書では別の仮名字体で書かれるのか、

次節以降検討していく。

表 5

照可能総

質屋庫 八犬伝① 八犬伝② 八犬伝③

調

表 3	【本行	行】稿本と板本の異同箇所						
本行	仮名部分	ने	質屋庫	八犬伝①	八犬伝②	八犬伝③	明断録	
表	?	(1)仮名字体の異同	642	720	483	911	563	
表	補	(2)濁点を補う	8	12	13	13	1	
表	誤・修	(3)濁点が消えている	3	2	2	3	0	
推	整・誤	(4)言葉自体の変更	1	1	0	5	2	あるは→あらば
推	整	(5)言葉の削除	3	2	0	0	0	ふかくも→深く
推	整・誤	(6)活用を改める	2	0	0	2	0	給へねかし →給ひねかし
表	誤?	(7)濁音の位置が変わる	0	2	0	1	0	
表	修・補	(8)脱字を補う	1	0	0	0	0	
表	易・慣	(9) > を仮名にする	1	0	0	0	0	美濃国とゝもに →美濃国ととも
推	整	(10)仮名を補い助動詞を直す	0	1	0	0	0	おもはれん。 →おもはれけん。
表	易	(11)くを仮名にする(行移り による)	0	1	0	0	0	いよく →いよ ぷよ
表	個	(12)合字を開いたもの	0	0	0	9	0	[こと]→こと ※[こと]は合字を表す
推	整	(13)言葉を補う	0	0	0	4	0	引入れなば →引入られなば
推	整	(14)助詞の誤りの修正	0	0	0	1	0	咱等に→咱等が
表	修	(15)稿本の衍字を消す	0	0	0	1	0	
推	修	(16)仮名遣いの訂正	0	0	0	1	0	あらむ敷 →あらん敷
誤	誤	(17)脱字	0	0	0	0	2	
漢字	:		質屋庫	八犬伝①	八犬伝②	八犬伝③	明断録	
表	慣	(1)漢字が異体になる	46	2	3	33	13	多し→夛しなど
表	修	(2)漢字(全画又は部分)が稿本 より板本で楷書に近い	168	2	0	45	420	
表	慣	(3)漢字(全画又は部分)が稿本 より板本でくずされている	85	3	0	1	12	
推?	誤?修?	(4)漢字を変える(意図不明)	1	7	0	3	3	又⇔亦など
表	個	(5)稿本と板本でくずし字の書法が 異なる	16	0	0	0	8	
推?	修	(6)二字熟語の漢字を入れ換える	0	1	0	1	0	知聞て →聞知て
推?	整	(7)一文字の漢語を二字熟語にする	0	0	0	1	1	衣→衣装
推	整	(8)漢字を変える(語自体)	0	0	0	1	1	牆○→庇間
表	修	(9)漢字の略体を正体に直す	0	0	2	0	0	般→盤 延→蜑
表	易	(10)々を漢字にする(改行による)	0	0	1	0	0	処々→処処
表	修	(11)誤字を直したもの	0	0	0	0	1	

表 4	【漢字/文字の種類・表記の入れ替わ	り】稿	本と板を	本の異同]箇所		
漢字	と仮名での表記の変更	質屋庫	八犬伝①	八犬伝②	八犬伝③	明断録	例
慣?	(1)【稿】省略字体漢字→【板】仮名	9	4	3	1	0	也→なり
慣?	(2)【稿】振り仮名つきの草書体字体漢字→ 【板】仮名	8	0	0	0	1	事→[こと]
慣?	(3)【稿】楷書漢字→【板】仮名	0	0	0	2	0	以→もて
慣?	(4)【稿】仮名→【板】省略字体漢字	10	7	2	1	1	なり→也
慣?	(5)【稿】仮名 →【板】振り仮名つきの草書・楷書体漢字	4	0	0	1	2	これ→是 ふかく→深く
慣?	(6)【稿】振り仮名つきの楷書漢字 →【板】仮名	3	2	0	0	1	上→うへ 世業→世わたり

表 6 稿	本と	: 板:	 本の仮	 名字体 0	の種類	質数・	一致	薬ほ	きか							
		総種類数	名字体の数で一致する仮	致する割合 一	仮名字体の数一致しない					される() される()						
質屋庫	稿	83	72	77. 41%	11	ゔ	衤	Œ	H	版	奄	ほ	匆	t	ゆ	怂
貝圧圧	板	81	12	11.41/0	10	な	な	\mathfrak{B}	좌	乃	N	ま	豹	ゅ		
八犬伝①	稿	95	91	93. 81%	4	艺	4	乞	絜							
N N IA U	板	93	91	93.01%	2	ふ	ž									
八犬伝②	稿	83	79	89. 77%	3	み	ま	\$								
NAME	板	84	19	09.11/0	5	な	に	袮	む	拢						
八犬伝③	稿	79	70	97 F00/	8	は	N	ま	ほ	t	\$	ゆ	15			
八人伍〇	板	73	10	87. 50%	2	す	(1)									
BELIAC VA	稿	79		05.55%	7	ら	な	ふ	乃	lá	t	恁				
明断録	板	73	71	87. 75%	2	かっ	(1)									
表 9 に	分かる。	争が	` `	が少なく	次に稿	体の合巻	③ • 明断	本の	体 の	本 オ	て 2 看米	2 大重	き、各資	ع :	6	さて、

表6は稿本と板本の仮名字体の総種類数、 各資料の本行に使用される仮名字体の種類・ 稿本・ 板本間で一致する仮名字体の 使用数について述べる。

まとめた表である。

犬伝③・明断録の板本の73

22種類の差がある。

また、

曲亭馬琴の八犬伝という同じ作品においても、

輯巻が異

バラつきがあることが窺える。

種類と、仮名字体の使用種類が多い資料と少ない資料

稿本の時点で仮名字体の種類が異なり、

各資料の仮名字体の 総種 類 数は、 八犬伝①稿本が 95 種 類と最も多く、 少 な 1 ŧ \mathcal{O} は

体の総 本の総種類数が多い の合巻と同程度である。 本 明 0 断録は、 仮 種類数と、 名字体の総種類数が参考になる。 遅い 表8の 時期 か少ないかは、 の読本であり、 浜田 (一九七九) 表7の馬琴の黄表紙・合巻・読本・ 比較的仮名字体の において調査が及んでいる黄表紙・合巻・ 仮名字体の総種類数が 種類数が少なく、 70 種類台の八犬伝 随筆の仮名 平仮名主

少なくなっている。これは、『偐紫田舎源氏』の場合とは異にする傾向である。 八犬伝②のみで、 次に稿本と板本の仮名字体の種類数を比較したい。 筆耕が清書において一方的に仮名字体の種類を減らしているわけではないことが 表6の稿本にのみ使用される仮名字体と、 質屋庫・八犬伝①・八犬伝③・

明断録は

僅かに仮名字体の

種

類 る

板本に仮名字体が増えてい

表 9 仮名字体の 覧と各資料における使用数・ 行頭における使用数を示した。 稿

類

 \mathcal{O}

仮名字体を使用してい

る。

稿本に使用される仮名字体の

種

類を反映

しな

いのと同時に、

板本では新たに

板本にのみ使用される仮名字体をみる

表 7 馬琴板	本の仮名字体の種類	数	
ジャンル	刊年	作品名	字体数
黄表紙	寛政5〈1794〉年	花団子食家物語	79
	享和4〈1804〉年	枩株木三階奇談	96
	文化2〈1805〉年	猫奴牝忠義合奏	90
合巻	文化9〈1813〉年	行平鍋須磨酒宴	73
	文政5〈1823〉年	照子池浮名写絵	75
読本	文化2〈1805〉年	月氷竒縁	106
	文化4〈1807〉年	椿説弓張月 前篇	103
	文化11〈1814〉年	南総里見八犬伝 肇輯	92
随筆	文化8〈1812〉年	燕石雑志	92
	文政元〈1818〉年	玄同放言	93

※調査範囲はいずれも巻之一全体である。

ジャンル	作家	刊年	作品名	字体数
黄表紙	恋川春町	安永4〈1776〉年	金々先生栄花夢	81
	朋誠堂喜三二	天明3〈1784〉年	誤歟大和功	68
	山東京伝	天明4〈1785〉年	廓中丁字	66
	恋川好町	天明6〈1787〉年	鳩八幡豆兼徳利	62
	唐来三和	寛政元〈1789〉年	天下一面鏡梅鉢	67
	十返舎一九	寛政10〈1799〉年	尻攑御要慎	61
	曲亭馬琴	享和2〈1802〉年	六冊掛徳用草紙	72
合巻	柳亭種彦	文化12〈1816〉年	正本製初編	68
	曲亭馬琴	文化14〈1818〉年	伊与簀垂女純友	69
	曲亭馬琴	文政9〈1827〉年	傾城水滸伝二編	76
	曲亭馬琴	天保3〈1833〉年	新編金瓶梅二編	76
	為永春水	安永5〈1777〉年	薄俤幻日記	64
読本	曲亭馬琴	文化3〈1807〉年	四天王剿盗異録	83
		文化2〈1806〉年	三国一夜物語	83
		文化4〈1808〉年	椿説弓張月 前篇	86
		文化4〈1808〉年	新累解脱物語	74
		文化6〈1810〉年	松染情史秋七草	76
		文化5〈1809〉年	俊寛僧都島物語	76
		文化5〈1809〉年	松浦佐用媛石魂録 前篇	98
		文化7〈1811〉年	夢想兵衛胡蝶物語	83
		文化7〈1811〉年	常夏草紙	84
		文化11〈1815〉年	八丈綺談	79
		文化12〈1816〉年	皿皿郷談	84
		文化11〈1815〉年	南総里見八犬伝 肇輯	83
		文化12〈1816〉年	朝夷巡嶋記 初輯	80
		文政3〈1821〉年	南総里見八犬伝 四輯	89
		文政12〈1830〉年	近世説美少年録 初集	85

※浜田(1979)では十丁分の仮名字体数を採取している。

が、 本にの 断 では主用される仮名字体が、 れる仮名字体に対し使用数の少ない仮名字体である。最初にも述べたが 仮名字体 録 板本ではすべて では稿本の み使用される仮名字体 例 質屋庫【 も 】、八犬伝①【 も 】、八犬伝②【に】、八犬伝③【 的 】、 〈モ〉 【あ】で書かれるほか、 の【も】【も】といった「毛」を字母とした筆順 他の板本でもよく使用される仮名字体に直されたものと考えられる。質屋庫・八犬伝②・八犬伝③・ ·例 ·· : 質屋庫 【 养 】、 (ナ) 八犬伝①【学】、 128 例のうち 103 八犬伝②【お】、 例が使用された【ふ】は板本ではすべて【る】で書かれる。 明断録 画 明 一数違い 断 八犬伝③ 録の稿本に かり の仮名字体を【も】に、 は、 **し** 分グ 表9で確認できるように、 明 断 36 録 例のうち なり、 八犬伝②・八犬伝③で 32 例使用された 板本にの み使用 多くは主 3 しら

用

表 9-1 後期読本の稿本・板本の仮名字体及び使用数一覧表

1	9 - 1		質屋	事事		I- 1/2	×-1		٠, ١		/ (^ 八ナ	法伝		包衣					明迷	F録	
		—	<u> </u>	-/ 第二		1		巻之三		2	八輔	巻之二	-			巻之廿·	t		<u>ラカド</u> 巻之 -	· 第一	-0
		稿	行	板	行	稿	第三十 行	-五回 板	行	稿	行	-六回 板	行	箱	百四 行	+二回 板	行	稿	行	板	行
		本	頭	本	頭	本	頭	本	頭	本	頭	本	頭	本	頭	本	頭	本	頭	本	頭
ア	あ	59	2	60	3	103	14	105	9	73	2	73	2	86	4	86	3	4	0	36	0
	ら	2	0	1	0	6	0	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	32	0	0	0
1	ζ,	64	5	64	4	93	6	93	4	56	3	56	0	62	4	62	1	39	3	39	0
	W3	0	0	0	0	7	0	7	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
ウ	う	10	0	10	0	50	3	50	2	34	2	34	0	14	0	14	0	14		14	
エ	え	11	0	11	0	6		6	0	7	0	7	0	9	0	9	0	5		5	-
オ	お	19		19	1	30		30	1	12	0	12	0	12	0	12	1	3	0	3	
	う	176		165	1	217		224	7	123	0	123	3	153		155	0	88	2	92	
力	か	19	0	30	5	37		30	4	23	2	23	0	15		13	0	10		5	
	かっ	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
	のき	1 5	0 1	0	0	3	0	0 8	0	0	0	0	0	0		60	0	0 55	0	43	-
キ	e K	60	-	20 45	0	3 126	-	8 121	0	71	1	71	2	97	0	60 38	0	ээ 8	0	20	0
	<u>∠</u>	50	0	50	0	103	0	103	0	65	0	65	1	82	1	82	0	60	1	60	0
ク	~	2	0	2	0	7		7	0	1	1	1	0	2	0	2	0	3		3	· 1
	け	18	0	41	2	53	0	48	1	50	2	48	2	72	4	72	1	39	2	41	2
ケ	B	45		23	1	6		11	0	0	0	2	0	0	0	0	0	6	1	4	
	為	1		0	0	0		0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	-	0	
	(1	65		58	3	29	2	23	2	4	0	5	0	4	1	5	0	33	1	35	
コ	\$,	0		6	0	31	4	37	3	25	0	24	1	25	1	24	0	8	1	6	
11	さ	36	2	36	0	89	1	95	4	45	2	47	4	60	2	66	3	39	2	39	1
サ	は	0	0	0	0	12	1	6	0	14	1	12	0	6	0	0	0	0	0	0	0
	(209	2	187	1	289	4	289	8	265	0	260	0	255	0	247	0	143	3	150	0
シ	类	57	8	55	3	25	4	25	4	16	2	21	6	38	12	45	11	5	1	6	2
	し	18	0	42	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	0	11	0
	ŧ	31	1	48	2	89	1	93	0	97	2	78	2	139	3	115	5	18	0	11	0
ス	N	29	0	12	0	33	0	29	0	2	0	21	0	1	0	22	0	14	0	25	1
	す	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	28	0	23	0
セ	せ	52	3	52	1	86	3	86	5	69	2	69	3	58	1	58	1	26	1	26	1
ソ	そ	42	2	42	3	74	2	74	1	55	1	55	1	47	1	47	0	43	3	43	2
	5	120	3	113	1	90	4	95	2	86	1	80	0	74	1	73	0	70	1	70	4
タ	た	1	0	8	1	5	1	4	0	7	0	13	5	1	0	2	2	0	0	0	0
	7	0	0	0	0	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
チ	ち	5	0	5	0	30	0	30	0	21	0	21	0	8	0	8	0	6	0	6	0
	つ	40	0	35	0	14	0	13	1	12	0	12	0	3	1	4	0	17	2	15	0
ッ	m	15	0	14	0	58		62	0	40	0	40	0	24	0	20	0	16	0	16	
	(1)	0		0	0	5		2	0	0	0	0	0	0		4	0	0		2	0
	た	0	0	0	0	2	0	2	0	2	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0

表 9 - 2

	9 - Z 	質月	屋庫							ハナ	法伝							明幽	沂録	
		巻之一	第二		1		最巻之三 -五回		2		≹巻之二 -六回	-			巻之廿· 十二回	ц	一輯者	巻之−	- 第一	- 🗇
		稿 行	板本	行頭	稿本	行頭	板本	行頭	稿本	行頭	板本	行頭	稿本	行頭	板本	行頭	稿本	行頭	板本	行頭
テ	て	32 0	137	0	158	1	85	0	122	0	304	2	176	0	379	1	194	3	189	1
	ξ	188 1	83	0	184	1	257	0	259	0	77	0	224	0	21	0	10	0	15	0
۱	と	230 6	202	8	300	6	301	4	208	2	209	6	282	4	257	4	160	3	148	0
	と	6 0	32	0	19	2	18	1	1	0	2	0	1	0	31	0	5	0	17	0
	る	112 4	105	7	178	7	213	15	159	8	160	7	156	9	156	6	15	0	128	7
ナ	な	0 0	5	0	39	1	7	2	3	0	2	0	0	0	0	0	10		0	0
	<i>5</i>	0 0	0	_	0	0	2	1	0	0	0	0	0		0	0	103		0	
	32	0 0	2		14	0	9	0	13	0	11		0	-	0		0		0	_
	J	221 3	104	-	39	3	47	0	191	0	68	0	359	0	12		33		31	
	か	63 2	175		341	2	334	1	232	1	354	0	101	0	448	_	206		219	
1	にす	0 0	0		0	0	0	0	0	0	1	0	0		0		12		2	
	4	$\begin{array}{ccc} 1 & 0 \\ 0 & 0 \end{array}$	5 0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	更	0 0	1		1 0	0	0	0	0	0	0	0	0	Ĭ	0	0	0 4		0 1	
ヌ	ぬ	11 1	11	1	47	0	47	-	26		26	0	33	0	33	-	19	-	19	
	OL.	1 0	0		14	0	7	0	13	0	9	0	5	0	0		0		0	
ネ	ね	3 0	4		9	0	18		7	1	8	-	10	-	15	-	1	0	8	-
	荪	1 0	1		3	-	10	0	0	0	3		0		0		10		3	
	の	343 9	351	-	426	3	442	8	318	1	315	1	386	3	386		227		240	
	H	11 0	0		19	0	2	0	1	0	7	0	0		0		13		1	_
	H	0 0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	乃	0 0	3	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
	t	16 0	16	0	34	0	34	0	15	0	15	0	20	1	21	0	10	0	10	0
ハ	n	226 2	228	1	423	0	396	0	272	0	268	0	312	0	337	1	181	3	198	0
	2	9 0	7	0	13	0	40	0	5	0	9	0	31	0	5	0	24	0	7	0
L L	\mathcal{O}	36 0	36	0	73	1	74	0	66	0	65	0	61	2	61	0	46	0	46	0
	む	0 0	0	0	8	0	7	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
フ	ふ	49 0	50	0	58	0	58	0	59	0	59	1	57	0	57	0	41	0	41	0
	B	1 0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	>	98 1	99	2	104	0	104	0	113	2	113	2	93	0	93	0	80	1	80	1
	盈	1 0	0	0	3	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	N	0 0	4		8	0	9	0	12	0	13	0	1	0	0	0	0	3	0	
ホ	ほ	13 0	0	0	11	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	そ	1 0	10	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	3	0	8	0	8	0
	ま	0 0	6	0	1	0	37	1	24	2	39	1	41	1	43	4	39	3	42	1
7	ま	20 3	15	1	58	4	23	1	15	1	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0
~	匆	1 0	0	0	4	0	4	0	3	0	3	0	1	0	1	0	0	0	0	0
	ほ	0 0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0

表 9 - 3

10			質屋	庫							ハナ	く伝							明迷	斤録	
		巻	之一	第二		① 复		聲之三 −五回		2		≹巻之二 -六回	-			巻之廿- 十二回	t	一輯卷	巻之−	- 第一	回
		稿本	行頭	板本	行頭	稿本	行頭	板本	行頭	稿本	行頭	板本	行頭	稿本	行頭	板本	行頭	稿 本	行頭		行頭
111	ſΥſ	14	2	14	1	43	0	43	1	27	0	27	1	24	0	25	0	23	0	23	0
	み	0	0	0	0	1	0	1	0	2	0	2	0	2	0	1	0	0	0	0	0
ム	む	9	0	9	1	10	0	10	1	12	0	12	0	25	0	25	1	7	1	7	0
メ	め	13	1	13	0	41	0	41	0	31	0	31	1	22	0	22	0	14	0	14	0
	免	0	0	0	0	1	0	1	1	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	8)	37	2	36	1	51	1	51	2	25		25	1	31	0	28	0	21	2	21	1
	4	67	0	75	1	181	0	176	0	150	1	152	0	129	0	139	2	24	0	125	1
モ	b	7	0	0	0	3	0	3	0	1		0	0	6	0	0	0	91	0	0	0
	\$	0	0	0	-	0	0	0	0	1		0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	140	0		0		0	0	5	0	0		0	0	0		0	0	0	0	0	0
L.	やも	13	0	11		65	0	66	0	28		31	2	32		41		23	0	21	0
ヤ	ゆか	15	0	17	0	16	0	17	0	16		13		19		11	0	5	1	7	0
	鱼	0		0		3	0	3	0	10		4	0	3 5		3	0	0	0	0	0
_	D D	4		5	0	9	1	8 7	0	12		12	2			6	0	3	0	3	0
ユ	ゆ ゆ	1		0	-	6	0		1	0	-	0	0	1		0		0	0	0	0
		0		0.	0	0	0	0	0	1		1		0		0	0	0	0	0	0
3	よと	52		52		80	4	81	4	76		76		67	2	67	2	38	0	38	3
	としら	0 6	_	0 29	0 1	$\frac{1}{14}$		0 12	0	0		0 35		0 22		0		0 25	0 1	23	0
ラ	5	89	3	29 66	0	170		172	3	24 116		35 105	2	130		51 101	0	48	0	23 50	0
	ŋ	175		174	0	204	0	109	0	234		234	0	213		186	0	84	0	135	0
リ) Jan	2		3	-	10		105	1	10	_	10	-	1		28	1	55	2	4	0
	る	21	0	24		46		62	3	33		45		66		96	3	74	2	60	2
	6	145	-	153	0	144	0	152	0	133		125	0	150	0	127	0	53	0	68	0
ル	15	17		0	0	24	0	1	0	9		7	1	7	0	0	0	1	0	0	0
	豹	0	0	6	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	れ	113	0	42	0	136	1	32	0	119	1	118	0	140	1	84	0	15	0	30	0
V	:20)	13		68		27		131		8		9		7		63		93		78	2
	ろ	9		8		19		19		10		10		3		3		0	0	0	0
口	裼	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ワ	5	9	0	9	1	38	1	38	2	1	0	1	0	0	0	0	0	3	0	3	0
丰	ゐ	3	1	3	0	1	0	1	0	5	0	5	0	3	0	3	0	0	0	0	0
ヱ	ゑ	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ヲ	を	238	7	239	5	263	2	246	2	261	0	259	2	323	0	325	0	80	4	92	1
	戏	4	0	3	0	7	0	24	0	0	0	2	0	3	0	1	0	101	0	89	0
ン	ん	37	0	37	0	89	0	89	0	80	0	80	0	60	0	60	0	30	0	30	0

能性があろう。 同じ字母の仮名字体であることから、区別していたか不明といえるが、こちらもより一般的によく使用される形の字体へ整理した可 は稿本の〈マ〉の【ま】を同じ「末」が字母の【ま】に書いている。〈モ〉の【も】【も】の【も】、〈マ〉の【ま】と【ま】!しは、

ち稿本・板本すべてにおいて共通した仮名字体は、調査範囲内で出現しなかった四拍(八犬伝①・八犬伝②・八犬伝③・明断録の〈ヱ〉、八 る60種類である。これらは基本的な仮名字体だと考えられる。左にその60種類を挙げる。その他の52種類の仮名字体は、使用差が 犬伝③の〈ワ〉、明断録の〈ロ〉〈ヰ〉)と、資料五本における使用仮名字体の使用差がある〈ホ〉〈マ〉の二拍を除いた、 ある仮名字体である。 後期読本五本の稿本と板本にみられた仮名字体の総種類数は、イロハ四十七にンを足した四十八拍に対し、12種類である。 四十二拍に対す

後期読本五本の稿本・板本のすべてに一致する仮名字体 (60 種類

〈ア〉【あ】

[] 【せ】

〈工〉【え】

(ノ) 【の】

<u>ك</u> 〈セ〉 ₹

ひ

〈フ〉【ふ】 〈ソ〉 【そ】 (ウ)【う】

〈サ〉【さ】

二種類	〈ヨ〉【よ】
	〈ロ〉【ろ】

(カ)【 ク 】【か】 〈ロ〉【ろ】 (ク) 【く】【**<】** 〈ヰ〉【ゐ】

〈シ〉【し】【ゑ】

(ヲ) **【を】**

(B) [6] 〈チ〉【ち】

<

(ナ)【る】 〈キ〉【た】

⟨ケ⟩ 【け】

(ヌ) 【ぬ】

〈ネ〉【ね】

〈コ〉【こ】

(メ) (め) 〈ユ〉【 ゆ 】

〈ム〉 【む】

〈テ〉【て】【そ】

〈ト〉【と】【と】

(三) [1] [ふ] 〈ル〉【る】【 る】

(モ) [�] [�] (ヤ) 【や】 【中 (ス)【を】【化】

〈ツ〉【つ】【 っ】

〈レ〉【れ】【 き 】

〈ラ〉【ら】【 ら 】

(y) [b] [2]

〈ハ〉【 て 】【 ハ 】 【 き 】

る では使用される傾向が考えられるこう このうち、【化】や【冬】は黄表紙や合巻などでは使用されないことがあるが、 画数の多い仮名字体であるため、 紙幅をとることができる場合に書きやすい字体と推測され 行数が決まっている体裁の漢字平仮名混じり文

に関しては、 屋庫の板本に注目すると、 が使用される。 使用されるが 資料ごとに使用差があった、 まったく筆耕の文字使いである。 質屋庫 明断録では稿本・板本ともに【 そ 】が使用されるものの、質屋庫・八犬伝①・八犬伝②・八犬伝③では【ほ】 【 は 】 ・八犬伝①・八犬伝②では、【そ】より【 は】【ほ】を使用する方が多かったようである。 稿本に【ほ】で書かれていたものを、【は】と【そ】で書いていることが分かる。質屋庫の板本の (ホ)と(マ)の仮名字体について述べたい。 まず戯作板本一 般に 〈ホ〉 の仮名字体は【そ】 しかしながら、 がよく (ホ)

うものとが混在していることが窺える。 ともに の板本では 以上から、 ヘマン 必ずしもそれを筆耕は反映しない。 の使用仮名字体にも変遷があることが窺え、筆耕の清書における概ねの傾向では、やはり【ま】に書くという方向性が窺える 【ま】の使用数が多い。 が 15 の仮名字体は、 【ま】で書くことがある。また、八犬伝②に注目すると、質屋庫・八犬伝①に比べて八犬伝②の稿本には 例使用されており、 基本とする仮名字体がありつつ、筆耕の仮名字体の表記においては、まったく筆耕ごとに異なるものと、 質屋庫・八犬伝①の稿本では【ま】が使用されていることが多いといってよい状態だが、 明断録の稿本・板本ともに【ま】の使用数が多い。松亭金水は別として、 【ま】の使用数が多いが、 また、 一方で、 読本には使用数の少ない仮名字体がしばしばみられ、 筆耕が別の仮名字体を僅かずつ使用することがあると分かった。 筆耕は【 ま 】の一切を【ま】で書いている 🖂。 それは稿本にも使用されてい 曲亭馬琴の 八犬伝③では稿本・ 質屋庫· (ま) 「末」 方向性の似通 が が字母 八犬伝① 24 板本

板本で稿本とは別の仮名字体に書かれる場合

六

仮名字体で書くこともある。 さて、 の字体の使用を増やす、 稿本と板本の仮名字体の使用数につい という単純な異同もあるが、二種類の仮名字体があったとして、 て確認してきた。 複数種の仮名字体を使用 している場合、 筆耕がその二種類の両方それぞれを別の ある仮名字体を減らして、

别

表 1 0 - 1 別の仮名字体になるパターンごとの数の順位 馬琴 質屋庫 (文化七)

$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	馬今	,貝		· (X	化七.)		_						
$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	通番	順位	仮名	字	体の変	更	数	通番	順位	仮名	字	体の変	更	数
3 3 \downarrow h \rightarrow \downarrow 63 35 32 \neq \rightarrow	1	1	11	1	\rightarrow	1,	121	33	32	1	の	\rightarrow	乃	3
$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	2	2	テ	ξ	\rightarrow	て	112	34	32	IJ	り	\rightarrow	F	3
$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	3	3	レ	れ	\rightarrow	4	63	35	32	ラ	ら	\rightarrow	5	3
$ \begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	4	4	シ	(\rightarrow	し	31	36	32	ヲ	找	\rightarrow	を	3
7 7 \nearrow <	5	5	7	と	\rightarrow	と	26	37	37	ア	ら	\rightarrow	あ	2
8 8 f <	6	6	ラ	5	\rightarrow	ら	26	38	37	ナ	る	\rightarrow	B2	2
9 9 $+$ <	7	7	ス	VE	\rightarrow	ē	24	39	37	ル	6	\rightarrow	8	2
10 10 n <t< td=""><td>8</td><td>8</td><td>ケ</td><td>な</td><td>\rightarrow</td><td>け</td><td>22</td><td>40</td><td>37</td><td>ヤ</td><td>や</td><td>\rightarrow</td><td>Þ</td><td>2</td></t<>	8	8	ケ	な	\rightarrow	け	22	40	37	ヤ	や	\rightarrow	Þ	2
11 11 $/$	9	9	牛	兒	\rightarrow	き	15	41	37	IJ	Ja de	\rightarrow	り	2
12 12 n <t< td=""><td>10</td><td>10</td><td>力</td><td>う</td><td>\rightarrow</td><td>か</td><td>12</td><td>42</td><td>37</td><td>ヲ</td><td>を</td><td>\rightarrow</td><td>拔</td><td>2</td></t<>	10	10	力	う	\rightarrow	か	12	42	37	ヲ	を	\rightarrow	拔	2
13 13 $=$ \wedge \rightarrow 1 9 45 43 \rightarrow \rightarrow 0 1 14 13 \rightarrow \rightarrow \rightarrow 9 46 43 \rightarrow \rightarrow \rightarrow 1 15 15 \rightarrow \rightarrow \rightarrow 8 47 43 \rightarrow </td <td>11</td> <td>11</td> <td>1</td> <td>H</td> <td>\rightarrow</td> <td>の</td> <td>11</td> <td>43</td> <td>43</td> <td>ア</td> <td>あ</td> <td>\rightarrow</td> <td>ら</td> <td>1</td>	11	11	1	H	\rightarrow	の	11	43	43	ア	あ	\rightarrow	ら	1
14 13 π π 9 46 43 ρ ρ ρ 1 1	12	12	ル	15	\rightarrow	6	10	44	43	力	õ	\rightarrow	う	1
15 15	13	13	11	4,	\rightarrow	1	9	45	43	力	か	\rightarrow	う	1
16 15 \wedge <t< td=""><td>14</td><td>13</td><td>ホ</td><td>ほ</td><td>\rightarrow</td><td>そ</td><td>9</td><td>46</td><td>43</td><td>ク</td><td>/</td><td>\rightarrow</td><td><</td><td>1</td></t<>	14	13	ホ	ほ	\rightarrow	そ	9	46	43	ク	/	\rightarrow	<	1
17 15 ν \triangleq → \hbar 8 49 43 ν \triangleq → ν 1 1 18 18 ν \neq → ν 7 50 43 ν ν ν → ν 1 1 19 18 ν \neq → ν 7 51 43 ν \neq → ν 1 1 20 18 ν \neq ν \neq 0 ν 0 ν 1 51 43 ν \neq 0 ν 1 1 1 20 18 ν 0 ν 0 ν 0 0 1 1 1 20 18 ν 0 0 18 ν 0 0 0 0 1 1 1 20 18 ν 0 0 0 0 1 1 20 18 ν 0 0 0 0 1 1 20 18 ν 0 0 0 0 1 1 20 18 ν 0 0 0 0 1 1 20 18 ν 0 0 0 1 1 20 18 ν 0 0 0 0 1 1 20 18 ν 0 0 0 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1	15	15	シ	し	\rightarrow	(8	47	43	ケ	希	\rightarrow	け	1
18 18 ス を → 化 7 50 43 ツ ッ → つ 1 19 18 タ ら → た 7 51 43 = ホ → ガ 1 20 18 テ て → 支 7 52 43 = ガ → ホ 1 21 18 モ り → り 7 53 43 = よ → 身 1 22 22 コ こ → む 6 54 43 ネ り → ね 1 23 22 ハ ハ → 身 6 55 43 ハ ハ → ቲ 1 24 22 ル 悠 → る 6 55 43 ハ カ → た 1 25 25 ツ つ → ッ 5 56 43 ハ た → ハ 1 26 25 ナ る → な 5 58 43 ハ を → ふ 1 27 25 マ ま → ま 5 59 43 マ ぬ → ま 1 28 25 ル る → お 5 59 43 マ ぬ → ま 1 29 25 ル る → る 5 60 43 モ か → り 1 30 30 = よ → ガ 4 62 43 ル 悠 → 沈 1 31 30 ホ ほ → 祁 4 63 43 ロ ろ → ѝ 1	16	15	ハ	Þ	\rightarrow	n	8	48	43	シ	(\rightarrow	类	1
19 18 タ ら → た 7 51 43 = ホ → 月 1 20 18 テ て → え 7 52 43 = 月 → ホ 1 21 18 モ り → り 7 53 43 = よ → み 1 22 22 コ こ → よ 6 54 43 ネ ロ → ね 1 23 22 ハ ハ → 々 6 55 43 ハ ハ → ቲ 1 24 22 ル 悠 → る 6 56 43 ハ た → ハ 1 25 25 ツ つ → っ 5 56 43 ハ た → ハ 1 26 25 ナ る → な 5 58 43 へ 極 → へ 1 27 25 マ ま → ま 5 59 43 マ ぬ → ま 1 28 25 ル る → お 5 59 43 マ ぬ → ま 1 29 25 ル る → る 5 60 43 モ め → り 1 30 30 = よ → カ 4 62 43 ル 悠 → 故 1 31 30 ホ ほ → ね 4 63 43 ロ ろ → 協 1	17	15	レ	争	\rightarrow	れ	8	49	43	シ	点	\rightarrow	し	1
20 18 テ て → え 7 52 43 = 月 → ホ 1 21 18 モ り → り 7 53 43 =	18	18	ス	ŧ	\rightarrow	VE	7	50	43	ツ	m	\rightarrow	つ	1
21 18 モ り → り 7 53 43 =	19	18	タ	9	\rightarrow	た	7	51	43	11	4,	\rightarrow	3	1
22 22 コ こ → お 6 54 43 ネ	20	18	テ	て	\rightarrow	ž	7	52	43	11	3	\rightarrow	4	1
23 22 ハ の → 点 6 55 43 ハ の → た 1 24 22 ル 協 → る 6 56 43 ハ た → の 1 25 25 ツ つ → ッ 5 57 43 フ 脇 → ふ 1 26 25 ナ る → な 5 58 43 ヘ 極 → へ 1 27 25 マ ま → ま 5 59 43 マ 極 → ま 1 28 25 ル る → お 5 60 43 モ め → も 1 29 25 ル る → る 5 61 43 エ ゆ → む 1 30 30 = よ → オ 4 62 43 ル 協 → 説 1 31 30 ホ ほ → ผ 4 63 43 ロ ろ → 協 1	21	18	モ	t	\rightarrow	Ð	7	53	43	11	1	\rightarrow	P	1
24 22 n 6 <t< td=""><td>22</td><td>22</td><td>コ</td><td>ح</td><td>\rightarrow</td><td>\$,</td><td>6</td><td>54</td><td>43</td><td>ネ</td><td>Œ</td><td>\rightarrow</td><td>ね</td><td>1</td></t<>	22	22	コ	ح	\rightarrow	\$,	6	54	43	ネ	Œ	\rightarrow	ね	1
25 25 ツ つ → ッ 5 57 43 フ 協 → ふ 1 26 25 ナ る → な 5 58 43 へ 逾 → へ 1 27 25 マ ま → ま 5 59 43 マ 逾 → ま 1 28 25 ル 台 → 秋 5 60 43 モ む → む 1 29 25 ル る → み 5 61 43 ユ ゆ → む 1 30 30 ニ よ → カ 4 62 43 ル 歩 → 説 1 31 30 ホ ほ → ル 4 63 43 ロ ろ → 説 1	23	22	ハ	n	\rightarrow	\$	6	55	43	ハ	n	\rightarrow	て	1
26 25 $+$ 5 58 43 \wedge 6 \rightarrow \wedge 1 27 25 \vee $+$ <t< td=""><td>24</td><td>22</td><td>ル</td><td>ts</td><td>\rightarrow</td><td>る</td><td>6</td><td>56</td><td>43</td><td>ハ</td><td>て</td><td>\rightarrow</td><td>2</td><td>1</td></t<>	24	22	ル	ts	\rightarrow	る	6	56	43	ハ	て	\rightarrow	2	1
27 25 \rightarrow \pm 5 59 43 \rightarrow \Rightarrow \pm 1 28 25 ν \rightarrow π 5 60 43 \pm \Rightarrow \Rightarrow \Rightarrow 1 29 25 ν \Rightarrow <td< td=""><td>25</td><td>25</td><td>ツ</td><td>つ</td><td>\rightarrow</td><td>m</td><td>5</td><td>57</td><td>43</td><td>フ</td><td>杨</td><td>\rightarrow</td><td>ふ</td><td>1</td></td<>	25	25	ツ	つ	\rightarrow	m	5	57	43	フ	杨	\rightarrow	ふ	1
28 25 ル る → 数 5 60 43 モ め → も 1 29 25 ル る → る 5 61 43 ユ ゆ → む 1 30 30 = よ → ガ 4 62 43 ル 歩 → 数 1 31 30 ホ ほ → ね 4 63 43 ロ ろ → 協 1	26	25	ナ	る	\rightarrow	な	5	58	43	^	鱼	\rightarrow	^	1
$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	27	25	マ	ま	\rightarrow	ま	5	59	43	マ	匆	\rightarrow	ま	1
30 30 = 1 → 7 4 62 43 ル	28	25	ル	ゟ	\rightarrow	豹	5	60	43	モ	\$	\rightarrow	Ð	1
31 30 ホ ほ → ね 4 63 43 ロ ろ → 協 1	29	25	ル	る	\rightarrow	6	5	61	43	ユ	ゆ	\rightarrow	@	1
	30	30	11	1	\rightarrow	3	4	62	43	ル	15	\rightarrow	豹	1
$32 32 \downarrow $	31	30	ホ	ほ	\rightarrow	N	4	63	43	П	ろ	\rightarrow	協	1
	32	32	シ	点	\rightarrow	(3							642

表 1 0 - 2 別の仮名字体になるパターンごとの数の順位 馬琴 八犬伝①4-3 (文政三)

通番	順位	仮名	字	体の変	更	数
1	1	レ	れ	\rightarrow	<u>¥</u>	107
2	2	IJ	り	\rightarrow	Z	97
3	3	テ	٢	\rightarrow	ξ	89
4	4	1]	4	\rightarrow	l	40
5	5	ン	\sim	\rightarrow	名	36
6	6	マ	お	\rightarrow	ま	35
7	7	ナ	な	\rightarrow	る	34
8	8	11	J	\rightarrow	か	32
9	9	ヲ	を	\rightarrow	泧	24
10	10	7	H	\rightarrow	の	18
11	11	テ	*	\rightarrow	て	16
12	11	ル	15	\rightarrow	6	16
13	11	ル	R	\rightarrow	る	16
14	14	~	De la	\rightarrow	n	9
15	15	力	か	\rightarrow	う	8
16	15	П	١١	\rightarrow	\$,	8
17	15	ス	N	\rightarrow	ŧ	8
18	15	ベ	15	\rightarrow	る	8
19	15	ベ	る	\rightarrow	6	8
20	20	ネ	9	\rightarrow	ね	7
21	20	ヲ	找	\rightarrow	を	7
22	22	キ	は	\rightarrow	さ	6
23	23	#	兒	\rightarrow	き	5
24	23	ケ	け	\rightarrow	な	5
25	23	タ	3/2	\rightarrow	5	5
26	23	ナ	B2	\rightarrow	る	5
27	23	七	Ð	\rightarrow	ě	5
28	23	ラ	ら	\rightarrow	5	5
29	29	ア	ら	\rightarrow	あ	4
30	29	1	い	\rightarrow	ωz	4

通番	順位	仮名	字	体の変	更	数
31	29	イ	W3	\rightarrow	い	4
32	29	ス	ē	\rightarrow	N	4
33	33	ツ	(1)	\rightarrow	ツ	3
34	33	ラ	5	\rightarrow	ら	3
35	33	レ	动	\rightarrow	れ	3
36	36	ア	あ	\rightarrow	ら	2
37	36	コ	75	\rightarrow	ح	2
38	36	ツ	7	\rightarrow	m	2
39	36	ナ	る	\rightarrow	な	2
40	36	ナ	る	\rightarrow	<i>\$</i>	2
41	36	7	の	\rightarrow	乃	2
42	36	タ	た	\rightarrow	5	2
43	36	ネ	荪	\rightarrow	ね	2
44	36	ユ	@	\rightarrow	ゆ	2
45	36	IJ	Pe	\rightarrow	り	2
46	46	カ	う	\rightarrow	か	1
47	46	シ	(\rightarrow	灰	1
48	46	シ	点	\rightarrow	(1
49	46	タ	6	\rightarrow	た	1
50	46	ツ	~	\rightarrow	つ	1
51	46	<u>۲</u>	と	\rightarrow	と	1
52	46	11	7	\rightarrow	か	1
53	46	1	乃	\rightarrow	の	1
54	46	1	の	\rightarrow	H	1
55	46	ヒ	む	\rightarrow	ひ	1
56	46	ホ	ほ	\rightarrow	N	1
57	46	メ	免	\rightarrow	め	1
58	46	メ	め	\rightarrow	免	1
59	46	ユ	ゆ	\rightarrow	@	1
60	46	П	ર્ટ	\rightarrow	ょ	1
61	46	ル	豹	\rightarrow	ts	1

表 1 0 - 3 別の仮名字体になるパターンごとの数の順位 馬琴 八犬伝②8-2 (天保二)

通番	順位	仮名	字	体の変	更	数
1	1	テ	M	\rightarrow	て	186
2	2		l	\rightarrow	1,	138
3	3	ニスマ	や	\rightarrow	N	19
4	4	マ	ま	\rightarrow	ま	15
5	4	11	4	\rightarrow	J	15
6	6	ラ	5	\rightarrow	ら	12
7	7	ル	6	\rightarrow	る	7
8	8	タ	70	\rightarrow	た	6
9	8	1	の	\rightarrow	H	6
10	8	$\vec{\zeta}$	n	\rightarrow	2	6
11	11	ぐ	(\rightarrow	点	5
12	12	テ	7	\rightarrow	ξ	4
13	12	abla	れ	\rightarrow	4	4
14	14	ベ	8	\rightarrow	15	3
15	14	ナ	奶	\rightarrow	る	3
16	14	ネ	Q	\rightarrow	荪	3
17	14	ヤ	P	\rightarrow	や	3
18	14	IJ	Popl	\rightarrow	り	3
19	14	IJ	り	\rightarrow	F	3
20	14	ル	15	\rightarrow	る	3
21	14	λ	刼	\rightarrow	れ	3
22	22	ケ	け	\rightarrow	な	2
23	22	サ	は	\rightarrow	さ	2
24	22	ツ	ツ	\rightarrow	つ	2

通番	順位	仮名	字	体の変	更	数
25	22	ツ	つ	\rightarrow	m	2
26	22	<u>۲</u>	と	\rightarrow	と	2
27	22	ハ	專	\rightarrow	n	2
28	22	ル	る	\rightarrow	6	2
29	22	ル	る	\rightarrow	怂	2
30	22	ヲ	を	\rightarrow	找	2
31	31	カ	う	\rightarrow	か	1
32	31	カ	か	\rightarrow	う	1
33	31	П	3¢	\rightarrow	(٦	1
34	31	$\dot{\diamond}$	赵	\rightarrow	(1
35	31	7	N	\rightarrow	と	1
36	31	ナ	な	\rightarrow	る	1
37	31	ナ	る	\rightarrow	B2	1
38	31	[1	4	\rightarrow	に	1
39	31	ネ	y	\rightarrow	ね	1
40	31	1	H	\rightarrow	の	1
41	31	1	H	\rightarrow	の	1
42	31	لا	か	\rightarrow	む	1
43	31	ホ	そ	\rightarrow	N	1
44	31	七	\$	\rightarrow	Ð	1
45	31	七	Ð	\rightarrow	\$	1
46	31	ユ	ф	\rightarrow	43	1
47	31	ユ	@	\rightarrow	ゆ	1
48	31	ラ	ら	\rightarrow	5	1

表 1 0 - 4 別の仮名字体になるパターンごとの数の順位 馬琴 八犬伝③9-27 (天保九)

通番	順位	仮名	字	体の変	更	数
1	1	11	J	\rightarrow	か	347
2	2	テ	٢	\rightarrow	て	203
3	3	丰	轮	\rightarrow	き	59
4	4	レ	れ	\rightarrow	爭	57
5	5	ラ	5	\rightarrow	ら	32
6	6	7	と	\rightarrow	と	28
7	6	IJ	り	\rightarrow	Z	28
8	8	ル	る	\rightarrow	る	27
9	8	く	\$	\rightarrow	n	27
10	10	ス	ŧ	\rightarrow	VE	22
11	11	シ	(\rightarrow	羔	9
12	12	ヤ	4	\rightarrow	や	8
13	13	サ	は	\rightarrow	さ	6
14	14	ネ	Q	\rightarrow	ね	5
15	15	力	か	\rightarrow	う	4
16	15	ぐ	灰	\rightarrow	(4
17	15	ル	15	\rightarrow	る	4
18	18	ス	を	\rightarrow	す	3
19	18	ツ	5	\rightarrow	(1)	3
20	18	书	Ø	\rightarrow	9	3
21	18	ラ	ら	\rightarrow	5	3
22	18	ル	ts	\rightarrow	る	3
23	18	ヲ	拔	\rightarrow	を	3

通番	順位	仮名	ウ	体の変	: 亩	数
24	24	力	う	→	か	2
25	24	タ	9	\rightarrow	た	2
26	24	ル	る	\rightarrow	6	2
27	27	コ	\$,	\rightarrow	2	1
28	27	ス	VE	\rightarrow	ŧ	1
29	27	タ	た	\rightarrow	5	1
30	27	ツ	77	\rightarrow	つ	1
31	27	ツ	た	\rightarrow	(1)	1
32	27	テ	て	\rightarrow	ξ	1
33	27	ハ	n	\rightarrow	Þ	1
34	27	ハ	n	\rightarrow	て	1
35	27	计	N	\rightarrow	そ	1
36	27	4	よ	\rightarrow	ま	1
37	27	マ	あ	\rightarrow	ま	1
38	27	111	み	\rightarrow	٤	1
39	27	モ	В	\rightarrow	Ð	1
40	27	ユ	ゆ	\rightarrow	4	1
41	27	IJ	Æ	\rightarrow	り	1
42	27	レ	剎	\rightarrow	れ	1
43	27	ヲ	を	\rightarrow	找	1
						011

表 1 0 - 5 別の仮名字体になるパターンごとの数の順位 金水 明断録1-1 (弘化四)

通番	順位	仮名	字	体の変	更	数
1	1	ナ	5	\rightarrow	る	103
2	2	IJ	Pag.	\rightarrow	り	51
3	3	ヲ	找	\rightarrow	を	39
4	4	ア	ら	\rightarrow	あ	34
5	5	11	J	\rightarrow	4,	28
6	6	アニヲニル	を	\rightarrow	找	27
7	7	11	4,	\rightarrow	1	24
8	8	ル	る単	\rightarrow	6	23
9	9	レハ	动	$\begin{array}{c} \rightarrow \\ \rightarrow \\ \rightarrow \\ \rightarrow \\ \rightarrow \end{array}$	れ	21
10	10	\langle	\$	\rightarrow	n	20
11	11	7	と	\rightarrow	と	13
12	12	トキテノニナシル	とき	$\begin{array}{c} \rightarrow \\ \rightarrow \end{array}$	轮	12
13	12	テ	7	\rightarrow	Ž	12
14	12	1	H	\rightarrow	の	12
15	15	11	U	\rightarrow	4,	11
16	16	ナ	な	\rightarrow	る	10
17	17	シ	し	\rightarrow	(9
18	17	ル	6	\rightarrow	る	9
19	19	ステネラ	ē	\rightarrow	N	8
20	20	テ	×	\rightarrow	て	7
21	20	ネ	荪	\rightarrow	ね	7
22	20	ラ	ら	\rightarrow	5	7
23	23	ケ	な	$\begin{array}{c} \rightarrow \\ \rightarrow \\ \rightarrow \end{array}$	け	6
24	23	ケスレ	す	\rightarrow	N	6
25	23	レ	れ	\rightarrow	£	6
26	26	カ	か	\rightarrow	う	5
27	26	П	\$,	\rightarrow	2	5
28	26	ラ	よら	\rightarrow	ら	5

通番	順位	仮名	字	体の変	更	数
29	29	ケ	け	\rightarrow	な	4
30	30		٢	\rightarrow	\$,	3
31	30	コハ	n	\rightarrow	\$	3
32	32	シ	(\rightarrow	し	2
33	32	シ	杰	\rightarrow	(2
34	32	シ	(→ → → → 	煮	2
35	32	シ	し	\rightarrow	煮	2
36	32	ス	す	\rightarrow	ē	2
37	32	ス	**	\rightarrow	す	2
38	32	ツ	つ	\rightarrow	$l^i)$	2
39	32		D)	\rightarrow	4,	2
40	32	11 11	D)	$\begin{array}{c} \rightarrow \\ \rightarrow \\ \rightarrow \\ \rightarrow \end{array}$	1	2
41	32	マ	ま		ま	2
42	32	ヤ	や	\rightarrow	P	2
43	43	力	か		カヮ	1
44	43	力	う	\rightarrow	か	1
45	43	ス	VE	\rightarrow	ŧ	1
46	43	ス	VE	\rightarrow	す	1
47	43	ス	**	\rightarrow	す	1
48	43	1	Z	$ \rightarrow \\ \rightarrow$	と	1
49	43	=	1,	\rightarrow	に	1
50	43	=	d'i	\rightarrow	Ð	1
51	43	ニニノ	乃	\rightarrow	の	1
52	43	マ	ほ	\rightarrow	ま	1
53	43	ル	15	\rightarrow	6	1
						563

数を順位にして示したものである。 稿本と板本の仮名字体の入れ替わりの頻度は、 複数種の仮名字体が、 同じ拍を表わすだけであれば同価値の字体なのであり、 五本の資料に共通して、 仮名ごとに異なる。 仮名字体の入れ替わりが起こる仮名があることが分かる 表 10 が、 五本の資料において別の仮名字体になるパターンごとの 相互の入れ替えは自由 のはずである。 しかしながら

ることがある。これら〈テ〉 〈テ〉【て】【 そ 】と〈ニ〉【 ホ 】【 4 】はその代表格といえ、馬琴読本では三桁にのぼるほどこれら二種類の仮名字体が入れ と〈ニ〉の仮名字体は字母を同じくして筆順・画数などの違いがある仮名字体である。

なかったと考えられ 使用され、 いる場合は、大きな入れ替わりが起きにくいのである。 に使用される仮名字体という、 る。【も】は下の字と切り離された形であるため、 板本【も】の入れ替わりが質屋庫に1例、 その一方で、 字母を同じくする仮名字体である〈テ〉【て】【そ】と〈ニ〉【 ↓】【 ↓】は、 字母を同じくする仮名字体においても、 語における位置によって使用分布が異なる「虫。こうした、 八犬伝②に1例、 語末や助詞に使用され、【も】は上下の文字と連綿に適した形であるため、 読本において、〈テ〉〈ニ〉の用例は主として助詞テとニを占める。 入れ替わりの数が少ないものがある。〈モ〉の【も】【も】は、 稿本【�】→板本【�】の入れ替わりが八犬伝③にみられるのみであ 書き手において区別して書く仮名字体では 連綿の便宜によって使用位置が固定化 稿本 同じ語に \$ 非

注目される。 は ・母を異にする仮名字体になるパターンでは、質屋庫・八犬伝①・八犬伝③に稿本【れ】→板本【 塾 】の異同 【れ】と同 馬琴の稿本では【れ】が優勢であり、【き】はそれよりも少ない傾向が共通するが、 等か、 あるいは【れ】を上回って【 & 】を使用している。 質屋庫・ 八犬伝①・八犬伝③の . の順 位 が高いことに

【 き 】で書かれる〈レ〉が多くなっており、 田 明断録はこの傾向に反するが、 (一九九八b) 0) 『偐紫田舎源氏』 馬琴読本ではそれぞれ別の筆耕においても右の傾向が確認できたといえよう。 また、 の稿本と板本の調査結果では、 内田 (二〇〇一) に調査された『金毘羅船利生纜』 内 田氏は 鱼 を 「板本の表記に特徴的な仮名字体と捉えられ」 稿本の シ シ は れ 前半部においては、 のみで書か れてい た ることを指摘する 稿本に比して板本 方で、 板本では

匹敵するほどの 八犬伝①・八犬伝③では稿本【り】→板本【 衤】 使用数が多い。 【り】で書かれる。 明断録では、 稿本に の異同 【り】と【 ? 】が同等に書かれるが、 の順 位が高く、 特に八犬伝①の板本では、 稿本【 ₹ 】→板本【り】の異同が多く、 は りに

八犬伝②の (J) の異同には稿本【り】→板本【 ② 】、稿本【 ② 】→板本【り】が 3例ずつ、 次のような用例がみられる。

【り】→板本【 孑 】(振り仮名は省いた。 一は行移りを表わす。)

稿本 板本

這里より し て

這里よーを (て

(四丁ウ L2 行中→四丁ウ L3 行頭)

捺りて

携り そ

捺

携一 ア て

更多

(七丁オ L2 行中→七丁オ L2 行中) (八丁ウ L8 行中→八丁ウ L8 行頭

稿本 【 趸 】→板本【り】

閃一まと

稿本

承知仕

— 星 ぬ

あまーま

か

あまりふ

閃りと

板本

承知仕りぬ

(十丁ウ L5 行頭→十丁ウ L4 行中)

(十一丁オ L6 行頭→十一丁オ L6 行中)

(十一丁ウ L11 行頭→十一丁ウ L11 行中)

がみられる。 八犬伝②においては、 稿本の行頭に書かれた【習】が、 八犬伝②の【り】と【 ぽ 】の入れ替わりは、 行頭における用字が右の〈リ〉のほか、〈タ〉〈ネ〉にも行頭に特定の仮名字体を使用しているとみられる用例 板本で行中に位置すると【り】を書くという、 1例を除いて、 稿本の行中の 〈リ〉が板本の行頭に位置したときに【 習 】を書き、 行頭に特別な仮名字体を書く用字が行われている。

稿本 【 ~ 】 → 板本 【た】(濁点のある仮名は振り仮名を付した)

板本

4, ゝろ得ら れど

お ゝろ得一たれど

(四丁ウ L10 行中→四丁ウ L10 行頭

₹ ₹ 逗留 名とこな なる ŋ 逗留え一たりし 名一だゝな 立一たる を (八丁ウ L7 行中→八丁ウ L7 行頭) (九丁ウ L2 行中→九丁ウ L3 行頭) (六丁ウ L6 行中→六丁オ L7 行頭

召とり されども 報されい 報一たれっ 召とりたれども (十一丁才 L5 行中→十一丁才 L6 行頭)※【 L 】には濁点がつく (十一丁ウ L3 行中→十一丁ウ L4 行中)

・稿本【ひ】→板本【ね】【 ネネ 】

索 と 稿本 給 5 索一 絡給い ら ハ (二丁ウ L11 行中→二丁ウ L11 行頭)※【ハ】には濁点がつく

遇秘 ハ 一 ね (三丁ウ L9 行中→三丁ウ L10 行頭)※【 h】には濁点がつく (六丁ウ L6 行中→六丁ウ L5 行中)※【ハ】には濁点がつく

遇り

Œ

推納せて

推紈ねて

(十丁才 L2 行中→十丁才 L2 行中)

かれる。この用例は、 ⟨g y は八犬伝③においても、 行頭と関わりはない。 板本では行頭で【た】が書かれている。 稿本に1 例のみ使用された【た】は板本では【 4 】で書

稿本【た】→板本【 ~】

試たり 稿本

稿本

【 ~ 】 → 板本【た】

試 ક છ

板本

(四丁オ L10 行中→四丁オ L11 行中)

添一たる

添ら 稿本

6

(十三丁ウ L9 行中→十三丁ウ L9 行頭

۲, ゝろ一得 きり。 おゝろ得一たり。 (十四丁オ L10 行中→十四丁オ L10 行頭

したとは考えにくい。 〈ネ〉については、八犬伝③の板本の【 & 】はすべて【ね】で書かれているため、 行頭のために〈ネ〉の仮名字体を【ね】を使用

に仮名字体を書き換えているとみられたのは、〈シ〉の【し】【ゑ】のみである。一部の用例を次に挙げる。 以上は八犬伝②・八犬伝③のみにみられた行頭において特定の仮名字体を書くという用字である。 五本の資料に、 行頭であるため

・稿本【 ゑ 】→板本【 ~ 】、稿本【 ゑ 】→板本【 ~ 】

	稿本	板本
質屋庫	進らしるり	進一 ゑ ら り (十五丁オ L1 行中→十四丁ウ L10 行頭)
八犬伝①	なう!~しう	み う ~~ ゑ う (十三丁オ L6 行中→十三丁オ L7 行頭)※【 ウ 】には濁点がつく
八犬伝②	あらを一えそ	あら に して (二丁オ L4 行頭→二丁オ L3 行中)※【 e 】【 lc 】 には濁点がつく
八犬伝③	臥て在りし うい	臥て在り ゑ う ハ (四丁オ L6 行中→四丁オ L7 行頭)※【 n 】には濁点がつく
明断録	做して	做一 ゑ て
大島 (三)	○○)には、行頭における	大島(三〇〇〇)には、行頭における仮名字体の使い分けとして、行頭の〈シ〉は【 ゑ 】を使用することが指摘される。
本の行頭の一	【 翟 】が、板本の行中にな	の行頭の【 孑 】が、板本の行中に移って【り】で書かれることも報告される。大島 (二〇〇〇) で調査された「八犬伝」

られ、 ②と同じ筆耕の谷金川が担当する「つ。しかし、〈シ〉に関しては、それぞれ別の筆耕が携わっている五本に、行頭における用字がみ 注目に値する。 される。 八犬伝」は八犬伝 また、稿

る場合である。 が八犬伝①にみられる。 稿本の仮名字体が、板本で別の仮名字体になる数が非常に少ないものの、意図して仮名字体を書き換えただろうと考えられる用例 やはり行頭での仮名字体の用字であるが、 横列に同じ仮名が並んだ場合と、語の途中で丁を跨いで行移りす

[1] 二丁ウL4-6

一るた。・・・・・興一

一るし。・・・物よなん。

一なし。・・・・物よ一 一るれ。・・・・・興一

板本

一あらにや。 らまと

※【を】【化】には濁点がつく

[2] 十二丁才 L5-6

一遊える

一あらをや。 あると

[3] 十六丁ウ L11 (-L1)

板本

おさめて一 稿本

-2 え さ

また、行末にも、同じ仮名字体が横一列に並ばないようにした変字法かと思われる仮名字体の使用がみられる。

[4] 十二丁才 L2-L4 行末

沼藺

大うらり一 意味と一

沼藺ハ

板本

大うらや 意味と一

表11 行総数と稿本と板本での行頭の一致 質屋庫 犬伝① 八 犬伝② 八 犬伝③ 明断録 271 稿本 総行数 252 312 225 199 **42** 15. 49% 36 22 59 14 行頭 -致 8. 73% 11.53% 6. 22% 29.64% 総行数 251 312 271 板本 225 199 する筆耕にとって、 のと考える。 用字が含まれる。 えられている。 原定家が行っていた用法である「ポ。[3] では「おさめて」の行頭の 以上のように、 稿者は、

な 】と字体を変えている。

ている。

調査範囲内に行頭で同じ仮名が並ぶのは右の用例のみだが、

[2]の用例では、稿本では行頭二行に【あ】が隣接していたが、板本では【あ】【6】と字体を変え

〈メ〉がただ一例の使用である 【 免 】に書き換

行頭で変字法を行うのは、

古くは藤原俊成・藤

板本では行末近くにあった〈ナ〉の仮名を行頭三行に揃えて【み】【な】

1

の用例では、

稿本では【る】が行頭二行に隣接し、

名字体の使用も自分の用字になりやすい傾向があったか、と推測される。 稿本と板本とが文の同じ位置で行移りすることはいずれの資料においても少ないことが分かる。 各資料の調査範囲内における総行数と、稿本と板本とで一致する数を示した。資料によってばらつきがあるもの 古い平仮名資料と類似する表記といえよう。 語であることを表わすハイフンと同じ機能を持つ用法を指摘する二。 さめて」の例は、こうした用法に類似するものと考えられる。 しほとけを」と行末・行頭に分れている「薬師仏」の語の表記を指して、 なお、 この 稿本から板本の清書過程で一部の仮名字体が別の仮名字体になるケースには、 小松(二〇〇六)には御物本『更級日記』の表記について、「心もとなきまゝにとうしんにや/を そもそも行頭・行末は馬琴の 要因に、 八犬伝①の筆耕による行頭・行末の 清書にあたって行移りの箇所がずれるのが常態であったことが挙げられる。 稿本とは違ってしまうものであり、 [1][2][4]に挙げた用字は、 八犬伝①の行頭における仮名字体の用字に関しては ハイフンと同じ機能を持つかはさて措き、「お 複雑な形の仮名字体が前行の末尾から続く 筆耕によっては行頭 行頭・ 装飾的志向によるも 板本の表記に清書を 行末における 行末の 表

七 おわりに

後期読-本五 本につい て、 仮名字体を中 心 に、 稿本と板本の 表記につ て確認してきた。

漢字が異体字になることや、漢字のくずしの度合

1

が変わること、

まず、

稿本と板本の本行における異同の全体像から、

11 に、

仮

った。 はみられることが分かった。 合巻の稿本と板本にもみられた、 仮名とで文字の 異同がほぼない場合がある。 同じ字母で筆順 種類が変わることに資料差があることに比べ、仮名字体が板本で別の仮名字体になることは、どの資料にも ・画数が異なる仮名字体にしても、ほとんど区別していないとみられる場合と、 稿本の仮名字体が板本で別の仮名字体になる数を順位化したところ、 また、 板本に特徴的な表記が確認できた。 字母を異にする仮名字体の場合、〈レ〉の【き】を板本では多めに書く筆耕がおり、 数の多いものと少数の 使用位置が分かれてい もの 10 とが (るため 18 あ

読 の清書では行移りの位置が変わることが多く、行頭・行末における用字を行う都合から、筆耕の用字が表れやすい位置かと考えられ を行頭に使用する傾向がある八犬伝②の谷金川、 と考えられる変字法を行頭・行末で行い、そこに稀少字体も使用する八犬伝①の筆耕である千形仲道と、 本の仮名字体における表記の個別性に繋がっていると看取され 稿本の仮名字体を板本では別の仮名字体で書く場合、 八犬伝③の白馬台音成とでは表記志向が異なるようにみえた。 行頭における仮名字体の用字が関わることが分かった。 ある仮名にのみ特定の字体 ただし、 一般的に、 装飾的 稿本から 志 向

時期の読本ほど、 仮名字体の 種 類数については、 仮名字体の選択 八犬伝③の稿本において草双紙並であるという調査結果を得た。 ・用字の装飾的志向から脱する傾向にあったと思われ いる。 馬琴は 福本の 執筆に お て、 遅

のではなく、 る準備は稿者にはない。 カュ つて仮名字体 作 :家の の種類に差があったはずの一作家の読本と草双紙において、 印 読本の仮名表記の平易化にあたるだろうか。使用仮名字体の減少 刷 物の 表記の問題として実態が窺われるのである二。 仮名字体の種 は 類 近 が同等化することの理由を詳 世期の史的変遷としてのみ起こった しく論が

注

木元 第四巻 小 説の 「近世小説」 原 稿 料 (明治書院、 (高木氏ホ 九八三年)、一九九八年増補の記事を参照 ページ 『ふみくら』 https://fumikura.net/other/column.html にて、 『研究資料日本古典

内田 (一九九八c)、内田 (二〇〇〇)

- 本の仮名字体に関しては、 地 では馬琴の読本と合巻の仮名字母の種類 市地 (二〇一五) (二〇一六 a) において、 を比較し、 画数の多い字母が読本には多いことを明らかにした。 その用法が装飾的であること、 稀少字体が多いことを指摘 ほ 読
- 個 人が所 蔵する可能性はあるが、 日本古典籍総合目録データベース(http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/)では、 少なくとも確認で
- Ŧi. 鷦鷯貞高 (為永春水) 纂述 『絵本漢楚軍談』は初輯 (天保一四 〈一八四三〉)・二輯 (弘化二〈一八四 五〉)が出版されているが、 以

天理大学図書館に所蔵されている

金水編次」と著者名が書かれ、 松亭金水 氏執筆項目)によると、書家の谷金川の弟子で、馬琴の板下書きもしていたという。為永春水の代筆などを経て、 馬琴の死後、 (寛政九〈一七九七〉年-文久二〈一八六三〉 読本『朝夷嶋巡記』続編などを執筆し、板元の注文に応じた執筆活動を展開する。『北條泰時明断録』には「松亭 板元の注文に応じて執筆した作品のひとつと考えられる。 年) は、『日本古典文学大辞典』(第三巻、 岩波書店、一九八四年、 人情本作家となっ 武藤元昭

六

は出版されていない。

しかし、

第三輯は稿本のみが残り、

- 七 れる。 これらの稿本は、 比較する板本は、馬琴のものについては初版本相当とされている本とした。 いずれも巻之五の裏表紙に稿了年月日や「筆福硯壽」「大吉利市」の文字が書かれた、 筆耕に渡した最終稿と目さ
- 範囲が一〇丁分であり、今回と範囲が異なる。 大島(二〇〇〇)の調査資料は八犬伝②と同じ谷金川が筆耕であるが、 した通りに調査資料を改めて選定し、 調査を行う。 別の巻でも同様の書き方を行っているのか再確認する意味も含め、 仮名字体の使用分布の詳細な数量は明らかでない 今回は注九に記 ほ 査
- 別の筆耕が担当した箇所として比較可能な九輯巻之二十七、 ぼる八犬伝のうち、美濃屋甚三郎、 第八輯巻之二を資料に選んだ理由は、 『八犬伝』の稿本は、 者による文字の変動を確認できる資料と考えた(彫り師の主たる影響は、版面の文字の書風に表れると考える)。この筆耕を軸とし、 、を担当した。 両者は最も担当箇所が多く、 その担当箇所も重なる。 このことから、 八犬伝を通して最もよくある組み合わせの出版従 第四輯巻之三・四の二冊と、丁子屋平兵衛に板元が移った第八輯以降の四十六冊分が残る。その中で、 丁子屋平兵衛に板元が変わって以降の六十冊に携わっており、 筆耕と彫り師の組み合わせにある。第八輯巻之二の筆耕を担当している谷金川は、 四輯巻之三を選択した。 彫り師の横田守は同じく十四冊の 全百六冊
- 読本にも使用されていたのと同じ、 矢野 (一九九四) (一九九五) に一九黄表紙の漢字使用実態がまとめられている。 タルコレクション http://www.dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9892801 二〇一九年九月十一日参照) 「事」「也」「思 が頻出漢字であると指摘される。 図1に掲載した略書漢字が使われている。 矢野氏論考の調査資料のひとつである『奇妙頂礼胎錫杖』(国立国会図書館デ この論考ではくずしの程度には言及してい の 「也」を確認すると、馬琴

- ている。 の「毛」が字母の仮名字体については【も】を代表字としてはおらず、〈マ〉よりもバリエーションも様々なものがあることが示され とから、「末」を字母とする仮名字体においても【ま】がより一般的な仮名字体であったと考えられよう。なお、『仮名考』では〈モ〉 という認識が、すべての書き手にあったとは言い難いが、他の多くの板本にも【ま】は使用され、【 ま 】は使用されない場合もあるこ のバリエーションについて記した仮名の研究書である。〈マ〉には【ま】が立項されており、字母のくずしのバリエーションの説明に 「【 ま 】なと古人書り」(下ノ十七、勉誠社文庫 8、一九八一年、p. 153 (底本:国立国会図書館本)) とある。代表字(主用) が【ま】 『仮名考』(文政五〈一八二二〉 年) は、 各音の平仮名の代表的 な仮名字体を挙げ、 字源である字母と反切、 字母のくずし
- ||一【 || 【 || を使用しない資料に赤本(久保田一九九五b)、滑稽本『浮世風呂』(久保田一九九七)が挙げられる。 【 冬 】は赤本(久保 二八〉年)、『浮世親仁形気』(享保五〈一七二〇〉年)『英草紙』(寛延二〈一七四九〉年)、『雨月物語』(安永五〈一七七六〉年)、 九七)には使用されない。行数など文章形式が整った漢字平仮名混じり文を調査した坂(二〇一六)では『醒睡笑』(寛永五〈一六 『東海道中膝栗毛』(享和二〈一八○二〉-文化十一〈一八一四〉年)、『北越雪譜』(天保八〈一八三七〉年)では【 ℓ 】 と 【 々 】 (『浮世親仁形気』はなし) の使用が報告されている。 一九九五b)、合巻『偐紫田舎源氏』(内田一九九八c)、十返舎一九の黄表紙(矢野一九九〇)、滑稽本『浮世風呂』(久保田一九
- でいる戯作では、読本を除き、【そ】が主用される仮名字体といってよい。 坂(二〇一六)での調査された、『醒睡笑』『雨月物語』の 〈ホ〉は【 は 】 【 ほ 】 の使用数が 【 そ 】を上回る。 しかし、調査が及ん
- すべて【ま】で書いていることが内田(二〇〇〇)に報告されている。 八犬伝②の筆耕は『金毘羅船利生纜』の後半部を担当した谷金川であり、『金毘羅船利生纜』においても同じく【ま】の仮名字体を
- 표 玉村(一九九四)pp. 199-200、久保田(一九九七)p. 84
- 一六 内田 (一九九八 c) p. 22
- 中内田 (二〇〇〇) pp. 151-152
- については内田(一九九八b)に『偐紫田舎源氏』の稿本の行中に位置した〈リ〉3例が、板本の行頭ではすべて【 衤 】で書か 、やはり行頭における仮名字体の使い分けが指摘されている。 の行頭における仮名字体の使い分けは大島(二〇〇〇)p.23、〈リ〉については同論文 p.24 に指摘されている。また、〈リ〉
- 小松 (二〇〇六) pp. 140-142、 迫野(一九七四)pp. 40-41、伊坂(一九八八)pp. 63-65 などに指摘される
- 小松 (二〇〇六) p. 142
- 三 矢田(二○○八)pp. 42-43 には、一八○○-一八五○年代の娯楽小説の板面が、ジャンルの垣根を越えて類似した字形が共通して使

起こっており、この時期の商業的な整版印刷物の表記の画一化が作家自筆稿本において進んでいた可能性が考えられる。 において、質屋庫・八犬伝①に対し、八犬伝②・八犬伝③の稿本では、漢字・仮名両方において、一文字一文字が均一化した文字で表 記されるようになっていることである。「フォント化の進行」は、仮名字体の種類の草双紙と同一化とともに、一作家の稿本において 用されるようになり、この時期にフォント化の進行が進んだことが指摘されている。この点と関連した留意点として、馬琴読本の稿本

はじめに

仮名字体の使用傾向の差異について掘り下げ、 することができる。そこで本稿では、 筆稿本と板本が豊富に残るため、作家や筆耕がいつ頃、どのような表記を行っていたのかを検討することで、 受けられる。安定的な使用傾向を持つ〈シ〉の仮名字体は、使用傾向が報告されるのみで等閑視されがちだが、 名字体である。 板本の比較による作家と筆耕の表記の違い罒等、様々な角度から検討されてきた。その中で、〈シ〉の仮名字体は【 し 】エが非語頭 【 ゑ 】が語頭という多くの資料に共通する使用傾向及び、 近世期における仮名字体「の使用実態の研究では、作品や作家ごとの使用実態」、ジャンルごとの仮名字体の種類の違い』、 しかし、 馬琴読本の仮名字体に関する研究を見比べると、 馬琴読本の時期の異なる複数本の自筆稿本と、 その要因を詳細化する。 行頭に【ゑ】が使用される傾向が指摘され、 作品によって行頭の【 ゑ 】の使用傾向に若干の 複数名の筆耕による板本を資料とし、 よく取り上げられてきた仮 その差異の 馬琴読本には作家自 要 違い (因を追究 (シ)の · が 見

一 問題の所在

きょで次のように述べている。 [亭馬琴は、 板行にあたって誤りが発生する仮名表記について、『朝夷巡嶋記』初輯第二篇巻之一(文化一四〈一八一七〉年) の前書

義において違ざれども。【ゑ】は上におくのぎたがとし。【ゑ】もじを【し】とし。【 を】 作者といへども。 坐に謬る。 作者まづ醪て。 傭書画工謬る。書画 謬りしょぐわこうあやまり て。棗人又謬る。(中略)ゑ えをへとし。 ひ るを

仮名遣いと並べて、 仮名字体の使用位置について言及している。 前書きには、〈シ〉と〈ハ〉の仮名字体がみえ、 今回取り上 一げる

しは 「かしら」として【ゑ】、「下」ないしは「かしらにかゝさる」ものとして【し】が挙げられるのと共通する。 は「【 ゑ 】は上」「【 し 】は下」と使用位置の認識が明確に示されている+。これは、一部の歌学書・仮名遣書^に、「上」

の【し】【ゑ】は平仮名資料に必ずといってよいほど使用される仮名字体で、 実態調査では、 次の使用傾向が指摘されてい

る。

1 語における使用位置 くの場合、 【 友 】が語頭や形態素頭に使用され、【 し 】が非語 語頭には【ゑ】が優勢的に使用される^九。 頭、 もしくは使用位置に制限なく使用される。

2 行における使用位置 行頭に【ゑ】が偏る傾向がある¹○。

が偏るのは、 校令に際して【し】【ゑ】の使用位置を区別して残す意見もあった!ほど、表記習慣として定着していた。一方で、 (天保三〈一八三二〉 は中世の韻文・散文ほか書状や、 近世期だと宗綱筆『土左日記』(慶長五〈一六〇〇〉年)、咄本『鹿の子餅』(明和九〈一七七二〉年)、人情本『春色梅児誉美 年)など、一部の資料に限って報告されている「こ。 近世期の板本等に広く確認され、仮名字体を一音一字に定めた明治三三〈一九〇〇〉年の小学 2の行頭に【 ゑ 】

方に使用する傾向があったと分かる。 が行頭に位置すると【え】が書かれ、板本で行中に位置が移ると【し】が書かれる。 で行頭に位置すると【 ゑ 】が使用される。 みられる使用傾向として、行頭に【 ゑ 】が使用されることが報告される。すなわち、稿本で、通常【 し 】を使用する語中の (二○○○) では、【し】が非語頭、【太】が語頭・形態素頭に使用されていたことを指摘している。更に、 『南総里見八犬伝』第八輯巻之一(天保三〈一八三三〉年)の自筆稿本・板本といった、自筆資料を中心として仮名字体を調査した大島 さて、馬琴の自筆資料や板本における〈シ〉の仮名字体の使用実態を明らかにした先行研究に目を向けたい。馬琴の書簡や日 以上から、 馬琴及び板本の清書を行った筆耕は、 また、稿本の行中おける語中の【し】が板本 読本の表記に【ゑ】を語頭と行頭の 八犬伝稿本· 板本の

本の仮名字体の使用実態については、 『南総里見八犬伝』 肇輯巻之一 (文化一一〈一八一五〉 読本 月氷竒縁』 年)の調査をした市地(二〇一五)があり、【し】が非語頭、【ゑ】が語 巻之一(文化二〈一八〇五〉 年)、 『椿説弓張月』前篇巻之一(文化四

る(合巻は読本と体裁・表記体が大きく異なるため、本稿では検討対象を		谷金川	0	0	小輯巻之一	表 1 本 <i>a</i>
	Ξ				した	
	八一		につく假	~】は下	ラジ山	
が【ゑ】で	文化一四年		におくの	気」は上		
特別〈シ〉	道 (二八一四)	千形仲	×	0	野 報 巻 之 一	研究に
の仙橘	: 二八〇		>	(: 引	こお
生纜」	文化四年	下 月	<)	ラ長月	ける
使用さ	文化二年	不明	×	0	月氷竒縁	馬琴
頭・形	年	筆耕	行頭【怎】	語頭 (玄) に	作品	読

使用 筆耕の両者が行頭に【 ゑ 】を使用するものの、 おける使用傾向の 多くの資料に共通するため、 は八犬伝第八輯巻之一までの期間で、 わけではない。 本に共通する【 ゑ 】を語頭、【 し 】を非語頭とする語における使用位置のことかと考えられるが、行頭も 「上」として捉えられな 【 ゑ 】を使用するという用字を行わなかった 「≒、ということになる。「【 ゑ 】は上」に該当したのが語頭のみだったとすれ 【 太 】の使用は、 傾向を時系列順に並べると表1の通りになる。 「【ゑ】は上」という使用位置が、 差異が何に基づくのか追究することで、 八犬伝第八輯巻之一にのみ確認されている。 よくある使用傾向が当てはまればその傾向が指摘されるのみとなりがちだが、 行頭に【ゑ】を使用するようになった可能性がある。 月氷竒縁・弓張月・八犬伝肇輯巻之一(三本とも稿本が現存しない) 語頭及び行頭という認識だったとすれば、 語頭における【ゑ】の使用傾向は馬琴読本に共通しているもの 板本における仮名字体の用字の実際を詳細化することが可能だと思われ 「「怎」 読本に絞る)。馬琴の言と、 は上」「【し】は下」という言は馬琴自筆の書 <u>ે</u> 先行研究における馬琴読本の【ゑ】 八犬伝第八輯巻之一 の仮名字体の使用傾 以上のような馬琴読本に の筆耕は、 の時点では作者 の、 簡• 向 行頭におけ はあまりに ば、 日 行頭に 記 馬

る

本に調査範囲を広げ、 は 以上の馬琴や筆耕における 『南総里見八犬伝』(文化一一-天保一三〈一八四二〉年)等に数十年に渡る稿本が残り、 馬琴及び筆耕が <u>ે</u> の仮名字体の使用傾向を解き明かすには、 <u>ે</u> に関してどのような仮名字体の用字を行っていたの 大島 (1000)板 本には担当する筆耕が分明なもの の調査資料以前 かを調査する必要が 以 後 あ \mathcal{O} る。 稿本が残る読 馬 が残存

る。

12

する。 に時期的な変化があるのか、 **∂** の仮名字体の使用位置の傾向を把握し、 調査ではそうした中から時期の異なる自筆稿本と、 筆耕によって表記に違いがあるの 各資料の使用傾向に差異があるか確認する。その上で、〈シ〉 筆耕が異なる板本に調査資料を絞り、 か、 具体的な用例から要因の検討を行う。 まず作家と複数名の筆耕に の仮名字体の使用 お 傾向 け る

馬琴読本における〈シ〉 の仮名字体の使用傾向

Ξ

<u>=</u> 調査資料

査資料と	歯か	1	alde 3	
	南な			
	総里見八犬伝い 犬伝の とうさとみはっけんでん		昔語質屋庫むかしかたりしちやのくら	調査資料
七巻第 之九 二輯	巻 第 之 辑	巻第 之 三 輯	巻 之 一	調査範
四一第 丁才四二 一回	二丁才 一丁才 一	七一第 丁丁五 一	二六丁ウ 一三丁ウ~	囲
八 犬 伝 ③	八 犬 伝 ②	八犬伝①	質屋庫	略称
	亭 馬	くていばきん		著者
成白馬台音	谷金川	千 形 仲 道	鈴木 武 箭 亭	筆 耕
田田 珠	横田守	作 村 喜	九崎店	彫り師
平兵衛	平兵衛	八崎平	太明月屋	板元
天保一〇〈一八四〇〉年正月天保九〈一八三九〉年五月	天保三〈一八三三〉年五月天保二〈一八三二〉年一二月	文政三〈一八二〇〉年一一月文政三〈一八二〇〉年六月	文化七〈一八一一〉年一一月文化七〈一八一一〉年七月	稿了年・発行年
	四丁才	七 四丁才 八犬伝 第九輯 第一四二回 八犬伝 (本田 丁子屋 天保九〈一八三九〉年五月 年五月 年五月 年五月 年五月 第八輯 第七六回 由亭馬琴 (本田 丁子屋 天保九〈一八三二〉年五月 (本田 丁子屋 天保二〈一八三二〉年五月	大伝 第四輯 第三五回 株之二一丁オ〜 一八犬伝③ 大伝③ 本二二丁オ (一八二二) 本五月 第九輯 第一四二回 大伝② 本金二二丁オ (十丁オ〜 一八犬伝②) 本部イントンはある人 本金川 (本の) 本日 大子屋 天保二〈一八三二〉年五月 第四輯 第三五回 大子屋 大保二〈一八三二〉年五月 本日 本日 中村喜山崎平 (本) 文政三〈一八二〇〉年一一	大大伝 巻之二 一丁オ〜

は制 料を傍線部の略称で呼ぶ)。 『南総里見八犬伝』から第四輯巻之三(八犬伝①)、第八輯巻之二(八犬伝②)、 調査にあたり、 作時期及び、 表 2 筆耕^一七がそれぞれ異なる「 明断録の筆耕は不明だが、稿本では〈ア〉の仮名字体の大半に【 6】(〈ア〉 読本五本の稿本と板本を調査資料とした一六。 また比較資料に松亭金水「元の『北條泰時明断録』 曲亭馬琴の 読本は『昔語質屋庫』と、 第九輯巻之二七 (八犬伝③) 36 例中 32 例) 長期に渡って執筆が続い を加えた二〇 を選出した。これら が使用されるも (本稿では資

た

により、二名の作家の自筆と、

五名の清書の 36 例中

あり方から仮名字体の用字の検討を行うことができる。

に書き換えられるなどの違いがあり、

筆耕の清書が存在したと考えられ

る。 分

以

調査範囲は

小 説一

章節

使用傾向の検討を行った

の仮名字体の種類と使用数及び用例に基づいて仮名字体の

丁半~一六丁半分)とし、そこに出現する〈シ〉

0

0 板

本では

すべて【あ】(〈ア〉

36 例

表 3 〈シ	/>	の似	5名字	≥体	の使用	 引分布					
				行			自立語	5		付属	属語
				頭 計	語頭	複合語 下接部頭	語中	複合語 上接部末	語末	文節中	文節末
	稿	1	209	2	2[0]	32[0]	23[0]	4[0]	58[0]	43[1]	47[1]
	恒本	冬	57	8	42 [4]	12 [2]	0[0]	0[0]	0[0]	3[2]	0[0]
質屋庫	4	し	18	0	0[0]	0[0]	0[0]	2[0]	7[0]	6[0]	2[0]
貝圧件	板	(187	1	2[0]	34[1]	21[0]	2[0]	48[0]	40[0]	40[0]
	本	冬	55	3	42[1]	10[1]	0[0]	1[0]	1[1]	1[0]	0[0]
	4	し	42	0	0[0]	0[0]	3[0]	3[0]	16[0]	11[0]	9[0]
	稿	1	289	2	0[0]	24[0]	47[0]	9[0]	100[0]	47[0]	63 [2]
八犬伝①	本	冬	25	2	21[1]	3[0]	1[1]	0[0]	0[0]	0[0]	0[0]
八大伍山	板	(289	8	0[0]	24[0]	47[0]	9[0]	100[0]	47[5]	63 [3]
	本	杰	25	3	21 [2]	3[0]	1[1]	0[0]	0[0]	0[0]	0[0]
	稿	(265	0	9[0]	12[0]	25[0]	4[0]	78[0]	64[0]	73[0]
八犬伝②	本	蒸	16	2	9[1]	5[0]	1[0]	0[0]	0[0]	1[1]	0[0]
八人伍公	板	(260	0	8[0]	11[0]	24[0]	4[0]	76[0]	64[0]	73[0]
	本	杰	21	5	10[0]	6[0]	2[2]	0[0]	2[2]	1[1]	0[0]
	稿	(255	0	1[0]	24[0]	31[0]	8[0]	73[0]	81[0]	37[0]
n +1-@	本	杰	38	12	7[2]	12 [3]	0[0]	1[1]	15 [4]	3 [2]	0[0]
八犬伝③	板	(249	0	0[0]	23[0]	29[0]	9[0]	74[0]	77[0]	37[0]
	本	杰	44	11	8[3]	13 [2]	2 [2]	0[0]	14[1]	7[3]	0[0]
	1-	(143	3	2[0]	17[0]	17[0]	3[0]	59[2]	35[1]	9[0]
	稿本	杰	4	0	0[0]	0[0]	4[0]	0[0]	0[0]	0[0]	0[0]
ㅁㅁㅆㄷᄼᆿ	4	し	20	0	0[0]	0[0]	0[0]	0[0]	8[0]	8[0]	4[0]
明断録	+ ⊏	(150	0	2[0]	17[0]	19[0]	3[0]	62[0]	36[0]	11[0]
	板本	冬	6	4	0[0]	0[0]	2[0]	0[0]	1[1]	3 [3]	0[0]
	平	し	11	0	0[0]	0[0]	0[0]	0[0]	4[0]	4[0]	3[0]
※自立語、	付加	属語	、行	頭に	おいて	数量が最	も多い	欄に網掛け	ナをした	0	

※[]内は行頭に位置した仮名字体の数である。

の文字を囲むように書かれる【し】も使用される。 類のうち 仮名字体の使用数をまとめている。なお、 ける使用位置の分布三、 し】【ゑ】が使用され、更に、 まず〈シ〉の仮名字体の種類は、

確認する。 |用数は、全資料において【し】の仮名字体が最も多く、 ①では行頭に 主用字体といえる。 次に行頭の〈シ〉の仮名字体を、 まず馬琴の自筆稿本のうち、 【し】【 ゑ 】の両方を書くことがある。 表3 [行頭計] より 質屋庫・八犬伝

しかし、

八犬伝②・八犬伝③の稿本では【 ゑ 】のみを

〈シ〉の仮名字体の使用 傾向

使用位置の

分 \mathcal{O} 料における稿本と板本の仮名字体ごとの使用数、

調査範囲内での行頭

Ó

「複合語下接部頭」

は形態素頭にあたる。

五本の資料すべてに

質屋庫·

明断録には前

全用例数及び、使用分布をみていきたい。

最初に、

五本の資料から、

シシ

の仮名字体の

種

表3には各資

語にお

多い。 行頭に書く。 ところが、 筆 耕の清書を経た板本では、 八犬伝②・八犬伝③の板本の行頭にはすべて【 ゑ 】が書かれている。 質屋庫 ・八犬伝①の行頭に【 し 】 【 友 】の両方が書かれる。 しかも八犬伝①は【し】

頭の使用数と一致しない。 屋庫・八犬伝①・八犬伝②にも僅かにあるが、これらは、 が 使用が偏り、 かし、語頭の【ゑ】に着目すると、八犬伝①と八犬伝②の間で使用数が減少している。更に、質屋庫・八犬伝①・八犬伝②では【ゑ】 語頭に偏るが、 語の位置における 八犬伝③では語頭に加えて語末などにも分布する三言。 の仮名字体の使用分布を確認する。 ほぼ行頭での使用である。 全資料の使用傾向として、【し】が自立語語中末と付 自立語語中末、 八犬伝③の自立語語中末、 付属語において【ゑ】が使用される例は質 付属語の【 ゑ 】は行 属 語に

本の行頭には【 ゑ 】が偏ることを押さえておきたい。 なお、 松亭金水の明断録では、 稿本・板本共に【し】 の使用数が極めて多く、 使用数僅かな【ゑ】は語中に使用される。 また板

の仮名字体において使用傾向に大きな変化はなく、【し】と【ゑ】で書き換えられる場合は僅かである。 もまず馬琴の表記に倣っていたといえる。 以上の馬琴読本における稿本・板本の 〈シ〉の仮名字体の使用傾向から、 次のことが指摘できる。 第 こ、 基本的には、 稿本と板本には、 いずれの筆

紀二に、〈シ〉の仮名字体の使用傾向について、次の三点が確認できた。

- $\widehat{1}$ 行頭に使用する仮名字体について、 馬琴・筆耕共に、 質屋庫・八犬伝①では【し】【ゑ】 の両方が使用され、 八犬伝②・八
- (2) 語頭における【ゑ】の使用数が、八犬伝①と八犬伝②の間で減少している。
- (3) 八犬伝③では語頭に加えて語末などに【ゑ】が使用されるようになっている。
- みられる。 稿 本 行 頭に 板本のそれぞれにおいて行頭に【ゑ】をどのような場合に書いているのか確認し、 位置する仮名字体については、 全体の用例数としては少 ない ものの、 稿本と板本におい 馬琴及び筆耕 て仮名字体 0 0 行頭 における

行う。 仮名字体の選択に個人差があるのか、 時期的な変化があったのか、 詳しく検討する必要がある。(1)については章を変えて検討を

きたい。 (2)(3) については、 馬琴・筆耕ともに表記の時期的な変化があったと見做すことができる。 先にその事情を明らかにしてお

| 三-二-| 語頭における【 ゑ 】の使用数の減少

表	4 〈シ〉 を	と語頭	頁とする
和	語		
月	本行和語	30	38.46%
水	和訓	48	61.54%
	計	78	100%
弓	本行和語	42	39.25%
張	和訓	65	60.75%
月	計 上/= 10==	107	100%
質	本行和語	44	77.19%
屋店	和訓	13	22.81%
庫ハ	十年四三	57	100%
犬	本行和語	22	25.28%
人伝	和訓	65	74.72%
(1)	計	87	100%
八	本行和語	18	18.95%
犬	和訓	77	81.05%
伝②	計	95	100%
八	本行和語	9	11.53%
犬伝	和訓	69	88.47%
1 <u>4</u> (3)	計	78	100%
明	本行和語	2	4.88%
断	和訓	39	95.12%
録	計	41	100%

章に語頭を〈シ〉とする和語を平仮名で書かなくなっていたことを要因とする。 八犬伝①と八犬伝②の間において語頭への【 ゑ 】の使用数が減少しているのは、 そもそも馬琴が漢字平仮名混じり文の読本の文

ら八犬伝③の間で、 である。参考に、 表4は語頭を〈シ〉とする和語について、本行に平仮名で書かれるものと、振り仮名に和訓で書かれるものの割合をまとめたもの 月氷竒縁・弓張月の巻之一における表記の調査を加えている「図。これによると、質屋庫を例外として、 漢字の和訓の割合が六○%台から八○%台に増加していることが分かる。これは間接的に、 漢字表記の増加を示 月氷竒縁か

「しからば」の表記の変遷に示した。右の5語は、質屋庫以前の本行では平仮名で書かれており、漢字表記がまれだった。ところが それが、 作 品ごとの語彙の違いのためではないことを、 表5の動詞 「しる (知)」、 副詞 「しばし」「しばしば」、 接続詞 「しかるに」

記※た※ 2と同じく語頭は【怎 】で書かれる。()「しばしば」の漢字表記では、1、「しかるに 」「しからば 」「しばし 」「しばしば」の漢字表記では、1次の名字体は稿本と板本とで字体が相違する場合の、稿本の用例である(「知る」の漢字表記では、(^)に入れた仮名字体が振り仮名として1 振り仮名はすべて本行での平仮名表 か れ る 内 の 」に入れ

		月氷竒縁	弓 張 月	質屋庫	八犬伝①	八犬伝②	八犬伝③	明 断 録
▼	知る 刊年	1805	1807	1811	1820	1833	1840	1847
	延べ	11	7	18	19	14	16	4
平仮名	える	10	6	18	6	0	0	0
	知(()	1	1	0	9	12	2	4
漢	知 (点)	0	0	0	1	2	6	0
字	知 (<u>太</u> [l])	0	0	0	3	0	8	0
▼	O 10 U							
	延べ	0	4	7	0	2	0	2
平仮名	えかるようるようるようるようるようるようるようるようるようるよう	0	4	7	0	0	0	0
漢字	介るふ 介るふ	0	0	0	0	2	0	0
T	然るふ	0	0	0	0	0	0	2
▼	-							
_	延べ	1	0	2	1	0	1	0
平仮名 漢字	点かられ 点かられ	1	0	2	1	0	0	0
漢字	介らい	0	0	0	0	0	1	0
▼	しばし					_		
	延べ	0	8	1	1	6	2	3
平仮名	左 た し	0	8	1	0	0	0	0
漢	霎時	0	0	0	1	6	0	3
字	一霎時	0	0	0	0	0	2	0
▼	 しばしば	1	1					
	延べ	1	6	0	1	0	1	2
平仮名 漢字	ゑハん∖ ゑえん∖	1	6	0	1	0	0	0
_ 漢 字	屡	0	0	0	0	0	1	2

仮名を付して表記される。 八犬伝①以降は、「しる」「しばし」が漢字に振り仮名を付して表記されるようになる。 「しかるに」も漢字表記されるようになる。そして、八犬伝①では平仮名表記だった「しばしば」も、 八大伝②では、「しる」をすべて漢字で表記 八犬伝③では漢字に振り

例えば月氷竒縁・弓張月・ 平仮名表記だった語が振り仮名の 本行に語頭を 〈シ〉とする語が平仮名で書かれなくなれば、 質屋庫には平仮名表記だった「これ」「この」も、 ついた漢字表記になるのは、 語頭に使用する【ゑ】が本行から減少するのは自明の理である。 〈シ〉を語頭とする語に限ったことではなく、 八犬伝では「是」「這」と表記するようになる。 全体的 な傾向だった。

三-二-二 八犬伝③における語末の【 ゑ 】

もとは【 し 】を使用していた語末に【 玄 】を書いていたのである。 丁オ L5)、「寫 $oldsymbol{s}$ $oldsymbol{e}$ $oldsymbol{o}$ $oldsymbol{o}$ (七丁ウ L11) を見出すことができる。八犬伝②にて「戰して」「寫したる」の用例を参照すると「戰 $\overline{}$ で」 丁ウ L7)など変字法とみられる用例が 10 例あるが、行中に位置する自立語語末の用例に「潰 ゑ て」(四丁ウ L11)、「戰 ゑ て」(五 次に、(3)に挙げた八犬伝③の自立語語末における【ゑ】の用例!se確認すると「示ゑ」(二丁オ L2)、「課し合ゑ っ」(二

L7)、「正 ゑ く」(十丁ウ L3) とすべて自立語語中である。八犬伝③に近い使用傾向があるといえよう。 していた語末に、【ゑ】を使用するようになったという、 以上から馬琴の【 玄 】の使用傾向に、漢字表記の増加による語頭における【 玄 】の使用数の減少及び、もともとは【 し 】を使用 時期的な変化があることを確認した。次節では稿本と板本における行頭

〈シ〉の仮名字体の行頭における使用傾向

四

用例に注目し、

検討を加える。

に追究したい。 間の読本四本から馬琴自筆表記の経年的側面と、 を書くのか確認する。 ここでは、稿本と板本のそれぞれの行頭における〈シ〉の仮名字体の用例をみていき、馬琴及び筆耕がどのような場合に【 ゑ 】 大島(三○○○)では馬琴と筆耕の両者が【 ゑ 】を行頭に使用することを示したが、一八一一~一八四○年の 複数名の筆耕による表記を検討し、 行頭における〈シ〉の仮名字体の使用実態を更

- | 馬琴自筆稿本の行頭における〈シ〉の仮名字体の用例

表6 稿本における行頭の〈シ〉 八犬伝① 質屋庫 9オ 12ウ 5オ 4オ 6オ 15オ25ウ25ウ15ウ22ウ 18オ26ウ23ウ14オ21オ 7 2 5 2 2 4 9 1 1 4 6 3 4 8 幼 あ 5 怯 贈 撃 小 の 對 改 応 接 ŋ ع ŧ を せ 囂 せ J J 面 名 杰 点 点 点 羔 羔 点 羔 羔 羔 点 杰 稿 本 る う ξ ξ 給 9 う う つ 9 < 6 5 n ŋ 5 5 9 n λ n n λ 15オ25ウ25ウ15ウ22オ17ウ26ウ23ウ13ウ21オ 2才 12ウ5オ 4才 6オ 9才 3 3 3 行 3 4 改 あ を 応 囂 贈 撃 幼 8) 對 点 点 点 う う 6 り 小 名 杰 接 せ 面 (0) と 怯 5 点 5 VE < 1 点 5 (せ 羔 し 1 友 Ð 板 6 5 \star う ((給 つ (n 本 て て ξ n ŋ 6 λ \star \star λ / \star W カ す お す 注 ず 6 すま ば ば ばば < る 記 る U X 明断録 __ 八犬伝③ 9ウ 5オ 7オ 13オ4オ 11オ12オ11ウ10オ8オ7オ5オ 14オ1オ 8ウ Γ 8 8 5 7 3 10 4 8 7 6 9 6 _ は ち 嘆 る 請 鑒 種 偸 行 سلح 定 J 歩 賞 過 鳴 呉 臥 出 閲 禀 戰 就 !頭を表-点 点 点 点 1 羔 点 羔 羔 羔 羔 点 点 て ぬ 得 て 1 ž ξ ξ ξ う う T う 1 m ど ŧ う n れ ٧ わ 13オ 4オ 11オ12オ11ウ10オ 8オ 8ウ 9ウ 5才 7才 7オ 5才 14オ1オ 7 5 7 3 8 7 5 9 6 8 10 4 6 6 呉 閲 鑒 戰 過 臥 出 る 請 種 偸 う 嘆 ど 羔 J ((禀 定 歩 点 1 1 ち 賞 就 羔 て 得 羔 点 点 う ぬ 羔 ξ (鳴 羔 ξ 羔 ξ 羔 ど \star ŧ て (m う (ξ う * う > n れ て n うこ・ひ ぬふ す け つ ず Š しきる みばま ぐ れ き あは

١ ، 認した。ここでは質屋 動詞 質屋庫では、 行 表6に、 琴 頭 \mathcal{O} \mathcal{O} \mathcal{O} 語 自 構成 筀 稿本 華稿本で 羔 上 . О 羔 0) \mathcal{O} 調査範囲内におい う は、 切 Ś が れ 庫 質屋 あ 目 8 と 例、 八犬伝①と八犬伝②・ が 行頭に 0 庫 2 (八 例 犬伝 位 は て行頭に 置 付 が ① に 属 l 2 てい 語 例、 は \mathcal{O} () > る。 連 行 (八犬伝③稿 語 頭に 1 が ニシテで 書かれ 位置す の 点 2 例 てい あ る。 本におい 八 ŋ, 八犬伝② た用例を は 付属 そ 羔 \mathcal{O} て、 語にあたる。 を板本の のうち 八 行 八犬伝③ 頭に は 4 板本で行中に 用例と共にまとめた。 太 で 例 これらは は は 語 を 点 頭 表記 に移ると 2 行 \mathcal{O} ける場 中の 例 4 は複合語 が 語に 行 (資料で 一合に 頭 おける使用 に 違 使 下 ごとに 改 11 用 接 \emptyset 部 が さ 6 頭 用 あ れ れる 傾 に 例 る て 向と変わら あたる漢 を \mathcal{O} [表6★]。 たことを 確 カコ 認す 検 討 る。 語 を行

連語ニシテは調査範囲内に8例あるが、行頭に位置する用例以外は【し】で書かれる。

が 中に移ると【し】に改められている[表6★]。 八犬伝①では、 1例、【し】が位置する 2 例は付属語、複合語下接部頭にあたる漢語サ変動詞の語構成上の切れ目である。「囂しく」は板本で行 行頭に【 太 】 2 例、【 し 】 2 例の計 4 例が位置する。 【 太 】 は語頭と行頭が一致する 1 例と、 「囂しく」の語

ある。後者は板本で行中に移ると【し】で書かれている [表6★]。 八犬伝②の稿本では語頭の【ゑ】が行頭に位置している1例と、 付属語のシテが行頭に【 ゑ 】で書かれている 1 例 の計 2 で書 例で

八犬	
伝③で	
は、 行	
11 頭 に	
() >	
が 位置	
直して	
い る 12	
例す	
べてが	
語頭	
· 複 合	
語下	
接部頭	
· 語 末	
· 付属	
語の別に	
にかかり	
わらず	
太	
」 で	

			八	犬伝	·(1)				皙鳥	全庫					
137	19 戊	19オ	<u></u> 11オ		7ウ	3オ	2オ	1オ	15オ		丁				
6	2	9	7	7	2	2	4	6	1	5	行				
な	あ	出	取	思	心	刺	給	聞	進		13				
う	6	さ	5	ひ	地	殺	7	(5						
1	ベ	れ	ĺ	((1	(4,	1	改	1+				
\	1	((事	m	₹	(W,	5	名	稿				
	や	(#	.,				b b	(本				
(75								ט	(
う															
13オ	12ウ		11オ	8才	7ウ	3才	2オ	1オ	14ウ	15ウ	丁				
7	3	9	7	7	2	2	4	6	10	3	行				
る															
う	あ	出													
1	6	さ	取	思	心	刺	給			改					
\	ベ	れ	5	Q_{ν}	地	殺	ひ	聞	進	名	板				
点	1	(((((((点	(本				
う	や			事	m	Ž		4,	9	,					
☆	,			4.		`		•	b						
									☆						
									_						
			بل		₊ ~	こさ		き	らまっ						
が			じょ		·	7 1			1) 7						
が			じら		ちょ	ろし	,	7	っゐ						
	明幽	折録	U S		۲ م	八	犬伝		00				犬伝	(2)	
が 9ウ	明 4 オ	所録 9オ	じら 4オ	14オ		八	犬伝		り 7オ	4才	11オ	八 10ウ	犬伝 6オ	② 6才	6才
9ウ 4	4才 10	9才 3		14オ 2	11オ 5	八 10オ 4	犬伝 9ウ 4	③ 8才 5	7オ 9	6	2	10ウ 8	6オ 11	6才 9	6才 5
9 4 強	4才 10 做	9オ 3 5	4才	14才 2 恋	11才 5 <u>谚</u>	八 10オ	大伝 9ウ 4 坐	③ 8才 5 撃	7才 9 立		2 遽	10ウ 8 起	6才 11 聞	6才 9 説	
9ウ 4 強 く	4才 10	9才 3	4才 10 貧	14才 2 恋 し	11オ 5	八 10オ 4 今 ハ	犬伝 9ウ 4	3 8才 5 撃 果	7オ 9	6	2 遽 し	10ウ 8 起 し	6オ 11	6才 9	5
9 4 強	4才 10 做	9オ 3 5	4才 10	14才 2 恋	11才 5 <u>谚</u>	八 10才 4 今	大伝 9ウ 4 坐	③ 8才 5 撃	7才 9 立	6 在	2 遽	10ウ 8 起	6才 11 聞	6才 9 説	5 面
9ウ 4 強 く	4才 10 做 し	9オ 3 5 り	4才 10 貧	14才 2 恋 し	11才 5 遽 (八 10オ 4 今 ハ し	大伝 9ウ 4 坐 し	3 8才 5 撃 果	7オ 9 立 出 ん	6 在 り	2 遽 し	10ウ 8 起 し	6才 11 聞 え	6才 9 説 示	<u>5</u> 百 會
9ウ 4 強くし	4才 10 做 (9才 3 5 り し	4才 10 貧 え	14才 2 恋 し	11才 5 遽 (八 10オ 4 今 ハ	大伝 9ウ 4 坐 し	3 8オ 5 撃果 ゑ	7才 9 立 出	6 在 り し	2 遽 し	10ウ 8 起 し	6才 11 聞えし	6才 9 説 示し	5 百 會 (
9ウ 4 強くし	4才 10 做 (9才 3 ふりしよ	4才 10 貧 え く	14才 2 恋 し	11才 5 遽 (八 10オ 4 今 ハ し	大伝 9ウ 4 坐 し	3 8オ 5 撃果 ゑ	7オ 9 立 出 ん と し	6 在りしう	2 遽 し	10ウ 8 起 し	6才 11 聞えしう	6才 9 説 示し	5 百 會 (
9ウ 4 強くし	4才 10 做 (9才 3 ふりしよ	4才 10 貧 <u>太</u> く し	14才 2 恋した	11才 5 遽 (八 10才 4 今 ハ し も	大伝 9ウ 4 坐 し て	3 8才 5 撃 果 太 (7オ 9 立 出 ん と し き	6 在りしう	2 遽しく	10ウ 8 起 し き	6才11聞えしうハ	6才 9 説 示し	5 百 會 (
9ウ4強くして	4才 10 做 し て	9才 3 ふりしよ 3	4才 10 貧 <u> </u>	14才 2 恋した	11才 <u>5</u> 遽 く	八 10才 4 今 ハ し も	大伝 9ウ 4 坐 し て	3 8才 5 撃 果 太 (7オ 9 立 出 ん と し え 7オ 10	6在りしうい	2 遽しく	10ウ 8 起 し	6才11聞えしうハ	6才 9 説 示 し そ	5 面會して
9ウ 4 強くして 9ウ	4才 10 做して 4ウ	9オ 3 5 りしよ 3 9オ	4才 10 貧 <u>気</u> くして 4才	14オ 2 恋 し た 14オ	11才 5 遽 く	八 10オ 4 今 り し も	犬伝 9ウ 4 坐 し て	3 8才 5 撃果 ゑ (78才 6	7オ 9 立 出 ん と し え 10 立	6 在りしうハ 13ウ	2 遽 く 11オ	10ウ 8 起 し え 10ウ	6才 11 聞えし 6ウ 6ウ	6才 9 説示しそ 6オ	5 面 會 し て
9ウ 4 強くして 9ウ 4	4才 10 做して 4ウ	9オ 3 5 りしよ 3 9オ	4才 10 貧 <u>条</u> くして 4才 10	14オ 2 恋 し た 14オ	11才 5 遽 く	八 10オ 4 今 り も 10オ 6	犬伝 9ウ 4 坐 し て	3 8オ 5 撃果 え (78オ 6 撃	7オ 9 立 出 ん と し え 7オ 10	6 在りしうハ 13ウ 11	2 遽 く 11オ	10ウ 8 起 し え 10ウ	6才 11 聞えしうい 6ウ 1	6才 9 説示しそ 6才 9	5 面 會 て 6オ 6
9ウ 4強くして 9ウ 4 強	4才 10 做 し て 4ウ 1	9才 3 5りしよ 9 3 る	4才10貧 友くして4才10	14才 2 恋 し 宛 14才 3	111才 5 遽 く	八 10オ 4 今 り し も	犬伝 9ウ 4 坐 して 17ウ 11	:③ 8才 5撃果 <u>まし</u> 28才 6 撃果	7オ 9 立 出 ん と し え 10 立	6 在りしうい 13ウ 11	2 遽 く 11オ 3	10ウ 8 起 し え 10ウ 9	6才11間えしうい6ウ1間1間	6才 9 説示しき 6才 9	5 面會して 6才 6
9ウ 4強くして 9ウ 4 強く	4才 10 做して 4ウ 1	9才 3 3 ふりしよ 3 9才 3	4才 10 貧 素 4才 10 貧く	14才 2 恋した 14才 3	111才 5 遽 く 111才 6	八 10才 4 今 り 10才 6	犬伝 9ウ 4 坐 く て 17ウ 11	3 8 5 撃果 <u>ま</u> し 8 7 8 7 8 7 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	7才 9 立出んとしき 7才 10 立出ん	6在りしうハ 13ウ 在り	2 遽 く 11オ 3	10ウ 8 起しそ 10ウ 9	6才11 聞えしかい6ウ1間え	6才 9 9説示しる 6才 9 説示	5 面會 て 6 るす 6
9ウ 4強くして 9ウ 4 強	4才 10 做 し て 4ウ 1	9才 3 5りしよ 9 3 る	4才10貧 友くして4才10	14オ 2 恋 し 宛 14オ 3	111才 5 遽 く	八 10才 4 今 り し も 10才 6	犬伝 9ウ 4 坐 して 17ウ 11	:③ 8才 5撃果 <u>まし</u> 28才 6 撃果	7オ 9 立 出 ん と し え 7 オ 10 立 出	6 在りしうい 13ウ 11	2 遽 く 11オ 3	10ウ 8 起 し え 10ウ 9	6才11間えしうい6ウ1間1間	6才 9 説示しき 6才 9	5 面會して 6才 6
9ウ 4強くして 9ウ 4 強く	4才 10 做して 4ウ 1	9才 3 3 ふりしよ 3 9才 3	4才 10 貧 素 4才 10 貧く	14才 2 恋した 14才 3	111才 5 遽 く 111才 6	八 10才 4 今 り 10才 6	犬伝 9ウ 4 坐 く て 17ウ 11	3 8 5 撃果 <u>ま</u> し 8 7 8 7 8 7 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	7才 9 立出んとしき 7才 10 立出ん	6在りしうハ 13ウ 在り	2 遽 く 11オ 3	10ウ 8 起しそ 10ウ 9	6才11 聞えしかい6ウ1間え	6才 9 9説示しる 6才 9 説示	5 面會 て 6 るす 6
9 9 4 強くして 9 9 4 強く ゑて	4才 10 做して 4ウ 1 做 & て	9才3 ふりしよ 3 9才3 るり 点よ	4才 10 貧 煮 くして 4才 10 貧く まて	14オ 2 恋した 14オ 3 恋点	111才 5 遽 く 111才 6	八10才 4 今 か し も 110才 6	犬伝 9ウ 4 坐 し て 17ウ 11	(3) 8才 5 撃果 <u> </u>	7オ9立出んとしそ7オ10立出んとゑて	6在りしつい13ウ13ウ在り表	2 遽 (く 111才 3	10ウ 8起しき 10ウ 9 起気て	6才11聞えしうハ 6ウ1 聞え ゑか	6 3 9 説示しき 6 3 説示 ま	5 面會して
9ウ 4強くして 9ウ 4 強く	4才 10 做して 4ウ 1 做 素	9才3 ふりしよ 3 9才3	4才10貧 素くして4才10貧く素	14オ 2 恋した 14オ 3 恋点き	111才 5 遽 (く 111才 6	八 10才 4 今 り し も 10才 6	大伝 9ウ 4 坐して 17ウ 11	(3) 8才 5 撃果 <u> </u>	7 7 9 立 出 ん と し ミ 7 オ 10 立 出 ん と と た ま た も と も た と も た と も た も と も と も と も と も と も と も と も と も と も と も と も と も と も と も と も と と も と と も と も と も と も と も と も と も と も と も と も と も と も と も と も と も と も と も と も と も も も と も と も と も も も も も と も も も も も も も も も も も も も	6在りしうハ 13ウ11 在り えうハ	2 遽 (く 11才 3 遽 太 く	100 8 起 (支 100 9 起 太	6才11聞えしつい 6寸 聞え ゑかを	6 3 9 説示しる 6 3 説示 なる	5 百會 て 6才 6 百會 太
9 9 4 強くして 9 9 4 強く ゑて	4才 10 做して 4ウ 1 做 & て	9才3 ふりしよ 3 9才3 るり 点よ	4才 10 貧 煮 く し て 4才 10 貧 く 太 て ☆	14才 2 恋した 14才 3	111才 5 遽 (く 111才 6	八10才 4 今 ハ し も	犬伝 9ウ 4 坐 し て 17ウ 11	(3) 8才 5 撃果 <u> </u>	7オ9立出んとしそ7オ10立出んとゑて	6在りしうい 3511 在り まう	2 遽 (く 11才 3 遽 太 く ☆	10ウ 8起しき 10ウ 9 起気て☆	6才11聞えしうハ 6ウ1 聞え ゑか	6 3 9 説示しる 6 3 説示 なる	5 面會して
9 9 4 強くして 9 9 4 強く ゑて	4才 10 做して 4ウ 1 做 & て	9才3 ふりしよ 3 9才3	4才 10 貧 煮 くして 4才 10 貧く まて	14才 2 恋 (宛 14才 3	111才 5 遽 く 111才 6	八10才 4 今 ハ し も 10才 6 今 ハ <u>冬</u> も ☆	犬伝 9ウ 4 坐 し て 17ウ 11	(3) 8才 5 撃果 <u> </u>	7オ9立出んとしそ7オ10立出んとゑて	6在りしうハ 13ウ11 在り えうハ	2 遽 (く 11才 3 遽 太 く	10ウ 8起しき 10ウ 9 起気て☆	6才11聞えしつい 6寸 聞え ゑかを	6 3 9 説示しる 6 3 説示 なる	5 面會して

表7 板本における行頭の〈シ〉

157

か れる。 そのうち 出出 し得ず」 「臥しぬ」 0) み、 板本では行中に移って【し】で書か れる [表6★]。

ように見受けられる かば」を に【

玄

】を優先して書く。「

~しかば」の用例をみると、質屋庫では とがあったと分かる なお、 以上、 馬 松亭金水自筆の明断録稿本では行頭に 【ゑ】で表記している。 琴は質屋庫・八犬伝①の時点から、自立語・付属語の語中といえる一部の場合に限って、 [表6★]。 一方で、 質屋庫・ 八犬伝②は用例が少ないため使用傾向を判断できないものの、 八犬伝①の時点と八犬伝③とでは、【 太 】を行頭に表記するその適用 3 例が確認され、 「贈りしかば」を【し】で表記しており、 行中における仮名字体の使用傾向と変わら 八犬伝③では行頭のすべ 範囲が変化している 八犬伝③では 就

Ⅵ−二 板本の行頭における〈シ〉の仮名字体の用例

行頭の る。 配りの個人差で、 別 本 行 1移りの -で行が移るときのみ \dot{O} 0 大島 動 質屋庫の筆耕は このことから、 詞 み 筆耕にもそれが当てはまるのか確認しつつ、筆耕がどのような場合に【え】を行頭に表記したのか検討する。 行 筆耕が行頭において仮名字体の選択を行ったか否かが問われることになる。以上を踏まえ、 太 頭が \mathcal{O} (1000)<u>ે</u> 箇所が 活用 一致 】に書き換えている。 語 \mathcal{O} 尾 仮 する場合は少ない。 稿 では 本の 2例 名字体を表フか 漢語サ変動詞 もともと稿本に【ゑ】で書かれていた部 行ごとの字詰めが変わる。 筆耕 怎 通 過去 りにはならないという点に留意する必要がある。 名 の に書き換える。 助 (八犬伝②の谷金川と同 の語構成上の切れ目の 6 八犬伝①の筆 動 つまり、 確認したい 詞 体形 清書にあたって行頭の 資料ごとのバラつきはあるものの、 耕 (なお、 4 は、 例 $\overline{}$ 行 稿本と板本とで行頭の位置が同じ場合は表6にまとめた通り、 打 頭に【し】のままの場合が、 が行頭において【し】を【ゑ】に改めたことが指摘されてお <u>〜</u>シ 消 0 分が行頭に位置したのか、 助 は行頭に【し】のまま書くが、 動詞ジ <u>ે</u> 1 例 を稿本と同じ位置で引き継ぐ場合と、 筆耕の清書過程では、 0 計 8 例 行移りの位置がずれるのは常態であり、 があり、 漢語サ変動詞の それとも【し】を【ゑ】に改めたの 「なが、 自立語語末の 稿本に書いてある文の挿 各筆耕の清書を経た板本における / \しう」[表7 語 構成上 【 ゑ 】のままである)。 進 の 切れ 目 1 位置が移る場合が し」[表7☆] 板本の表記では ☆ ŋ 0 入指示や字 例、 自立 稿本と板 かに 0 語 詞 語 ょ

に 【 ゑ 】を表記する傾向が特に強いといえる。 方、八犬伝②・八犬伝③の筆耕は、 行頭 (T) 〈シ〉の仮名字体をすべて【 ゑ 】で表記する。 明断録の板本はこの傾向に近い。 質屋庫 八犬伝①の筆耕 に比 して行頭

件が異なる。 各筆耕にみられることが分かった。 大島 (二〇〇〇) に指摘された、 行頭では自立語語中末、 しかし、 質屋庫・八犬伝①と、八犬伝②・八犬伝③とで、 付属語に【し】を使用するより、【え】を用いることを優先する場 合

Ⅰ−三 行頭における〈シ〉の仮名字体の用字の時期的な変化

料は 特定できない。ここで、 って似るという点を偶然として看過し難い。これらが書き手ごとの個別性なの 表記の違いが板本のみにあるのならば、 け ではないようだが、 八犬伝③稿本の馬琴及び八犬伝②・八犬伝③の筆耕には、 『南総里見八犬伝』の残存する稿本と、 質屋庫・八犬伝①では、 中世の資料に語の途中で行が移る際に、 更に調査範囲を広げて、 馬琴・筆耕共に語の途中で行移りする際に【 ゑ 】を表記する点が共通する。 筆耕の表記に差異があったものとして処理できるが、 全一〇六冊の板本とする。 馬琴読本の稿本・板本の 【 ゑ 】を行頭に使用する傾向が強いように見える。 行頭に特定の仮名字体を書く場合があったことと類似する一次。 行頭における か、 時期的な変化なのか、 **√ ≥** 馬琴稿本と使用傾 の仮名字体の使用傾向を把握する。 読本四· 律の基準があっ 本の調査 向 の違 行 頭の仮名字体 · が時 は 要 期 によ 因 た を

うになる。そうした、 稿本の文字列の乱れは甚だしくなり、 これによると、 馬琴の八犬伝稿本計四九本 のみを行頭に表記することが増えている。天保八〈一八三七〉年に馬琴は右目の視力を失い、 第四輯巻之三・四の時点と、 の両方が行頭に表記されるようになる。 文章全体の筆記に困難がある中においても、 (うち第九輯巻之四六以降の七本は、 天保一一〈一八四〇〉年稿了の第九輯四一巻からは、 第八輯巻之三までは行頭に【し】【ゑ】両方を表記するのが常だったが、 行頭には お路の筆記) 【ゑ】のみを記す。ところが、 における行頭の 罫線のつきの用紙に、 <u>ે</u> 左目 0) 仮名字体を表8に示した。 お路に書き手が交代する の視力も低下していく。 六行で文を書くよ それ以降

表9は八犬伝板本一〇六冊における行頭の 〈シ〉の仮名字体である。 稿本が残る板本については、 板本で行頭に位置する仮名が 稿

※ ※ だ※ 虫併行 虫損等で稿本ので研記した。 仮 名 ·字体 の 使 用 数 を 示 し た ま た 板本で行頭に位 置 する シ ~ が稿本でどのような仮名字体

仮 名字 に (1) (2) (3) (3) とな 振箇 所 たが あ つ た 印 で ある

つ

X 伝① (2) (3) (5) 頭 . 対 応 する **資料** 暃 語

頭 は 語 暃 は 頭

本に 表9から、 (【ゑ】どちら 八犬伝の第 0 輯から第七輯の 仮名字体 で表記されてい 筆耕達は、 たの 八犬伝②の筆耕である谷金川も、 か を示 į 各 資料 0 清書を 担 行 当 L 頭に た筆耕 1 を明 】【 ゑ 】の両方を書くことが 記 した。

なる。 稿本の 以外の筆耕は、 1 . の 谷金川や、 仮名字体が書き換えられていることも窺える。 八犬伝③を担当する白馬台音成 (對二樓音成ともある) を含め、 行頭には【ゑ】が表記されるように

亭金水)

たことが分かる。

第

八輯以

降、

筆

耕

が誰であろうと、

行頭に

~

を書く場合が激減する。

そして第九輯巻之八以降、

亀井金水

(松

頭

に

【 ゑ 】 が偏るわけではない一方で、 なお、 『北條泰 時 明 断 録 全五巻の板本では、 板本はその傾向が 行頭の 強 <u>ે</u> 15 例 中 (左) 12 例、 1 3 例 で あ 0 た。 松 亭 金 水 は 稿 本 \mathcal{O} 行

に 期的 における 以上から、【 太 】を行頭に表記する傾向 な変化が 【 ゑ 】の使用傾向に倣って表記を行っていただろう。 たと見做すことができる は、 馬 琴とその筆耕に したがって、 お 1 て徐 々に強い まず馬琴において行頭での くなっていたことを 確 認 <u>ښ</u> L た。 0) 仮 筆 名字 耕 達 体 は 0 馬 選 琴 択 \mathcal{O} 行

あ

0

あ

0

9-53上

表 9	南総里見							ける	3 <	シ〉	の仮名字	体								
		語頭				語頭			注語 :				語頭				語頭	. 1		語頭
輯巻	筆耕	<u>板</u>		高灰	<u>板</u>	<u>₹</u>	高点	<u>板</u>	<u>₹</u>	高点	輯巻	筆耕	<u>板</u>		高糸	<u>板</u>	稿	点	<u>板</u>	稿 し
1-1	羊初	1			3	Ì		1	Ì		9-12上	二十 初	0	0	0	2	0	0	7	7 0
1-2		0			9	, ,		10			9-12下		0	0	0	0	0	0	8	8 0
1-3		1			5	\		5			9-13/14		0	0	0	0	0	0	12	11 1
$\frac{1-4}{1-5}$		7 3			6 3			3	_		9-15 9-16		0	$\overline{}$		0	\rightarrow	\rightarrow	8 15	
2-1		1			4			3			9-17		0	eg		1			13	
2-2		1			1			8			9-18		0	0	0	0	0	0	6	5 1
2-3		0			2			5			9-19	谷金川	0	0	0	1	0	1	11	9 2
2-4 2-5	千形仲道	3 1			5 6			3			9-20 9-21		0	0	0	0	0	0	16 14	12 2
3-1	1 //2 下坦	1	$\overline{}$		2			2			9-21		0	\leq		2		$\overline{}$	8	12 2
3-2		2	V		3			2			9-23		0	\subseteq		2			17	
3-3		8	Λ		4			1			9-24		0			0			7	
3-4		8			1			5	_		9-25		0	$\frac{1}{2}$		0	,	\searrow	9	10 1
3-5 4-1		3 8			3			6 1			9-26 9-27 (3)	音成	0	0	0	4	2	0	13 *15	12 1 10 4
4-1		10	$\overline{}$		1			4			9-21	谷金川/音成	0	0	0	1	0	1	13	11 2
4-3(1)		12	12	0	3	-	3		-	2	9-29		0	0	0	3	1	-	*17	11 5
4-4		6	6	0	5		4	3	1	2	9-30		0	0	0	0	0	0	11	10 1
5-1		3			4			1			9-31上		0	$\stackrel{\circ}{\longrightarrow}$		0)	Ž	4	10 0
5-2 5-3		7 5			6			0	Α.		9-31下 9-32		0	0	0	0	0	0	13 15	10 3 14 1
5-4	田中正造	9			3			1			9-33		0	0	0	4	2	2	16	14 2
5-5		10			4	_		2			9-34上		0	0	0	0	0	0	5	4 1
5-6		7			1			1			9-34下		0	0	0	0	0	0	6	6 0
6-1	谷金川	6 9			1			0	· ,		9-35上		0	0	0	0	0	0	4	2 2
6-2 6-3		1			2			0	_		9-35下 9-36	谷金川	0	0	0	1	0	1	5 13	3 2 10 3
6-4	田中正造	2	$\overline{}$		4			1			9-37	1 NE/11	0	$ egin{array}{c} $		0			6	10 3
6-5上		3			2			0	· ·		9-38		0			0			7	
6-5下	谷金川	11			1			3			9-39		0	0	0	0	0	0	*11	9 1
7-1 7-2	仙橘	4 6			0 2			4			9-40 9-41		0	0	0	1	0	1	6 16	4 2 15 1
7-3	谷金川	4			1			5	, ·		9-41 9-42 H		0	0	0	1	0	1	11	9 2
7-4	- н ме/ п	3			1			8	_		9-42下		0	0	0	1	0	1	6	5 1
7-5	仙橘	1			2			8			9-43/44		0	0	0	1	0	1	17	14 3
7-6		0			1			5			9-45		0	\rightarrow		1		\rightarrow	7	11 0
7-7 8-1		4	0	0	3	2	1	3 6		0	9-46 9-47上		0	1	0	0	0	1	11 5	11 0 4 1
8-22		0	0		0			Ŭ		1	9-47下	亀井金水	0	0	v	2	0	2	5	5 0
8-3		0	0				1	15	14	1	9-48		0	0	0	2	0	2	6	6 0
8-4上	谷金川	1	1								9-49	音成	0			1		Ž	5	
8-4下 8-5		0	0								9-50 9-51	谷金川 音成	0	0		3	0	3	18 9	14 4 6 3
8-6		2			1		1	13	_	7	9-51	谷金川	0			0		J	8	
8-7		1			1	, '		10			9-53上	音成	0	0	0	2	0	2	6	6 0
8-8上		0			0			6			9-53下		0			0		$\sqrt{}$	9	
8-8下	仙橘	0			3		,	8			※凡例は	表8に同じ								
9-1 9-2		0	0		1		—	15 9		3										
9-3		0	0							3										
9-4	谷金川	0	0		0	0	_	*11	9	1										
9-5	石亚川	0	0						12											
9-6		0	0				1	24												
9-7 9-8		0	1	0	0		3	13 14	13	0										
9-9	千形道友	0			0	_		6												
9-9		0	/		0	· ·		4												
9-10	谷金川	0	0	0	0		0	15	13	2										
9-11	千形道友	0			3			7												

五 〈シ〉の仮名字体の使用傾向の変化と漢字平仮名交じり文

以上、 馬琴読本の稿本と板本には、 次のような順序で、 の仮名字体に使用傾向の時期的な変化があっ

- Ι したため、 語 頭における【 ゑ 】は、八犬伝①時点に確認できる漢字表記の増加に伴って 八犬伝①と八犬伝②の間で使用数が減少していた。 (||-||-| で検証 (v) を語頭とする和 語 の平仮名表記が 7減少
- \prod 行頭の仮名字体については、質屋庫・八犬伝①時点では馬琴・筆耕共に【し】【え】の両方を書いていたが、 八犬伝②と八

(四で検証

犬伝③

Ď

間の時期には【ゑ】を使用する傾向が強くなっていた。

してい

、 た 語

の語

宋にも【ゑ】を使用して表記することがある。

(||-||-||で検証

 \prod 八犬伝③では【ゑ】を語頭や行頭に加えて、変字法などのため語中末などに使用するようになった。 以前は【し】を使用

これらの 使 用 傾 向 の時期的な変化は、 馬琴の表記に起こった変化である。 本章では、 何故、 こうした時期的な変化が起きたの か考

おける【 ゑ 】とは何だったのだろうか に当てはまるものだったと考えられる。 そもそも、 非語頭に【し】という使用傾向は一貫しているためであるこせ。 馬琴の「【ゑ】は上」「【し】は下」という認識は、 何故なら、 読本の初期作品である月氷竒縁から今回調査した八犬伝③に至るまで、 やはり語頭を【ゑ】、 では、 Ⅱの馬琴読本に使用傾向が強くなっていった行頭に 非語頭を 【 し 】とする語における使用位置 語頭に

語 頭に【 ゑ 】を使用する必要性が低まったことを要因とした変化だったと考えている。 稿者は、このⅡの行頭に【ゑ】を使用する傾向が強くなっていった時期的な変化が、Ⅰ の漢字平仮名混じり文に漢字表記が増

中の 読本の行頭に【 ゑ 】が表記される場合について、まず整理したい。 が行頭に位置した場合に【 ゑ 】で表記していた。その用例は「~にして」「囂しく」「あらずして」「進したり」「なが / ~ 〈シ〉の仮名の下に仮名が続くときに限ってであった。これらの用例は、行中だと前の仮名の「下」につく〈シ〉(【 し 】) 質屋庫・八犬伝①の馬琴及び筆耕 の表記では、 部

基準に差異があっ と推測される。 ものである。 である故に有標の 行 頭に位 質屋庫・八犬伝①の行頭には特別に【ゑ】を使用する場合と、【し】を書く場合の両方があり、 たが、 置すると、 【 ゑ 】を使用したのではなく、 それは行頭という状況下の 下に仮名が続く先頭 Ó 行頭という環境であるがために「上」 ◇シ、 **シ**シ が臨時的なものだったため、 すなわち「上」となる 「上」と扱うか否かに個人差が発生したの の状態になった〈シ〉に【ゑ】 だったと考えられる。 書き手によってもその つまり、 を使用し

ない 化 頭における【 ゑ 】の使用傾向の強さだと思われる。 板本では行頭に【 ゑ 】を表記する傾向があることにも当てはまる。 はり二種類の仮名字体の使用を保持するための用字を行ったものと考えられる。 なった用字であり、 頭に使用することに何らかの効果を求めたというよりも、【ゑ】を使用することそのものに目的を持つ用字であったと考えられる。 が増加した時期で、 その と関連した現象だったと捉えることができる。 \mathbf{III} 0 】と使用位置を区別して二種類の仮名字体を使用する状態が保持できる。 八犬伝③における【 ゑ 】の使用位置の変化は、 「上」における使用だった行頭の 同 様の現象が起きてい 本行に【ゑ】を使用するべき平仮名表記は減少していた。 「【 友 】 は上」とする記述に外れるものとなる。この八犬伝③における表記も、 たと考えられよう。 [左] を、 本行 その使用傾向が強くなった八犬伝第八輯以降は、 行頭という位置であるために使用するようになっ への使用が減少した【ゑ】を、「【ゑ】は上」 変字法という装飾的利用と、【し 漢字表記が多く、 行頭の位置に【ゑ】を表記する、 行頭に【 ゑ 】を使用する傾向の 以上の用字は、 語頭を 】と使用位置を区別せずに使用するように <u>ે</u> 明断録において、 とする自立語 とする有標性 Ι 第四輯 たの 0) 語頭における使用傾 が、 時 強さは、 という形であれ 点に比して漢字表記 八犬伝③に の平仮名表記が とは関係なく、 稿本では語中に .頭 著 向 0 B

に二種 字体が習われていた。しかし、公刊されている本にいろは仮名四七字体のみで書かれたものはまずない。私的な書状ならば、漢字一 知ら 候 は 故 複数の れる。 類以上の 1 除 ただし、 仮名字体による成熟した仮名表記 て、 仮名字体が存する平仮名表記は当たり前に行われていたが、 現行の平仮名と変わらない、 こうした仮名字体の 種 類の いろは四七字体の が相 少 ない表記は子供が書くような稚拙 応 か つ たのだと考えられる三〇。 みで書かれた伊達宗村七歳 初学の時点では なレベルのもの その中で (享保九 音に一字が対応する、 **∂** で、 0) 【し】【ゑ】は欠くことの 七二 板行される文芸作品にお 四 年) いろは仮名四 の頃の書状二九 当 時、 御 音

て が

0	〈タ) 質】		八大	(伝(1))仮名字(d) 八犬	伝②		伝③
	稿本 行 総 頭数	板本 行総 数	稿本 行 総 頭数	板本 行 総 頭数	稿本 行 総 頭数	板本 行 総 頭数	稿本 行 総 頭 数	板本 行 総 頭数
タた	3 120 0 1 0 0	1 8	4 90 1 5 1 4	0 4	;	0 80 5 13 0 0	1 74 0 1 0 0	0 73 2 2 0 0
び ネね 森	0 1 0 3 0 1	0 4	0 14 0 9 1 3	2 18	0 13 1 7 0 0	1 8	0 5 0 10 0 0	0 0 1 15 0 0
	175 2 たまた (月) 音線の 3 によって		101 104 102 104 105	105 10	234 10 10 10 10 10 10 10 10	0 2 ではなく【た】を行頭に表記する傾向が23 1く【?】を行頭に表記する傾向がある。また、	10 に示した通り、馬琴と筆耕は〈ネ〉は【 Φ 】ではなく【ね】【 ネネ 】を、〈リ〉は【 り】ではな21 21 ただし、行頭に特定の仮名字体の使用するのは〈シ〉に限ったことではない。例えば、 表 10 13 1	0 186

たって文字の種類の選択を変えた影響が、 に平仮名で表記される〈シ〉を語頭とする自立語が多かったことにある。これらの語は漢字平仮名混じり文において「【 太 】は上」 「【し】は下」という仮名字体の使用位置が分かれる要素だったものの、 〈シ〉において、使用傾向の変化が起こった重要な点は、「しからば」「しばし」といった接続詞・副詞、 〈シ〉の仮名字体の使用傾向へ徐々に表れていたのである。 漢字表記はその要素をなくしてしまった。馬琴が著作にあ 動詞「しる」など、読本

響は受けない。

六 結論

れにより、馬琴において漢字表記の増加を要因として〈シ〉 【 太 】は上」「【 し 】は下」という使用位置の認識を示している の仮名字体の使用傾向が変化していたことを明らかにした <u>ે</u> の仮名字体の用字について確認してきた。

っていた。 年稿了)時点では平仮名表記されていた「しからば」「しばし」などの接続詞・副詞や、 馬琴読本には、 その結果、 少なくとも八犬伝①(文政三〈一八二〇〉 自立語語頭に使用される【ゑ】の使用数が減少していた。 年稿了) 時点で漢字表記が増加しており、 動詞 「しる」などが漢字表記されるようにな 質屋庫 (文化七

たことから、【し】と使用位置を区別する形で【ゑ】を使用する状態を保持しようとしたものと稿者は仮定している したのが、八犬伝②以降にみられる行頭における【 ゑ 】の使用傾向の強さだと考えられる。これは、語頭における【 ゑ 】が減少し が これを要因として、〈シ〉の仮名字体の使用傾向に二段階の変化が起きていた。まず、八犬伝②(天保二〈一八三二〉 「上」になる場合に【 ゑ 】が書かれることがあった。それが、 行頭において【ゑ】を使用する傾向が強くなる。もともと質屋庫・八犬伝①時点では、行頭というその環境によって語中の 行頭という位置であるために【 ゑ 】を表記するという用字に変化 年稿了)

る用字に変化したのだと考えられる。 を使用するようになる。 そして八犬伝③(天保九〈一八三九〉年稿了)時点では、変字法のためや、【 し 】が使用されていた自立語語末や付属語に【 ゑ 】 この段階では、【し】【ゑ】の使用位置を区別せず、 種類の仮名字体を使用することそのものに目的があ

種 だと考えられる。 当時ごく普通に使用され、 整理された要因の 今回明らかにしたのは、 (T) 低さが露呈したともいえる。 平 ·仮 人名表記 二種類以 に 端に繋がろう。 おける仮名字体の用字の調査が進むことで、 「馬琴読本に関係する人物の表記という個別的なケースだが、漢字平仮名混じり文に漢字表記が増加すると、 使用傾向が安定していた〈シ〉の仮名字体の用字にも変化が起こり得たことを示す例として興味深い現象 上の仮名字体を使用する志向の強さが窺えたと共に、漢字平仮名混じり文に複数の仮名字体を用 漢字平仮名混じり文が日本語の中心的な表記体となった明治以後に、 今後、 先行研究に蓄積された仮名字体の表記実態の報告と対照しつつ、 近世期を通して仮名字体が減少した原因の使用実態からの考究や 仮名字体が一 漢字平仮名混じり文など 字一 音の いる必然 体系に

注

一仮名・仮名字体の定義及びその表示の方法は凡例に従う。

「矢野 (一九九○)、久保田 (一九九七) (二○○九) など

三内田(一九九八a)、市地(二〇一三)など。

四内田(一九九八b)(二〇〇〇)など。

五仮名字体の表示については凡例に従う。

六 は字体の区別に関わる箇所のみ変体仮名とし、 馬琴の言の存在については木越治(一九八九)「上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について」(『金沢大学教養部論 人文学科編』二六巻二号、pp.244-168) p.183 注に指摘される。 合字 「こと」は開き、 なお、 割書き箇所は 翻刻は早稲 田大学図書館本 に入れた。 (ヘ13 03093) によった。

るには煩瑣になりすぎるため、 きになっている可能性があり、 は 用位置の認識は【
を 】が「上」、【
ハ 】が「下」というものだったとみられるが、 本稿で 九四、 ハ行転呼音など/wa/と読む 書かれていない。馬琴の 〈ハ〉の仮名字体の使用傾向は扱わない。 矢野一九九○など)に共通する使用傾向が確認されている。これを踏まえると、【 ℓ 】【 ハ 】は音韻による使い分けが下敷 〈ハ〉に使用するという近世期の多くの板本(内田一九九八 a、 使用位置では推し量れない要素がある。 の表記は、 の仮名字体の問題に集中して検討を行う。 大島 (二〇〇〇) や市地 〈シ〉とは別途検討を要する点が多々あるためである。 (二〇一五) において【 そ 】は/ha/と読む また【き】は馬琴読本の板本において使用位置の傾向が本 久保田 本稿でこれらの要素を検討す 九九五b・一九九七、 例えば、 何が 馬琴の 「謬り」 玉村一 なのか の

宇野 分ける記述がなされる。 『新撰仮名文字遣』(永禄九 (一九八一) 『和字大観抄』」が挙げられ、 一九七三年)) によると異体仮名の使用位置について記載のある文献に「一、 書礼の書き方に関係して『玉章秘伝抄』『宗五大艸紙』『女房筆法』 馬琴の言はこうしたものと同等にみえるが、 には「これらのおのが音によらばいづくにもあれ、 (一五六六) これらには「上にかゝぬ」「下にかゝぬ」「上下わかぬ」などとして仮名字体の使用位置を 年頃成立、 『駒澤大学国語研究資料第三 例えば、『和歌大綱』 和歌の書き方に関係して『和歌大綱』『悦目抄』 とがむべからず、 新撰仮名文字遣』(汲古書院、 (鎌倉時代頃成立、 仮名文字の使い方に関して『新撰 これ様也。」(pp.138-139) とあ 『日本歌学大系』 一九八一年))

るほど仮名字体の使用位置は徹底されるものではなかったと考えられる。 玄)」な場合をも挙げる。 げた上で、 にはその仮名字体を使用した語の「見くるしき」「悪シ」例が挙げられる(pp. 96-99) 「【し】ら雲 「とがむべからず」とされたり、「かゝさる」例に反するものを許容する場合があることから、「謬り」とす 【し】ら露 はなの 【 し 】 た陰るとは尤ゆうけん也可書也」と 【 し 】を語頭に使用して「ゆうけん(幽 が、「かしらにかゝさる」として【し】を挙

- する先行研究もある。 ら子供向けの本にまで確認されている。なお、【 太 】と【 し 】を語頭-非語頭の分類ではなく、文節頭-非文節頭という単位で分類 八三)、洒落本(久保田) 九)、近世期の板本では延宝五〈一六七七〉年版『平家物語』(土肥二〇一八)、仮名草子(久保田一九九四)、浄瑠璃丸本(野口一九 たらない時期の文書資料・僧侶の資料(矢田一九九五)や、世阿弥の自筆資料(表・後藤一九七九)、大倉流狂言資料(菅原一九七 語頭に【 玄 】が使用される傾向のある資料は枚挙に遑がない。中世の資料には、定家の文字資料(小松一九七四)、定家とさほど隔 一〇〇九など)、 咄本(三原一九九八)、黄表紙(矢野一九九○など)、赤本(久保田一九九五b)と、古典か
- とけ」の〈ク〉【を】が前行の末尾から続く語であることを表すハイフンと同じ機能を有すると指摘する。しかし、〈シ〉については 資料に指摘される。なお、小松(二〇〇六)p. 142 には基本字体に対する補助字体の用法のひとつとして、 迫野一九七四)、今野(二○○一a)所収論文では伝西行筆本・源氏物語古写本・大山祇神社連歌・室町末期書写の土左日記等、 〈シ〉の仮名字体に限らず、行頭に特定の仮名字体が偏ることについて、中世の資料では定家筆かそれに近い写本(小松一九 行頭に配された「やくしほ 和文
- 【 ゑ 】に関しては語の構成要素を把握していることを表していると指摘した。 【し】の方を一語の中又は末に用ゐる仮名とすること」と【 ゑ 】を残す少数説があった(「明治三十三年一月 安田 (一九六七) pp. 5-9 は、 秀吉書簡における〈シ〉の仮名字体の使用傾向の調査を行い、【 太 】が語頭に使用されること、更に、語中に使用される 国語国字に関する決議」(吉田澄夫・井之口有一編『明治以降国字問題諸案集成』風間書房、 仮名字体が一音一字に定められた明治三三〈一九〇〇〉年八月の小学校令に際して「【 ゑ 】を存して 一九六二年、 帝国教育会仮名調查 p.946)) ことを踏
- (二○○一a)p. 319、咄本は前田(一九九八)pp. 203-205、人情本は玉村(一九九四)pp. 180-181 参照
- 行頭に使用される傾向は確認されていない」としたのは、あくまで板本の表記において、通常【し】が使用される語中の〈シ〉を 市地(二〇一五)で扱った馬琴読本には稿本が残存せず、 頭だと 【 玄 】で書いている、というような行頭で特別に 【 玄 】を使用していると見做せる用例が確認できなかったということで 稿本と板本とで表記に変動があったかは不明である。ここで「【 気 】が
- 稿本と板本の表記を比較する研究方法は、 内田 (一九九八 c) が先行し、 合巻『偐紫田舎源氏』(文政一二〈一八二九〉 年) の稿本で

カン 【り】のうち、 板本で行頭に移った三例すべてが

- (一九九八c) (二〇〇〇) により、 筆耕が作家自筆稿本の仮名字体を別の字体に書くことがあることが知られる。
- 調査資料には仮名字体の使用位置について言及があり、 初-四篇までの計 二〇冊の稿本(文化一二〈一八一六〉-文政三〈一八二
- 稿本と板本の比較によって得られる用例が限られてしまうこと、 天理図書館所蔵、 二編が千形仲道・棚加正造(分担箇所不明)、五編が田中正造、 請求記号九一三・六五-イ二三)が残る『朝夷巡嶋記』が相応しいように思われるが、 稿本が残る板本を担当する筆耕がほぼ八犬伝①と同じ千形仲道 稿本の虫損が激し

六編が田中正造(巻一・五)と谷金川

政一一〈一八二八〉〉は『八犬伝』の制作期間と完全に被るため、 (巻二・三・四)、三編筆耕不明) であること、『朝夷巡嶋記』 初輯から六編までの制作期間の一三年間 長期に渡る馬琴の 〈シ〉における用字を辿ることができる『八犬 (文化一二〈一八一五〉-文

伝』から優先して資料を選んだ。

(初輯・四編が千形仲道、

- 査範囲が一○丁分と、今回とは異なる。 大島(二〇〇〇)の調査資料は八犬伝②と同じ谷金川が筆耕であるが、 査資料を改めて選定し、調査を行う。 別の巻でも同様の書き方を行っているのか再確認する意味も含め、 仮名字体の使用分布の詳細な数量は明らかでないほか、 注一八に記載した通り、
- 輯巻之二を資料に選んだのは、八犬伝全巻を通して最も担当頻度の高い筆耕・谷金川(全一○六冊中六○冊)と彫り師・横田守(全 〇六冊中一四冊)の組み合わせにある。このことから、八犬伝を通して最もよくある組み合わせの出版従事者による文字の変動を 『八犬伝』の稿本は、 第四輯巻之三・四と、丁子屋平兵衛に板元が移った第八輯以降の四九冊分が残る。 その中で、
- 松亭金水(寛政九〈一七九七〉-文久二〈一八六三〉年)は書家の谷金川の弟子で馬琴の板下書きをしていたが、 開した(『日本古典文学大辞典』第三巻、岩波書店、一九八四年、 代筆などを経て人情本作家となった人物である。馬琴の死後、『朝夷巡嶋記』続編などを執筆し、 認できる資料と考えた。この資料を軸とし、 別の筆耕が担当した箇所として比較可能な四輯巻之三、 武藤元昭氏執筆項目)。 板元の注文に応じた執筆活動を 九輯巻之二七を選択した。 その後、 為永春水
- れる。 後期読本の最終稿本は、 「大吉利市」 筆耕や画師は、この稿本をもとに板本を制作する。調査資料の稿本は、 の文字が書かれた、 一 一 行 筆耕に渡した最終稿と目される。 (明断録は一○行)の書式・挿絵、 目次・飾り枠に至るまで、 いずれも巻之五の裏表紙に稿了年月日や「筆福硯壽 売り出される板本を想定して制
- 八犬伝③一七・ 調査範囲内で稿本と板本で異なる字体になる仮名の割合は、 この場合、【て】/【き】、【ま】/【ま】のように、同じ字母だが書き順・画数の異なる仮名字体同士の変更も含めたが、こ 五二%、 明断録 一七・五一%であった。どの資料においても仮名の約八○%以上は同じ字体のまま書き写されてい 質屋庫一 五・七六%、 八犬伝①一一・八〇%、

言もある。 らは書き手が 【 し 】と 【 玄 】 が変わることは書き手が区別して"書き換えた"ものと捉える。 区 別していなかった可能性がある。 <u>ે</u> の 【 し 】 【 し 】 / 【 ゑ 】 については、 字母が異なる字体であり、 か 0 馬

語サ変動詞は語中とも考えられるが、 の付属語がついていない場合と同じ語末に含めた。 すべて複合語下接部頭に分類した。また「示して」「示したり」のような例は、 語中と捉え

八犬伝②・八犬伝③ ・明断録の〈シ〉の語頭の用例は、 サ変動詞スルの連用形シの場合が多い。

で未定だった語の表記の反映・同義の漢字の書き換え・行書体と楷書体の違い・ごく少量なものに「多」「夛」 仮名のまま、 月氷竒縁と弓張月は板本のみの調査になるが、 いずれもごく僅かで、 漢字は漢字のまま清書したと考えられる。今回調査した読本の稿本と板本の比較で、 平仮名と漢字とで表記が入れ替わるのは草書体の「也」「事」くらいだった。 筆耕によって平仮名と漢字の表記が大幅に入れ替わることはなく、概ね平仮名は平 漢字は、 写し間違い・稿本の時点 等の異体字の変動が

用例は、 原文の仮名字体を反映して示す。 振り仮名は変体仮名で表示できないため、 現行仮名字体で付した。

とつに、 佐々木(二〇一八)では正徹本『徒然草』〈一四三一年〉の行末と文・句・単語末尾の一致が八二・五%と高率であることを示し、 活用語の語幹と活用語尾との切れ目での行移りを指摘する。

『新撰仮名文字遣』(注八参照)に「かしらにゝさる」「下にかゝさる」仮名字体の使用例に語を単位として例示があることも根

ここで問題にしたいのは、「本行」 である。 平仮名表記だった副詞・接続詞、 書き手にとってメインの文である本行にまずどのような表記を行うかが問題になると考えられる。 に【ゑ】が減少していることである。 動詞などが漢字表記になっても、 振り仮名の語頭には 書記の順序として振り仮名は、 【 ゑ 】を使用する位置が存する。 本行に後から付されるもの

春日政治「仮名の沿革」(『仮名発達史の研究』春日政治著作集第一冊、 勉誠社、 一九八二年、 pp. 163-184) pp. 169-170

体仮名の知識の中でも、 方がまだしも良く書けて」おり、含まれている平仮名字体の多くはいろは仮名四七字体で、変体仮名は【ℓ1】【11】【11】と僅かであ 矢田 (二〇一六) には .は映し出している」とする。〈シ〉の仮名字体を一元化せず、【 し 】【 ゑ 】の二字体の使用を保持する志向も、こうした 年頃のものと推定される稚拙な筆跡の地方文書資料が紹介されている (pp.159-162)。 〈ク〉に 「九」、〈シ〉に「四」と漢数字が使用されることが指摘される。この上で矢田氏は、「そうした乏しい書字能力、変 なお変体仮名は使用しなければならないものであるというこの時代の人々の文字意識の強固さを、この用字 「充分な変体仮名リテラシーを獲得し得なかった事例から見える変体仮名への意識」として、宝暦四 それによると、その文書では「漢字の

が関係しよう。

九八)などに報告されるが、〈タ〉や〈ネ〉ほどこの使用傾向が多くの資料に共通するわけではない。田(一九九五b)(二〇〇九)、矢野(一九九〇)に指摘される。〈リ〉の【?】を語頭とする例は久保田(一九九五b)、前田(一九久夕)に関しては内田(一九九八a)、久保田(一九九五)(一九九七)(二〇〇九)、玉村(一九九四)において、〈ネ〉については久保

はじめに

み取りに貢献されたであろうことが推測されている。 世 0 を語頭に書き、 (紙のような平仮名文における仮名の文字列に、 含有率が大きくなったため、 . の 本章では 戯作に句読法もまだ未整備の状態にあって、 数の仮名字体を使用する表記に関して、 馬琴読本の それらに比して単純な形の仮名字体を非語頭に書くことがある。こうした仮名字体における使い分けには、 振り仮名における 漢字と平仮名の交用による切れ目表示に交替したことが指摘されるい。 <u>〜</u>シ 語頭に【 連綿でのまとまりの切れ目や、 の仮名字体の用字を、 意味の切れ目を示す機能があったと考えられている」。 **煮** その上で、 語中末に【し】といった、 平仮名の字体の使い分けの類による切れ目表示は、 稿本の作家の表記と板本の筆耕の表記を通じて考察する。 仮名字体の使い分けによる語や形態素の切れ目が 横幅の広い仮名字体や、 久保田 (1001)画数が多い仮名字体 現代では、 例えば 漢 近

象とした調査だったため、 語中末に【し】という用法が行われていることを市地 区別が漢字によって明瞭な読本において、本行と同等の用字が行われるか疑問があるが、稿者は馬琴読本の振り仮名に、語頭に【ゑ】、 は使用傾向が き方であったとみられる。 これらのことから、 確認できたことのみを報告し、 語頭に【 ゑ 】、語中末に【 し 】というような使い分けは、平仮名を多く含む ところで、 それが馬琴の稿本の時点から行われている使用傾向なのか、 読本のような漢字平仮名混じり文では、必ず漢字に振り仮名が付けられる。 具体的な使用数として (二〇一六6)(二〇一七)で報告したことがある。 の仮名字体の使用位置等を示さなかった。 筆耕において【 ゑ 】とされているの 「文」において効果を発揮する しかし、 市地(二〇一六b)で 自 また、 立語と付属語 板本を対 確認

仮名字体の典型例として することで、 筆耕が作家の 地 (二〇一七)では振り仮名の語頭に 振 表記 り仮名特有の の仮名字体から 仮名字体の表記が見出せないかと期待される。 0) 別の仮名字体を変えている場合に注目し、 【 し 】が使用される例を確認している。こうした用例に基づいて、 振り仮名における仮名字体の使用 そこで、 振り仮名における用字を検討する。 本稿では、 傾向を探る。 語 頭 語中 作家自筆稿本の 末で使用 振り仮名の用字を 傾 向 表記と、

一 先行研究と調査方法

から、 げられている。 形態素頭にあたるため、 韻と関わる場合に使用される傾向があることを指摘した!。稿者としては、漢語の拗音、拗長音、促音を伴う〈シ〉は必然的に語頭 また、【 太 】は同じ語の中で〈シ〉が二回あるときにそれぞれを別の字体にする変字法による使用と、拗音、拗長音、促音を伴う音 振り仮名の仮名字体については、 音韻を使い分けの理由として考えられるのか疑問がある。 佐藤 (二〇〇九) では振り仮名の場合に、 近世期に限らない多くの資料で指摘される【ゑ】が語頭、【し】が語中末という使用傾向『に合致すること 佐藤(二〇〇九)に浄瑠璃本『出世握虎稚物語』の〈シ〉〈リ〉の仮名字体の用法の調査で取り上 語頭には【ゑ】ではなく【し】が使用されることが多い点が指摘される。

化四 〈タ〉〈ネ〉〈ハ〉〈リ〉の仮名字体の実態を、 読本の振り仮名の仮名字体に関しては、市地(二〇一六b)において、馬琴の『月氷竒縁』(文化二〈一八〇五〉年)、『椿説弓張月』(文 〈一八○七〉年)、『南総里見八犬伝』肇輯巻之一(文化一一⟨一八一五⟩年)に共通する複数の仮名字体が使用される⟨ケ⟩⟨シ⟩⟨ス⟩ 使用数や用法の記述をすることで報告した。また、市地(□○□七)においては、『南総

Δ(= H	127110	#-14-F				
北條泰時明断録		南総里見八犬伝なんそうさとみはっけんでん		昔語質屋庫	調査資料	
巻之一 二丁オ~ 二丁オ~ 第一回 1 1 2	老之二 四丁オ~ 四丁オ~	巻之二 二丁オ~ 一第八輯 第七六回	巻之三 七丁オ~ 一第四輯 第三五回	巻之一 二六 丁ウ 第二	調査範囲	
明 断 録	八犬伝③	八犬伝②	八犬伝①	質 屋 庫	称	
松亭金水		曲亭馬琴	くてい		者	
不明	成馬台音	谷 金 川	千形仲道	鈴木武 衛 一 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二	耕	
不明	森田甲	横田守	作中 村 喜	九山 郎崎 庄	彫り師	
佐河 助内 屋	平丁 兵子 衛屋	平 丁 兵子 衛屋	八山 崎 平	太河 助内屋	板元	
弘化四〈一八四七〉年序稿了年・発行年不明	天保一〇〈一八四〇〉年正天保九〈一八三九〉年五月	天保三〈一八三三〉年五月天保二〈一八三二〉年一二月	文政三〈一八二〇〉年一一月文政三〈一八二〇〉年六月	文化七〈一八一一〉年一一月文化七〈一八一一〉年七月	稿了年・発行年	

調査資料と調査範囲

り仮名の語頭に使用される場合もかなりあることを述べ、 里見八犬伝』 【 点 】はその字が書かれた後に何らかの字が続く場合に語頭に使用されると推測した 肇輯巻之一を取り上げて、 りあることを述べ、単音節の語である「死」の振り仮名には【 し 】が使l振り仮名の仮名字体の使用傾向の調査結果を示した。この調査結果で、 【 し 】が使用されることから、 シッの 【し】が

仮名字体の用字に違いがあるのか検討する。 いる場合の作家・筆耕の振り仮名の いずれも板本のみを調査対象とした仮名字体の研究である。 〈シ〉の仮名字体の用字を分析し、 語頭に【し】が書かれている用例や、【し】と【ゑ】を書き換えて 本行における調査結果と対照することで、 本行と振り仮名に

る。 仮名字体の用字を検討する 八輯巻之二(八犬伝②)、 調査資料は表1に示した。曲亭馬琴の自筆稿本が残り、かつそれぞれ筆耕が異なる読本の質屋庫、八犬伝第四輯巻之三(八犬伝①)、 これらは既に本行における 第九輯巻之廿七 〈シ〉の仮名字体について調査が行われている。 (八犬伝③) とする。 また、 比較資料に松亭金水の その調査結果を踏まえて振り仮名における〈シ〉 『北條泰時明断 (明断 録 を加え 0)

本にみえる馬琴の振り仮名の付け方

Ξ

の仮名の 仮名字体の用字を検討する前に、 文章の要素として読本の振り仮名がどのようなものなのか確認する。 稿本の墨継ぎを観察したい。 その上で、

が読本の執筆において振り仮名をどう付けていたのか、

広く十九世紀の戯作、 なのラインで成り立っていると言える」(p.47)という振り仮名を読解上の本文とする見方が示されている。この 仮名と文体、 輯巻之三一丁オ)といった二重イメージを喚起する熟字訓がつけられ、文章表現上の特色のひとつにもなっているド。 重要な要素といえる。 「「総ルビ」の文章では本体はルビであって、本行の漢字ではない」(p.119)と指摘する。それがないと本行の文意が伝わらないほど、 後期読本は漢字が多く、 位相との関わりを論じた倉田(二〇〇四)では「文章表記上、漢字に対してほぼ総ふりがなになっており、 辞 典 振り仮名が密に付けられることが知られる。 雑誌、 新聞などにみられ、 屋名池(二〇〇九)はルビなしには漢字の読みが一意的に定まらな 馬琴読本では漢字の読み方を示すほか、 総総 「再燂て」(八犬伝第四 ルビ」 馬琴読本の 本文はふりが の文章は

馬琴の読本において、 文の意味・読解の上で不可欠な振り仮名は、 どのように付されただろうか。 稿本の墨継ぎの 濃淡

馬琴の文・文章を書く順序が窺える。

図1 八犬伝第八輯巻之二 稿本の冒頭

金と且縁頼 るる 短刀でなれて左

漢字と振り仮名を、 は墨が濃いことが分かる。 このうち、② ①「じだんた」②「いまし」③「はしら」④「つな」⑤「かれ」と、本行の漢字の墨の濃さが、 図 1 は八犬伝第八輯巻之二(天保二〈一八三二〉年稿了)の稿本(早稲田大学図書館蔵、 1に番号をつけた漢字①「次團太」②「綑」 「綑」あたりの墨の濃淡を確認すると、「綑」の漢字と振り仮名の文字はかすれているが、 ほぼ同時に書いていたことが分かる。 細」 を書いてから振り仮名をつけ、 3 「柱」 ④ 「繋」 それから墨を付けて送り仮名と助動詞を書い (5) 他 の墨の濃淡に注目したい。 請求記号:イ04 00600 0001) ほぼ同じだと分かる明瞭な例である。 送り仮名+助 各漢字についた振り仮名の たのであろう。 0) 第 動 文の影印であ 詞 「めたる」 本行の

がある。 义 2は前掲の 义 1と同じ資料の四丁オいである。墨の濃淡から、 ある程度本行を書いてのち、 振り仮名をつけたと考えられる箇所

义 2 八犬伝第八輯巻之二 いがいくけの性寒で日教を費をできた 稿本四丁オニ **6**)

にくい。 を確認すると、 6 非の また、 理り の 裁許あ 「裁許」につく振り仮名「さばき」は、 非 理 ŋ の墨の濃さに比べ、 0) 前 までは、 図1と同じく漢字と振り仮名の墨の濃さが同じように見える。 振り仮名の 漢字に比べて振り仮名の墨が濃い。 $\sqrt{\mathcal{O}}$ <u>ŋ</u> の墨はかなり薄く、 漢字を書いた直後に振り 本行の 「非理の裁許あり」とまとめて書 しか 仮名をつ 6 非の理り けたとは考え の裁許あり」

文を書 測される それ いて から から $\overline{\mathcal{O}}$ 振 ŋ り仮名をつけたというわけではなく、 と振り 仮 名をつけ、 墨を筆に付け直 まもなく文末だったために先に文末までを書き切り、 してから「さば き」と振り仮名を付したことが窺える。 振り ただ、 仮名をつけたと ここも長

振り仮名をつけた本文を書く順序は、 本行の漢字・漢字を含む文が先に書かれ、 振り仮名は必ず後で付けられる。

3. 59% 6. 58% 八犬伝第八輯 とめて書いてから振り仮名をつけることも想定されるが、 の時期の馬琴は、 大方漢字を書いた直後に振り仮名をつけていることが分かる。 図 1、 図2の様子から、 本行の文章 少なくとも を

漢字とそれに付ける振り仮名を考慮しながら執筆していたと推定される。

四 振り仮名の **〜**シ

ここでまず、 数量的な観点から大まかに把握する。 馬琴読本を中心とした五本の資料 0 振 ŋ 仮名における <u>ે</u> 0 仮名字体 0) 使

〈シ〉の仮名字体と使用総数

八犬伝②

230

184

231

183

265

16

<u> 260</u>

21

の使用割合が多い方に網掛けをした。

用実態を、

55. 56%

44. 44%

55.80%

44. 20%

94. 31%

5. 69%

92. 53% 7. 47%

0%

0%

0%

八犬伝③

49.

225

218

0

208

235

0

255

38

0

<u>24</u>9

44

0

50. 79%

46. 95%

53.05%

87. 03%

12.97%

15. 02%

84. 98%

21%

0%

0% 9

0% 20

0% 11

明断録

169

72

11

156

87

143

4

150

6

振り

の仮名は、

単

中語や用っ

言

の語幹をまとまりとして書かれる本行の補助的

な要素だが、

馬琴は

ま

67.06%

28. 57%

4. 37%

61. 90%

34. 52%

3. 57%

85. 63%

89. 82%

2. 39%

11. 98%

方で、 断録に 仮名字体の種類は、 |比べて振り仮名に多いことが挙げられる。 表 2 は 振 . (7) み り仮名の **シ**シ 【し】が使用される。 0 仮名字体の振り仮名と本行の使用総数を示した。 <u>シ</u>シ 本行に順じ、 の仮名字体の特徴として、 その使用数の傾 すべての資料の振り仮名において【ゑ】【し 本行の (向は、【し】が優勢であることが分か 点 全体に対する【 ゑ 】の使用割合は の 使用割合が本行の 振り仮名に使用されて 仮名字体と引き 1、質屋庫 る。 ٧ì 明 る

187 板 羔 55 本 42 ※使用割合は小数点第四位以下を四捨五入して示している。 |名は多くて五三・〇五% (八犬伝③板本)、少くて二八・五七% |使用される。 が 【 煮 】の使用割合と関連しよう。 振り仮 名は主として自立語であり、 必然的 に語 頭 (明断録稿本) にあたる箇所が多くなること の割合で【ゑ】

表 2

振

仮

行

本 ij

板 名

本

稿

本 本

振り仮名と本行の

58. 15%

36. 30%

5. 55%

58. 52%

37. 41%

4. 07%

73. 59%

20.07%

6. 34%

65.85%

19.37%

14. 78%

【点】

多くて二〇・〇七%

(質屋庫稿本)、

少なくて二・三九%

(明断録稿本)

である。

L

カコ

振り仮

八犬伝①

194

78

0

189

83

0

289

25

0

289

25

0

71.

28. 68%

32%

0% 0

0% 0

0% 0

0% 0

69. 49%

30.51%

92. 04%

7. 96%

7. 96%

92 04%

質屋庫

157

98

15

158

101

11

209

57

18

羔

L

ゑ

羔

の仮名字体と使用数及び使用位置の分布

175

馬琴読本の振り仮名における〈シ〉の仮名字体 の使用分布 語中 行 単字 語頭 末尾 構成要素 頭 語中 4[0] 37[0] 157 3 11[1] 39[0] 56[2] 稿 点 98 1[0] 72[4] 21[0] 0[0]0[0]4 本 質 0[0] 0[0]1[0] 2[0] 12[0] 15 0 屖 158 0 5[0] 4[0] 41[0] 48[0] 61[0] 庫板 点 0[0]79[3] 0[0]101 4 33[1] 0[0] 本 0[0] <u>4</u>[0] 0 0[0]7[0] 11 0[0]八稿 6[0] 34[1] 72[0] 70[0] 194 1 15[0] 犬 本 点 2 1[0] 71[2] 7[0] 0[0] 0[0]78 伝板 (10[1] 189 3 3[1] 34[0] 72[0] 70[1] ① 本 点 83 4 6[0] 74[4] 7[0] 0[0]0[0]八稿 14[0] 15[0] 79[0] 121[1] 230 0[0] 1 点 犬 本 184 10 0[0]141[7] 42[3] 1[0] 0[0]伝板 (231 2 14[0] 1[0] 13[0] 79[0] 121[1] 2本 点 183 7 0[0] 140[3] 44[4] 1[0] 0[0]八稿 225 3 16[1] 5[0] 8[0] 99[0] 96[2] 犬本 点 218 10 4[0] 138[7] 74[3] 0[0]0[0]伝板 (208 2 4[0] 3[1] 6[1] 98[0] 96[0] 3 本 点 235 8 16[0] 140[7] 77[1] 1[0] 0[0]5[0] 56[4] 35[1] 40[0] 41[0] 177 5 稿 点 75 3[0] 71[4] 1[0] 0[0] 0[0]4 明本 し 0 0[0]0[0]0[0] 3[0] 8[0] 11 断 (166 4 8[0] 46[4] 31[0] 38[0] 43[0] 録板 点 87 7 0[0]81[6] 0[0]5[1] 1[0] 本 0 0[0] 0[0] 0[0] 4[0] 10 6[0]

筆

耕

五.

名

应

名に

お

V)

て、

作

家

 \dot{O}

稿

本

 \mathcal{O}

9

り仮名の

(i)

に【ゑ】を使

用 段

傾

向

が 振 中

やや強

かか

ったことが

窺える。

用

総

数

 \mathcal{O}

傾

向

が

語

に

お

け

る使用

位

置

 \mathcal{O} 伝

用

数 八 \mathcal{O}

が

僅

カコ

12

増 明

L 録

て で

お は

ŋ

犬伝

犬伝

3

断 加

板

本に

人

は 使

(

の

使

用

数

を上回ることさえある。

名字

体

使 稿

用 本と

数を

比較すると、

質

屋庫

八

犬 仮

ま

た、

板

本

に

お

け

る

振

り

仮

名

 \mathcal{O}

※使用数が最も多い欄に網掛けをした。 ※[]内に、行頭に位置した数を示した。

てどうい

つ

た分布

に

なっ

7

1

る

づ

1

. て述べ

たい。

階よ 料 表3に基 おい Ź れることが に まず、 使

カン 5 そ $\bar{\mathcal{O}}$ 主 たる 使 用 位 置 は 語 中

末と

所

お

11

て、

概

ね

位

限

ること

使

用

あ

ると

分 置

か を

る。

網

掛

け な

を

使用数の多い

1

は、

五.

本

 \mathcal{O}

資

. 使 用 0) z 使 ñ 用 る例 庫 筃 所を確認すると、 は、 明 断 録 大伝③ 開き 板 本 語頭・ \mathcal{O} 語 中 構成 1 は、 例 要 (るま 素頭 さ 使用 う 点 使 され 用 5 る傾 所に 生慳 向 が 九丁オ 強 Ņ ことが分かる。 · L8/稿· 中 本では 僅 カュ に ~)使用, これ され は本行の場合と同じ \mathcal{O} みで あ る。 犬伝③ で \mathcal{O} あ

本

行

る。

語

知

5

れ 点

る。

屋

に

使

れ

る

U

(

 \mathcal{O}

筃

準

Ü

語

末

末

12

た例 お 語 7 外 頭 は 12 \mathcal{O} 使 1 以用され 例 点 以 外 が る は 0 語 示 は 中 -末に使 点 点 - 一二丁オ 用されてることが \mathcal{O} みで にはなく、 L2) (潰 すべ ない 点 て て σ 回 資 料に 丁ウ L11) 語 頭 \mathcal{O} と 語: (末相 が 当 確認で \mathcal{O} 筃 所に き、 使 特 用 に さ 明 れる 断 録 \mathcal{O} 方で、 語 頭 に 振 は ŋ 仮 名 では \mathcal{O} 先に 使 用 数 挙

か

なり

カュ

L

11

ず

れ

 \mathcal{O}

読

本に

お

\ \

ても

語

頭で

は

点

が

(

を上回

る。

この点につ

て、

佐

藤

(二()(九)

指

!摘され

振 り仮名の 語頭 ぶには 【 し 】が主として使用されるという浄瑠璃本の使用傾向とは異なることに、 留意しておきたい。

動詞 と考えられる。二文字以上の語の表記にあたって、 素頭に専ら使用される、 さて、 【 し 】が使用されることに注目される。 「する」の連用形「し」の場合といってよい。これは、 以上から、 読本の振り仮名における〈シ〉 という傾向が、 判然としていることが分かった。また、【ゑ】が語頭・ 本行で自立語語頭に【し】が使用されるのは「~とし給ふ」「~をし給ふ」 の仮名字体の使用分布は、【し】は語中末を中心とする、【ゑ】は語 振り仮名では語頭に 単字の語の振り仮名に【し】が使用されるのと使用原理としては同じだ 【し】を書く場合がある。 構成要素頭に主として用いら 頭 いれる中 構 成

る用例は確認できなかった。 で行移りしても、 の仮名字体の使用数を示した通り、 振り仮名で語頭の なお、八犬伝②と八犬伝③の本行では行頭に【ゑ】を使用する傾向が強いことが分かっているが、 その漢語の構成要素ごとに分れるため、 <u>ે</u> に 【 ゑ 】を使用する傾向が強いこともあり、 振り仮名の語中や語末が行頭に位置することはない。 特に行頭に位置するがために【ゑ】を使用したと考えられ 振り仮名は漢字ごとに付されているため、 表3に各本における行頭の もともと馬琴の 漢語中 校本 (i)

いえる。 倣 伝③の板本では単字の語が、 一つてい 稿本と板本に仮名字体の使用傾向に変化があるかという点では、いずれの板本でも稿本の概ね同じ るもの しかし、 0 各本に少しずつ、 語 記頭では すべて【し】ではなく【ゑ】で表記されている点である。 怎 板本では別の仮名字体で書かれている場合があることが窺える。 が増加している。 以上にどのような用例があるか次節で検討する。 また、 明断録では 馬琴読本で目を引くの (i) の仮名字体と使用 概 ね松亭金水の は 表記に 傾 八犬 向

稿本と板本の比較における振り仮名の仮名字体

五

まず、 稿本の <u>〜</u>シ の仮名字体が板本の清書でどれほど別の仮名字体に書かれることがあるのか確認する。

そのパ 各資料におけるその用例数を、 ターン は 犬伝①以外では、【ゑ】だった箇所が【し】で書かれるパターンもある。【し】と【ゑ】の仮名字体の 各資料によって異なる。 語に おける位置によって整理した表が表4である。 しかし、 V ずれの資料においても、 板本の清書で、【し】だった箇所が 稿本の <u>ે</u> の仮名字体を別 の仮名字体で書く 点 入れ替わ

表 4 稿本から板本で〈シ〉の仮名字体が別 の仮名字体で書かれる用例 語中 単字 語頭 末尾 構成要素頭 語中 数 稿本 板本 \rightarrow 羔 7 0 11 1 3 0 点 \rightarrow 8 6 0 0 1 質 し \rightarrow 2 0 2 0 0 0 し \rightarrow 6 6 0 0 0 0 点 (\rightarrow 0 0 5 5 0 0 1 麦 \rightarrow 3 2 0 0 八 0 1 2 \rightarrow 点 2 2 0 0 0 0 点 八 \rightarrow 2 19 12 3 2 0 3 点 \rightarrow 2 0 0 0 \rightarrow 点 23 0 18 5 0 0 点 \rightarrow 4 0 0 0 8 4 明 し \rightarrow 3 0 0 0 2 1 0 0 0 0 ※仮名字体について、稿本と板本で同箇所が同仮名字体だったときに「―」で示した。稿本と板本の同箇所の仮名字体が変わっていたものを「→」で示した。 ※【()】【な】の書き換えと、用例がある欄に網掛けを施した。 もと わ は、 は、 で 別 表 は 1 素 れ 以 なく 単 頭 上 記 字 語 もともと て 屋 0 字 から、 \mathcal{O} 1 字 庫 さ 頭 \mathcal{O} 一で書か たことが分かる。 体になる場合は、 れていても、 語 【 し 】で表記する場合があったことが分かる。 語 明 の場合、質屋庫・八犬伝①・八犬伝②では馬琴の 構 まず、 頭 1 断録では、【し】と【し】の書き変わりがあり、 成要素頭に偏る仮名字体だが、 れてい 構 が 振り仮名における〈シ〉の仮名字体が、 成 | 要素頭 た語頭 清書では【ゑ】としていることが 優勢な語中末で起こる。 ただ、 語を単位としたよくある使用 に偏 ・構成要素頭を、【ゑ】とする場合と、【ゑ】 る。 板本の清書を行う筆耕 先ほど 確 板本の 認 L た 清書にあたって 通 り、 は 傾 あ 稿本

点

は

もと

とは れるという、 用 節 傾 羔 では 基 向 とい 本 を 単 的 語 には 、える。 字 書 頭に書くことは、 記 語 行為 本 頭 行と同等に 漢字によって自立語と付属 次で筆耕 0 上では 0 仮名字 文 平仮名の (一点 か 体 5 0 多い 用字 切 n \mathcal{O} 文を単位とした表記におい 離 が 語 使用 行わ さ \mathcal{O} れた振り 区 が れ 别 揺れる用 たも が明解な文章の 仮名であるため のと考えられ 例に 注 目 振り て、 Ļ る。 に起こる語頭の揺れだと推測される 仮 その用字について考察を行う。 自 L 名において、 立語と付属語を区別する有効 かしながら、 語頭に 1 点 も使用される点 を使用 な 7 する傾] は 力 1 12 漢字に 向 が な 強 ŋ 付 え 1

方

が

あ

り、

単に

語

頭を

ゑ】で揃えようとするもの

では

な

六 振 ij 仮 名に おけ る単 字 語 頭 の <u>ે</u> の 仮名字体の)用例

さて、 振 ŋ 仮 名 0 単 字 語 頭 E お 11 て、 仮 名字体が板本で稿本とは 别 \mathcal{O} Ł \mathcal{O} に なって いる用例を確認

向 稿

範

疇 5

で

カコ

板

本

 \mathcal{O}

場

合

語 0 本

頭

構

成

六-一 単字の振り仮名における〈シ〉の用例

まず単字の振り仮名において 【 ゑ 】と 【 し 】で仮名字体が変わることのある振り仮名の用例を確認する。 一文字・二文字以上の振り仮名が付く場合を含む「死」の語を集めた。 て頻出する 振り仮名の用例がない)及び、「仕まひ」「字」の稿本・板本の使用仮名字体をそれぞれ示した。 「知る」の振り仮名と、「知る」を後項要素とする複合語 (なお、質屋庫では 「知る」 表5-2も五本の資料に頻出 の語16例すべてを本行に平仮名で書 表 5-1 は五本の

れる。 例のみ【し】である。 金水も単字の振り仮名に【し】で書く傾向が窺える。 ③の稿本では、「知る」40例のうち、振り仮名の〈シ〉は【し 】4例、【 ゑ 】 6 例である。 表5-1の「知る」「字」「仕~」の漢字に付される仮名字体について、 明断録の稿本では、「知る」の振り仮名 4 例のうち仮名字体は【し】 4 馬琴の表記では、「知る」の振り仮名を【ゑ】で書くこともあるが圧倒的に【し】で書くことが多く、 稿本の作家の表記を確認する。 例、 「仕まひ」「仕さす」 「字」は、 八犬伝①・八犬伝②・八犬伝 は3例中2例が【ゑ】、 6 例すべてが【し】で書か

があり、 たかと考えられる。「告知す」の場合に、振り仮名が平仮名二文字になっている点に注目したい。八犬伝②・八犬伝③では、「知」では、〈シ〉の仮名字体の扱いが異なることが分かる。「人知らず」は「人+知らず」という語構成の上での頭である分析意識があで書き、「人知らず」1例、「告知す」2例の計3例では、【 煮 】で書く。「知る」に一文字の振り仮名がついている場合と、複合 ていることが分かる。ここから、 知 知る」を後項要素とする複合語の場合はどうだろうか。馬琴は、「恥知らず」1例、 (ず)」「知(て)」と活用部分を送り仮名にせず、平仮名二文字になっている例が3例あり、 振り仮名が二文字以上ならば【 ゑ 】で書いていたことが窺える。 馬琴の表記において、「知」の漢字一文字に振り仮名一文字が対応する場合は、【し】を書く傾 「聞知る」 3 この場合、 例の計 4例の振り仮名に【し 馬琴は【ゑ】で表記 複合語 向

一文字に平仮名二文字の振り仮名が対応する「死(ず)」「死」では、6例中6例が【 太 】で書かれる。漢字熟語の「死刑」「死活」一文字に平仮名二文字の振り仮名が対応する「死」「死なず」計11例では、【 し 】10例、【 太 】1例と、やはり【 し 】が優勢である。また、漢字仮名一文字が対応する「死」「死す」「死なず」計11例では、【 し 】10例、【 太 】1例と、やはり【 し 】が優勢である。また、漢字 同じように、「死」の語を表5-2からみてみよう。馬琴の質屋庫・八犬伝①・八犬伝②・八犬伝③において、 4 例はすべて【 ゑ 】、複合語の後項要素の場合は【 し 】 2例、【ゑ】1例と【し】で書かれることもある。 漢字一文字に 松亭金·

ま表記している。 中10例を【ゑ】としており、【ゑ】で表記する傾向が強いといえる。 |表記している。八犬伝①・八犬伝③の筆耕は【し】だった〈シ〉を【ゑ】とする例がみられる。特に八犬伝③では、【し】 12この上で、筆耕が清書をした板本の仮名字体の選択をみてみたい。まず「知る」の場合、八犬伝②・明断録は稿本の仮名字体の だった〈シ〉を【ゑ】とする例がみられる。 筆耕によって、「知る」につく一文字の振り仮名を、 特に八犬伝③では、【し】12例 語頭とし ま

の表記においては

「死す」に【ゑ】を書いている。

表 5	-	2		٢	【太] 7	字位	本	表 5 -	1	[]	٢	【类	.] 7	で字化	本
が変	えれ	るこ	との	ある	事	節	の用	例	が変わ	るこ	との	ある	単	音節	の用	例
死」類		稿本	板本	質屋庫	八犬伝①	八犬伝②	八犬伝③	明断録		稿本	板 本	質屋庫	八犬伝①	八犬伝②	八犬伝③	明断録
が		(l	0	0	0	2	0	知し	((0	9	12	2	4
死し 死し		羔	1	1	0	0	0	0	力る	点	点	0	1	0	4	0
死し	,	羔	1	0	0	0	0	2	#\ \b	(羔	0	3	0	8	0
す 死 ^l	L	(支	0	2	0	4	0	恥知らず	1	l	0	1	0	0	0
なず		((0	0	2	0	0	間 ^き 。	1	{	0	0	2	0	0
死力	Ž.	点	点	0	2	0	2	0	る	1	ゑ	0	0	0	1	0
死,		煮	点	0	2	0	0	0	人でとり知り	秦	点	0	0	0	1	0
死過	, †(类	点	1	0	1	0	0	らず	~~	~					
死為	(灰	芨	0	0	0	1	0	告知す	支	点	0	0	0	2	0
死。物		為	ゑ	0	1	0	0	0	知ら	点	点	0	0	2	1	0
討		煮	1	1	0	0	0	0	知り	点	点	0	0	0	1	0
死しす	(11)	l	点	0	0	0	0	1	仕 ^し ま	1	1	0	0	0	0	1
溺:	io fi	1	l	0	0	0	1	0	ひ仕ょ	点	\ \	0	0	0	0	1
ず頓点	1								さす。字	<u>خ</u> ر)	5	1	0	0	1
死しす	-	{	1	0	0	0	1	0	「知る」	 「聞知		告		」「仕	さす	
				I					終止形							

| 知る」「聞知りて」「告知す」「仕さす」「 終止形に統一して示した。振り仮名の 「しら」とあるものは、打消の助動詞ズ などが接続する。

て捉えるか否かに違いがあったことが窺える。

平仮名二文字が対応する「死 仮名字体を【し】から【ゑ】に書く。 八犬伝②・八犬伝③の筆耕は、「死」「死なず」の仮名字体を【し】のまま引き継いでいる。 、 「 死」 0 振り 仮名の仮名字体をみてみたい。 (ず)」「死」、漢字熟語の サ 『明断録では「死す」の仮名字体を【ゑ 】から【し 】としている。 質屋庫 「死刑」「死活」「死物」は稿本の【 ゑ 】から変わらない。 の筆耕は、 稿本に 【 ゑ 】で書かれている「死」を【 し 八犬伝①・八犬伝③では「死す」 漢字一文字の振り仮名に いて

が のように送り仮名や複合語が本行に続いている場合も同じで、「文」の文字列から切り離された一文字になった振り仮名では、 家・筆耕を含め、漢字一文字に平仮名一文字の振り仮名が付けられる場合に、【し】で表記する傾向があるといえる。それは「知る」 以上から、 【 ゑ 】 である必要がなかったのである。 八犬伝③の筆耕は、 単字の振り仮名を語頭と見なして、 特に【ゑ】で表記する傾向が強かったものの、 基本的に、

えるか揺れがあり、 知る」「死」を後項要素とする複合語の場合は、 その結果、【 太 】と 【 し 】の仮名字体の揺れに繋がっていると考えられる。 複合語の後項要素を語中と捉えるか、 それとも構成要素の頭として分析

-二 振り仮名の語頭の〈シ〉の用例

書かれる用例、 れているため、 平仮名二文字以上の振り仮名がついた、 表6-1にまとめた【 太 】と【 し 】で仮名字体が変わることのある語頭 以上から振り仮名における【ゑ】と【し】の 語頭における用例を確認する。 使用実態をみてみたい。 語頭の大半は稿本と板本ともに【 ゑ 】で表記さ 0 用例、 表6-2にまとめた語 頭に 1

ただ、表6-2の語頭に【し】が使用された用例をみると、「自殺す」「四郎」「師弟」「自餘」「四手」「子息」「次郎」「思按」「慈悲たが、筆耕に大きな傾向があるわけではなく、板本の清書にあたってどう表記するのか、筆耕ごとの個別的な字体選択のようである。 「時致」「時運」「至妙」の11例が該応する用例であることに目につく。 表6-1に、 稿本で【ゑ】だった箇所を【し】で書いている用例、 燭 計 13 例が漢字に振り仮名二文字以上が対応するものの、 が該当する 表6-1に示した用例の中にも、 「四海」「自害」「自然」「伺公」「二男」「時宗」「自業」「刺客」「かい じがい しぜん しかう じなん じそう じごう しかくりるものの、熟語を分解すれば漢字一文字に振り仮名一文字が対 その逆の【し】だった箇所を【ゑ】で書いて 例

書か 表記、 【し】と【友】で字体が変わることがある語頭の用 \mathcal{O} 振 亚 以 例 れる用 と考えら 仮 上 ŋ 八 ような 仮 0 質 眀 質 眀 名 犬 犬 犬 犬 犬 犬 稿 板 稿 板 使 名が が 屋 断 屋 断 伝伝伝 伝 伝 伝 本 本 本 本 用 例 重 録 庫 録 庫 これ 1 2 (2) 傾 対 が れ 漢 (3) (1) (3) な る。 向 応 多 る 自じ に比 は する場合 (V 点 点 1 0 0 1 0 0 0 0 1 業 その 獅し場 لح 四し 子に合い V 海か L 時じ (、える。 て、 (羔 0 0 0 1 0 0 用 0 1 0 0 致ち 生に 例 は、 [左] 12 を 宿ぐな 時じ 漢 羔 点 何 除 0 0 0 0 0 0 1 0 1 0 運ん (次字に単: 自が 6 1 لح 害" た カコ 至し 什多 ح あ 0) 1 0 0 妙き (点 0 0 0 0 0 0 1 1 字 (لح 使 左 して 用 \mathcal{O} \mathcal{O} 時 点 1 $\mathsf{F}^{\iota}_{\mathfrak{b}}$ (羔 0 0 1 0 0 0 0 0 0 1 規 振 日っるケ 11 則 り 自ぜ 筆耕 例 0 寿じゅ があ 仮 然ん は、 は、 仮名字体 羔 点 点 0 0 0 0 王が (0 0 0 0 名が 1 1 が 丸ま 0 作 語 仮名字体を別の 対応し たというより 家 頭を 羔 羔 点 2 0 0 0 0 0 0 0 0 親と 宿は .. の 所台 王智 点 点 (点 0 0 0 0 筆 6 15 0 0 0 3 選 ている場合と似 耕に 点 択 守し 点 0 0 0 1 点 0 0 0 0 2 1 B 護ご におい 称や とし、 揺 ŧ 仮 れやす 所り 点 点 点 0 0 0 0 1 0 0 0 0 1 て 名字体で書いてい 得さ 単字の _ 二文字 伺し 1 点 て、 羔 0 0 羔 0 0 0 0 公か 」と揺れることなく 傾 振り İ 向 巡り 漢字熟語 式よ 禮れ に は 部ぶ 仮名や、 あ ((羔 為 0 0 0 0 1 0 0 0 5 0 丞じゃ ると考えられ (たり、 0) 食しょく で書 稍だ 漢字一文字に平 語 1 点 羔 1 0 0 0 0 0 1 1 頭でも、 にい 稿本と板本で変わりなく 11 所に 怎 て区別 点 (点 2 0 0 0 0 0 0 0 0 1 為る 時じ 漢字一 宿は 宗う が 羔 点 羔 0 0 0 (0 0 0 0 1 0 業が 1 l . 書 か て 仮 文字に平仮名一 11 名 須い 点 羔 0 0 0 0 (0 0 0 0 1 れ 刺か る、 明ゆ 客 て 文字 変字法による 点 点 点 1 0 0 0 () (0 0 0 0 1 た用 実じ が 一世を 点 点 1 0 2 対 (例 応す 文字 左表の二重線より上は板本で【\】、 二重線以下と右表は板本で【ゑ】 で

0

語

 \mathcal{O}

に

が

使

用

され

ĺ

ス

へもあ

ŋ,

表

うに

にまとめ

た通

り、

異

な

ŋ

語

数

で

14

例

が

存

す

Ź。

0

うち、

で

182

で書かれている用例である

表7	板本	と稿	本で	で語り	頭の	⟨÷	/>
を【え	、 】 で	書く	用例	īIJ			
字が対応 マッシー文字	稿本	板本	質屋庫	八犬伝①	八犬伝②	八犬伝③	明断録
四 k t _い	点	点	0	0	0	1	0
四は方	点	点	0	0	1	0	0
四 壁 ^ *	点	点	0	0	1	0	0
尋思が	点	点	0	1	2	1	0
獅し子	点	点	14	0	0	0	0
私 _け い	友	点	0	0	3	0	0
示 _げ 現ん	友	点	0	0	1	0	0
止した。	麦	点	0	0	1	0	0
指 月 院 ん	点	点	0	0	2	0	0
次 圏 太 だ 太 だ	麦	羔	0	0	12	0	0
一しけられ	蒸	点	0	0	0	0	1
時 じっ	点	怎	0	1	0	0	0
時ぶん		点	0	0	0	1	0
紙燭す	羔	点	0	1	0	0	0

表 6 -	- 2	語	頭の	D <	シ〉	に	[]]	が書	か∤	こる)	用例	J			
	稿本	板本	質屋庫	八犬伝①	八犬伝②	八犬伝③	明断録			稿本	板本	質屋庫	八犬伝①	八犬伝②	八犬伝③	明断録
自じ	1	1	1	0	0	0	0		貞をうおう	1	l	0	0	0	0	1
自殺す	≲	点	1	0	0	0	0		代 ^し 呂 ^ち	1	ł	0	0	0	0	1
四にらう	(1	1	0	0	0	0		師は	{	l	0	0	0	0	1
師でい	(1	0	1	0	0	0		走	灰	东	0	1	0	0	0
下垂たりを	1	l	0	1	0	0	0		思した。	1	l	0	0	0	0	1
自じ餘よ	1	1	0	0	0	1	0		按る	轰	点	0	1	0	0	0
四 ^し 手で	(1	0	0	0	1	0		慈悲	{	l	0	0	0	0	1
生に	{	1	0	0	0	0	1		仔され	~	l	0	0	0	0	1
生ようずう	轰	点	0	0	0	1	0		城でやうか	1	l	0	0	0	0	1
瀟やう 告	{	1	0	0	0	0	1		城やうちう	{	ł	0	0	0	0	1
承じゃうきう	{	l	0	0	0	0	3		城やうしゅ	{	l	0	0	0	0	1
将しゃうぐん	{	1	0	0	0	0	2		志で 願ん	1	≀	0	0	0	0	1
子 と も	(1	0	0	0	0	2		城る	1	l	0	0	0	0	1
将やう	1	1	0	0	0	0	2		火 る	点	羔	0	0	3	0	0
次じらう	{	1	0	0	0	0	1		正 _や 気き	{	l	0	0	0	0	1
譲 _や 位ゐ	(1	0	0	0	0	1		紙し	1	l	0	0	0	0	1
商 _や う 賣こ	1	1	0	0	0	0	1		燭々	羔	点	0	1	0	0	0
									定っめ	{	l	0	0	0	0	1

だと考えられる。 る仮名文字が連なる際に、相対的に頭となる箇所へ用いられる仮名字体なので、おそらくは、単字の振り仮名に使われにくかったの る振り仮名の場合に、【 太 】を使いにくいことを原因とするのではないか、と推測される。 【 太 】は〈シ〉の下にひとまとまりとな

七 筆耕による変字法のための字体使用

示しておきたい (傍線は稿者による)。 質屋庫・八犬伝①の板本には、変字法のために稿本とは仮名字体を別のものに書き換えたと考えられる例があった。それを最後に

二十一丁オ 15 その志を思食出され そ	こゝろざし お み	稿本	質屋庫
L4 その志を思		板本	
	([,		

八犬伝①

十一丁ウは 蚘が知らせてむし し	八丁才13 一隅を知る	五丁才 16 志を知ら ず し そこころぎし 11	稿本
L5 蚘が知らせて **- **- **- **- **- **- **- **- **- **	L3 一隅を知る りょれし 料	L6 志を知らず し そこ^^ざし 料	板本

おぼしめし」と本文には濁点がつく)

順に仮名字体が使用されているのを、 板本の清書では【し】【し】【し】と同じ字体が続かない表記にしたと考えられる

八犬伝①板本の清書では、「知る」の振り仮名を稿本の【し】から【ゑ】に書き換えている3例すべてが、 直前に【し】が書かれている用例であった。 振り仮名の文字列に

たのだと考えられる。 筆耕の個別的な表記で はあるが、 振り仮名が密に付けられるがゆえに、振り仮名の列において紛れにくい仮名字体の用字が行わ

八 まとめ

考えられよう。 する)。馬琴が本行の漢字を書いた直後に振り仮名をつけながら執筆していたことを鑑みると、本行に沿う用字を行う態度だったかと 多いことが分かり、 択が筆耕において変わっていることがあった。 の語頭には【し】が使用されることがあり、 における〈シ〉の仮名字体では、 振り仮名の 馬琴読本の振り仮名における語頭の〈シ〉を【 ゑ 】とする割合の多さは一般的でない可能性がある(次章で検討 〈シ〉の仮名字体について、 語頭が【ゑ】、語中末が【し】という使用傾向が確認できた。ただし、いずれの資料にも振り仮名 稿本と板本の比較をすると単字の振り仮名や、語頭において【ゑ】と【し】の字体選 なお、先行研究と照らし合わせると、振り仮名の語頭に 【 し 】が使用される割合が 稿本と板本と比較のうえ、検討を行ってきた。馬琴読本を中心とした後期読本五

が使用され して有効的だった仮名字体の使用法だと考えられる。「知る」の語は、 まとまりとして書かれる場合に語頭に書かれたと考えられる。それは、平仮名の多い文字列において、結果的に自立語のマー 応する場合に【 - 】が書かれる傾向がみられた。一方で、語頭に使用されることが圧倒的に多い【 玄 】は、 **ゑ】と【し】で仮名字体が変わる用例と、【し】を語頭に書く用例を分析すると、漢字一文字に** (月氷竒縁、 椿説弓張月、質屋庫など)、漢字で書かれると振り仮名には【し】で書かれるのである。 同じ馬琴の読本でも平仮名で本行に書かれれば語頭に【ゑ】 **∂** 振り仮名二文字以上を の振り仮名一文字が

馬琴読本の振り仮名は、 仮名字体の用字は、 それがなくては意味が通じないような、 全体としては文に馴染むように行われていたと思われる。 文脈の読解を担う重要な要素であった。 しかし、 本行における仮名字体の その 仮 ける

注

る効果をもつ仮名」を明らかにした上で、「それらは仮名の字体が多少は語あるいは文節などの把握に役立つことを示している」 ると思われる仮名」「特定の語に多く用いられ、その後の認定に貢献していると思われる仮名」「変字的な用法で紛らわしさを回避す (一九九〇) では十返舎一九の黄表紙における仮名字体の使用傾向 「かなり明白な使い分けが認められ、 語の 把握に貢献してい

(pp. 256-257) と指摘した。

久保田 (二〇〇二) pp. 83-84

兀

佐藤(二○○九) pp.97-99。なお、本行の仮名字体においても、〈シ〉を音韻に関わる使い分けとしている

二〇一八)、赤本(久保田一九九五日)、黄表紙(久保田一九九六、一九九八、 ら近世にかけてほぼ安定した仮名字体の使用傾向であることが分かっている。 九八 a、 の仮名消息、 【 ゑ 】が語頭、【 し 】が語中末という使用傾向については、 久保田二〇〇九)、 安田(一九七二)に秀吉の仮名消息など中世の平仮名を含む資料にも指摘されるほか、近世の版本『平家物語』(土肥 滑稽本 (久保田一九九七)、合巻 (内田一九九八b、 小松(二〇〇六)に定家筆本に近い写本、安田(一九七一)に恵信尼 内田一九九八 b、矢野一九九〇)、 内田二〇〇〇)にも同様の傾向が指摘され、 洒落本 (内田一九 中世

市地 (二〇一七) p. 149

六

読本における漢語と振り仮名の関係を巡る語彙研究として、 究が挙げられる。 とする擬古語・擬雅語の造出などを明らかにしている鈴木(一九六七)(一九六八a)(一九六八b)(一九七二)(一九九七)等の研 語に一つの和語を振り仮名つける手法や、『書言字考節用集』『雑字類篇』に典拠が求められる漢語と振り仮名、 和語を振り仮名として漢字漢語の難しさを補う手法、 雅語らしさを出そう いくつもの漢字漢

表3の使用位置における分析は次の基準に基づいた。

立語

単字*1

語頭

語中 構成要素頭*2

末尾*3

*2「語中」の「構成要素頭」は和語の複合語における後項要素の語頭や、二字漢語・三字漢語の場合、後項要素にあたる二字目・三 「単音節」は「知る」「字」などの場合。本行では助詞に下接する動詞「する」の連用形「し」が該当する。

ただし、次のような場合は「語中」に分類した。

字目の語頭に〈シ〉が出現する場合に分類した。先行研究にいう「準語頭」に該当する。

・「天下」のように助詞を挟んで一語化している語 「歩台間」「馴染」「後堂」「不思議」「十二生肖」など構成要素に分析しにくい語。 ふんしき しゅんき じゅにしがた

た。これでは、 からしらう としゅんくわく からしらう なみしらう としゅんくわく

また、二字漢語の後項要素の語頭にあたっても、「獅子」などのように末尾と重なる場合は、「末尾」に分類した。

*3「末尾」は「振り仮名における末尾」を分類した。漢字平仮名混じり文の場合、振り仮名のついた漢字と連続する本行の平仮名 為の上で振り仮名は本行とは別途つけられるものであり、本行とは連続的ではない。このため、このケースでは語を単位として分 部分で、 漢語サ変動詞や複合語を構成していることがある。語としてはその複合語を単位として自立語を認定すべきだが、書記行

類せず、 語末・複合語前項要素末を「振り仮名における末尾」という位置でカウントした。

ても【し】の使用が目立つ。『摂津名所図会』の振り仮名は、 例えば近世期のベストセラーである『摂津名所図会』(寛政八~一〇〈一七九六―一七九八〉年)の振り仮名をみると、 文脈を担っていることで、本行との繋がりを文字列に反映させて語頭に【 ゑ 】を使用する傾向が強い可能性が考えられ 漢字の読みを示すことに重きが置かれているとみられる。 語頭であっ 読本の振り

今後の課題としたい。

7

先 行 |研究と| 問 題

され 文 に使用される傾 0) 0 4 沂 る字 仮 な 世 らず、 名草子、 期 体 \mathcal{O} 平 で 【ゑ】と あ 仮 読 向 ŋ 名 資料 本、 が 語 あ 1 洒 る。 中 で - 末乃至 落本二や、 は、 この <u>〜</u>シ は、 は <u>〜</u>シ 使 歌学書や仮名遣書に 子供にも読める平仮名文の黄表紙・合巻三など、 0 用 <u>の</u> 仮名字体に主として 位 置 に関係 一字体の使用傾向 なく 使 ŧ 用 1 同は中世 さ 「上下をわ れ . る。 加期の 羔 方、 カュ 平 À 0) 仮名資料にも指摘され 「かしらにかゝさる」 太 種 類 は が 板行された文学作品 使用される。 (に対 L 多く 少 (近世期における漢字平 数字 の資料に 体 に広く見出 「下にか で あ お り V さる」 I され て、 語 頭 . る。 (仮 形 点 使 名 態 混 用 は 素

く定 着してい たもの とい

使用

位置

に

0

V

て

 \mathcal{O}

記

此述があ

る。。

当

時として【し】【ゑ】を区別し

て

 \mathcal{O}

用字

は

表記習慣とし

7

とし

じ

ŋ 頭 用

 \mathcal{O}

主

実

えよう。

語頭為

324 95. 58%

割合

22. 07%

84. 44%

22. 39%

78. 79%

180 74. 07%

数

64

38

15

26

里 そ 見 れ 八 は 八犬伝』 本 五 涥 め 肇 漢字の読 輯 巻之一 み方を示す (文 化 っ振り $\widehat{-}$ 八 仮 名に 四 年 お V \mathcal{O} ても、 振 ŋ 仮 例外では 名で は な 本 行 より 例 えば、 ŧ 仮 名 曲 字 亭 体 馬 \mathcal{O} 琴 種 \mathcal{O} 類 読 数 本 が $\overline{}$

25. 93% な 文 1 化二 ŧ \mathcal{O} \mathcal{O} 八〇五〉 <u>ે</u> 年)、 の二字体は先述 椿 説弓張月』 0 使用 (文化四 傾向で (一八〇七) 使用される。 年) \mathcal{O} 馬琴 振 ŋ \mathcal{O} 仮 他 名 の読 12 も六その 本 作 品 使 用 あ 傾 る 向 は 月 氷竒 確 認さ 縁

本行 振り仮名 63 ※割合は小数点第三位以下を四捨五入して計上した。 世 頭 特段 さて、 握 \mathcal{O} 振 (怎

の

使用

割合を、

他

0

平

-仮名資料と引き比

た際の多さで

あ

る

本行

本行

振り仮名

振り仮名

注

般

的

な

 \mathcal{O}

仮

名字

体

0

使

用

傾

向

が

馬

琴

本

仮

名

に

観察さ

意する必要がない

ように思わ

れるが、

本稿が取

ŋ 読

上

げ \mathcal{O}

た 振

1 ŋ

 \mathcal{O}

は馬琴

読

本

 \mathcal{O} れ

振 る、

仮 لح

名 1

に う

お 使

け 用

る

実

態

語頭における〈シ〉の仮名字体の使用数

語頭(

226 77. 93%

数

15

7

52

7

る。

割合

4. 42%

15. 56%

77. 61%

21. 21%

表 1

出世握虎稚物語

1725年初演 無頼诵説法 1779年刊 南総里見八犬伝 肇輯巻之一1814年刊 う 変字法により 虎 n 稚 仮 が 名の 物 主用され、 語 <u>ે</u> を調 使 \mathcal{O} 用されることを指摘す 査し 点 仮 人名字体 た佐藤 は拗音 を (三〇〇九) 詳 細 拗長音に に調 査 うる。 が した研 あ 使 $\overline{}$ る。 用さ 出 世 究に、 佐藤 れる傾っ 握 虎 稚 (二〇〇九) 享 物 向 保 及び 語 \bigcirc 0 は、 振 七二五 ŋ 語 中に 当 仮 該 名 同 に 板 年 は、 本 初 字 \mathcal{O} 演 体 振 \mathcal{O} 点 を使 浄 仮 瑠 を 用 名 璃 語 0 作 な 語 頭 品

に

使

頭

 $\overline{}$

出

188

南

することが 少 な V のである^{±c}

ころが て 洒 語 友 頭における 本 0) 語 頭 を使用しているの 出 頼 E 世握 通 お 説法』 け **∂** 虎稚物語』『無頼通説 る **∂** (安永八〈一七七九) 0) 仮名字体の使用種を比 0) は馬琴の 仮名字体の使用数と使用割 八犬伝のみである。 |法』の振り仮名の語頭では、 年 八 較すると、 馬琴読本 合を、 『南総里見八犬伝』 本行ではいずれの作品においても【 ゑ 】 先行研究で使用数 【し】が優勢である。 **肇輯巻之一によって引き比べてみたい** が 明 5 かになっ 振り仮名において【し】を圧倒的に上 ている浄瑠 が優勢であることが分 璃本『出 世) 表 1 物 各作 回

字の か、 振り仮名を付けた可能性もある。 に ば、 【 ゑ 】を表記する傾向の強い 振り仮 態度に、 直 複数種の **太** 】を語頭に使用するのは広く行われた用字で、 線的な【し 名は漢字の読み方を示す補助的なものである。 仮名字体 違いがあると見受けられる。 . の 方がスペースをとらない利便性があったことも想像に難くない。 を使用しての表記の方法に関係すると考えられ 板本が、 とはい え、 実際に存在するのである。 この点は、 本行と振り仮名とで、 どのような表記形式 振り仮名においてもその使用 本行の横に小書きする表記形式により、 表記慣習として通底していたと考えられる 勿 る。 論 の場合に、【ゑ】を語頭に書く、 板本の表記にあたり、 傾 向が だがしかし、 みられるの 空間的、 本行を書い 振り仮名において、 は当 な制 という用字が強く働 たり た人物とは 限 (v) もあることを鑑 前 であ の仮名字体 る。 語 別 頭 その \mathcal{O} (T) みれ 0 物 用 方

稿本の実態調 版され 仮名字体の 娯楽小説 仮名字体 上」に、 そこで、 板本に お 本稿では 0 ・通俗的な資料にあってどのように位置づけられるのか推定を行う。 ~ ŋ, 用 おける実態 使 査を行うことが可 字の 用実態を を 何 位 を以て適切な比 置 亍 振り仮名において【 ゑ 】を語頭に表記する傾向の 調 軸に他資料との 査 に使用する認識 とい '能な作家であるためである。 0 た、 較資料とするの 周 比 辺的 較が必要だが、 (後 人物が関わっ 述) か難しい。 を示しており、 近世後期には漢字平仮名交じり文の娯楽小説ほ この た板本の表記傾向と対 そこで、 (i) 更に校正を施した板本から表記規範を探った上で、 0 馬琴読· 仮名字体 強い 、馬琴読· 本の筆耕者が著作 ここで馬琴の読本を資料とするのは、 0 が照し、 使用 本の 意識 その中で馬琴読本の 振り仮名に が明 した娯楽小説 確な人物の つい か通俗 て、 振り その 振り仮名における や、 的 仮 ア用字が な読 筆耕を担当した往 名における 馬琴が み物が 読本の 他 0 点 膨 近 自筆 大に 世 期

け る その上で、 \mathcal{O} 馬 仮 名字 琴読本以前に、 体 \mathcal{O} 使 用 実 態 を 調 を語頭 査 に 確 表記する 認 ける。 傾 向 \mathcal{O} 強い 板 本 が あ 0 た \mathcal{O} か 近 世 前 期 0 娯 楽 小 説 往 来 物 0 振 仮

お

0

0

以上により、 る (を) を語頭に表記する傾向が、 馬琴の振り仮名における 〈シ〉の仮名字体の用字の大まかな位置付けを通して、 振り仮名においてどう行われるものだったのか、 見通しをつけることとしたい。 近世期に渡って通底したと考えられ

一 〈シ〉の仮名字体の用字に関する曲亭馬琴の認識

馬琴が〈シ〉の仮名字体の表記にどのような認識があったのか、確認しておきたい。

他だ の漢字の点画や仮名遣いの誤りを慨嘆する序文がつく。その中に、【し】【太】の表記について次のような記述がある。 馬琴読本『朝夷巡嶋記』初輯第二篇巻之一(文化一四〈一八一七〉年)には、「余 嘗 思ふ。大約坊間印行の草紙物 語に五ケの訛謬あ馬琴読本『朝夷巡嶋記』初輯第二篇巻之一(文化一四〈一八一七〉年)には、「まからではも おほよきばうかんいんこう そうしものかち いっこ あやまり し草帋はさておきつわがうへをもてこれを敷ん。」として、作家・筆耕・彫り師の三者を経て書肆も気づかぬまま世に出 回る板本

を以 亦これに同じ。…ヵ ろづをよろずとするの ・就中この書の前板。棗人の刀をもて。 戕 るゝものいと多かり。或 は圏点傍訓を削去り。或 は真名を削去て。補 ふに假字はかんづく しょ せんはん そうじん たう そになま かな ない かいしょ しょうしん たう をよろずとするの類亦多し] ましは義において違ざれども。まは上におくの假字。しは下につくの假字也。す。[筑紫琴を筑紫こととするの類なり] ゑえを~とし。ひゐをいとし。まもじをしとし。モーとし。 *** ッな をいとす。 「よ

に に広く行われている【 ゑ 】を語頭に、【 し 】を非語頭に使用する傾向と合致するものだと考えられる。 !つくの假字」としている。少なくとも馬琴は【ゑ】【~】の使用位置を別のものとして捉えている。この吏用立置の区別、常がなり師による板本の表記の誤りとして【ゑ】であるべきところが【~】になっていることを挙げ、「ゑ は上におくの假字。 は、 は 下も 近

図2に後刷本の られ一、 で校合した本が残っている。 た板から板面を彫り出し、その板木で印刷され、本の形となる。その間に馬琴は何度も校合した一が、 右のような認識は、馬琴の校合からも確認できる。読本の出版工程では、最終稿本を筆耕が清書し、 訂正のうち一ヵ所は、〈シ〉の仮名字体を区別しての使用に関わる。 国立国会図書館本 その馬琴手沢本の『南総里見八犬伝』国立国会図書館本〔本別 3-2〕 [わ-124] の同箇所を載せる 図1に国立国会図書館本 は、 彫り師がその清書を貼り付 朱による訂正の書き込みがみ 印刷されて書物になった状態 [本別 3-2] に該当箇所を

図1 本別 3-2 第七輯巻之二 八丁ウL7

図2 わ-124 第七輯巻之二 八丁ウL7





に訂正する(濁点も加えている)。 図1の馬琴校正では、 第七輯巻之二八丁ウL7「如此 図2後刷本の国会図書館本わ-124では同一箇所の板木が直され、【ゑ】となっている。 々々」 0) 振り仮名に印字されている「し う / へ」と語頭の〈シ〉を朱で【ゑ】 語頭は【ゑ】

という使用位置を分ける認識の強さが窺える。

では実際に、 馬琴が自筆稿本のうちから読本の振り仮名で語頭を【 ゑ 】とする仮名字体の使用を振り仮名に行っていたのか、 確

振り仮名における〈シ〉の仮名字体の使用傾向

Ξ

推定する。 比較を行う。 の著作及び、 ここでは、 これにより、 馬琴読本以外で筆耕を担当している本の振り仮名における〈シ〉の仮名字体の使用傾向の調査結果を示し、 馬琴読本の稿本と板本の振り仮名における〈シ〉 まず馬琴読本の振り仮名における【 太 】を語頭とする使用傾向が、 の仮名字体の使用傾向の調査結果と、 同時代としてどう位置づけられるか、 馬琴読本の筆耕を担当した人物 その実態の

調査は、 語における位置はフィルタ機能で計上した。 調査範囲 の振り仮名の 〈シ〉の仮名字体を目視で確認・採取し、 語における位置をタグ付けし、 エクセルに入力していっ

語における位置」は次のように分類した。

自立語

単 字 1

語頭

語中人 構成要 語中 素頭*2

末 尾 *3

*2「語中」の「 *1「単音節」 は「知る」「字」などの場合。 構成要素頭」は和語の複合語における後項要素の語頭や、 本行では助詞に下接する動詞 二字漢語・三字漢語の場 「する」の連用形 「し」が該当する。 合 後項要素にあたる二字

目・三字目の語頭に 〈シ〉が出現する場合に分類した。 先行研究にいう「準語頭」に該当する。

次のような場合は「語中」に分類した。

- ・「鑣子木」「薬師詣」など構成が二字漢語+後項要素の組み合わせになっている語・「鑢四郎」「並四郎」「杜荀鶴」など人名・「歩台間」「馴染」「後堂」「不思議」「十二生肖」など構成要素に分析すると意味しにくに歩台間」「馴染」「後堂」「不思議」「十二生肖」など構成要素に分析すると意味しにくにあった。

また、二字漢語の後項要素の語頭にあたっても、「獅子」などのように末尾と重なる場合は、「末尾」に分類した。

*3「末尾」は「振り仮名における末尾」を分類した。漢字平仮名混じり文の場合、

が、 平仮名部分で、漢語サ変動詞や複合語を構成していることがある。語としてはその複合語を単位として自立語を認定すべきだ 書記行為の上で振り仮名は本行とは別途つけられるものであり、 本行とは連続的ではない。このため、 このケー ・スでは

語末・複合語前項要素末を「振り仮名における末尾」という位置でカウントした。

を単位として分類せず、

付属語

した。

であれば本行に書かれる送り仮名や漢語サ変動詞連用形 漢字平仮名交じり文の振り仮名は主として自立語だが、 Ī 往来物などは漢文に則して振り仮名が文単位でつく。 は、 自立語における位置に分類し、 付属語はすべて「付属語」に分類 漢字平仮名混じり文

振り仮名のついた漢字と連続する本行の

<u>=</u> 馬琴読本の振り仮名における〈シ〉の仮名字体の使用傾向

調査資料一 曲亭馬	琴読本・	松亭金水	読本(比	較資料)				馬琴の自筆稿本・板本
●●の人物題名は内題か	で、古典籍	ご叩ぶつ	こ、る人物ースに登録	と司一人勿されている題	と 異 な	る場合は	()に示した	平义
料の力物に記	略 資料 二に		3	調査範囲	行数	板元	稿了年・発行年	- まとめ、調査資料一の一覧表
						1		した。
3 復讐月氷竒縁	月氷奇縁		不明	巻 之 一	一一行	太河助内屋	文化二〈一八〇五〉年	自筆稿本の残る馬琴読本におけ
八郎為	Ę	'	F 月	前篇	- - -	平 林 庄	文と写 / 一 () ii	る調査結果は、『南総里見八犬伝』
棒説弓張月	7 7				- - 彳	Ŧī.	イ ロ - ノ (十 *	の第四輯巻之三 (八犬伝①)、第八
昔語質屋庫	質 屋 庫		 O	巻之一 第二		太河 助内 屋	文化七〈一八一一〉年一一月一文化七〈一八一一〉年七月	輯
		曲亭馬琴						廿七 (八犬伝③) と、稿本の
<u>9</u>	-	j	,	四輯巻			政三〈一八二〇〉	7
<u>i本あり</u>	八 犬 伝 ①		◆千形仲道	第三十五回	一一行	八山	文政三〈一八二〇〉年一一日	
南忩 担 見 し 犬 云	大 云 ②	1	● 谷 金 川	第八輯巻之二	一 一 亍	丁子屋	天保二〈一八三二〉年一二月	、三、更に、第四輯巻之三以前
	7 f:	ı	3	七十六	- - 1	平兵	保三〈一八三三〉	作で、筆耕の嶋岡節亭の担
	八 犬 伝 ③		白馬台音成	十七 第九輯巻之二	 一 行	· 丁 : 子 ī 屋		る - -
	1) 1		-	平兵	保十〈一八匹〇〉年正	る、前章こおって示した
				_		可	了手・発テ手	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
高本 社 條 泰 時 野 好 弱	明 断 録	松亭金水	不明	第一回車	_ 〇 行	佐油助品	弘化四〈一八四七〉年序	果を用いる。
<u> </u>								」 にこ、『宇岳軍忌臣』 人介つ 筆斗

比較資料として、松亭金水の読本『北條泰時明断録』の調査結果を加える。馬琴の活躍時期からやや時代を下る読本だが、松亭金

として、板本のみが現存する『月氷竒縁』『椿説弓張月』を調査資料に加えた。以上により、一八一一-一八三九年の自筆稿本及び、

一八○五-一八四○年間の板本の振り仮名における〈シ〉の仮名字体の表記を検討することができる。

水は馬琴読本の筆耕を担当したことがある人物である「四。馬琴と連続的に登場した戯作者の表記として捉えられよう「玉。

表記しないが)、 主として まず全資料 語 の本行には 盟頭には 1 \mathcal{O} 単 振 が使用されることが 字 点 ŋ 0 仮 語 仮名字体 を語頭とする語を平仮名 名 を 中 使 本 用 語 末 す 行 0 る傾 \mathcal{O} 使 使 付 用 属語に 用 傾 確 向 認で が 傾 向 を併 強 向 は <

 \mathcal{O}

調

查

結

果を

3表2に

す。

振

 \mathcal{O}

仮

名字体

 \mathcal{O}

使

用 示

傾

向

録 · 金 水 名字体の 122 |位以下を四捨五入して示す)を示せば、 ~ 使 張 |用割合七〇・五二%、 使用 月 0 \mathcal{O} 51·使用割合二九 0) 語 使 数·使用割合 振り 頭に 用数を上回 仮名では、 注 目 た っ る。 (以下、 \ \ \ . 四 弓 その い ず 板 八%、 割合は れも 本 \mathcal{O} 、【怎】 月 月 小数 / 氷竒 \mathcal{O} 氷 点 仮 竒

41 琴 使 0 用割合 自 筆稿本が存する質屋庫・ 兀 八 五. % <u></u> こ 八犬伝①・八犬伝②・八犬伝③の振り仮名における使用傾向をみてみよう。 124 使 用 割 合七五 五. ※ と、 およそ語 頭の 七 割 に 点 が使用されてい 馬琴 る。

の自

筆による

仮 % 【 煮 】を使用する傾向が強かったことが明らかである 名 \mathcal{O} 語頭で 犬伝②: は O % , 四資料と £ 八犬伝③: 【ゑ】で表記することが圧 九六・ 五〇%と概 ね八割以上を占める。 倒的に多く、 割合を示せば、 馬琴の 質屋庫 自筆稿本の時点で、 八六 七 五. 振り仮 % 八 犬伝①:七二・二 名の 語 頭の

とほぼ同じく、 用することが分かる の清書を経た質屋庫 語頭へ【ゑ】を使用する傾向が強い。 (質屋庫:九五・一八%、八犬伝①:九六・一〇%、 八犬伝①・八犬伝②・八犬伝③の板本の調査結果も、 八犬伝②:九九・二九%、 自筆稿本と同様に振り仮名の語 八犬伝③:九七・九〇%)。 筆耕 頭 は馬琴の を 自

○九%、 使用割合三六・二二%、【ゑ】81・使用割合六三・七八%と【ゑ】の使用割合は上がるものの、 及ばない。 馬琴読本と同様だが、 さて、 [[[] 松亭金水の自筆稿本が残る明断録を確認しよう。 71・使用割合五五・九一%と、【し】【ゑ】二字体の使用割合に、 その自筆稿本における語頭の〈シ〉の仮名字体の使用数・使用割合を確認すると、【し さきほど述べたように、 馬琴読本ほどの大差はない。 振り仮名の語頭へ【 ゑ 】を使用する使 馬琴読本の【 ゑ 】の使用割合には 板本では、 56 ·使用割合四 用 傾 向 46 兀 は

録と比べると、 本では月氷竒縁 様の使用傾向 以上、馬琴読 が た行われ 語 時 本では自筆稿本の時点から、 頭に【ゑ】を使用する割合が、 点よりも、 ていた。 遅い すべての読本の振り仮名において、 時 期の 読 本にお 振り仮名の語頭の いて、 馬琴読本では七-一〇割方、 徐々に語頭へ【 ゑ 】の使用が徹底されるようにみえる 一六。 シに 語頭に【 ゑ 】が使用される傾向の強さが窺えたもの 【 ゑ 】が使用されることが明らかである。 明 び断録では六割程度と、 使用傾向に差があることに留 松亭金水の の、 板本でも 馬琴読 明 断 同

<u>=</u> 馬琴読本の筆耕が関わる資料の振り仮名における **〜**シ の仮名字体の使用傾向

検討する。 道)・八犬伝② 次に、さきほど振り仮名における〈シ〉 調査資料二に、 (谷金川) /宝田千町) 資料の情報と調査範囲を示した。 の筆耕を担当した人物が中心的に関わる板本における振り仮名の の仮名字体の使用傾向を確認した馬琴読本の質屋庫 (嶋岡節亭/節亭山人)・八犬伝① の仮名字体の使用傾向

往来物 質屋庫 稽本 の 外實 庭 筆耕を担当した嶋岡節亭=節亭山人 せの資料は読本 訓 (語教) 往 来 (絵抄 (道外実語) 解)_ 一人 である。 (以下仲道庭訓)、 岡山鳥・宝田千町の資料は彼らの戯作者としての著作だが、 八犬伝②の筆耕を担当した谷金川=宝田千町の資料は往来物を下 『放下僧』 (以下放下僧)、 八犬伝①の筆耕を担当した千形仲道 仲道 庭 訓 は 千形仲道が筆耕を 敷きにした「九 の 資料

は

調査資料二 曲亭馬琴の筆耕が関わる資料

※題名は内題からとり、古典籍総合データベースに登録されている題と異なる場合は()に示し

た

※○◆●の人物は調査資料一に同じ印がついている人物と同一人物

	板本のみ		
滑稽本	往来物	読本	
中本	大本	半紙本	調
教	〜 庭	(画	査
訓	廷 訓	放本	資料
道	訓往	家復 雌	料
外	来来		
實	木 繪	巡 放	
語	抄	下	
教	解	僧	
	0		
	仲	放	略
外	道	下	称
実	庭	僧	
語	訓		
● 宝	玄恵	0	著者
玉田	157	節 亭	
千		山	
町		人	
不	•	不	筆
明	千	明	耕
	形		
	仲 道		
_	一	第巻	調
₩	₩	一之	査
		編一	範囲
五.	六	八	行
行	行	行	数
兵森	與西	卯伏	板
衞屋	八村	兵水	元
治	屋	衛屋	
天保	文政	文 化	発行
五	七	=	年
^	^	^	
_	_ _		1
//		//	
八三	八二	八〇	
八三五	八二四〉	八〇六〉	

例1 仲道庭訓 五丁才

あらたまるとしょきよろこびひにんおんこゝろ これゑだせんいもくしゅっ改年吉慶被∠任;御意;候之條先以目出かいねんのきっけいられまかせ ぎょいに の でうまづもってめで

例2 道外実語教 一丁才

米高故多不以食

り、振り仮名の付け方もそれぞれ異なる点に注意が必要である。 ――務めた本で、著述としての関りではない。これらの資料は、ジャン

ルが異な

れているのか不明である。しかし、馬琴から離れた板本での〈シ〉の仮名字体和ているのか不明である。しかし、馬琴から離れた板本での〈シ〉の仮名字体自筆稿本は存在せず、特に岡山鳥と宝田千町の著作は本人の表記が反映さ

の使用傾向について、参考情報は得られよう。

漢字平仮名混じり文で、漢字ごとに付される振り仮名が対象となる。調査対象とする振り仮名について述べる。放下僧は馬琴読本と同じように、

道庭訓は、 本行の変体漢文の両側に傍訓がついている (例1)。 右側に は

の読解に関わる右振り仮名の 振り仮名が字音であれば訓、 漢文の語順に合わせて振り仮名として付けられており、 訓であれば字音がつけられるという、 〈シ〉の仮名字体を調査対象とした。 本文を返り点の通りに読み下すと読解の補助となる。 本文の読解には関わらない漢字教材となっている。 左側は、 その漢字の右 今回は、 本文

福心得種」(六-十丁、 道外実語は二部構成の作品で、 頭書付) の振り仮名があり、 漢文の「道外実語教」(1-五丁)につく読み下し文の振り仮名 それぞれを調査対象とした。 (例2)と、 漢字平仮名混じり文の

寿

その調査結果が表3である。振り仮名の語頭に注目しよう。

表3 馬	馬琴読	本	の筆制	#に	おに	ける著	作・別	リの $_{1}^{2}$	筆耕る	本に	おけ	る	〈シ	\cdot			
						扎	長り仮え	名						本1	亍		
				行	単	語	語中		末	付		行		自立			付
			計	頭	字	頭	構成要 素頭	語中	尾	属語	計	頭	語頭	複合語 下接部頭	語中	語末	属語
放下位		(67	2	3	28	10	17	9		42	2	0	1	12	9	20
(節亭山) <u>岡節亭)18</u>		点	5	0	0	4	1 0		0		4	0	4	0	0	0	0
仲道庭	副	(984	21	0	253	324	324 88 1		77							
(千形仲)	道筆)	羔	166	11	0	150	12	0	0	12	ļ						
18234	=	し	94	0	0	0	0	44	42	8							
道外	漢	(44	0	0	0	0	9	30								
実語教	文	羔	30	6	1	8	1	1	0		ļ						
(宝田千)	〈	し	1	0	0	0	0	1	1		<u> </u>						
町/谷金	名漢	(16	0	0	2	8	1	5		12	0	0	0	2	7	3
川) 1834年	交字 じ平	杰	15	0	0	13	2	0	0		2	2	0	0	0	0	2
1034#	り仮	し	0	0	0	0	0	0	0		4	0	0	0	0	4	0

表4 1	7-1	8世紀	<u> </u>	通俗	小説	・往来	そ物に	こおに	ける	〈シ〉	の	仮彳	3字	体の仮	使用が		
	_				į	振り仮	名							本行	Ţ		
			行	単	語	語中		末	付		行	単		自式	Σ語		付
		計	頭	字	頭	構成要 素頭	語 中	尾	属 語	計	頭	字	語頭	複合語 下接部頭	語 中	語 末	属語
東海道	(159	3	5	62	41	17	32	2	273	2	6	5	11	65	136	50
名所記 1658-	為	17	2	0	5	12	0	0	0	18	2	0	17	1	0	0	0
1661年間 成立	し	18	1	1	3	1	1	12	0	36	0	0	0	0	4	19	13
好色一	(75	1	0	7	20	16	32	0	301	4	4	3	5	89	135	65
代男	為	31	2	0	27	4	0	0	0	51	5	1	44	8	0	0	0
1682年	し	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	2	2
庭訓往	(736	35	0	127	156	121	255	77								
来図讃	杰	449	30	0	269	172	1	0	7								
1688年	し	37	0	0	0	0	8	21	8								
商売軍	(121	5	1	47	36	16	32	21	235	3	10	2	6	54	104	59
配団	杰	6	0	0	5	0	0	0	0	37	1	7	27	0	0	0	2
1712年	し	1	0	0	0	0	1	0	0	15	0	1	0	2	1	6	5

る。 使用割合一二・五%と、【 し 】が優勢的に使用される。 放下僧は 用 例 数が少な いが、 振り仮名の 語頭における仮名字体の使用数と使用割合は、【~】 本行では、 やはり用例が少ないもの 0 語頭には【ゑ】の 28 使用 割合八七・五 みが使用されてい 羔 4

仲道庭訓の 語頭では ~ 253 • 使用割合六二・七八%、【 ゑ 】 150・使用割合三七・二二%と、 四割方【ゑ】も使用されるが

【し】の使用数が上回る。

道外実語も用例数が少ないものの、 漢文・漢字平仮名混じり文ともに語頭には 怎 が使用される。 漢文につく読み下し文では

【 ゑ 】のみが使用され、漢字平仮名混じり文では 15 例中 13 例、 八六・六七%が 【 え 】 である。

よりも【え】を使用する傾向があるのは道外実語のみである。 以上、 、放下僧・仲道庭訓では、振り仮名の語頭に【 ゑ 】を上回って【 し 】が使用され、 馬琴読本と同じく振り仮名の語

を使用する表記が行われていない。 った二〇。板本ではやや【ゑ】の使用数が増えてさえいた。ところが、馬琴読本の筆耕から離れた表記では、 筆耕と同 ここで、馬琴読本の板本における〈シ〉 一人物の千形仲道ともに、 馬琴の読本の筆耕では、 の仮名字体の使用傾向を振り返りたい。 自筆稿本と同じように振り仮名の語頭に 質屋庫の筆耕と同 一人物の節亭山 馬琴ほど振り仮名に【ゑ】 を表記する傾向が強か 八犬伝①

にその使用 ずれの資料の 傾向 が 徹底されるかは、 振り仮名においても、 同時代としても資料差があることが窺える。 【 左 】 が 語頭に使用される傾向そのもの は見出 せる。 L カコ Ļ やは り馬琴読 本ほど振り 仮名

四 近世前期資料の振り仮名における〈シ〉の仮名字体の使用傾向

するにもかかわらず、 明ら 既に述べ かにされている。 た通 ŋ 浄瑠璃本 本行に比べて【ゑ】を表記する傾向に、 馬琴読本 『出世握虎稚物語』、 を中心とした、 近世後期の資料における使用実態を確認しても、 洒落本 『無頼通説法』 資料差がかなりあったと想定される。 では、 語頭に【し】を使用する割合が多いことが先行研 振り仮名には自立 語 語頭が 液頻出

馬琴読本に先行する娯楽小説に、 振り仮名の語頭へ優勢的に【 ゑ 】を使用する資料があったのか確認したい。 一七一八

調				りみ	板本			
査	※ 題			9世草子		往来	草子	
具料三 近世	調査資料のおとり、	1	大東海道名所記	大好色一代男		大废割往来區離	·本 一 新 人 軍 記 団	アノ宣西
の資料	略 称 籍 総		名 所 記	一 代 男		区	記団	酉
	著者 合データ		浅井了意	西鶴		· 支	工鳥丰青	ų į
\ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \	筆耕 ベースに登録・	井 了 意	れ下ると	西吟		不明	不明	7
	調査範囲	1	巻 之 四	巻 之 一	- }	-	き 之 一	
	行数 と異		一 二 行	一 一 行		ナ 行	一 一 	- - 彳
i j	板元なる場合に		未詳	心孫 兵衛 可			江嶋屋市	左衛
	成立年代・発行には()に示した	治年間 4	○一点 成五 立五 八 一	天和二〈一六八二	Ī.	真事五 ヘーカル	正恵二〜一七一	行 - - - - -
	年		六六	八 二 年		八 〉 年	1	左
世紀の娯楽小説三本と平仮名がつい	- た往来物一本を取り上げて、その使用	傾向を把握する。	調査資料三に調査資料の情報を示	名草子『東海道名所記』(以下名所記)のした。近世前期の娯楽小説として、仮	板下が浅井了意とされる巻之四三、西	鶴『好色一代男』巻之一(以下一代男)	三、江島其磧『商売軍配団』三巻之一	(以下軍配団)を選出した。また、往来

助となる振り仮名が調査対象となる。 となった『庭訓往来圖讃』(以下圖讃) 三を取り上げる。 圖讃は、 本文の右側につく、変体漢文を返り点の通りに読むときの読解の 補

物は

庭訓往来の絵抄系統本の

先 駆

け

調査の結果は表4にまとめた。 振り仮名の語 頭 \mathcal{O} 0 仮名字体の使用数・ 使用割合を示す。

し】を優勢とする資料

軍配団 名所記 () 47·使用割合九○·三八% 62·使用割合八八·五七% ゑ

5

・使用割合七・一四%

3

使用割合四・二九%

点 5 使用割合九・六二%

「玄」を優勢とする資料

代男

圖讃

【し】7・使用割合二〇・五九% (点)

127・使用割合三二・〇七% 点 269 27 使用割合七九・四一% 使用割合六七・九三%

振り り仮名の! 語頭の (i) に、 代男・ 圖讃は 【 ゑ 】を使用する傾向が強く、 名所記 軍 革配団は 1 】を使用する傾向が強 名

所記 仮名字体の使用傾 ・一代男・軍 前に、 配団の本行では、 個人差があることが窺える。 いずれも語頭に【ゑ】を使用する傾向が強いが、 それに対して、 振り仮名においては、〈シ〉

ペースがやや広く、【ゑ】を使用しての用字を行う余裕があったのではないか、と推測され を上回るものの、【し】が語頭に書かれる例もかなりある。仲道庭訓と引き比べると、圖讃には左振り仮名がない。 注目しておきたい用例として、 【 ゑ 】を使用する志向が強いといえるのは一代男だが、そもそも語頭を〈シ〉とする語が34例と少ない。 名所記の振り仮名では語頭に【し】が表記されることを示しておきたい。 る。 圖讃は 右振り仮名のス

名所記

 二十一丁才 L6
 しそん

 十二丁才 L6
 しそん

 しそん
 しそん

 こ十一丁才 L6
 しそん

例は右の一例のみ)。 の音が重なる箇所に、 においても同様の使用傾向がある。 【し】は、表2、 字母の異なる【え】とせずとも、視覚的な区別さえできればよかったことが窺える(なお、調査範囲内で〈シ〉の音が重なる用 表 3、 字母を同じくして形の若干異なる【し】【し】を使用し、 表4から分かるように、自立語の語中末や付属語に使用される傾向のある仮名字体である。 ところが、振り仮名では語頭に使用されるのである。「し し や」の例などは、二字漢語で 漢字ごとの振り仮名を字体で区別している。 名所記の本行

が働 使用する傾向が する版がある。『新撰仮名文字遣』には、「かしらにかゝさるかなの事」として【 し 】を挙げながら、【 し 】を「かしら」に表記して 「ゆうけん也」とする例が示される「宝。【 ゑ 】を語頭とする用字は必須ではない。しかし、本行では全ての資料に語頭へ【 ゑ 】を 仮名字体の使用位置を区別して表記する指示が記載された書物には、 くものだったことを浮き彫りにする。 強い一方で、 振り仮名に仮名字体使用の個人差が表れる点は、 例えば『男重宝記』に「上下をわかず書べき【し メインの本行にこそ「語頭は【 ゑ 】」という用字意識 』と記

五 結論

とは示し得たと考える。 本によって個別差がある使用傾向として表れ、その中で馬琴読本の振り仮名に 稿で確認した資料はごく僅かで、 以上、 本が見つ 琴において、 かる可能 性は高い。 振り仮名の語頭の ただし、 なおも調査範囲を広げる余地は残り、 本行では押しなべて強い使用傾向として表れる 〈シ〉に【え】を使用する表記態度がかなり徹底されたものだったと明らかになった。 勿論、 馬琴並に振り仮名で語頭に 【 ゑ 】を使用する傾向 〈シ〉の仮名字体の使用傾向 <u>ે</u> の仮名字体の用字が、 の強さが特徴的であるこ 振り仮名では 本 \mathcal{O}

文 れ \mathcal{O} のは近世に入って が考慮されたとは考えにくい。 査を行った資料で ようこせ。 仮名字体を使 文章において行われるように り仮名の 語 頭に 用しての表記に振り いからで、 は 1 1 】が使用されやすい事情として、 それ以前の振り仮名は主として片仮名で付けられるものだった二次。この起源を鑑みれば、 を語頭へ優勢的に表記する資料においても、 複数種の仮名字体を使用しての表記は、そもそも古くに和歌や仮名文といった平仮名をメインとし なったものである。 仮名の表記形式は想定されておらず、本行に比して用字の個人差が表れやすかったものと考えら 漢字の読解補助である振り仮名が平仮名で表記され、 狭いスペースに表記する利便性が求め 語頭に【 ゑ 】を使用する用例が確認できた。 6 れたとも考えられるが、 公刊されるようになった もともと複数種 スペ ース 今回 0) 4 調

傾 は考える。 向 が 強く表れない 0 今後の課題としたい 仮名字体 :の使 ケースも含め 角傾 向 は T 中 観察・ 世以 来 検討することにより、 通 底した用字だと考えられるが、 その時代における仮名字体の使用実態を明ら その用字の 徴 証 \mathcal{O} 4 を取り 上げるの かにできるものと ではなく、 用字の

注

- 七)に豊臣秀吉書簡、 (一六〇〇) 松 (二〇〇六) に定家筆資料、 など、 今野 幅広い平仮名資料に指摘され (二〇〇一 a) に荒木田守武 矢田 (一九九五) に定家とさほど時期を隔たらない時期の文書資料や僧侶の資料、 『守武千句』 (天文九 ← 五四○⟩ 年成立) や宗綱筆『土左日記』(慶長五 安田 (一九六
- 久保田 (一九九七) 仮名草子は久保田 (一九九四)、 による滑稽本の調査などにも指摘される。 後期読本は市地 (三) 五)、 洒落本は内田 (一九九八a) や久保田 (二〇〇九) など。 この ほ
- 『矢野(一九九○)、久保田(一九九五b)、内田(二○○○) など。

兀

- 77-6 の宝暦一〇〈一七六〇〉 似合さらは 玄 の仮名也とまりには し の仮名を書へし中にも し 仮名しかるへからん」と記される(八戸市立図書館) おくべし」(十一丁ウ-十二丁ウ)という項目があり、「上下をわかず書べき【し】」の記載のみが確認できる(近世文学書誌研究会 して【ゑ】が挙げられる。 古くは『和歌大綱』(鎌倉時代頃成立)に 仮名字体の使用位置を区別することの記述が歌学書、 る使用傾向として表れる使用方法が中世期から近世期に通底したといえる。 『第二期 『新撰仮名文字遣』(永禄九〈一五六六〉年頃成立)にも「かしらにかゝさるかなの事」として【 し 】、「下にかゝさるかなの事」と (元禄八 教養・教習2』第十一巻、 (一六九五) 近世文学資料類従 年)巻之二にも同項目 近世期には『男重宝記』(元禄六〈一六九三〉 年船越三蔵写本を新日本古典籍総合目録DBで確認。 参考文献編 臨川書店、 「下にかゝぬ ゑ」「上下わかぬし」、『悦目抄』(鎌倉時代頃成立) 17 (十一丁ウ-十二丁ウ) pp. 56-58)。『一歩抄 男重宝記』勉誠社、一九八一年、 仮名遣書、 (佐々木信綱編、 書札礼、 があるが、〈シ〉に関する記述はない(長友千代治編『重宝記 手爾葉遣』(延宝四〈一六七六〉年成立) には 風間書房、一九七三年、 年)巻之二に「哥書かなづかひといふ事ありよくおぼへて 教訓書にあることについては宇野 原本所蔵者亀井孝、p.70)。『新板増補男重宝記』 書誌 ID:100059439)。歌学書や仮名遣書に必ず 和歌大綱 p. 138、 に「下にかゝざるゑ」 (一九八六)に 悦目抄 「とまりに書て 請求記号 96-
- 市地 スが狭いことから、本行ほどバリエーション豊かに仮名字体を使用する余地がなかったと考えられる である」 が使用されていることが確認されている。 振り仮名は五七種と、 (二〇一六b) (二〇一七) 年 ことと、【し の仮名字体においても、 字母の種類数が少ないことを明らかにした。 に調査により、『南総里見八犬伝』肇輯巻之一の本行には九二種類、 両字体の使用が確認されている。 前田(一九七一)に「振仮名として使われている仮名の方がより単純な形になっているの 市 地(二〇一三)においても、『椿説弓張月』の仮名字母の種類について、 馬琴に限ったことではなく、 振り仮名は本行の補助的な要素であり、 前期読本『雨月物語』(安永五 振り仮名には七〇種類の仮名字 書き込むスペー 本行が八〇

市地(二〇一六b)による。なお、本行の〈シ〉の仮名字体の使用傾向も同様である。

七 いるため、〔志〕を用いて「まとまり」の「かしら」を示す必要性が薄かったと考えられる。」(p.8)と指摘している。 延宝五〈一六七七〉 注六に「振り仮名においても〔志〕の 年板『平家物語』の 〈シ〉の仮名字体の用法を検討した土肥(二〇一八)は、 形態素頭表示機能を確認できた。 しかし、その出現率は低かった。 振り仮名を検討対象から 漢字が本行で記され

八 内田 (一九九八a)

体について言及している部分は太字にした。 木越(一九八九)p.94注にこの言辞の存在が示されている。早稲田大学本 ースで確認。翻刻は稿者により、 割書きは「]で囲い、仮名字体が問題となる記載箇所は字体を変体仮名で表示し、 (請求記号:へ 13-03093) を早稲田古典籍総合データベ 〈シ〉の仮名字

翰林書房、一九九八年))、『夢想兵衛胡蝶物語』(大高洋司『日韓の書誌学と古典籍』(アジア遊学 184、勉誠出版、 読本は、 長友千代治 韓国中央図書館蔵板本に、馬琴による朱筆の校正の書入れがあることが紹介されている)が残っている。 『近世説美少年録』第一輯の校正を、 実際に『墨田川梅柳新書』(鈴木重三「『墨田川梅柳新書』の校合本―紹介とささやかな考察―」(『読本研究新集』第一集、 服部仁氏は「馬琴の著述生活」(『近世文学研究叢書6 「解題」(『近世小説稿本集』天理大学図書館善本叢書、 出板までに三回、出板後に二回している」と日記から読み解いている。 曲亭馬琴の文学域』若草書房、一九九七年)p. 389 にて「馬琴 第六十五巻、八木書店、一九七四年) を参照。 板本へ校合を行った 二〇一五年)によ 馬琴に限った研

一板坂則子(一九七八) p. 51

嶋記 度が最も多い谷金川(六〇冊)と、 ネット上でデジタル公開されており、誰においても検証しやすい。以上を踏まえて、『南総里見八犬伝』を中心とし、調査資料を選 自筆板下だったのか筆耕がいたのか定かではなく、 資料以外に天理大学附属図書館に『雲妙間雨夜月』巻二の稿本(文化五〈一八〇八〉年、請求記号:九一三・六五-イ七)、 筆耕である千形仲道が携わった第四輯巻之三、白馬台音成が携わった第九輯巻之廿七を選定した。馬琴読本の自筆稿本は今回の調査 調査を行った馬琴読本の選定は、 初-四篇までの計二〇冊の稿本(文化一二〈一八一六〉-文政三〈一八二〇〉年、 『南総里見八犬伝』の稿本の方が長期に渡る馬琴の自筆状況を確認できるうえ、筆耕が明記されている。『雲妙間雨夜月』は 千形仲道がほとんどの筆耕を担当している。『南総里見八犬伝』の稿本は調査資料とする第四輯巻之三以外、 彫り師を担当する頻度が最も多い横田守(一四冊)の両者が携わる第八輯巻之二を軸とし、 板本全一〇六冊のうち四九冊の自筆稿本が残る『南総里見八犬伝』において、 『朝夷巡嶋記』初-四篇は今回調査資料とする『南総里見八犬伝』第四輯巻之三の 請求記号九一三・六五-イ二三)が存する。 インター 「朝夷巡

化七年、 筍が全巻筆耕を担当した『松染情史秋七草』(文化六年、 〜四は嶋岡節亭、 担当巻は明記されていない。しかし、 松本平助)と対照すると(それぞれ『馬琴中篇読本集成』 巻之五の刊記には、 巻之五は鈴木武筍の書風と近似する。このことから、 筆耕に嶋岡節亭と鈴木武筍の名がある。 巻之一~四と、 五巻六冊、 巻之五とでその文字の書風が大きく異なることが分かる。 森本太助)と、 一第十一巻(汲古書院、二〇〇一年)の影印を参照)、 調査範囲となる巻之一の筆耕は嶋岡節亭(岡山鳥)と判断 巻之五の漢文による跋文に「鈴木武筍書」とある以 嶋岡節亭が全巻筆耕を担当した『常夏草紙』(文

板下をお路が執筆するようになった『南総里見八犬伝』第九輯巻之四十七上下・巻之四十八の筆耕を担当している。また、 文政一○〈一八二七〉年以来長らく続編が出なかった『朝夷巡嶋記』の七編・八編を執筆した。 馬

馬琴のもの以外で、自筆稿本が残る読本を見出すのは困難であり、 稿者が捜索した限りで『北條泰時明断録』が唯一だった。

犬伝②以降は九割の語頭に【ゑ】を表記しており、 定される。これは、本行に語頭を〈シ〉とする語の平仮名表記が少なくなり、【 友 】を語頭に使用する必要性が低まっていたことと関 馬琴読本において、月氷竒縁・弓張月と、 振り仮名において【玄】を使用する表記態度が強まったと考えられる。 質屋庫以降とでは、 振り仮名の語頭の〈シ〉〈、徐々に【 ゑ 】を表記する傾向が強くなっていると想 振り仮名の語頭に【 太 】を使用する傾向の強さが異なる。

セ 化政期に合巻・滑稽本等の執筆を行った岡山鳥のこと。

文の一行あたりの字数が仲道庭訓とは一致しないため別板である。仲道庭訓は宝暦十年鱗形孫兵衛板から改訂した本である可能が高 ままに頭書についた絵を削り新たな絵を埋め木した安政四 『庭訓往来絵抄』(韓国中央図書館、 仲道庭訓は題簽に『庭訓往来繪抄解 開されている鱗形孫兵衛板 先行する庭訓往来に改訂を加えたものだと分かる。改定前の庭訓往来については、本資料と同じ板の、 」とあることから、宝暦一○〈一七六○〉年鱗形孫兵衛板『庭訓往来』との関係が知られる。 『庭訓往来』(乙竹文庫、 請求記号:365-243-2、 両假名附』とある。内題の「庭訓往来」の下には「愆 文 謬 字 音 訓 請求記号:ル 185-412)を確認すると、仲道庭訓と板面が酷似するものの、本 古典籍総合目録DBで確認)の刊記に「寶暦十庚辰歳正月鱗形屋孫兵衛 〈一八五七〉年伊勢屋半右衛門(仙台)·和泉屋市兵衛 筑波大学図書館HPに電子資料で 千形仲道筆の本文はその /點假名等改訂」とあ (江戸)

来』(天保五〈一八三四) 『教訓道外実語教』は 石川松太郎監修 年 の往来物を下敷きにした滑稽本である。 『往来物大系34 教訓科往来』(大空社、 一九九三年)解題によると、『実語教』、

かというと、例えば左の表に示すように、 節亭山人・千形仲道・宝田千町が馬琴読本の筆耕にあって、 〈キ〉の仮名字体において稿本の字体を別の字体に表記することがあった。 他の仮名字体においても **∂** の仮名字体のように馬琴に倣っていた

振り仮名の〈キ〉の使

き

 \downarrow

纪

0

25

0

用数と異同数 轮 \downarrow 轮 き 質 稿 167 68 (屋庫 62 板 229 6 八 稿 11489 犬 伝 ① 板 85 110 八 85 105 犬 26 伝 ② 板 110 80

し。」と指摘される。 『東海道名所記』は 久保田(一九九四)(一九九五 a)、 .鈴木行三『戯曲小説近世作家大観』巻之一(中文館書店)p. 109 に巻之四-六が 坂(二〇一六)に本行の仮名字体の種類等が検討されているため、 「釈了意の筆蹟として紛れ

以外の仮名字体の使用状況に研究が及んでいる資料として、 調査資料として選んだ。

| | 『好色一代男』の板下は西吟であると解題(近世文学書誌研究会『西鶴編1好色一代男(大坂版)』(第二期近世文学資料類従) 誠社、 .吟」の署名のもと記されているためである。 『好色一代男』の仮名字体は全巻に渡って多種類かつ個性的で、同時代的にみても、 一九八一年)pp.1-3編集部編)にあり、これは巻之五の跋文に、西鶴の草稿を集めて「うつし」たというあらましが なお、本行の仮名字母の種類は坂(二○一六)に詳しい。同論文で指摘されている通 癖のある仮名表記だと思われる。 「落月番

は元治元〈一八六四〉年まで板行されるほど諸本が残存する(同前辞典、 西鶴以上のものがある」と評される(『日本古典文学大辞典』巻之一(岩波書店、一九八三年)長谷川強執筆項目「江島其磧」)。『商 江島其磧 13 01637) は巻之一-五まで揃う合冊本で、 (を通じて多くの読者の支持を得た通俗的な作品と捉え、資料として選出した。なお、資料とした早稲田大学図書館本 (請求記号: 軍配団」 は江嶋屋市郎左衛門を板元とする初版以降、後印本、京都菊屋喜兵衛刊の求版本、文化一五〈一八一八〉年に出た改題本 (享保二〇〈一七三五〉 没)は元禄期~に活躍した浮世草子作家で、「当時の評価は西鶴と並び、江戸後期文学への影響も 刊年不詳だが巻之五の刊記に「江嶋屋市郎左衛門」と板元が記された本である。 長谷川強執筆項目 「商人軍配団」)。稿者はこの点から近世

『男重宝記』は注四参照。 絵抄系の庭訓往来の嚆矢である(石川謙編纂『日本教科書大系 類がある(『稀覯往来物集成』第一巻(大空社、一九九六年) 解説・解題による。)貞享五年三月刊の『庭訓往来圖讃』には京都・山崎屋市兵衛、 『新撰仮名文字遣』 は(駒澤大学国語研究資料第三、 解題より)が、今回は仲道庭訓に合わせて江戸板を資料とした。 往来物篇古往来(三)』第三巻 汲古書院、一九八一年) pp. 96-98 丸屋半兵衛板と江戸書林利倉屋喜兵衛板の二 (講談社、一九六八年) pp. 136-137

矢田 (二〇一二)「第四章 (がつけられる例に『落葉集』(一五九八〈慶長三〉年) 点による仮名点を由来とするゆえんから、平仮名資料であっても、 漢字仮名交じり文要素としての振り仮名」pp. 574-582によると、 があり、 中世に平仮名で漢字の読み方がつけられた書物が全く存在しないわ 主として片仮名によって付された。掲出漢字に平仮名で読み 近世以前の写本時代における振り 仮名

あらかじめ密に付されて印刷されるようになる。同「第三章 漢字仮名交じり文の成立」pp. 566-568 には、こうした振り仮名が密に けではない。 つけられる形式について、漢字読解の能力が不充分な読み手への配慮も行われたことが指摘される。 しかし、 近世に入って商業出版が盛んになり、読者の読みやすいテキストのため、 漢字平仮名文には平仮名で振り仮名が

れている。 本古典籍総合目録DBで閲覧可)では、漢字平仮名混じり文に振り仮名が片仮名で付けられているのに、板行時には平仮名に改めら て振り仮名の付けられ方が異なったとも考えられる。 『摂津名所図会』(寛政八−一○〈一七九六−一七九八〉年)の巻之六・八稿本(国文学資料館貴重書、 馬琴読本の稿本では、 本文の一部としてもともと振り仮名が平仮名で付けられており、書物のジャンルや出版工程によっ 請求記号:99-163-1~2、日

以上、 馬琴読· 本を 調査資料とした八章の 論文により、 馬琴読本の 仮名字体の表記について検討を行った。

人気作である馬 部では、 近世後期の娯楽小説の中でも格調高いとされている読本の仮名字体の表記を明らかにすることを目的として、 琴読 本 『月氷竒縁』(文化二年)、 『椿説弓張月』 前篇(文化四年)、『南総里見八犬伝』 肇輯巻之一 (文化一一年) が板本に 当 時

おける仮名字体の表記実態を明らかにした。

った。 弓張月の いことが分かった。 囲内にみられた平仮名字母の種類と、使用数・使用割合により、 第 、装飾的な仮名が使用されることを示し、同じ作家の作品であってもジャンルによって平仮名表記に差があること明らかにした。 仮名字体の種類の面では、 一章では月氷竒縁、 章では、 本行に比して行平鍋須磨酒宴は平仮名字母の種類が少なく、更に合巻の本文よりも弓張月の振り仮名の方が仮名字母が少な 馬琴の読 読本本行にみられる字母は画数の多いものが多く、合巻に比して、 弓張月、 本 『椿説弓張月』の本行と振り仮名、 八犬伝肇輯の読本三本の本行に共通する仮名字体の種類と使用傾向について、 読本三本それぞれに共通する仮名字体がありつつも、 合巻 読本と合巻における平仮名の表記傾向の違いを検討した。 『行平鍋須磨酒宴』の本文それぞれ八○○○字を採取 作品によって使用仮名字体に幅があることが 先行研究で決まった使用傾向が指摘されてい 仮名ごとに検討を行 その 調 査 範

ことが起こり、 本行では使用数が多いようにみえる場合があった。〈ニ〉 紙と変わらなかった。 詞 仮名字体の用字では、 体詞 接続詞、 これも自 また、 また名詞や動詞に【か】や【 ゑ 】といった特定の位置に用いられる字体を使用し、 自立語のほとんどが漢字で書かれるものの、平仮名で書かれる「かゝる」や「しばし」「しかるに」などの 立語を平仮名で書く機会の減る漢字平仮名交じり文の影響と考えられ 非語頭 \hat{O} の【1】【ふ】は、 助詞ニに使うメインの字体が本によって異なるという る。 語幹部分を漢字で表記する読本の その点は、 平仮名文の 草 双 副

窺えた。

弓張月では字体を歪めさせてスペースを省略したりする技法がみられた。三本に共通する字体を検討したのに関わらず、 「おの 読本三本に通じてみら 一づから」と語が切れてしまう箇所に 的 な仮 人名字体 の使用がみら れたのは頻出語の字体を変える用法である。 っれた。 読本は漢字主体の 【 れ 】 を用いる場合があったり、 文章だが、 また語の途中での行移りを嫌った用 草双紙 より読 縦幅をとる仮名字体を使ってスペースを埋めたり、 本の 仮名字体は 多様であり、 法 いがみら 平仮名にも教養色 れ 氷 品によっ 縁に は

て

が強い表記と考えられた。

れ 例 が行末に使用が偏るのも同様の使用傾向かと考えられる。 埋めたと考えられる場合もあった。【を】や【7】は月氷竒縁、 の字体を変えるためとみら 5 0) 第三章で用例を 場合がどのような表記原理に基づくもの る仮名字体のうちでも、 は もあった。こうした行末の 一章では、 三本に共 確認した仮名字体は、 通 月 7氷竒縁、 でする、 主用される字体に対し、 月氷竒 弓 れる用例が大勢だった。 処理 `張月、 は、 縁には語が行頭と行末に分れた際に、 犬伝のうち二本に 行末の匡郭までに適切な文の切れ目で収める書き手の技術だったと考えられる。 画数が多く複雑な字体が多く、 か 追究しがたい。 使用数が少ないものがほとんどであり、 一方、 0) 字体の大きさを利用して、 弓張月には【し】や【す】により、 み共通する字体、 弓張月に行末を埋める用途とみら その使用傾向も、 通常は 本の 使用しない みにみら 行末と行頭で語が分かれ 近接する同じ 仮名字体を使用している例がみられた。 個別性が窺われる表記に使用されてい れた字体の種 狭いスペースに語を収めたとみられる れる用例があり、 語 頻出する語 類と ないようにスペー 用 例 を 八犬伝の【乃 対句の 行末に使用さ た。 同じ -スを

用字には 合っていたとみら 合的にみて、 装飾的志向による仮名字体 読本の ń る 仮名字体の使用に関 の表記と、 しては、 語が途中 近世前期の仮名草子の本行ほどではない で切れないようにする、分りやすさを志向した仮名字体の表記とが混ざり が、 装 飾 性 \mathcal{O} 強さが 窺えた。 ただその

表記 した。 このことから、 本行には仮名字体の用字による装飾性と多様性が認められるが、振り仮名には通用の使用傾向で表記されているも 文である草双紙と通じる。 と考えられる。 使用法について、 数 第四章では、 Ô というわけではなく、 以上のことから、 多い · 字 体、 振り また、 月 7氷竒縁、 漢字に近い字体はほとんど使用されない。 本行と対照しながら検討を行った。 が仮名は. 用字として、 振り仮名の字体は本行を踏まえつつ整理・選定がなされ、 本行に 本行 その使用傾向は、 弓張 の装飾性から 月、 おける字体を踏まえつつ、 〈ス〉 八犬伝の 以外の仮名には何らかの使い分けが行われており、 Ū 自立語が書かれるときの場合に則している。 振り仮名に使用される仮名字体と、 原則 的 に離れなが まず仮名字体の種類について、 振り仮名と言う表記条件に合わせた形での字体の 全体に平易化していた。 いらも、 本行の平 -仮名の 通用の使用傾向にほぼ限られ 調査資料三本に共通する複数の仮名字体 ただし、 振り仮名は、 文脈 また、振り仮名と本行の用字を比べると、 に馴染 それらの用字法 草双紙のような通俗 なし表記 本行に比べ字体の種 が 行 わ は、 選 平易化されてい れ 別• 概 のが多いことを示 的 7 な小 整理 ね平易な平 たと結論付け 類が ,説と同: が 0 少 使 わ んなく 用 -仮名 等な 数

た。

化 \mathcal{O} 本四本と、 総里見八犬伝』 板本にみられ 振り仮名の 部では、 比較資料に松亭金水の 第四 た仮名字体による表記の 馬 琴 読 輯巻之三 の用字について、 本の 仮名字体の (文政三年、 『北條泰時明断録』(弘化四年)を加えた計五本を調査資料として、 表記に 表記実態を明らかにした。 個性や、 八犬伝①)、 ついて、 漢字使用の増 第八輯巻之二 (天保三年、 書き手の用字を検討 加を原因とすると考えられる馬琴の した。 八犬伝②)、 馬琴自 筆稿本が残る 第九輯巻之二七 **∂** 稿本と板本の比較を行 『昔語質屋 (天保 0 仮名字体 一〇年、 庫 の使用傾 (文化七年)、 八犬伝③ 向 読 \mathcal{O} \neg

0) 体で書かれる場合に如 総里見八犬伝』 なの 査資料とし、 第五章では、 か、 筆耕によるの 第八輯巻之一 本行の仮名字体を中心とした表記の比較検討を行った。 稿本と板本の比 何なる表記が行われているかを示した。 か、 0) 複数本の自筆稿本と筆耕の異なる板本と比較した上で検証する余地があった。 みである。 較により、 読本では板本において仮名字体の表記に個性がみられ、 その表記にみえる異同の 先行研究で板本と稿本の比較が行われているのは合巻と、 全体像を確認したうえで、 仮名字体が清書にあたって それが馬琴 そこで、 0 稿本の時点によるも 右 読本五 馬琴 別 \mathcal{O} 仮 \mathcal{O} 『南 名字

その用字は、 仮名字体の なる場合が、 その また、 が おり、 治結果、 板本で稿本とは仮名字体を別の仮名字体に表記する場合、 表記 種 装 どの資料にも 稿本と板本の異同の全体像からは、 類 志 飾的志向と考えられる変字法を行頭・行末で行う筆耕と、 が草双紙 向が異なるようにみえた。 並だということが判明 10 ~18%はみられることが分かった。 稿本からの清書では行移りの 漢字に関わる異同には資料差があることに比べ、 仮名字体の選択・用字の装飾的志向から脱する傾向にあったと思わ 仮名字体の種類数については、 行頭における仮名字体の用字が関わることが分かった。 ある仮名にのみ特定の字体を行頭に使用する傾向がある筆 位置が変わることが多く、 遅い時期の読本では 仮名字体が 行 頭 • 行末における用字を行う 板本で別 稿本の 0 れる。 仮名字 ただし、 時 体に

耕

都

合から、

筆耕

め

用字が行われやすい位置かと考えられ、

読本の仮名字体における表記の個別性に繋がっていると看取され

体は 指摘されてきた。 第六章に そ 一字体は、 において が 0 使用 非 語 L は、 傾 頭 かし、 あ 向 (き) まりにも当たり前に使用される仮名字体であるため等閑視されがちだが、 の 馬琴読本に 違い 馬琴読本の仮名字体の研究を見比べると、 が語頭という多くの資料に共通する使用傾向及び、 0 要因を追究することができる。 おい て、 <u>ે</u> 0 仮名字体の使用傾向に、 そこで、 作品によって行頭の【玄】の使用傾向に違いが見受けられる。 各調査資料における 時期的な変化があることを明らかにした。 行頭に 【玄】が使用される傾向が多くの先行研 **~**シン 馬琴読本には自筆稿本と板本が 0 仮名字体 .. の 語 行 頭 における使 0 仮名字

に

位置 の分布に 差異があるか確認し、 それによって得られた資料間の差異について具体的 な用例 の検討を行っ

に使用することで二種類の仮名字体の使用を保持する用字が行われたものと考えられる。 立語語末や付属語に こに、 頭に使用する【ゑ】 Ō 結果、 八犬伝②以降、 馬 琴は質屋庫当時に平 【玄】を使用するようになった。これらの変化は、 の数が減少していた。これを要因として、 行頭において【ゑ】を使用する傾向が強くなった。第二に、 -仮名表記だった **シ**シ を語頭とする自立語 〈シ〉の仮名字体の使用傾向に二段階の時期的な変化が起きてい 本行の語頭に使用する必要性が低まった【ゑ】を、 を、 八犬伝①時点で漢字表記するようになって 八犬伝③時点で、【し】の みが使用されてい 別の 、 た 自 位

が圧 文字列において、 すると、 名の語頭には は、 本行における仮名字体の用字から切り離されていたことを明らかにした。 で書かれる。 本でも平仮名で本行に書かれれば語頭に【 ゑ 】が使用され(月氷竒縁) 選択が筆耕において変わる場合があることが分かった。【 ゑ 】と【 し 】で仮名字体が変わる用例と、【 し 】を語頭に書く用例を分析 第七章では、 「倒的に多い【 ゑ 】は、 語 頭 漢字一文字に が【ゑ】、 振 【し】が使用されることがあり、 振り仮名の り仮名における 結果的に自立語のマーカーとして有効的だった仮名字体の使用法だと考えられる。 語中末が (i) **シ**シ 振り仮名二文字以上をまとまりとして書く場合の語頭に書かれたと考えられる。 の振り仮名一文字が対応する場合に【し】が書かれる傾向がみられた。 1 **∂** の仮名字体について、稿本と板本と比較のうえ、その用字の検討を行った。 】という語を単位とした使用傾向が振り仮名にも行われていた。 の仮名字体の用字に関しては、 稿本と板本の比較をすると単字の 椿説弓張月、質屋庫など)、 全体としては文に馴染むように行われているが、 振り仮名や、語頭において【ゑ】と【し】の字体 漢字で書かれると振り仮名には【し ただし、 「知る」 一方で、 いず それは、 全体の使用傾向とし \mathcal{O} 語頭に使用されること 語 れの資料にも振り は、 平仮名の多 同 部につ じ馬琴の 仮 7

世握 る使用傾向 Ó 代及び馬琴 虎 稚物語』 仮名の に だが 語 【 太 】を使用 頭に 以 洒 振り仮名では必ずしもその用字が行われるとは限らない。この点で、馬琴読本の振り仮名における〈シ〉 前 · 落本 の娯楽小説の板本におい おける〈シ〉の仮名字体の使用傾向を、 『無頼通説法』 でする傾向が特に強いことが分かる。 0) 振り仮名の語頭には てどのように位置づけられるか、 先行研究の調査結果及び馬琴読本の調査結果と対照すると、 【し】を使用する割合が多いのに対し、 $\overline{}$ が非語頭、 第八章で検討を行うことにした。 【ゑ】が 語頭という使用傾向は、 馬琴において、 多くの 振 浄瑠璃 資 の用字が ŋ 仮 名の 本『 通す 出

読 本に お V) 7 は 自 筆 稿 本の い時点か . Б 語頭 E を使用する表記態度がかなり徹底されており、 板本の筆耕においてもそ

人と千形仲道筆で 庭訓 使用 往 傾 来 向 が 0) 引 き継 振 は 仮 が 語 名 れ 頭に て 八犬伝② いた。 【 し 】が優勢であることが分かった。 L の筆 か į 耕 馬琴読本の質屋庫 宝 田千 町 の滑 稽 中の筆耕 本の 振り つまり、 節 仮 名の 亭 Щ [人の読・ <u>ે</u> 馬琴読· \mathcal{O} 本、 本の筆耕から 仮 人名字体 犬伝① : の 使 の筆耕 一離れれ 用傾向を調 ば、 形 振り 仲道 査 たとこ 仮 が筆耕を 名におけ ころ、 担 る 亭

0)

の用字に馬琴ほど気を配っていないのである。

らず、 という用字を徹底した態度といえる。 用されていることから、 るものだったためと考えられよう。 本はほかにも存在すると思われる。 物 (軍配団』(正徳二年) では、 ·庭訓往来圖讚』(貞享五年) 振り仮名では本によって個別差があるのは、 琴以 前 の板本として、【 太 】を語頭に使用する傾 0 振り仮名ではやはり語頭に【し】を優勢に使用し、 やはり馬琴読本の振り仮名において語頭に【 ゑ 】 には振り仮名の ただし、 本稿で確認した資料はごく僅かで、 本行では押しなべて強い使用傾向として表れる 語 頭の 語頭に <u>ે</u> 【 ゑ 】を使用する用字がもともと仮名をメインとする文・文章に行 に 向 怎 0 強い 本がなかったのか、 が 優勢であった。 馬琴並に振り仮名の語頭に【ゑ】 の使用割合が極めて高い点は、 『庭訓往来圖讃』においてもかなりの しかし、 といえば、『好色一 **∂** 東海道名所記』 \mathcal{O} 仮名字体の用字な 語頭に【ゑ】 代男』(天和 を使用、 割合で (万治年間成立) する傾 \mathcal{O} を使用 1 にも 向 B \mathcal{O} カコ する が カコ 強 往 使 商

ることができた ために、 多様性を示し、 以上が、 中 て、 を使用する態度を窺うことができ、 馬琴読-世 時 期 か 期 ら通底する 的な変化として、 近世後期における具体的な仮名字体の 本を資料として、 <u>ે</u> 遅い \mathcal{O} 仮名字体の 仮名字: 時 期の読本ほど仮名字体の 体の 本行には 表記に 使用 っい 傾 使用傾向が崩れていた 表記 向が変化してい て明らかにした点である。 のジャンル差を示し得た。 種類が草双紙並に減少していたこと、 たことを明らかにした。 「怎」 これ また、 は上」とする馬琴 により、 馬琴の自筆 後期読 方で、 事稿本に 振り 本の 本行に漢字使用 0) 認識 仮 仮 を振り 名に 名字 おける仮 は 体 仮名に 徹底 \mathcal{O} を増や 名字体 種 して語 類や 確 用 認 \mathcal{O} 頭

して確 その と考えられていた読 研 は確 究では当初、 期 かめることができた。 0 馬 かに、 琴 読 文化 本 近世 0 本の仮名字体の 自 間の 後 筆 期の 稿 馬琴 本ほ ところが、 仮名字体の先行研究に草双紙 読 本に 表記 仮 名字体 を調 馬琴読本の自筆稿本がまとまって残る文政・天保年間の お て、 査することで、 0 使用 仮 名字体の種類の多さ、 種 類 が 仮名字体の 草 の調査が多いことから、 双紙 0 合巻と同等であることが明 表記の幅広さ・位相性を明らかにする目 その用字の 装飾的-物之本であり、 志 向といった点から、 6 『南総里見八犬伝』の調査により、 かになった。 当時において格調高 的 この点は で研究に着手した。 双紙との 娯 想外で 楽

0) あ った。 違いを超えて同 久田 (三〇一九) 程 度になってい には近世後期の人情本と合巻では仮名字体の種 るという指摘 (p. 10) があり、 遅い時期の馬琴読本もこの段階に属する可 類 が六〇~七〇種類と、 文字主体か絵入り主体 能性があろう。 か

性が生じることは、 になった近世期における仮名字体の表記の特色として、漢字表記が文章中で果たす表記機能とともに仮名字体の用字を考察する必 る用字の変化として捉えることができると稿者は考える。 た点については、 また、 (i) (T) 馬琴読本における作文上の文字種の選択を原因とするものの、漢字平仮名混じり文ならば起こり得る仮名字体によ ように典型的な使用位置の区別がある仮名字体において、 今後も課題に挙げられ る。 振り仮名のことも含め、 漢字使用の増加でその使用傾向が変化したと見受け 漢字平仮名混じり文が整版印 刷 本の文章に一 般的 6

き手の用字も含め、 行われる、 った調査について、 しかし、 ということが具体的に誰が 複数種の仮名字体を使用 単なる表記実態の記述に留まざるをえないことが多々あった。 馬琴の読本の 調査では検証 しての表記に、 (作家か、 筆耕か、 し得ない課題として残った。 出版にあたってどのような社会的要請が 板元か、 読者か) 求めるものなのか、 例えば装飾的志向と考えられる表記 具体的にどのような意味があるの あ る \mathcal{O} か 不透明なことか , 5 が 本論文で行 出 **|版物には** 書

 \mathcal{O} が少なく、 そもそも、 近世 使用種類や用字に差があった点を、 .後期における読本や草双紙の読者たる「大衆」とはどのような人々で、文化的な位相のある平仮名表記の その用字も草双紙などによくみられる使用傾向 近世前期の 仮名草子に比 つすれば、 近世期の仮名字体による表記史の中に位置づけることがまだできない。 仮名字体使用に装飾的志向があったとはいえ、馬琴読本には明らかに仮名字体の が基本となっている。 その上で、 草 双紙に対し馬琴 読 読書・ 本に おいて仮名字体 記能力をど 種 類

のような識字教育によって身につけてい これも今後の課題としたい。 付けて研 究を進 めることで、 書 物に求められた仮名字体の表記のありようも具体的に推定できるようにならないかと考えて たのか。 また近世前期ではどうだったのか。 今後、 リテラシ 100 側 面 カコ ら読 者と書物の 仮名

表

記結

び

参考文献

池 上禎造 九五五)「文字論のために」『国語学』二三集、 国語学会、 武蔵野書院、 pp. 1-13

伊 坂淳一 (一九八八a) 「藤原俊成の用字法・試 論 自筆本『廣田社歌合』における機能的用字法 (Ⅰ)」『学苑』五七七号、 pp. 179-

189

坂淳 九八八b) 「藤原俊成の用字法 · 試 論 -自筆本 『廣田社歌合』における機能的用字法 (Ⅱ)」『学苑』 五七八号、 pp. 59-

1)

5坂淳一 (一九九○)「藤原俊成の用字法・ 試論 =昭 和切 本 『古今和歌集』 における用字法 『千葉大学教育学部研 究紀 要

三八巻第一部、pp. 185-195

伊 坂淳 (一九九一) 「藤原俊成の用字法・試論 \equiv 頭 広切 本 『古今和歌集』 における用字法 『千葉大学教育学部研 究紀

三九巻第一部、pp. 301-310

伊坂淳一 (一九九二) 「藤原俊成の用字法・試論 $\stackrel{\textstyle \bigcirc}{\boxtimes}$ Ħ 5野切本 二千 載和歌集』 における用字法 ---』『千葉大学教育学部研究紀

四〇巻第一部、pp. 325-335

(一九七八) 『南総里見八犬伝』の諸板本(上)」『近世文芸』二九号、

板坂則子

板坂則子(一九七九)「『南総里見八犬伝』の諸板本(下)」『近世文芸』三一号、

板坂則子 (一九九一)「馬琴稿本をめぐって (附) 南総里見八犬伝稿本目録」『讀本研究』 第 五. 輯、 広島文教女子大学研究出版委員会

pp. 50-66 pp. 53-70

pp. 177-201

板坂則子(一九九二)「『占夢南柯後記』稿本雑感」『書誌学月報』四八号、pp. 1-11

市地 英 (二○一三) 「馬琴小説の平仮名字母の研究―読本と合巻の比較―」 『成蹊國文』 四六号、 pp. 103-116

地 英 (二○一五)「馬琴読本の平仮名字体―『月氷竒縁』『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』を資料に―」『成蹊國文』四八号、 pp. 133-

157

市

市 地 英 =六 a) 「馬琴読本 『月 氷竒縁』 『椿説弓張月』 『南総里見八犬伝』 の仮名字体の特徴 『成蹊國文』 四九号、 pp. 125-148

市 地 英 (二○一六b)「馬琴読本の 振り仮名―変体仮名の用字を中心に―」『表現研究』一〇四号、 表現学会、 pp. 47-54

地 英 (二〇一七)「『南総里見八犬伝』の仮名字体 ―本行の仮名字体と振り仮名を比較して―」『共立女子大学文芸学部紀要』六三集

市

要』

要

0. 133-133

荊木令子 (一九八三) 「〈卒業レポ ا / / おくのほそ道の使用仮名の 一性格」 『青須我波良』二一号、 pp. 76-83

岩井田満 (一九七八)「中世における仮名使用の研究----奈良絵本の仮名使用を中心に――」 『玉藻』第一四号、 pp. 39-53

植真代子(一九七九)「藤原定家の変体仮名用法について」『国文学攷』八二号、pp. 1-24

1田宗一 九九八a)「黄表紙・洒落本の仮名字体―恋川春町自筆板下本についての比較考察―」『国語文字史の研究』 兀 和泉書

pp. 149–177

田宗 九九八b)「柳亭種彦自筆資料の仮名字体 --草双紙稿本を中心に---』『語文』七一集、 pp. 29-38

内 一田宗 九九八 c) 「『偐紫田舎源氏』の仮名字体―作者自筆校本と板本の比較考察―」『待兼山論叢』三二号、 pp. 15-27

内 田宗 (二〇〇〇)「馬琴作合巻『金毘羅船利生纜』 の仮名字体―筆耕による表記の改変をめぐって―」『国語文字史の研究』 垂

書院、pp. 145-168

(二○○一a)「『国号考』の仮名字体──訓仮名出自字体の忌諱・追考

田宗 (二○○一b)「『古事記伝』の仮名字体 -訓仮名出自字体の忌避とその背景-――」『国語文字史の研究』 六、和泉書院、 pp. 137-

一」『語文』七五・七六集、

CT

内

田宗

内 田宗一 (二〇〇六)「『古言梯』の仮名字体 -訓仮名出自字体の忌避をめぐって― ―」『国語文字史の研究』九、 和泉書院、 pp. 97-113

内 田宗 (二○一○)「賀茂真淵著作における仮名字体使用に関する考察─訓仮名出自字体の忌避をめぐって─」『語文』九二・九三集

pp. 100-108

内 田 宗 =四)「鹿持雅澄 『万葉集古義』 稿本の仮名字体」 『国語文字史の研究』 匹、 和泉書院、 pp. 89-108

内 田宗 (二○一八)「八木美穂著述の仮名字体─『約古事記伝』『約古事記伝之序』を対象に─」『近代語研究』二○集、

宇野義方 (一九八六) 「異体がなの使い分け」『松村明教授古稀記念国語研究論集』明治書院 pp. 367-384

岡田一祐 (二〇一三)「江戸期のいろは仮名」『国語国文研究』一四二号、pp. 33-43

春日 大島悦子 [政治 (二〇〇〇) 「曲亭馬琴の文字意識 『仮名発達史の研究』 春日政治著作集第 ―自筆資料の仮名字体について―」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』一〇号、 ₩ 勉誠社、 一九八二年 (『岩波講座日本文學 假名發達史序説』 岩波書店、

三年所収)

樺島忠夫 『日本の文字―表記体系を考える―』岩波書店、一九七九年

倉田 靜 佳 (二〇〇四) 「馬琴のふりがな―文体・位相との関わり―」『表現研究』八〇号、 pp. 47-55

木越 治 (一九八七)「富岡本『春雨物語』における仮名文字の用法について」『北陸古典研究』二号、 北陸古典研究会、

木越 治 (一九八九)「上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について」『金沢大学教養部論集 人文学科編』二六巻二号、

pp. 244 (33) -168 (109)

木越 治 (一九九二)「近世文学作品における字母の用法について―― 「ますらを物語」・『おくのほそ道』・『教訓私儘育』の場合―

『国語文字史の研究』一、和泉書院、pp. 189-23

曲亭馬琴 『近世物之本江戸作者部類』徳田武校注、岩波書店、二〇一四年

久保田 久保田篤 篤 (一九九五a)「仮名草子整版本における仮名の用法 (下)」『茨城大学人文学部紀要 (一九九四) 「仮名草子整版本における仮名の用法 (上)」『茨城大学人文学部紀要 (人文学科論集)』二七号、 (人文学科論集)』二八号、 pp. 41-59

久保田篤 (一九九五b)「草双紙の用字法─赤本の仮名字体の用法を中心に─」『国語学論集:築島裕博士古稀記念』築島裕博士古稀記念

会編、 汲古書院、 pp. 549-574

久保田篤(一九九六)「恋川春町『無益委記』の表記―平仮名の字体について―」『茨城大学文学部紀要(人文学科論集)』二九号、

久保田 篤 (一九九七)「『浮世風呂』の平仮名の用字法」『成蹊国文』三〇号、pp. 74-91

久保 田 篤 (一九九八)「『金々先生栄花夢』の文字の用法について」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』 汲古書院 pp. 586-

久保田篤 (二○○九)「江戸板本の表記の多様性―洒落本『傾城買二筋道』の場合―」『成蹊國文』 四二号、 pp. 28-54

八保田篤 (二○○二)「江戸時代後期の平仮名・片仮名について」『日本語の文字・表記─研究報告論集─』国立国語学研究所、

窪田恵理子 (二〇〇〇)「与謝蕪村の仮名字体の用法 -俳書と書簡を比較して――」『国語文字史の研究』 和泉書院 pp. 127-143

小松茂美 (一九六八)『かな―その成立と変遷』岩波書店、一九六八年

小松英雄 『日本語書記史原論』笠間書院、 新装補訂版 (原装一九九八年)、二〇〇六年

小 松英雄 (一九七四) 「藤原定家の文字づかい― 「を」「お」の中和を中心として」『言語生活』二七二号、 pp. 33-42

今野真二(一九九六)「『落葉集』の仮名文字遣について――「か」「た」「に」「へ」「み」に関して― 書院、 pp. 119-135 ―」『国語文字史の研究』 三、 和 泉

今野真二 『仮名表記論攷』清文堂、二〇〇一年(本論では今野 (二〇〇一 a) と表記する)

今野真二 (二○○一b)「定家以前-――藤末鎌初の仮名文献の表記について」『国語学』五二巻一号、 日本語学会、

今野真二 「伏流する仮名文字遣」『清泉女子大学紀要』五九号、 pp. 1-19

今野真二 (二〇一四) 『仮名の歴史』日本語学講座第九巻、 清文堂出版

坂口 至 (一九八三)「虎明の表記意識」『文獻探究』一一号、pp. 50-60

坂梨隆三 阪倉篤義 (一九七九)「曾根崎 (一九五〇) 「平がな用法の歴史 (明治以前)」『言語生活7月号』四六号、 心中の 「は」と「わ」―その仮名遣と仮名の字体について―」『茨城大学文学部紀要 筑摩書房、 pp. 24-29 (人文学科論集)』

二号、 pp. 31-63

坂梨隆三(二○一七)「曽根崎心中における語句の異同と「け」の字体について」『成蹊大学文学部紀要』

佐々木勇 (二〇一八)「正徹本『徒然草』の行末に見られる区切りへの配慮」『論叢国語教育学』一四号、 pp. 40-49

佐藤麻衣子(二○○九)「享保期浄瑠璃本の仮名文字遣い―『出世握虎稚物語』における「り」「し」「じ」の調査から―」『国文目白』 兀

八号、pp. 92-102

島田勇雄 (一九九○)「西鶴本のかなづかい (一)~ (七)」『西鶴本の基礎的研究』明治書院 (初出一九六五年三月~一九七二年一月)

菅原範夫 (一九七九)「大蔵流狂言資料にみられる平仮名用字法の諸相」 『高知大学学術研究報告 人文科学』二八巻、 pp. 101-121

鈴木丹士郎 (一九六七)「馬琴の語彙」 『専修国文』一号、pp. 102-122

鈴木丹士郎(一九六八)「読本における漢字語の傍訓 ----「雨月物語」と「弓張月」を中心にして----」『近代語研究』二集: 武蔵野書院

鈴木丹士郎 (一九六八)「「里見八犬伝」に見える漢語語彙 (上)」『専修人文論集』第一号、 pp. 176-199

(木丹士郎 (一九七二) 「「里見八犬伝」 の用字について一試論」『専修国文』 通巻一一号、 pp. 67-80

鈴木丹士郎 (一九七八) 「読本から見た馬琴の文語と文体」『国語と国文学』六五七号、pp.14-28

木丹 士郎 九九七) 「曲亭馬琴読本語彙の 側面」『文芸研究』 一四三集 日本文芸研究会、 pp. 56-64

五二号、

鈴木眞喜男(一九九二)「行頭の仮名」『いわき明星文学・語学』二号、pp.1-8

迫野虔徳(一九七四)「定家の「仮名もじ遣」」『語文研究』三七号、 九州大学国語国文学会、 pp. 39-46

髙木 元(一九八三)「曲亭馬琴」『研究資料日本古典文学』第四巻「近世小説 明治書院 (高木元氏HP『ふみくら』

http://www.fumikura.net/other/bakin.html、二〇〇四年增補改訂)

田中巳榮子(二〇一八)「近世初期の狂歌における異体仮名使用の実態―『古今夷曲集』『吾吟我集』『半井ト養狂歌』を中心として―」

『国文学』一〇二号、pp. 373-386

玉村禎郎(一九九四)「『春色梅兒譽』における仮名の用字法」『国語文字史の研究』二、 和泉書院、

pp. 175-206

築島 裕『日本語の世界5 仮名』中央公論社、一九八一年

土肥新一 郎(二〇一八)「江戸期版本における〈し〉の用字法―延宝五年板『平家物語』を資料として―」『論叢国語教育学』一四号、

永井悦子 (二〇〇八) 「江戸時代女性の言語生活に関する一考察—本居宣長母お勝書簡における仮名字体—」『十文字国文』一四号、pp. 9-

永井悦子(二〇〇六)「近世女子用往来における仮名字体」『国語文字史の研究』

九、

和泉書院、pp. 115-132

中野三敏『和本のすすめ』岩波書店、二〇一一年

野口義廣 (一九七三)「浄瑠璃丸本の表記をめぐって―平仮名字体について―」『文獻探究』一二号、pp. 26-36

浜田啓介 (一九七九)「板行の仮名字体―その収斂的傾向について―」『国語学』一一八集、 pp. 1-10

濱森太郎 (一九九九)「『野ざらし紀行画巻』の行頭・行末処理―行頭・行末のレイアウトに伴う用字変化について―」『三重大学日本語

学文学』一〇号、pp. 93-105

『松尾芭蕉作『野ざらし紀行』の成立―文字データベースによる用字解析―』三重大学出版会、二〇〇九年

康尊 (二○一六)「江戸時代の変体仮名の字母字形の変遷と傾向—中でも『好色一代男』の特異性について—」『同朋文化』 四四号、

pp. 45-93

坂

久田行雄(二○一五)「近世文学板本における使用仮名字体の通時的変化」『日本語学会二○一五年度春季大会研究発表会予稿集』 日本語

学会

久田行雄『近世期資料を対象とした国語文字・表記の史的研究』博士論文、二〇一九年

表章 ・後藤ゆう子 (一九七九)「世阿弥の平仮名書の用字法の特色 (上)」『能楽研究』五号、 pp. 1-90

表章・後藤ゆう子(一九八〇)「世阿弥の平仮名書の用字法の特色(下)」『能楽研究』六号、 pp. 1-80

本間啓朗 (二〇一四)「仮名の用法と語音排列則との関係性 -中尾本『奥の細道』における一考察-――」 『ことばとくらし』 二六号、

pp. 5-14

前田富祺 (一九七一)「仮名文における文字使用について—変体仮名と漢字使用の実態—」『東北大学 教養部紀要』一 四号、 pp. 99(1)-

134(36)

前田富祺 (一九八八)「川柳の仮名―国語字体史の視点から―」『日本語・日本文化研究論集』 四輯、 pp. 25-49

宮本淳子 (二〇一一)「金春禅竹筆『五音三曲集』における用字法」『東京女子大学紀要論集』 六二巻 号、 pp. 89-127

宮本淳子(二〇一七)「松花堂昭乗筆資料に見られる仮名字体:和歌巻・色紙・法帖における使用実態とその特徴」『日本文学』一一三号

pp. 117-131

宮本淳子(二〇一八)「「光悦流」資料に見られる仮名字体―「光悦和歌巻」の平仮名字体の分析を通じて―」『学芸国語国文学』五〇巻

pp. 233-242

前田桂子 (一九九八)「『鹿の子餅』の仮名もじ遣い(一)―字体と出現位置を中心に―」『宇部国文研究』二九号、

三原裕子 (一九九八)「江戸後期咄本における仮名の用法をめぐって」『国文学研究』一二五集 pp. 41-54

安田 章 (一九六七)「仮名資料序」『論究日本文学』二九号、pp. 1-13

安田 章 (一九七一)「仮名文字遣序」『国語国文』四○巻二号、pp. 1-16

安田 章 (一九七二)「仮名資料」『国語国文』四一巻三号、pp. 1-22

安田 章 (一九七三)「吉利支丹仮字遣」『国語国文』四二巻九号、pp.1-20

安田 章 (二〇〇九)『仮名文字遣と国語史研究』清文堂 (安田一九六七、一九七一、一九七二、一九七三所収

矢田 勉 /九五a) 「異体がな使い分けの発生」 『国語学論集:築島裕博士古稀記念』築島裕博士古稀記念会、 汲古書院、 pp. 603-622

矢田 勉 九九五6) 「いろは歌書写の平仮名字体」『国語と国文学』七二巻一二号、 pp. 44-59

矢田 勉 九 九九六) 「異体がな使い分けの 衰退 ―トの仮名の場合」『国語学論集 (山口明穂教授還曆記念)』 明治 書院、 pp. 439-457

矢田 勉 (一九九八)「鈴屋の文字意識とその実践」『鈴屋学会報』一五号、pp. 27-39

矢田 勉 (二〇〇八)「近世整版印刷書体における平仮名字形の変化」『神戸大学文学部紀要』神戸大学文学部、 pp. 25-49

矢田 勉『国語文字・表記史の研究』汲古書院、二〇一二年

矢田 勉 (二〇一六)「近世における文字教育の一側面―変体仮名習得をめぐって―」『国語文字史の研究』一五、 和泉書院、 pp. 147-164

屋名池誠 (二○○九)「「総ルビ」の時代―日本語表記の十九世紀」『文学』一○巻六号、 岩波書店、 pp. 117-130

矢野 準 (一九八○)「大田南畝の文字意識──『向岡閒話』のかなの用字法を中心に──」『近代語研究』六集、近代語学会、 武蔵野書

pp. 377-403

矢野 準 (一九九○)「一九の文字生活─蔦屋黄表紙五種の仮名表記の実態を中心に─」『近代語研 究 吉田澄夫博士追悼論文集』

近代語学会、武蔵野書院、pp. 243-260

準 (一九九二)「一九自画作黄表紙の文字遣い : 榎本版四種を中心に」『国語国文研究と教育』二七号、

矢野 準(一九九四)「一九黄表紙に於ける漢字(一)」『香椎潟』三九号、pp. 53-55

矢野 準(一九九五)「一九黄表紙に於ける漢字(二)」『香椎潟』四〇号、pp. 39-55

矢野 準 (二○○一)「草双紙の行——京伝黄表紙三種を中心に——」『筑紫語学論叢奥村三雄博士 追悼記念論文集』風間書房、 pp. 147-

JOC

山田俊雄(一九八○)「文字論に課せられた問題」『国語学』一二○集、pp. 1-6

横山邦治編『読本の世界―江戸と上方―』世界思想社、一九八五年

219

pp. 42-55

調査資料一覧

月氷竒縁 『馬琴中編読本集成』第一巻、 鈴木重三・徳田武編、 汲古書院、 九九五年

椿説弓張月『椿説弓張月前編』板坂則子編、 笠間書院、 一九九六年

昔語質屋庫

質屋庫稿本(巻之一)ニューヨーク公共図書館、 スペンサー・コレクション蔵 Sheif locator: Sorimachi 186

https://digitalcollections.nypl.org/items/510d47e1-c72f-a3d9-e040-e00a18064a99

質屋庫板本(巻之一)『馬琴中編読本集成』第一二巻、 汲古書院、二〇〇二年

南総里見八犬伝

八犬伝①稿本(第四輯巻之三) 都立中央図書館加賀文庫蔵 請求記号:加8277

八犬伝②稿本(第八輯巻之二)早稲田大学図書館蔵 請求記号: イ 04_00600_0002

八犬伝③稿本 (第九輯巻之廿七) 早稲田大学図書館蔵 請求記号:イ04_00600_0016

八犬伝稿本

第四輯巻之三・四 都立中央図書館加賀文庫、 請求記号:加8277

第八輯·第九輯各本 早稲田大学図書館所蔵、 請求記号:イ04_00600

第九輯巻之一-六 国立国会図書館所蔵、請求記号:WA19-15

八犬伝板本(本稿の調査資料共通) 第九輯三六、三九、四〇『天理図書館善本叢書和書之部 国立国会図書館蔵 請求記号: 本別 3-2 第六十五巻 近世小説稿本集』(八木書店、一九八三年)

北條泰時明断録

明断録稿本(第一輯巻之一)都立中央図書館特別買上文庫蔵 請求記号:503-1

明 断録板本(第一輯巻之一)早稲田大学図書館蔵 請求記号: へ 13 03367

教訓道外実語教』 謙堂文庫蔵 『往来物大系34 教訓科往来』大空社、 九九三年

放下僧』 早稲田大学図書館本、 請求記号:へ13 02895

『庭訓往来絵抄解』 早稲田大学図書館本、請求記号:文庫 30 G0040

『好色一代男』大阪府立中之島図書館赤木文庫蔵 近世文学書誌研究会『第二期近世文学資料類従西鶴編1好色一代男』勉誠社、一九八 『東海道名所記』都立中央図書館加賀文庫蔵 近世文学書誌研究会『近世文学資料類従古板地誌編7東海道名所記』勉誠社、一九七九年

『商人軍配団』早稲田大学図書館蔵 < 13 01637

·庭訓往来圖讚』三次市図書館蔵 石川松太郎監・小泉吉永編『稀覯往来物集成』第一巻、大空社、一九九六年

※国会図書館本・早稲田大学図書館本・スペンサーコレクション本はデータベースで閲覧した

国立国会図書館デジタルコレクション http://dl.ndl.go.jp/

早稲田古典籍総合データベース http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/

THE NEW YORK PUBLIC LIBRARY DIGITAL COLLECTION https://digitalcollections.nypl.org/

調査資料の検討においては日本古典籍総合目録データベースの恩恵に浴した。

国文学研究資料館日本古典籍総合目録データベース http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/

初出一覧

いずれの論考においても加筆修正を行った。

第一部

第一章 「馬琴小説の平仮名字母の研究―読本と合巻の比較―」『成蹊國文』四六号、二〇一三年

第二章 「馬琴読本の平仮名字体─『月氷竒縁』『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』を資料に─」『成蹊國文』四八号、二○一五年

第三章 「馬琴読本『月氷竒縁』『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』の仮名字体の特徴」『成蹊國文』四九号、二〇一六年

第四章 「馬琴読本の振り仮名─変体仮名の用字を中心に─」『表現研究』一○四号、表現学会、二○一六年

第二部

第五章 書下ろし

第六章 「行頭の仮名字体 後期読本の稿本と板本の比較を通して―」『日本語学会二〇一八年度秋季大会予稿集』二〇一八年

第七章 書下ろし

第八章 書下ろし

資料 馬琴読本の仮名字体対照一覧表

本論文で扱った資料の仮名字体画像と本文で表示した字体をここに示す。 『松浦佐用媛石魂録』(『馬琴中編読本集成』第十巻、汲古書院、1999年)は本論文の調査資料ではないが、読本の仮名字体の多様性を示す一例としてここに含めた。

が、仮名	月氷竒縁巻之一	椿説 弓前 之 巻之	本の多様 松浦 佐用録 石魂録 前編	昔語 質屋庫 巻之一	南総里見 八犬伝 肇輯 巻之一		を 南総里見 所代伝 第八代輯 巻之二	南総里見 八犬伝 第九輯 巻之廿七	昔語 質屋庫 巻之一	南	南総里見 八犬伝 第八輯 巻之二	南総里見 八犬伝 第九輯 巻之廿七	IPAmj明朝 /学術情報 用変体仮名 /手書き画
	文化二年	文化四年	文化五年	文化七年	文化十一年	文政三年	天保三年	天保十年	文化七年	文政三年	天保二年	天保九年	/ 于曾已回 .像
	板本	板本	板本	板本	板本	板本	板本	板本	稿本	稿本	稿本	稿本	
ア													あ
													7 ラ コード:1B004
1													い
													ひ ヨード: 1 B006
ウ													う
エ													え
													お
オ													护
													才こ コード: 1B015
													う コート:1B01A
カ													ラ コード: 1B019
													か
													き
+													分 コード:1B02A
2													<
													~

仮名	月氷竒縁 巻之一	椿説 弓張月 前篇 巻之一	松浦 佐用媛 石魂録 前編 上	昔語 質屋庫 巻之一	南総里見 八犬伝 肇輯 巻之一	南総里見 八犬伝 第四輯 巻之三	南総里見 八犬伝 第八輯 巻之二	南総里見 八犬伝 第九輯 巻之廿七	昔語 質屋庫 巻之一	南総里 八第四輯 巻之三	南総里見 八犬伝 第八輯 巻之二		IPAmj明朝 /学術情報 用変体仮名 /手書き画
	文化二年 板本	文化四年	文化五年	文化七年	文化十一年 板本	文政三年 板本	天保三年 板本	天保十年 板本	文化七年	文政三年 稿本	天保二年 稿本	天保九年 稿本	像
													け
ケ													月 コード:1B033
													ラード: 1B034
													ی
П													♂ ⊐-ド:1B038
													さ
サ													坊 コード: 1B03E
						ı							し コード:1B045
シ													し
													≠ ⊐-ド:1B048
													す コード:1B04F
ス													√ 2 ⊐− ド : 1B051
													1 € ⊐−ド:1B050
													す
													せ
セ													3 − F: 1B052
													セ
У													そ

仮名	月氷竒縁 巻之一	椿説 弓張月 前篇 巻之一	松浦 佐用媛 石魂録 前編 上	昔語 質屋庫 巻之一	南総里見 八犬伝 肇輯 巻之一	南総里見 八犬伝 第四輯 巻之三	南総里見 八犬伝 第八輯 巻之二	南総里見 八犬伝 第九輯 巻之廿七	昔語 質屋庫 巻之一	南総里 八犬伝 第四輯 巻之三	南総里見 八犬伝 第八輯 巻之二	第九輯	IPAmj明朝 /学術情報 用変体仮名
	文化二年	文化四年	文化五年	文化七年	文化十一年	文政三年	天保三年	天保十年	文化七年	文政三年	天保二年	天保九年	/手書き画 像
	板本	板本	板本	板本	板本	板本	板本	板本	稿本	稿本	稿本	稿本	
													∠ ⊐−ド:1B060
タ													あ コード: 1805F
													た
													J− F: 1B05E
チ													ち
													つ
													〜 フード:1B06A
ツ													(1) ⊐−ド:1B069
													た コード: 1B06D
													7 ₽ ⊐− F : 1B06B
													て
テ													ス コード: 1B073
													う コード: 1B06E
													と
۲													変体仮名番号: 200050020
													9 ⊒− F: 1B07B

仮名	月氷竒縁 巻之一	椿説 弓張月 前篇 巻之一	松浦 佐用媛 石魂録 前編 上	昔語 質屋庫 巻之一	南総里見 八犬伝 肇輯 巻之一	南総里見 八犬伝 第四輯 巻之三	南総里見 八犬伝 第八輯 巻之二	南総里見 八犬伝 第九輯 巻之廿七	昔語 質屋庫 巻之一	南総里 八大四輯 巻之三	南総里見 八犬伝 第八輯 巻之二	南総里見 八犬伝 第九輯 巻之廿七	IPAmj明朝 /学術情報 用変体仮名
	文化二年	文化四年	文化五年	文化七年	文化十一年	文政三年	天保三年	天保十年	文化七年	文政三年	天保二年	天保九年	/手書き画 像
	板本	板本	板本	板本	板本	板本	板本	板本	稿本	稿本	稿本	稿本	る
													なか
ナ													なっ
													- F: 1B081
													3- F: 1B085
									_				コード:18084
													コード: 1B08B
													J == F: 1B08C
													に
=													コード: 1B0BD
													有 4
													। ਐ
ヌ													J− F: 1B087
													J-F:1B094
ネ													ね
													ネイ コード: 18097

仮名	月氷竒縁 巻之一	椿説 弓張月 前篇 巻之一	松浦 佐用媛 石魂録 前編 上	昔語 質屋庫 巻之一	南総里見 八犬伝 肇輯 巻之一	南総里見 八犬伝 第四輯 巻之三	南総里見 八犬伝 第八輯 巻之二	南総里見 八犬伝 第九輯 巻之廿七	昔語 質屋庫 巻之一	南総里 八四二 巻之三	南総里見 八犬伝 第八輯 巻之二	南総里見 八犬伝 第九輯 巻之廿七	IPAmj明朝 /学術情報 用変体仮名 /手書き画
	文化二年	文化四年	文化五年	文化七年	文化十一年	文政三年	天保三年	天保十年	文化七年	文政三年	天保二年	天保九年	像
	板本	板本	板本	板本	板本	板本	板本	板本	稿本	稿本	稿本	稿本	
													の
													乃 コード: 1B099
)													J-F:1B09C
													₹ ⊐- F: 1B09B
													→ □-ド: 1B09E
													て コード: 1B0A6
^													コード: 1B0A3
													ラード: 1B0A2
													は
													ひ
Ł													خن ع-۴: 1B0AF
フ													ふ
													1 3− ド: 18081
													^
^													コード: 1B0B6
													2

仮名	月氷竒縁 巻之一	椿説 弓張月 前篇 巻之一	松浦 佐用媛 石魂録 前編 上	昔語 質屋庫 巻之一	南総里見 八犬伝 肇輯 巻之一	南総里見 八犬伝 第四輯 巻之三	南総里見 八犬伝 第八輯 巻之二	南総里見 八犬伝 第九輯 巻之廿七	昔語 質屋庫 巻之一	南総里 八犬四輯 巻之三	南総里見 八犬伝 第八輯 巻之二	南総里見 八犬伝 第九輯 巻之廿七	IPAmj明朝 /学術情報 用変体仮名 /手書き画
	文化二年	文化四年	文化五年	文化七年	文化十一年	文政三年	天保三年	天保十年	文化七年	文政三年	天保二年	天保九年	像
	板本	板本	板本	板本	板本	板本	板本	板本	稿本	稿本	稿本	稿本	
													ほ
ホ													√4 ⊐− ⊬ : 180BB
													そ
													ま
													3- F: 1B0C4
₹													Ø ⊐− ド : 1B0C6
													15 ⊒− ド: 180C5
m													≥ ⊐- F: 1B0C9
													み
٨													む
													め
У													2 コード: 1B0D4
													変体仮名番号: 350020040
													t
ŧ													も
													9
													کو ع-۴:1B0D9

仮名	月氷竒縁巻之一	椿説 弓張月 前篇 巻之一	松浦 佐用媛 石魂録 前編 上	昔語 質屋庫 巻之一	南総里見 八犬伝 肇輯 巻之一	八犬伝 第四輯 巻之三	南総里見 八犬伝 第八輯 巻之二	南総里見 八犬伝 第九輯 巻之廿七	昔語 質屋庫 巻之一	南総里 八犬伝 第四輯 巻之三	南総里見 八犬伝 第八輯 巻之二	南総里見 八犬伝 第九輯 巻之廿七	IPAmj明朝 /学術情報 用変体仮名 /手書き画
	文化二年 板本	文化四年 板本	文化五年 板本	文化七年 板本	文化十一年 板本	文政三年 板本	天保三年 板本	天保十年 板本	文化七年 稿本	文政三年 稿本	天保二年 稿本	天保九年 稿本	像
									11-9-1	11-5-1	100-1	11971	や
ヤ													→ P □ - F: 1B0DD
													温 コード: 1B0DF
													ゆ
ュ													♂ ⊐- F: 1B0E5
													ラード: 1B0E4
													よ
3													と コード: 1B0EB
													5 ⊐-ド:1B0F0
ラ													変体仮名番号: 390020020
													ら
IJ													り
													₽ ⊐−ド:1B0F6
													る
													る
ル													3, =- F: 1B0FC
													₹£ ⊐-۴: 1B0FD
													15
													な

仮名	月氷竒縁 巻之一	椿説 弓張月 前篇 巻之一	松浦 佐用媛 石魂録 前編 上	昔語 質屋庫 巻之一	南総里見 八犬伝 肇輯 巻之一	南総里見 八犬伝 第四輯 巻之三	南総里見 八犬伝 第八輯 巻之二	南総里見 八犬伝 第九輯 巻之廿七	昔語 質屋庫 巻之一	南総里 八犬伝 第四輯 巻之三	南総里見 八犬伝 第八輯 巻之二	南総里見 八犬伝 第九輯 巻之廿七	IPAmj明朝 /学術情報 用変体仮名 /手書き画
	文化二年	文化四年	文化五年	文化七年	文化十一年	文政三年	天保三年	天保十年	文化七年	文政三年	天保二年	天保九年	クサ音さ画 像
	板本	板本	板本	板本	板本	板本	板本	板本	稿本	稿本	稿本	稿本	
													れ
ν													₽ ⊐− F : 1B100
													ろ
П													ぴ コード: 1B106
													∃-k:1B10C
7													わ
													→ === ₹ : 1B10A
													を
ヲ													₹ ⊐- F : 1B11A
井													お
ヱ													Ž.
ン													ん